同類嫌悪は、必然性

島崎　亮 × 霊幻新隆
芹沢克也 × 霊幻新隆

周囲は打算だらけの
純愛トライアングラー

R-18
FOR
ADULT
ONLY

これは2019年8月に発行した本を
webイベント『みんな師匠が大好きです』の記念に
改めてPDF化した無料配布本です。
無料配布のきっかけをくださったイベント主催者様、
本をダウンロードしてくださったあなた、
本当にありがとうございます。
5年前で、モブサイコの3期もまだの時期のものですが、
少しでも楽しんで頂ければ幸いです。
文章や文法も今見ると拙くて恥ずかしいのですが……
ご容赦頂けると助かります。

書いた人・くり坊

⁉

Attention!

・この本は、芹沢×霊幻・島崎×霊幻本です。
・模造設定多数のエロコメディ本です。
・芹霊・島霊の３P 表現あります。ご注意下さい。
・全編セクハラ表現・成人向け表現多数です。
・個別エロ（芹霊・島霊）あります。
・80P 以上はエロシーンが入っています。
・霊幻総受け（無自覚モブ→霊）表現もありますが、
エロ表現はありません。エロ表現は芹霊・島霊のみです。
・ラストは、安心のハーレムエンドです。

目次
Contents

SHIMAREI

芹沢克也×霊幻新隆

同類嫌悪は、必然性。

島崎亮×霊幻新隆

SERIREI

序章

同類嫌悪

「俺、最近、霊幻さんと追いかけっこするの、楽しいですっ！」

芹沢は声を弾ませた。

「俺は、楽しくないっ！」

反対に、霊幻は声を荒げる。捕まったら最後、問答無用でベッドイン。セックスフルコースに直行だ。

それでも、霊幻は決して走る足を止めない。

チラリ、霊幻が振り返れば、芹沢はニコニコとご機嫌な様子で笑って、霊幻の後を追いかけて走っている。

芹沢の笑顔は、人なつっこい笑みを浮かべているが、その様子は猟犬のようだ。ギリギリまで追い込んで、こちらが疲れて足を止めた瞬間、喉元をガブリ。その瞬間を想像して、喜んでいる。

（分かってるさ！芹沢が手加減している事ぐらいはっ！だからって、俺は諦めたりしないっ！絶対に、逃げ切ってみせるっ！）

力強い思いとは裏腹に、霊幻の身体は疲れて、足が重くなっていく。体力のない自分が恨めしい。

「あれー？霊幻さん、追いかけっこはもう終わりですか？」

耳元で、芹沢のクスクスと笑う声が聞こえて来て、霊幻は「ひゃあっ！」と声を上げて、飛び跳ねた。驚く霊幻の姿に、芹沢はとても嬉しそうだ。

「霊幻さん、可愛いなぁ。ねぇ、霊幻さん。俺との約束、忘れてませんよね？」

「何の事だっ⁉」

「霊幻さん、忘れたふりしてもダメですよ。霊幻さんを捕まえたら、その場でエッチな事していいって約束ですよね？」

「約束じゃないっ！あれは芹沢が一方的に言っただけっ！俺は認めた覚えはないっ！誤解もいいところだ！」

「いいですよ、細かい事は言いっこなしです」

「バカッ‼」

「はい、バカです！」

「芹沢っ！嬉しそうに同意するなっ！」

「りょ、です！」

「りょ、じゃないっ！」

「り、です！」

「更に短くなってどうするっ⁉」

言うが早いか、芹沢は霊幻にタックルする勢いで、霊幻を抱きしめて、そのまま路地裏に滑り込むと、芹沢は霊幻の身体を壁に押し付けた。

「はーい！霊幻さんを捕まえましたーっ！じゃあ、エ

ッチな事、しましょう！」
口付けてこようとする芹沢の顔を、霊幻は慌てて押し返す。
「ヤーダー！はーなーせーっ！どうして、お前はいつもいつも、外でエッチな事をしたがるんだっ!?」
「大丈夫ですよ。ちゃんと、俺の超能力で不可視化しますし、防音壁も展開しますから。むしろ、もう展開してますから。本当に便利ですよね、超能力」
「そういう問題じゃなーい！離せっ！これは上司命令だー！」
力の限り大声を上げた霊幻は、ジタバタと最後の抵抗とばかりに霊幻はとにかく暴れる。
「何でもかんでも考えなしに、上司の命令に従ってたら、ダメなんですよ。ネットで見ました。ちゃんと自分で考えるのが、本当に仕事の出来る人間なんです」
真顔、ドヤ顔で、芹沢は言った。
「偉そうに言うなっ！」
「はいはい。じゃあ、話の続きは、エッチな事をした後にしましょう。確か、そういうのって、ピロートークって言うんですよね！」
「それは違……！いや、合ってるーっ!?」
万事休す。
その時、霊幻の視界の端で、何かがキラリと何かが光った。

「んん？」
霊幻が何かが光った方に目を向けた、瞬間、

ヒュンッ！

空を切る音と共に、高速で何かが飛んできて、風圧で霊幻の髪が揺れた。何かが飛んできた先を見ると、そこには、
「うわぁっ！ナイフッ!?……って、芹沢ーーっ!!」
霊幻は驚きの声を上げた。芹沢にナイフが突き刺さっていたのだ。霊幻の顔から、血の気が一気に引いていく。
「せっ、芹沢っ!?大丈夫かっ！」
「大丈夫ですよ、霊幻さん。俺を心配してくれるなんて、ありがとうございます。でも、これぐらい、大した事ないですよ」
「ふぇっ？」
平然と、いつもの調子で芹沢から返事があって、霊幻は戸惑いの声を上げる。薄暗い路地裏で視界が悪くて気付かなかったが、芹沢をよく見れば、ナイフを指で挟んで止めていた。しかも、複数のナイフを止めたようだ。芹沢はそのままナイフに力を込めて、全てのナイフを光の粒子に変えて消してしまう。
無事な様子の芹沢に、霊幻はホッと息を吐いた。
その時だった。

「いけませんよ、霊幻先生。そんな『化け物』の無事を確認して安堵なさるなんて」

すっかり聞き慣れたその声に、霊幻はキョロキョロと辺りを見回すものの、近くにいる筈の『世界一のテレポーター』の姿は見えない。
「島崎っ！」
霊幻が名前を呼んでキョロキョロと辺りを見回せば、何処からともなく「はい」と返事が返ってくる。
「お辛いでしょうが、もう少しお待ち下さい。あなたの島崎が、霊幻先生を助けに馳せ参じました」
声と同時に、路地裏の更に奥から、カツンと物音が聞こえて、何かの影が見えた。芹沢は現れた何かに、素早くエネルギー弾をぶつけた。

パァンッ！

何かに着弾すると、辺りに破裂音が響き渡り、白い煙が吹き出した。白い煙はすぐに路地裏に充満して、すぐ側にいる筈の芹沢の姿も見えなくなってしまう。
「これは……！デコイかっ！」
芹沢は苛立たしげに声を上げて、舌打ちする。霊幻は不思議そうに首を傾げる。
「デコイ？デコイって……」
「デコイとは、簡単に言えば『囮』ですよ、霊幻先生」
耳元で島崎の声が聞こえて、霊幻の身体が強い力で引っ張られる。
「うわぁっ⁉」
「お待たせしました、霊幻先生。では、私と共に、参りましょう」
島崎の声が聞こえたと同時に、景色が一変する。いつの間にか、霊幻は薄暗い路地裏から、空へと転移していたのだ。島崎はそのまま、何もない空中を軽やかにステップを踏むように、素早く転移しながら移動していく。気が付けば、霊幻は島崎に横抱き、世に言う『お姫様抱っこ』されていた。島崎の顔が、霊幻に向く。目は固く閉じられたままだ。
「暗闇の中にいる霊幻先生も美しいですが、明るい陽の下にいる霊幻先生も、お美しい」
「島崎は目が見えないのに、場所とか関係ないだろ？」
霊幻の素朴な疑問に、島崎は「ふふっ」と意味部な笑みを浮かべた。
「それはもちろん、違いますよ。やはり、霊幻先生とセックスするシチュエーションが違えば、霊幻先生の反応も違うじゃないですか。それと同じです」
「物の例えに、俺を使わないで」
「他に例えようがないものでして」

悪びれた様子もなく、島崎は平然と言い切る。それから、うっすらと目を開けた。何も映し出していない筈の島崎の目は、しっかりと霊幻を捉えていた。
「本当に、霊幻先生は堪りませんねぇ。……では、お約束していただいた通り、霊幻先生を捕まえたので、セックスしましょう？」
「……っ⁉そんな約束はしてないだろっ！」
「おやおや、忘れてしまったのですか？何でしたら、ＩＣレコーダーに録音した霊幻先生のお言葉を確認しましょうか？」
「っ⁉ろっ、録音してたのか⁉」
「私にとって、霊幻先生の日々のお声を録音するのは、当然のことですので。他にも、数々の金言が入っております」
「あーもう！どいつもこいつも、エロい事しか頭にないのかーっ！バカーーー！」
思わず、霊幻は空に向かって大声を上げた。
「おや、霊幻先生ともあろう方が、私を誰かと比べました？もしくは、超能力者というカテゴリで一括りにしました？」
わざとらしく疑問を呟く島崎の顔は、笑顔のままだが、雰囲気は不機嫌そのものだ。霊幻は慌てて、首を振った。
「い、いや、そんな訳ないだろ？やだなぁ、島崎はっ！」
「……本当ですか？」
「うん！本当、本当！」
努めて明るく声を上げる霊幻は内心、
（超能力者って何で、誰かと比べたり、一緒にされると怒るんだ？これはもう、超能力者の特性だな、きっと）
と思わずにはいられない。
その時だった。

「霊幻さーん！待って下さーーい‼」

「……え？」
思いがけずに聞こえてきた芹沢の声に、霊幻は驚きの声を上げる。見れば、芹沢が手を振りながら空中を走って来る所だった。
「芹沢ーーーっ⁉」
空中を走るという、あまりにも現実から逸脱した光景に、霊幻は驚きの声を上げた。よく見れば、芹沢は自分の足元に超能力で具現化させた板の上を走っているようだ。超能力者という生き物は、非常識にも程がある。
「いい加減、空飛ぶの覚えた方が早いと思うけど……」
「それには同意しますが……しかし、しつこい男だ」
呆れたようにため息を吐いた島崎は、自分の周囲にナイフを複数、出現させた。
相当な数のナイフが宙に浮かぶ光景に、霊幻は目を丸

くすする。
「おっ、おい、島崎。俺を抱っこしたまま、どうやってナイフ投げるつもりなんだ？ どっかで、俺を下ろすつもりなのか？」
霊幻の問い掛けに島崎は「まさか、そんな事致しませんよ」と答える。
「せっかく、霊幻先生が我が腕の中にいるというのに、何故わざわざ手放す必要があるのでしょうか？」
「いや、でも、手が塞がってたら、攻撃出来ないだろ。いや、別に、俺はお前達に喧嘩してほしい訳じゃないけど……。一方的にやられるのを見るのもなぁ」
「心配してくれるのは非常に有り難いですが、私を常人と同じように考えて欲しくないですね。手が塞がっていても、攻撃手段なんて、いくらでもありますよ。……ほらっ！」
言うが早いか、島崎は一本のナイフに鋭い蹴りを当てる。瞬間、芹沢の眉間目掛けて、猛スピードでナイフが飛んでいく。

ガキィンッ！

飛んで来たナイフを、芹沢は超能力を使う事なく、裏拳で弾き飛ばす。島崎は次々とナイフを芹沢に向かって蹴り飛ばしていくが、芹沢も不規則に飛んでくるナイフを、確実に破壊していく。
島崎はテレポートを繰り返しながら、その場に制止し続け、全てのナイフを破壊した芹沢は、空中に具現化した板の上に着地すると、島崎をバカにするように鼻で笑った。
「くだらない小手先芸だな。さっさと霊幻さんを俺に返して、出直してくるんだな」
「笑止。霊幻先生はお前のものではない。諦めて、さっさと引き返せ」
それぞれが言い合い、睨み合う。それぞれが、隙あらば攻撃しようと狙っている。
「うわぁ……。何処でこんな戦いしてるんだよ……これはもう、超能力関係なくないか？」
あまりにも高等なテクニックに、霊幻は素直に感心すると同時に呆れるが、霊幻の言葉に、島崎は機嫌良さげに笑う。
「お褒めいただき、ありがとうございます。霊幻先生に評価していただけるなんて、光栄の極みです」
「そりゃ、良かった」
霊幻は身体の力を抜いて、島崎に寄り掛かる。
「おや？ 抵抗はやめたのですか？」
「抵抗はするし、諦めるつもりもないけど。ここは空中だしさ。どうしようもないだろ？ しかも、超能力者がバトル始めたんだから。仕方ないから、『一般人』の俺は、

静かにしておく事にするよ」
　空中では霊幻は大人しくしている事にするが、隙があればいつでも逃げ出せるようには覚悟していた。
「霊幻さん、俺は?俺だって、すごかったでしょ?」
　芹沢は霊幻の側まで、ジャンプしてひとっ飛びでやってくる。芹沢の全身からは、『褒めて褒めて』オーラが出ている。
「うん、うん。お前もスゴいよ、芹沢。空、飛べないし、テレポートも出来ないのに、ここまで追いかけて来たんだもんなぁ。スゴい執念だよ」
　霊幻が芹沢の頭を撫でてやろうと手を伸ばすと、島崎が急に転移したようで、ビルの屋上に移動していた。島崎は残念そうに霊幻を屋上に下ろす。
「霊幻先生。非常に残念ではありますが、予定変更です。しばらくここでお待ち下さい。ヤツと決着を付けて戻って来ますので」
　名残惜しそうに霊幻の頬を撫でた島崎は、再び転移する。

ガァンッ!!

　姿を現すと同時に、島崎は芹沢の頭上に、瓦礫の固まりを転移させる。が、芹沢が瓦礫に触れた途端、光の粒子になり、欠片すら残らずに消えてしまう。

　今度は、芹沢が自身のエネルギーを変換させて、爆弾を作り出し、島崎目掛けて放り投げた。一定時間で爆発する仕組みになっているのか、爆弾は次々に爆発していく。島崎は確実に転移しながら、爆発を避けていく。
　次々と攻守を交代しながら、二人の戦闘は一進一退、続いていく。
　二人は同時に口を開いた。

「霊幻さんは、お前なんかに渡さないっ!!」
「霊幻先生は、お前如きに渡すものかっ!!」

　霊幻は屋上の縁に座り、二人の戦闘を見つめる。
(芹沢と島崎にこんな事言ったら、絶対に否定するだろうけど……似てるよな、この二人。これぞまさしく、『同類嫌悪』ってヤツだ)
　いつからこんな複雑な三人の関係が始まったのか、と考えて、霊幻は大きく息を吐き出した。
　もしかすると、三人が出会った時点で、こうなる事は『必然』だったのかもしれない。

第一章

芹霊出会い編

「また、引きこもろう」

芹沢は呟いた。

芹沢が階段に座って大きくため息を吐いた時、下から人の気配を感じる。

超能力者ではなく、ただの『ノーマル』のようだ。思って、芹沢は自分の考えを下らなく思う。

いざ『影山茂夫』との戦いが終わっても、芹沢に残されたものは何もなかった。結局、自分で出来る事と言ったら『引きこもり』ぐらいだ。

(『ノーマル』とか『超能力者』とか、バカらしい……。俺なんて、超能力があってもなくても変わらない。どうせ、俺はただの『引きこもり』だ)

超能力がなければ、違う人生だったかもしれない。と考えては、芹沢は苛立ちを募らせていたが、違ったのだ。結局、何も変わらない。所詮、『引きこもり』は『引きこもり』でしかないし、『テロリスト』は『テロリスト』でしかない。

人の気配が近付いてくる。下を向く芹沢の目に、人の靴が映るが、芹沢には顔を上げる気力が起きない。

「どうした、あんた?」

話しかけられても、人とまともにコミュニケーションが取れるはずのない芹沢は無視を続ける。

(放っておいてくれよ。普通、こんな男に話しかけるか?半纏だぞ、半纏。怪しいだろ、こんなヤツ。無視するのが、普通だろ)

今までだって、そうだった。実力的には組織の『ナンバー2』と言われながらも、この性格と見た目で、内心では馬鹿にされていたのを芹沢は知っている。

面と向かって言えない連中は、芹沢を無視していた。それが当たり前だったし、当然だと思っていた。どうせ、自分は何処に行っても、ただの『引きこもり』なのだから。

それなのに。

「おーい、無視するなよ」

俯いた芹沢の視界に、人の顔がアップで映り込む。突然、目の前に現れた見知らぬ顔に、芹沢は弾かれたように顔を上げる。

金色の髪。夕日色の瞳。白色の肌。

今まで、芹沢の人生にまるで縁の無い色彩。あまりの鮮やかさに、芹沢の目はチカチカと点滅し、目眩がする。

考えるよりも先に、芹沢の身体が反応して、一気に螺旋状の階段を駆け上って距離を取る。芹沢は壁に張り付いて、また座り込んで、膝を抱えて、様子を伺う。

（だ、誰だ？あれ？こんな人、いたかな？いなかった気がするけど……）
ジーッと、芹沢は男を凝視する。男は呆気に取られた様子で、芹沢を見上げている。男は芹沢が握っている傘を指差して「あ」と声を上げた。
「その傘……。そうか。あんたが、あいつが言ってた『厄介な男』か……。まさか、本当にいるなんてなぁ。あー、あんなに言われてたのに、話しかけちゃったよ」
男の言っている事が理解出来ない芹沢は、様子を伺いながら、首を傾げる。「やれやれ」と男は頭を掻くと、芹沢の顔をジッと見て、口を開いた。
「俺は『霊幻新隆』。怪しい者じゃないし、戦う気もない。あんたは『爪』だろ？俺、上に用事があってさ。あんたに都合が良くても、悪くても、ここを通りたいんだ。通ってもいいか？」
説明しながら、『霊幻』と名乗った男は、敵意がない事を証明しているのか、両手を挙げている。
声が出ない芹沢は、ただコクコクと何度も頷く。
「ありがとな」と言って、霊幻は口元に笑みを浮かべると、そのまま芹沢の横を通り過ぎようとして、立ち止まった。
「なぁ、あんたの名前は？」
突然名前を聞かれても、芹沢が答えられる筈もなく、ブンブンと激しく首を振る。そんな芹沢の様子に、霊幻は「そうか」と呟く。
「じゃあ、俺は行くから。あんたは用がないなら、さっさと逃げた方がいい。……多分、ここも安全じゃないんだろ？」
言って、霊幻は今度こそ、階段を昇っていった。自分自身で、安全ではない場所に向かって、行ってしまった。
霊幻の後ろ姿を、芹沢はぼんやりと見つめる。
（俺には、逃げろって言うのに、あの人は逃げないのか。バカだなぁ、あの人。せっかく生き残れたのに、わざわざ死ぬ為に行くなんて。さっさと逃げればいいのに。……でも）
気が付けば、芹沢は勢い良く立ち上がっていた。
「あぁ、もう！」
霊幻の後を追って、芹沢は階段を駆け出していた。先程までは何とも思わなかった階段が、今はとても長く感じる。
最上階から爆発音が聞こえて、調味タワーが激しく揺れた。それでも構わず、芹沢は走り続ける。
（バカな人の後を追いかけている俺が、一番バカ野郎だ。どうして俺は、あの人の後を追っているんだ？）
考えても答えが出ないまま、霊幻の後を追って最上階に到着すると、ボロボロの『影山君』、遠くには、傷だらけの『ショウ君』も倒れている。
子供が二人倒れている姿を見て、芹沢は確信した。

（あぁ、やっぱり『避難が完了している』なんて、嘘だったんだ。街には人が残っていた。今まで俺は、どれだけの街を、人を、破壊したんだろう？俺はただの『テロリスト』で『殺戮者』なんだ。もう、取り返しの付かない所まで来てしまったんだ。俺は、何てバカ野郎なんだ。……いいや、違う。俺は『バケモノ』なんだ）

子供の頃から引きこもっていたとは言え、自分のした事の重大さは何となく理解出来た。『知らなかった』では許されない一線を、芹沢はとうの昔に越えてしまっていた。きっと、戻れない所まで来てしまったのだろう。こんな自分には、この先、ロクでもない人生が待っているに違いない。

その時、芹沢は霊幻を見て、違和感を感じた。

霊幻は社長と色々話しながら、倒れている『影山君』と『ショウ君』の位置をチラチラと確認しながら、少しずつ移動している。その姿を見た芹沢には霊幻が何をしているのか分かった。

（あの人、社長から、影山君を引き離そうとしてるのか？嘘だろ……。自分の命が危ないのに……何やってんだよ）

自分の命も危うい状況で、霊幻が誰かの為に命を投げ出そうとしている事に、芹沢は驚きを隠せない。同時に、「愚かだ」と思った。そんな事をして何になるというのだ。結局、順番が変わるだけだ。

霊幻に向かって大きなエネルギー弾が放たれる直前、霊幻の目が、芹沢を捉えた。驚きに見開かれた目が僅かに動いて、『影山君』や『ショウ君』を見た。

それが何を意味するのか、芹沢は分からないし、理解したくなかった。

（ああ、畜生！『影山君とショウ君を連れて逃げろ』って事なんだろっ！……でも、そんなのは、嫌だっ!!）

考えるよりも先に、芹沢は動き出していた。

霊幻にエネルギー弾が着弾する寸前、芹沢は霊幻の前に出て、超能力を込めた、傘を広げる。エネルギー同士がぶつかり合い、大爆発が起こった。芹沢は防御壁でしっかりと爆発をガードした。傘は攻撃に耐えきれずに壊れてしまったが、そんな事は、今の芹沢にはどうでも良い。芹沢は、霊幻の事で頭がいっぱいだった。

（霊幻さんはっ!?無事なのかっ!?）

骨組みだけになった傘を無造作に放り捨てた芹沢は、思わず霊幻を振り返ると、霊幻の夕日色の目。部屋の閉じたカーテンを少しだけ開けて見た、雨の後の夕焼けに照らされた水たまり。引きこもっていた芹沢の見た、数少ない色彩。

霊幻の目に、自分の姿が映っているのを見て、芹沢の心臓は大きく高鳴った。

（この人……俺と同じバカだ。でも、この人は、キラキラしてる。何だろう？何で、キラキラして見えるんだ

ろう？」
眩しい。でも、目が離せない。こんな事は、初めてだった。
訳も分からず、芹沢は霊幻の顔をジッと見つめる。霊幻の唇も見える。霊幻の唇は、ぷにぷにとして、美味しそうだ。
（柔らかくて、美味しそうだ……。俺、シュークリームとかオムレツとか、好きなんだよなぁ）
他の所だってそうだ。
金色の髪の毛だって、細くてふわふわしていて、まるで綿菓子のようだ。見る角度で色の変わる夕日色の瞳も、とろとろの蜂蜜のようで、舐めたらきっと、甘いに違いない。よく見れば、霊幻の何処もかしこも、美味しそうだ。
（食べたら、どんな味なんだろう？食べられないなら、せめて、しゃぶりたい。チューチューしたい。ダメかな？ちょっとぐらいなら、いいかな？）
考えただけで、芹沢の気持ちは酷く高ぶっていき、下半身に熱が集中していく。その意味が、芹沢にはよく分からないが、とてもドキドキする。芹沢が真っ直ぐに霊幻を凝視していると、顔を歪めた霊幻が芹沢を見つめ返し、口を開いた。
「なぁ……。あんた、大丈夫なのか？」
心配そうな霊幻の言葉に、何を言われているのか分からない芹沢は首を傾げた。
「あんた、俺を庇ったら、ヤバいんじゃないのか？」
「いえ、全然平気です。俺、下っ端なんで」
キッパリと芹沢は言い切った。そんな芹沢を見て、霊幻は驚いたように目を見開く。
「ボスの攻撃を真正面から防御する下っ端なんて、いる筈ないだろ」
「ここにいます」
自信満々に、芹沢は自分を指差した。霊幻は言われている意味が分かっていない様子で、目を瞬かせる。
「いや、いないって。本当にお前、何者？」
霊幻に聞かれて、芹沢は途端に黙り込む。急に何も言わなくなった芹沢の姿に、霊幻は吹き出した。
「お前って、変なヤツだな」
その霊幻の笑顔を見て、芹沢は霊幻がキラキラ見える理由が分かった。
（この人……。俺の力を利用しようなんて、少しも考えていない。きっと、利用してるって本人は思っても、実際は全然大した事頼まないんだろうな。それに、俺を哀れんでもいない。普通に接してくれる。『超能力者』とか『ノーマル』とか関係なく、俺を見てくれている。この人は、何の力もないのに……。こんな所まで来て、ボロボロになって、それでも頑張って……。とってもスゴい人なんだ。こんなに心がキラキラな人、初めて見た。……嘘みたいだ。俺が会った人は、みんな心なんてドス

黒いのに……)

芹沢は驚いた。同時に、霊幻を「守らなくてはならない」という使命感にも駆られた。

(こんなにキラキラした心じゃ……きっと、危険がいっぱいだ。俺が守らないと!)

「……?どうした?」

固く決意した芹沢を見て、霊幻は不思議そうに首を傾げる。

瞬間、芹沢と霊幻に向かって、超能力のエネルギー弾が放たれた。

(っ!?デカいっ!)

巨大なエネルギーに、芹沢は咄嗟に、目の前に防御壁を何重にも展開する。強い超能力に、次々に展開した防御壁が破られていく。

(一、二、三っ!これは、ヤバいっ!!)

破られた防御壁の数を数えながら、攻撃を防ぎきれないと判断した芹沢は、呆然としている霊幻の腰を抱き寄せて、自分の方に引き寄せて強く抱き締め、躊躇いなく後ろに飛んだ。

打ち消せないなら、衝撃に逆らわない方がいい。

芹沢は改めて、目の前に防御壁を展開する。先程は呆気なく打ち破られてしまったので、防御壁の形を変える事にする。

防御壁の形のイメージは『開きかけた傘』だ。エネルギー弾が防御壁に着弾すると、攻撃が細く尖っている先端に当たり、複数の線に分かれて、螺旋状の溝にエネルギーが通り、四方八方に飛んでいく。

エネルギーを上手く拡散出来た。

防御壁は強力なエネルギーに負けて、破壊されてしまったが、一発防ぐ事が出来れば十分だった。

イメージした超能力を、そのまま展開する事が出来る。今まで、こんな器用に超能力を使えた事がなかった。芹沢自身、驚く。

(何だ、そうか。傘持ってない方が、超能力って使いやすいんだ)

芹沢自身、自覚はなかったが、傘がなくなる事で、本来持って生まれた芹沢の超能力と戦闘力のセンスの高さが研ぎ澄まされ、今の『最善』を教えてくれていた。そして、『危機』も。

追い打ちをかけるように、エネルギー弾が数発、芹沢と霊幻に向かって、飛んで来る。

(これは……さっきの防御壁でも、防ぎきれないかな)

先程の攻撃を防がれたので、エネルギー量が増えただけで、より強い攻撃をしてきたのだろう。ただ、エネルギー量が増えただけで、攻撃の仕方に変化はない。

言ってしまえば、ただの力押しだ。

(これなら……俺でも、対処出来る)

危機的状況の筈なのに、今の芹沢は酷く冷静だった。

芹沢は『ドリル』をイメージした。形状は『傘』に似ているが、先端をより鋭く、細いイメージで形成した『ドリル』を複数、空中に展開する。超能力で具現化した青白く輝く『ドリル』を高速回転させ、芹沢は全神経を集中して、勢い良く発射する。
狙いは、エネルギーの中心。最小の力で、最大限の威力を。こちらに向かってきたエネルギー弾の中心を抉るように突き抜け、エネルギー弾を全て破壊する。
複数の『ドリル』は勢いをそのままに、『爪のボス』に直撃する。どの程度効いたか分からないが、これ以上、こちらに追い打ちを仕掛けて来ないだろう。
ただ、エネルギー同士がぶつかり合った時の衝撃は打ち消せず、芹沢と霊幻の身体はそのまま調味タワーの外に押し出される。超能力で身体を落下しないように制止しようとするが、芹沢はやめた。このまま落下して、戦闘から離脱してしまった方がいい。
「うわぁっ!?」
外に放り出されて慌てふためく霊幻が、目を白黒させて大声を上げている。芹沢は霊幻を強く抱き締めた。
「落ち着いて下さい、霊幻さん。俺が付いていますから」
「べ、別に、俺は全然、怖くないっ!……っあっ!」
その時、霊幻の目が『何か』を捉えた。途端に、霊幻は慌て出す。
「まだ、子供達が残ってるんだった!?なぁ、あんた！子供達も一緒に連れて行ってくれ！」
「あ、ショウ君か」
芹沢は呟いて、落下を一旦止めると、エネルギーをロープのように伸ばし、ショウの足首を捉えて、思い切り引っ張った。ショウは気絶しているようでグッタリとしているが、傷は大した事はなさそうだ。
「大丈夫ですよ。ショウ君、気絶してるだけですから」
心配そうにショウを見ていた霊幻は芹沢の言葉に、「良かった」と安堵のため息を吐いた。それから、霊幻は調味タワーに向かって、手を伸ばした。
「おい、モブッ!大丈夫かっ!?こんな所、さっさと逃げるぞっ!……、……モブ?」
何の返事もない状態に、霊幻の顔色が悪くなっていく。先程まで、自分の命が危険に晒されても、顔色一つ変えなかったのに。
「もしかして、動けないのかっ!?頼むっ！モブも引っ張ってくれっ！」
（モブって、影山君の事だと思うけど……。何だろう?何だか……とっても嫌な気分だ）
先程から霊幻の口から何故か『モブ』という呼び名が出てくる度、霊幻の目が縋るように芹沢を見る。芹沢の胸がチクチクと痛む。それが何故なのか、芹沢には分からないが、いい気分ではない。霊幻が『モブ』という名前を呼ぶのが、単純に嫌だった。

「師匠。僕は大丈夫ですから、行って下さい」
気が付くと、破壊され、大穴が空いた場所から、モブが霊幻を見下ろしていた。その髪は逆立ち、赤い怒りのエネルギーが全身から噴き出しているが、霊幻を見つめるモブの目は、穏やかそのものだ。
「何言ってるっ!?ダメだ、モブッ!お前も一緒に……っ!」
「大丈夫です。ここは『いつも通り』僕に任せて下さい。」
不意にモブの目が動き、芹沢を見る。霊幻を見ている時とは違い、その目は冷たい。もしかすると、これが、本当の『影山茂夫』なのかもしれない。
ふっ、とモブの表情が緩んだ。
「師匠は僕の大事な師匠なんです。守ってくれて、ありがとうございます。……師匠の事を、よろしくお願いします」
言って、モブは調味タワーの中へと静かに戻っていった。また戦闘が再開したのだろう。中から、轟音が響き渡る。
モブの言葉に、芹沢は正直、イライラした。
(何だよ……。これじゃあ、俺が影山君に頼まれて、霊幻さんを助けたみたいじゃないか!違う!俺は、自分の意思で、霊幻さんを助けたんだ!それなのに……!!)

「モブッ!!もういいから、来るんだっ!!危ないですから、
「霊幻さん。戦闘はまだ続いています。危ないですから、しっかり掴まってて下さい。影山君なら、大丈夫ですよ。彼、強いし」
今にも泣きそうに大声を上げる霊幻の身体を、芹沢は強く抱き締める。超能力が解け、落下が始まる。
「で、でも……。でも、そうだよな……モブなら、大丈夫だよな……」
霊幻はしっかりと芹沢にしがみ付く。霊幻にしっかりと密着されて、芹沢は霊幻の身体が震えている事に気が付いた。
(霊幻さん、震えてる。……本当はとっても怖いし、影山君を置いていきたくないんだ。自分の命が危ない状況で……誰かを助けたり、逃がそうとしたり、心配したり……スゴい人だ)
心の底から、芹沢は感動していた。今まで、人と会った事はそんなに多くはないが、こんなに一生懸命な人には一度も会った事がない。誰だって、芹沢を見下していた。
ふと、芹沢はクンクンと鼻を鳴らした。匂いの元は、霊幻だ。
(いい匂い……美味しそう……)
味見で、芹沢は霊幻の首筋を少しだけペロッと舐めてみる。

（やっぱり霊幻さんって、美味しいな。何て表現したらいいんだろう？うーん……折角なら、もっといっぱい、食べたいな）
ペロペロと、芹沢はこっそり霊幻の首筋を舐める。
「ん？んんっ？うわ、やっべー……俺、汗かいてきた」
「あ、霊幻さん。そろそろ着地します。しっかり掴まってて下さい」
「……ん？え？うわぁぁぁぁっ!?」
下を向いた霊幻は、迫り来る巨大な食虫植物を見て、大声を上げた。
（植物……？これも、超能力か。誰か使えるヤツがいた気がするけど……忘れた）
芹沢は巨大な食虫植物の蔦を無造作に踏みつけて勢いを抑えると、霊幻を横抱きにして、そのまま地面に静かに着地する。
これなら、霊幻に着地の衝撃伝わっていないだろう。
「あのさぁ。一応、助けようとしてやったのに、僕の植物を踏み潰すなんて、酷くない？」
霊幻を下ろすと同時に、声をかけられる。咄嗟に声をした方を見ると、紫色の髪をした青年が不機嫌そうに立っている。
芹沢は名前を完全に失念しているが、その青年は同じ『5超』の一人である植物使いの『峯岸』だった。
エネルギー状のロープで掴んでいたショウを、芹沢は峯岸に向かって放り投げた。
急に飛んできたショウを、峯岸は慌てる事なく植物でキャッチして、そのままショウの仲間に引き渡してから、峯岸は芹沢を睨み付ける。
「相変わらず、あんたって愛想がないよね。……別にいいんだけどさ」
無表情の峯岸は「じゃあ」と呟いて、さっさとその場を離れていく。
周囲に全く興味のない芹沢の耳には、峯岸の話などまるで届いていない。芹沢は、横抱きにした霊幻を、ゆっくりと丁寧に地面に下ろす。霊幻はそのまま立っていられず、その場に座り込んでしまう。縋るように伸ばされた霊幻の手を、芹沢はしっかりと掴んだ。
「霊幻さん、大丈夫だ。大丈夫ですか？」
「俺は大丈夫だ。でも、あの子は……？」
キョロキョロと周囲を見回した霊幻は、ショウが仲間の治療を受けているのを確認して、表情を綻ばせる。
「良かった」と呟いてから、霊幻は芹沢に視線を向けた。その顔は、呆れている。
「……で。お前ホントに誰？絶対、幹部だよな？モブも苦戦してるボスの攻撃、防いだり、反撃したりなんて、超能力者だからって、出来るものじゃないだろ」

「大した事してません。俺は、ただのザコです」
「あのさぁ……。こんなカッコいいザコが、いる筈ないだろ？」
霊幻の言葉に、芹沢は目を丸くする。
「カッコいい？俺が？半纏着て、髪の毛はモコモコしてるのに……」
芹沢自身、この姿形は世間から見れば、とてもダサい格好だという事は分かっていた。だからって芹沢には、今更どんな格好をすればいいのか、さっぱり分からない。こんな格好だから、芹沢はいつだって『奇異の目』に晒されてきた。
しかし、
「馬鹿だなぁ。半纏も髪型も、関係ないだろ。自信を持て。お前は、カッコいいよ」
霊幻はキッパリと言い切った。親指を立てて笑う霊幻を、芹沢は眩しそうに見つめる。
その時だった。
調味タワーから、轟音と振動が響き渡る。芹沢は顔を上げて、調味タワー『だった』場所を凝視する。どうやら、強大なエネルギーが収束し、爆発しようとしているようだ。この場所も、危ない。
調味タワー『だった』場所を睨んでいる芹沢の姿を、霊幻は不安げに見つめる。
それに答えず、芹沢は霊幻を抱きかかえ、一気に走り出した。爆心地から、少しでも距離を取らなくては、芹沢の超能力でも防ぎきれない。
「おっ、おい！どうしたんだよっ⁉」
「あと数分で、爆発が起きます。かなりデカいです」
芹沢の言葉に、霊幻は驚きの表情を浮かべてから、呆然としている他の味方に向かって、霊幻は大声を上げた。
「お前達も逃げろっ！このままじゃ、爆発するぞっ‼」
霊幻が言った途端、皆一斉に走り出した。
まだ会ったばかりの自分の言葉を、霊幻は信じてくれた事が、芹沢には嬉しかった。
その時、後ろから、エネルギーの大爆発が巻き起こる。
霊幻を庇い、芹沢は霊幻の身体を抱え込む。
「そんな事しなくていいっ！俺を置いて、逃げろ！」
「嫌です」
芹沢は即答して、霊幻を抱き締める腕に力を込める。
その時、エネルギーに追いつかれ、芹沢と霊幻の身体が衝撃に宙に浮いた。咄嗟に、芹沢は霊幻に防御壁を何重にも展開する。このエネルギーは何か、普通のエネルギーと違うように感じた。超能力者の自分なら、多少の異常な力でも対応出来るが、力のない霊幻では、このエネルギーに触れたら、どんな影響が出るか分からない。
そして、

世界が、真っ白に染まった。

音さえも吸収され、真っ白で何もない世界。いるのは、自分と霊幻だけ。
抱き締めている霊幻を見下ろして、霊幻の存在を確認する。確かに、霊幻はここにいる。
そんな世界で、芹沢はぼんやりと考えた。
（この人がいるだけで、こんなにも世界は輝いているんだ。いいや、違う。霊幻さんが輝いているんだ。あぁ……どうせ俺は、この先何をやっても、ダメな人生しか残っていないんだ。この人を見守ってる方がいいに違いない。よし、決めた。俺は……霊幻さんを見守ろう！）
どうやって『見守る』のかは分からないが、霊幻を『見守る』と決めた芹沢は、自分の妙案に小躍りしたい気分になる。今なら、何でも出来る気がする。芹沢は今までの暗い気分が嘘のように、晴れやかな気分だった。
（霊幻さんの『嘘』も『秘密』も、俺が全部『本当』にすればいいんだ。邪魔するヤツがいたら俺がこっそり、消してしまえばいい。俺が霊幻さんを色んなものから、全部守るんだ。……よし、決めた！とにかく俺は、霊幻さんを守るんだっ!!）
不意に芹沢は気が付いた。今までの人生は、霊幻に出会う為にあったのだ。
長かったような、短かったような、大爆発が終わり、世界が再び元の廃墟に戻る。地面に上手く着地した芹沢は、腕の中の霊幻を見た。
「大丈夫ですか、霊幻さん?あ、傷が……」
霊幻の額から血が流れていて、芹沢は顔を顰める。
「これぐらい大丈夫だよ」
「すみません……俺が不甲斐ないばかりに……」
「いいって。あの爆発なのに、これぐらいで済んだんだから、良かったよ。それより、あんたは大丈夫か？俺の事、庇ってくれただろ？」
「俺は大丈夫です。すみません、治癒が使えなくて。せめて、痛みを取れるといいのに。……出来るかな？」
言いながら、芹沢は霊幻の額に手をかざす。同時に、芹沢の手が青白く光り出す。光が収まると、霊幻は驚いたように、額を触る。
「ん？……あれ？痛くない？」
ペタペタと傷口に触る霊幻を、慌てて芹沢は止める。
「触っちゃダメですよ、霊幻さん。痛みを取っただけで、傷が治った訳ではないですから。傷の治る速度が上がらないか、やってみますね」
もう一度、芹沢は手をかざして、傷の治る速度が上がるように念じてみるものの、変化はない。
「もう十分だよ。あんたには助けられてたばっかりだな。ありがとう」
霊幻は芹沢に笑いかけた。
この笑顔を守る為なら何でも出来ると、芹沢は思った。

「やれやれ……撤退するタイミングを逃したな」
島崎は呟いた。
次々に飛んで来る攻撃を、軽くいなしながら、島崎は大きくため息を吐く。
『一対多数』のこの状況を『卑怯』などと言うつもりはない。ただ、『面倒臭い』状況である事には間違いない。
トンットンッ、とリズミカルにテレポートを繰り返し、上へと昇っていき、何もない空間に拳を放つ。瞬間、『傷』の一人『誇山』が飛び込んで来て、島崎の拳が誇山の頬にめり込んで、そのまま吹き飛んでいく。
その隙を狙ってか、超能力中学生である『花沢』が複数のエネルギー弾を放ってきた。
島崎は『籠手』のイメージでエネルギーを手の甲に纏い、向かってきたエネルギー弾を一発、跳ね返す。跳ね返ったエネルギー弾はビリアードの球のように次々と他のエネルギー弾とぶつかり合い、跳ね返り、島崎に攻撃を放とうとしていた他の『傷』達にぶつかって、吹き飛ばしていく。
追い打ちをかけようと、思わず『ナイフ』を数本、転移させようとして、やめた島崎を、別の『傷』の一人、呪いを込めたエアーガンの弾を避け、エアーガンを撃ってきた『桜威』に向かって、蹴りを放つ。吹っ飛んだ桜威は超気功を放とうとしていた『嶽内』にぶつかって、二人一緒に吹き飛んでいく。
『邑機』の幽体が複数体、四方八方から宙に現れ、島崎の身体を拘束しようとするのを、エネルギーを込めた手で払い、一瞬で打ち消し、側にあった瓦礫となったコンクリートの大きな塊を転移させ、本体の邑機の上に落とす。
（もう少し、不利という状況が欲しいものだ）
撤退するには、こちらの傷が浅すぎる。島崎としては、『撤退』するに値する証明が欲しい。残念ながら、現在進行形の野良の超能力者と元・第七支部の幹部達との戦闘では、島崎は何度か攻撃を喰らう事はあったものの、戦闘不能になりそうな攻撃は全て避けていたので、戦闘不能になる程のダメージは無かった。
圧倒的な実力差。
だからこそ、引き際が難しくなってしまったのも事実だ。ここでいきなり逃げても変だし、負けても不自然だ。
（全く……。ボスじゃあるまいし、子供相手に本気で戦える訳ないだろう）
超能力者と言っても、所詮は子供。確かに数人は大人よりも超能力は確かに高いようだが、逆に言えば、ただ

それだけ。戦いの場に子供が出て来て、島崎はずっと戸惑っていたのだ。子供相手にムキになって本気で戦える程、島崎自身は子供ではなかった。何とか子供には退場願いたかったが、上手くいかないものだ、と島崎は思った。

こちらは戦闘のプロだ。

確かに、中学生とは言え、能力的には大人よりも高いのだろう。ただ、能力の高さと経験値は比例しない。元・第七支部の超能力者にしてもそうだ。

ここにいる超能力者は、島崎から言わせてもらえば、全員、経験値が低い。

多かれ少なかれ、例え虐げられていたとしても、誰もが自分は特別だという『優越感』を持っている。自分を『凡人』だと言い、島崎を『凡人』と言う花沢という子供にしてもそうだ。決して『優越感』を失う事は出来ない。こうして、島崎に戦いを挑んで来る時点で完全に状況を見誤っているし、島崎が追い込まれていると思っている事自体、浅はかな考えだ。

(全く……大人どもは何をしている？ここは止めないとダメだろう。全く……勘弁してくれ。子供を頼ってどうする？超能力者どもの間抜けぶりには、呆れ果てる)

大人数との乱闘になっては、子供と大人で手の抜き方を変えられる余裕もない。

本気を出さず、本気を出しているように見せるなんて、普通に戦うよりも神経を使う作業だ。それに、考えなくても、視界に頼って戦闘していない分、この程度の戦闘は身体が勝手に反応して、普通に出来てしまう。

(あぁ、面倒臭くなってきた。何で、こんな奴らの為に、私がこんなに苦労しないといけない？面倒だ。面倒すぎる。私は楽しく生きたいだけなのに、何故邪魔をする？私が何をした？私がした事は、総理大臣を誘拐しただけだし、邪魔者を排除しただけだ。そもそも、総理大臣を誘拐された護衛が悪いし、調味タワーに近付いたこいつらが悪い。私は別に、調味タワーに近付かなければ、危害を加えるような事はしなかった。この場合寧ろ、私が被害者じゃないかっ!?鬱陶しい……何て鬱陶しい連中だっ!!虫と同じ。音がうるさい。存在がうるさい。いい加減にしてくれっ!!消えろ、消えろ……全部、消えろ……)

思考する事、数秒。

(……よし、全員殺そう)

島崎は決めた。地面に降り立った島崎は、全神経を集中する。

(この一撃で、終わりだ)

島崎は一歩踏み出した。

瞬間、

「正当防衛ラーーーッシュ!!」

突然聞こえた声と全身を襲う殴打。
盲目であり、戦闘に集中していた島崎には、今の状況が全く掴めず、動揺し、受け身を取る事も忘れて、島崎の身体は地面に打ち付けられる。
その時、周囲から、一斉に歓声が起きた。
混乱しかけた頭を、島崎はすぐに切り替える。これはチャンスだ。

(驚いたが……。これだけ痛めつけられて見せれば、撤退しても問題あるまい)
惨劇の一歩手前の、絶妙なタイミングでの連打だった。これなら、何の問題もなく、撤退出来る。これ以上ない程、舞台は整った。

(……やれやれ助かった)
立ち上がろうとして、島崎は気が付いた。身体が動かないのだ。

(しまった……これは、ヤバいっ!!)
島崎にとっては、真正面から殴られたのは、これが初めてだ。ノーガードで受けた打撃は、島崎に思いの外、身体へのダメージを与えていた。
(テンプルに入ったか……脳を振られて、平衡感覚に狂いが生じている。しかも、他の殴打する場所も的確で、ダメージがデカい。攻撃してきた相手が誰かは知らないが、私にここまでのダメージを与えたのだから、相当な手練れで間違いない。これは、動くのに時間がかかりそうだ。……マズいな)
動けない島崎の耳に、第七支部の誰かが「霊幻大先生!」と言っているのが聞こえた。
『霊幻』
聞いた事のない名前だったものの、島崎を殴った相手の名前だろう。島崎の胸には『霊幻』の名がしっかりと刻まれた。

「……どうしよう。大丈夫かな?起きて来ないかな?」

(……ん?この声は……)
「だ、大丈夫だよな?倒したよな?何か、みんなが戦ってたっぽいから、勢いで殴ったけど……強そうだし、起きてこられたら、俺勝てないって……。でも何で、殴れたんだろ?」
ブツブツと聞こえる独り言は、先程『正当防衛ラッシュ』と叫んでいた声と同じ声だ。力強かった声とは打って変わった、何処か不安そうに、怯えたような声。
島崎はクラクラする頭を押さえ無理やりに顔を上げた。
生まれつき目が機能しない島崎の身体は、視界の代わ

りにオーラを感じ取る事が出来た。オーラを感じる事が出来るようにしてから、霊幻を視た島崎は、驚愕する。今まで、様々な人間のオーラを見て来たが、彼から放たれるオーラは初めて見た。
（何て、複雑な感情が入り交じっているんだ！
彼は『嘘』と『秘密』を抱えている。その『嘘』と『秘密』がバレないかと常に怯え、不安に駆られている。彼自身は寂しがり屋で、一人になる事を怖がっている。『ノーマル』でありながら『傷』の連中にあんなに尊敬されているというのに、驕るどころが、バレやしないかと、ビクビクと怖がっている。困っている人を見捨てる事が出来ない。縋られると振り払えない。彼自身の能力は非常に高いのに、彼にとっては、その能力の高さすらもコンプレックスとなり得る。普通の人間だったら、驕り高ぶった自信過剰な人間になる要素ばかりだというのに、驕る気配は全くない。寧ろ、脆い。脆くて、儚いオーラをしているのだ。
あぁ……美しい！こんなに美しいオーラ、見た事がない！何て複雑に絡み合った、美しいオーラなんだ!!）
島崎の心臓が早鐘を打ち鳴らす。こんな感覚初めてで、島崎は戸惑った。今まで、誰かに興味を持った事はない。
（いくら見ていても飽きない……。胸が高鳴る。こんな感情は初めてだ。……もしかして、これが、『ファン心理』というものなのだろうか。そうだ。そうに違いない。
私はどうやら、彼の『ファン』になってしまったようだ。とにかく、彼の全てを支えたい。全財産、貢ぎたい。影に日向に、彼を支えたい。……だが、彼が結婚したら？私は、それでも彼を支える事が出来るだろうか？……いいや。きっと、彼なら素晴らしい相手を選ぶだろう。心配するだけ無駄だ。私は、彼が結婚してスピード離婚させても、彼を支え続けられる。いいや、結局は、結婚までは至らないだろう。彼が誰かと交際する事を、誰か一人だけのものになる事を、神が、世界一のテレポーターが、許さないに決まっている。あぁ、私は何て罪深いんだ！彼の不貞を疑うなんて、罪深い。これでは、彼に責められ、足で踏まれ、罵られても仕方がない）
島崎は思考する。この間、僅か数秒の出来事だ。
少しでも時間があれば、考え事をしてしまう癖が島崎にはあった。目の見えない島崎にとって、『思考』は遊びと同じ。考え始めると、何時間でも考え続ける事が出来る。故に、思考スピードが常人よりも早かった。
まず、島崎は後日改めて『霊幻』に関して調べようと決めた。
「なぁ……あんた、大丈夫か？」
間近で、霊幻の声が聞こえた。同時に、ふわりとかぐわしい香りが島崎の鼻を刺激する。
驚いた事に、霊幻が島崎に話しかけて来たのだ。この状況で、敵である島崎に声を掛けるという事は、何か事

情があると考えるのが自然だ。
島崎は苛立ちに、自分の髪を掻き毟り、叫び出したい気分になった。
（ボイスレコーダー!!何故、私は録音機器の一つも持っていないんだっ!?いついかなる時でも、常に声を録音出来るように、録音機器を用意しておかなければ駄目だろうっ!!
……いいや。駄目だ、落ち着け。彼は、『霊幻先生』は、何も悪くないのだ。八つ当たりするような真似は許されない。とにかく、ここは冷静に話をしなければ。大変不本意ではあるが……霊幻先生を待たせる訳にはいかない。録音は……諦めるしかない！畜生っ！）
苦渋の決断をした島崎は、気持ちを落ち着かせ、ゆっくりと口を開く。
「……何でしょうか？」
声を出してから、島崎は内心舌打ちする。
（何て事だ……声が上擦ってしまった……。私とした事が……人生をやり直したいっ!!）
島崎は思い切り、これでもかというほど落ち込む。けれど、霊幻は気にした様子もなく、話を進めていく。
「あんた……本当は、もっと強いんだろ？頼むから、ここは引いてくれないか？俺、あんたには勝てないし。これ以上は、戦っても意味がないと思う」
「ほお」と、素直に島崎は感心する。

霊幻は怯えからそう言っている訳ではない。
周りが全く気付いていない島崎の真意に、彼はもう気付いているのだ。つまり、島崎が『手を抜いていた』という事実を。
島崎は周りに気付かれないように、そっと頷いた。
「なるほど……。あなたは美しいだけではなく、頭が良い方だ。素晴らしい」
島崎はもし手が動くなら、拍手したい所だった。
「はあ？何言ってんだ、あんた？」
「今の状況をよく理解している、という意味ですよ」
「いや、そうじゃなくて。美しいとか何とか……」
戸惑いの声を霊幻は上げたが「いや」とすぐに言葉を止めた。
「いや、今はそれどころじゃないか……あまり、時間もなさそうだし」
「私もそろそろ撤退しようと思っていた所ですので、その点はどうぞご安心を。むしろ、逃げる口実を作っていただけて、私の方が感謝したいぐらいです」
島崎の言葉に、霊幻は「ありがとう」と島崎の耳元で囁いた。
霊幻の声を聞いた島崎は、
（あー、ヤバい。勃つ）

と、内心で思った。
ピッタリとしたレザーパンツを履いているので、霊幻にバレやしないかと考えて、島崎は興奮する。こうなると益々、録音していなかった事が悔やまれる。
（仕方がない。今回は、実際の音声ではなく、私の記憶で妄想は補おう。だが、彼の声と香りは確かに、記憶した。これから先の生涯、私は彼の声と香りを忘れないだろう）
『霊幻』の情報が島崎に刻まれたが、全く足りない。もっと、『霊幻』に関する情報が欲しかった。
目を開けて、島崎は見えない霊幻を見ようと目を向ける。無駄な事と分かっていても、そうせずにはいられなかった。
（あぁ！目の見えない我が身を、今日ほど悔しく感じた事はない！今までは、汚い世界を見なくて良かった、と思っている程度で何とも思っていなかったのにっ！）
その時、霊幻から驚きの感情が発生して、息を飲む音が聞こえてくる。
「あんた……もしかして、目が？」
「生まれつきですので、気になさらないで下さい」
島崎の言葉に霊幻は、弱々しく「あぁ」と返事をする。
「ど、どうしよう……。もしかして、過剰防衛？いや、これってただの暴力？」
「ご安心下さい。この件は、訴えませんので」
心配そうに独り言を呟く霊幻に、島崎は安心させるように言った。
「本当？本当の本当か？訴えないでくれよ、マジで」
「大丈夫ですよ、訴えませんから。……今は」
オロオロと必死な様子の霊幻に、島崎は「ククッ」とくぐもった笑い声を上げると、霊幻は「ひぃっ！訴える気かっ！」と悲鳴を上げた。
慌てる霊幻の声を心地よく聞きながら島崎は、顔をゆっくりと調味タワーに向けた。
調味タワーの最上階には、強大な力のオーラが『二つ』立ち上っている。
島崎は顔を顰めた。
能力の一つである『未来視』が、調味タワーに入っていく霊幻の姿を島崎に見せた。
「あなたはきっと……私が止めても、あの調味タワーに向かうのでしょうね」
島崎の呟きに、霊幻は呆れたようにため息を吐いた。
「あのなぁ……俺が、あんな怖い場所に行く訳ないだろ。後は、警察とか自衛隊に任せるよ」
「行かないならいいのですが……行く時には、お気をつけ下さい。途中、『傘』を持った厄介な男がいます。ヤツは危険です。ボスでさえ、あの男を制御する事は出来ず、超能力の使用を制限する事しか出来ませんでした。決して、あの男には近付かないで下さい。遭遇してしま

って も、決して声をかけたりせずに、静かにその場を立ち去って下さい。絶対に、目は合わせないように。もう一度、言います。傘を持った男には、話しかけないように」
「な、何だよ、その男って……猛獣か？」
「猛獣の方が、まだ大人しいでしょうね。あの男は、あまりにも……。いいや、これ以上の野暮な忠告はやめておきましょう。あの男が、あなたに勝てる筈がない。ヤツなんて、霊幻先生の手にかかれば、瞬殺でしょうね」
「え？何？その怖い言い方。何がいるんだよ？そんな怖い所、絶対に行かないぞ、俺は」
「霊幻先生をお止めする事の出来ない我が身の不甲斐なさを、痛感しています」
「勝手に行く事にするなよ。行かないったら、行かないんだからな、俺は。それに、何だよ、お前まで『先生』呼ばわりはやめろよ」
「しかし、あなたは……、……っ!?」
口を開きかけた島崎は、強大な超能力を感知した。ふらつく頭で、島崎は無理やりに立ち上がろうとする。
「どうした？脳振られて、まだ立てないだろ。そのまま、もう少しゆっくりとしてた方がいい」
「お気遣い、痛み入ります。ですが、何か強大なエネルギーが近付いて来ています……。霊幻先生。危険ですので、気を付けて下さい」
「え？……、いや、そいつは、大丈夫だ。お前は動かなくていい」
「もしかして、霊幻先生の関係者ですか？」
「強い力が近付いてるっていうなら、俺の弟子だと思う。俺の弟子、メチャクチャ強いから」
「それはまた……とても優秀な弟子がいるようで。さすがは霊幻先生です。ですが、弟子も選んだ方がいいかと思いますよ」
「あんた……それ、嫌味だろ？」
「……？何がですが？」
「もう、分かってるんだろ。……俺の『正体』」
そう言う霊幻の声は、怯えの感情で震えている。霊幻の注意が、落ち着きなく周囲に向けられているのを、島崎は感じていた。
（『正体』とは……『超能力者』ではなく『ただの人間』だという事だろうな。『正体』というには、あまりにも可愛い内容だ。超能力者に尊敬の念を向けられても優越感に浸る事なく、騙して申し訳ないとさえ思っている。この薄汚れた世界に、こんな純粋で愛らしい人間が存在し続けているなんて、天然記念物だ。私がしっかりと守って差し上げなくては、すぐに薄汚れてしまう。いや、薄汚れても、霊幻先生の美しさに何の陰りもないどころか、程良いエッセンスとなり得る可能性は高いが。……違う、そうではなくて。ただ、私が霊幻先生を守り、支えたい。ただ、それだけなんだ。あぁ、可愛い。部屋に

置いて、愛でたい。一日中、その声を聞いていたい。その匂いを嗅いでいたい。その為なら、揶揄ではなく、私は何でもするだろう）
想像しただけで、島崎は幸せに満たされていく。本当にそんな未来があるのなら、きっとどんな犠牲を払ってでも、実現させたい。
そんな事を考えている事を、全く感じさせずに、島崎は首を傾げて見せた。
「さぁ？何を言われているのか、私には存じ上げません」
島崎の言葉に、霊幻は更なる疑惑を深めている。
「……本当か？嘘くさいな……」
「この話は後日、改めてにしましょう。これ以上の会話は、霊幻先生にとって都合が悪いと思いますので」
言って、島崎は大げさに肩を竦める。
「え？」と霊幻が首を傾げた、その時だった。

「遅くなりました、師匠」

島崎と霊幻の話を遮るように、少年の声が被さってくる。
オーラを見るまでもない。少年ではあるが、今までに会った、どの能力者よりも、強大で危険な存在だ。
その少年の『敵意』が、真っ直ぐに島崎に向けられている。
「おー、モブ。遅かったなぁ。敵は俺が倒しておいたからな」
胸を張り、呑気に話す霊幻とは裏腹に、『モブ』と呼ばれた少年は島崎に対する警戒を更に強くする。
「師匠、こっち」と言って、モブは霊幻の腕を掴むと、自分の方にグイッと引き寄せた。それから、庇うように片手を上げて、霊幻の前に立つ。
「おいおい、モブ。大丈夫だって。俺がフルボッコにしたからな。しばらく、立てないさ」
「いいえ、師匠。そいつは危険です。近付かない方がいいです」
言うが早いか、外に溢れていたモブの力が一気に収束し、島崎へ向けられる。
「モブッ！」止めようとする霊幻の声がするが、モブはまるで聞く気はない。
このまま戦闘になるなら、霊幻から貰ったダメージがまだ残っている島崎が、圧倒的に不利な状況だ。いや、元々、勝てる可能性さえ皆無だろう。だからと言って、素直に逃がしてくれるとも思えない。
逃げるだけなら十分に可能だが、島崎には使う気にはなれなかった。相手が子供という事もあるが、暗殺めいた、えげつない攻撃を、霊幻には見せなくなかった。
（やれやれ……。今更、いい人ぶっても意味がないと

いうのに……）

元々、『爪』にスカウトされる前から島崎は、テレポートという便利な能力を利用して、色々と裏稼業に手を染めていた。今更、真人間になれる筈がない事を、島崎自身が一番理解していた。『爪』を抜けた所で、結局は今までのように、似たような選民思想を持つ海外のテロ組織に雇われるだけだ。ただ、それは霊幻と出会う前の話。今となっては、霊幻のいない外国に行くつもりはないし、犯罪組織に入って、犯罪に手を染めるつもりもない。

モブは島崎の本性を無意識に察知して、島崎を警戒しているのだろう。次第に高まっていくエネルギーに、島崎の背筋に冷たい汗が流れる。このままでは何もしなくても、問答無用で吹き飛ばされるだろう。

（これはまた、面倒臭い。一難去って、また一難。やれやれ……さっさと逃げてしまえば良かったのかもしれないが……）

思ったものの、島崎は後悔していなかった。霊幻と共に大切な時間を過ごす事が出来たのだから、後悔する筈がない。きっと、時間をやり直せるとしても、自分は同じ選択をするだろう。

その時、霊幻は「おい、モブ」と言って、モブの手に自分の手を重ねて、島崎に向けられているモブの手を無理に下ろさせた。

「そいつは俺が倒したんだ。すっかり戦意はなくなってるし、お前が力を使う必要はない。やめとけ」

言いながら、霊幻は島崎を庇うように、モブの前に立った。そんな霊幻の後ろ姿に、島崎は呆然とする。まさか、霊幻に庇われるとは思っていなかった。

「でも、師匠……。その人は……」

「モブ、いいんだ。戦わなくてもいいのに、わざわざ戦う必要なんてない。お前、戦うの嫌いなくせに、俺のために無理すんな」

「……、でも……、……、分かりました」

不満そうな感情を隠さないまま、それでも霊幻の言葉に、モブは島崎に向けたエネルギーを打ち消した。

その時、霊幻の目が、島崎に向いたような気がした。見えない島崎の目と霊幻の目が、重なり合ったように、島崎は感じた。今、島崎の真っ暗な世界に、霊幻だけが佇んでいる。見えない筈の霊幻の口が『行け』と告げている。島崎はゆっくりと身を起こすと、そのままテレポートした。テレポートしている間も、頭の中は『霊幻』の事でいっぱいだ。

（霊幻先生……。どんな姿をしている？身長は？体格は？もっと、彼の声が聞きたい。香りを嗅ぎたい。肌に触れて、その感触を確かめたい。どんな味なのだろう？舐めて、その味を知りたい。

砂漠が美しいのは、どこかに井戸を隠しているから。

……そして、隠しているから、暴きたくなる。彼の全てを、暴きたいと私が思うのは、当然の事）
少し離れたビルの上に転移した島崎は、霊幻がいる方を見下ろす。
本当なら逃げなくてはいけないのだが、どうしても霊幻から離れがたい。
霊幻のオーラが、確かにこちらを向いた。誰も気付かなかったのに、霊幻だけは、島崎の存在に気が付いたのだ。
（……不思議だ。私の目は機能していないというのに……霊幻先生とは、目が合っているように思える）
島崎は『見』届けた。

調味タワーに入っていく霊幻先生も。
芹沢と一緒に吹き飛ばされて出て来た霊幻先生も。
芹沢に抱きかかえられて、爆発から逃れた霊幻先生も。

全て見届けた島崎は、大きくため息を吐いた。
（あれほど、あの男に関わってはいけないとお伝えしたのに、やはり聞いてはいただけなかったか……。しかし、さすがは霊幻先生だ。ボスでさえ、扱いに困ったあの厄介な男を、あそこまで手懐けるとは。……ただ、あの懐かれ方は気になる。厄介な事にならなければいいが……。霊幻先生が、しっかりと突っぱねてくれる事を信じたい……が、霊幻先生はお優しい方だから、難しいかもしれん。その時は、私が命に代えても霊幻先生をお守りしなくては。……あぁ、凄まじいストレスだ。新しい能力が発現する予感がする）
考えて、島崎は腕を組んで「ふむ」と唸る。
すぐにでも霊幻の所に赴きたかったが、まずは今までの人生を全てリセットして、新しい人生を始めなくてはならない。
（さて、霊幻先生のお役に立つ為にも、まずは職探しだな。いつまでも国際指名手配犯では、私も霊幻先生の為に動きづらい。それに、霊幻先生の情報をもっと集めたい。そう考えると、必要なのは、権力と権限か。全ての条件をクリア出来るとなれば……やはり、新しい就職先は、あそこしかないだろうな）
考えをまとめた島崎は、テレポートを開始する。座標は、首相官邸だ。
テレポートする寸前、島崎は自分の目に触れて、心に誓った。
（私の世界には、霊幻先生だけいればいい。この目は、霊幻先生に差し上げよう。目を開けるのは、霊幻先生の前でだけだ。それ以外で、私が目を開ける事は二度とない。そして、私の力は、霊幻先生の為に）
と、島崎は決意した。

芹沢克也と霊幻新隆

(霊幻さんを『見守る』って決めたけど……何て楽しいんだっっ!!)
霊幻を『見守る』と決めた芹沢は、心を弾ませていた。
『見守る』と強く決意してから、芹沢は困った。
(……でも、どうやって霊幻さんを『見守る』んだ?『見守る』って言うぐらいだから、とにかく霊幻さんを見守ってみようっ!で、霊幻さんが隙をみせたら守るんだっ!!)
芹沢は霊幻の後を付いていきながら考える。芹沢の頭の中からは、『霊幻』以外の全てが抜け落ちていた。
後を付いていきながら霊幻を見守っている内に、芹沢はどんどん、霊幻から目が離せなくなっていく。霊幻に夢中になっていく。
今、この瞬間、芹沢の世界には、確かに霊幻だけしか存在していない。
全てが色褪せ、霊幻の周りだけが、キラキラと眩しく輝いている。
廃墟から出てくる霊幻さん。
ブロッコリーから出てくる霊幻さん。
学校から出てくる霊幻さん。
次々と移動する霊幻の後を、芹沢は距離を取りながら付いていく。次は何処に行くのかと見守っているだけで、芹沢は嬉しくて仕方がない。今まで生きてきた芹沢の人生の中で、今が一番輝いていた。
学校を出た霊幻は一人になっていた。どうやら、これから家に帰るようだ。家に入ったら、霊幻はしばらく家から出て来ないだろう。
(霊幻さん……どれぐらい家にいるのかな?きっと、疲れたから、何日かは出て来ないよな……。でも、俺は見守り続けよう。でもなぁ……出来れば、中にいる霊幻さんの様子が分かるといいんだけど……超能力で何とかならないかな?よし!俺は、霊幻さんを見守るって決めたんだっ!頑張ってみようっ!)
強く決意した芹沢は、大きく頷いた。今なら、何でも出来る気がする。
(あぁっ!『見守る』って、楽しいっ!霊幻さんを『見守る』って決めて、本当に良かったっ!)
芹沢のウキウキ、ワクワクが止まらない。一人歩く霊幻の後を、芹沢はひたすら付いていく。
その時、歩いていた霊幻が不意に足を止めたので、芹沢も足を止める。チラリ、と後ろを振り返った霊幻は再び歩き始めたので、芹沢も歩き出すと、霊幻は再び足を

止めたので、芹沢も足を止めた。それを何度か繰り返した後、霊幻は足を止めて、芹沢に向き直った。芹沢は知らないが、場所はちょうど霊幻の住むアパートの前にある公園付近だった。

霊幻は芹沢をジーッと見て、口を開いた。

「……なぁ、あんた。助けてくれたのは本当に感謝してるけどさぁ。さっきから、ずっと後を付けてきてるのは、何のつもり？」

「あ、見守ってるんです」

芹沢は即答した。即答されても全く意味が分からない霊幻は、困惑に顔を歪めた。

「はあ？見守ってるって、何を？」

「霊幻さんです。俺、霊幻さんを見守るって決めたんです」

「えぇと……何で？」

「見守るって決めたからです」

「いや、だから、何で俺を見守ろうとしてるの？」

「見守りたいからです」

「そうじゃなくて、何で俺なんかを……」

「俺『なんか』って、何ですか？霊幻さんの事、『なんか』とか、そんな風に言うの、やめてもらえませんか、霊幻さん？」

不機嫌そうに、芹沢の声色が何段も落ちる。突然苛立ち始めた芹沢の姿に、霊幻はポカンと芹沢を見つめる。

「それから、霊幻さん相手にこんな事言いたくないですけど……。何で俺、霊幻さんに俺の生き方、否定されないといけないんですか？そこまで霊幻さんは、俺の人生メチャクチャにしようとしてるんですか？酷くないですか？」

「お前、怒りの沸点低すぎっ!!」

普通の人だったら恐怖に引いている所だが、変わり者、くせ者揃いの『超能力者』に慣れきっている霊幻は芹沢を怖がる事もなく、平気で大声を上げた。声を上げてから、ふと霊幻は「あれれ？」と気が付いた。

「なぁ、あんた……名前は？」

霊幻の素朴な疑問に、芹沢は沈黙する。それから、首を振った。

「嫌です。教えたくありません」

「何で？知られるとマズい名前なのか？」

「いいえ、別にそういう訳じゃないです」

「なら、何で名前を隠すんだよ」

「俺の名前なんて、霊幻さんが知る必要ありません」

「俺は名乗っただろ。それなのに、お前は名乗らないのかよ？」

霊幻が言えば、露骨に不機嫌そうな顔をして、芹沢はそのまま沈黙した。そんな芹沢に、霊幻は更に続ける。

「俺はさぁ、お前の名前が気になるんだよ。何て呼べばいいのか分からないし」

「嫌です。霊幻さんが俺の名前を呼ぶなんて、恐ろしいです。教えたくないです」
また初めに戻ってしまい、霊幻は頭を抱える。霊幻は鋭く、芹沢を指差した。
「いいから、早く、名前を言えっ！」
語気を強くすれば、芹沢は首を傾げる。
「あの、霊幻さん。それは、命令ですか？」
「はぁ？……、うーん……「これは命令だ」って言えば、お前は名前を言うか？」
「命令なら、従います」
「じゃあ、命令」
「芹沢克也ですっっ!!」
芹沢は即答した。
「ややこしい性格してるな、お前って。えーと、芹沢だな、芹沢」
「はい。でも、別に呼ばなくていいです。俺の事は『クズ』とか『ゴミ』とかでいいです。一番的確なのは『引きこもり』か『テロリスト』ですね」
「いや、それおかしいから。……一応言っとくけどさぁ。俺は芹沢をディスるような、そんな呼び方はしないからな。俺は芹沢に助けられて、感謝してる。命の恩人だ。命の恩人にそういう言い方はやめろ。……まぁ、面白いヤツなのは分かったけど」
口元に笑みを浮かべた霊幻が言えば、芹沢は困り果てたように顔を顰めてた。
「どうしよう……俺が、霊幻さんに名前を名乗ってしまったばかりに、霊幻さんは一つ、罪を背負ってしまった……申し訳ないです、ごめんなさい」
「……、もうさ、お前の言ってる事の意味が、全然分からない」
大きく肩を落とした霊幻は、再び歩き出した。
「……良かった。モブ達が合宿行ってくれて。やっぱり、部活は大事だし、学校の人間関係も大事。ごめんな、モブ。俺、反対なんてしてて……。無理、変な命の恩人の面倒みるので手一杯だったよ、お前の師匠は……。はぁ……最後の最後で、ドッと疲れた……、マジでヤバい」
『霊とか相談所の火事』に『爪との激闘』、そして、極めつけに芹沢との謎のやりとり。
「まぁ、いいや。俺は疲れてるから、もう行く。芹沢も、さっさと家に帰れよ。おやすみ」
ついに、霊幻の疲労はピークを越えていた。
霊幻の言葉に芹沢は大きく頷く。
「はい。おやすみなさい、霊幻さん」
アパートに入っていく霊幻を見送った芹沢は、アパートの向かいにある公園に入っていった。
アパートに戻り、洗面台で顔を洗っていた霊幻は気が

付いた。
「あれ？額の傷、治ってる」
霊幻の額にあった傷は、キレイに消えていた。

† † †

そして、夜が更け、朝が来た。
霊幻はいつものスーツにビシッと着替えて、『霊とか相談所』に行くする為、アパートから外に出る。
途端に、
「おはようございます、霊幻さん。……あの、身体、大丈夫なんですか？」
公園に突っ立っていた芹沢が、心配そうに霊幻に駆け寄ってきた。
まさか、芹沢がいるとは思っていなかった霊幻は、驚きに固まり、目を丸くする。
「……え？せ、芹沢？あれ？いつから、そこにいたんだ？」
「俺の事はいいんです」
キッパリと言い切って、芹沢は霊幻の顔を覗き込んだ。
「……それより、霊幻さん。今日はまだ、休んでいた方がいいですよ。昨日は霊幻さんはケガしたり、大変だったんですから。……大丈夫ですか？何処か、具合は悪くないですか？無理しないで、ちゃんと休んで下さい」
「芹沢、お前……」
しきりに霊幻を心配する芹沢の姿に、霊幻は感動する。
（何だよ、こいつ……ちょっと変なヤツって思ったけど……こんなに俺の事、心配してくれて……。とっても良い子じゃないか……。）
目元をグイッと拭うと、霊幻は芹沢に笑いかけた。
「心配してくれて、ありがとな、芹沢。でも実は、事務所が火事で焼けちゃってさ。火事になった事務所がどうなってるか心配だし、ちょっと様子見に行きたいんだ。無理はしないから、大丈夫だ」
「事務所？」芹沢は霊幻の言葉に首を傾げながら、口を開いた。
「霊幻さんって、仕事してるんですか？何してるんですか？」
「ん？あぁ……俺は、霊能事務所やってるんだよ。俺はさ、ほら、『霊能力者』だからさ」
「え？霊幻さんって何の力もないのに、『霊能力者』やってるんですか？スゴいですね」
平然と、芹沢は言った。途端に、霊幻の顔が真っ赤に染まる。
「たわけっっ!!」
思わず、霊幻は大声を上げた。

「……?どうかしましたか、霊幻さん?」

何で怒られているのかさっぱり分かっていない様子の芹沢は、不思議そうに首を傾げた。

「なっ、ななっ、何言ってるんだ、芹沢っ！俺はなぁ、『稀代の霊能力者・霊幻新隆』なんだぞ！今まで、たくさん除霊してきたんだからなっ！すごい霊能力者なんだっ！それなのにっ！」

「でも、霊幻さんって幽霊見えないですよね？見えないのに、除霊するの、大変じゃないですか？」

「だーかーらー！違うって言ってんだろっ！人の話を聞けーっ！」

声を荒げた霊幻は、芹沢の身体をポカポカと殴打する。効果音は可愛いが、意外に重いパンチが芹沢を襲う。霊幻自慢のパンチだ。

しかし、

「ど、どうしたんですか、霊幻さん？何で、いきなり抱きついて来たんですか？急に甘えたくなったんですか？」

殴られても全然気にした様子もなく、芹沢はギュッと霊幻を抱き締めた。

芹沢に抱き締められた霊幻は、ジタバタと暴れた。

「こらーっ！急に抱き締めるなーっ！俺はお前を殴ってんだぞっ！甘えてるんじゃないからっ！……って、あれ？すっげー半纏ふかふかしてる。気持ちいいな、この半纏」

「そうですか？よく分かんないです。何か置いてあったから着てたんですけど。適当に買ったヤツじゃないんですか？」

「いやぁ、これはいい素材使ってるよ。カシミアかな？普通、コートにするよな。こんないい素材。うわぁ、気持ちいいなぁ」

スリスリと、霊幻は半纏に頬ずりする。そんな霊幻を見下ろして、芹沢は閃いた。

「じゃあ、こうしたら、もっと気持ちいいですか？」

霊幻を抱き締めていた腕を解くと、芹沢は半纏を広げて、半纏を広げて、霊幻の身体を包み込んだ。

「うひゃあっ!?こらっ、芹沢っ！半纏でくるむなよっ！……あっ、でも、確かにこれは気持ちいい……」

半纏にくるまれているのは思いの外、気持ち良くて、霊幻は芹沢に身体を預ける。それから、胸板を触った。

「芹沢って、意外にいい身体してるな。鍛えてたの？」

「いい身体、してますか？あんまり、鍛えてたつもりはないんですけど」

「いやあ、いい身体してるよ、芹沢。超能力者って、フィジカル弱いんだけど、お前は違うんだなぁ。」

モブがそうだが、超能力者は超能力に頼って行動している事が多いので、意外と身体が弱い。もしかすると、超能力で筋肉増強しているのかと思ったが、芹沢はしっ

かりと筋肉を鍛え上げているようだ。
感心した霊幻は、ペタペタと芹沢の胸板を触る。
その時、霊幻の首筋をジッと見つめていた芹沢が、いきなり霊幻の首筋に鼻を押し付けて、大きく深呼吸した。
「んひゃっ!?」
首筋に当たった芹沢の鼻息に、霊幻はビクンッと身体を大きく震わせた。
「な、何!?何だ、いきなりっ!?」
「……霊幻さんって、本当にいい匂いしますね」
「え?そうか?うーん……普段、呪術クラッシュで、アロマオイル使ってるからかなぁ?」
クンクン、と霊幻は自分の匂いを嗅いでみるが、よく分からずに首を傾げた。
芹沢は霊幻の首筋の匂いを何度も嗅ぐ。
「いい匂いですよ。ピーチかな?よく分かんないですけど、いい匂いで……美味しそうだなぁ」
ポツリ、と呟いた芹沢の呟きに「え?」と顔を上げて芹沢を見ようとした霊幻の首筋を、芹沢は唇を押し当て、チュウッと吸った。
「ひゃあっ!!」
いきなり首筋を吸われた霊幻は思わず、甲高い声を上げた。自分の声に驚いて、霊幻は慌てて口を押さえた。
身を離そうとしたが、芹沢にしっかりと拘束されているので、逃げる事は出来ない。

「せ、芹沢……っ!ここは、公園だぞっ!何するんだよっ!」
声を抑えて、霊幻は言った。
霊幻自身、すっかり忘れていたが、今、芹沢と霊幻の二人がいるのは公園だ。
慌てる霊幻を余所に、芹沢は平然と、霊幻の首筋をペロペロしている。
「やっぱり霊幻さんって、美味しいなぁ……」
うっとりと呟きながら、芹沢はチューチューと音を立てて、霊幻の首筋を吸い始めた。
「こら、芹沢っ!俺の話を聞きなさいっ!」
「大丈夫です。この公園は、不可視化してますから」
「え?不可視化って……俺達が周りには見えてないって事?」
「はい」と芹沢は頷いた。その拍子に、芹沢の舌が首筋を這い、霊幻は「ひゃっ」と身体を震わせた。
「それから、俺達の声が聞こえないように防音壁を展開してますから、霊幻さんがどんなに声を上げても大丈夫です」
「芹沢……。お前って、やっぱりスゴいヤツだよな。そんなに超能力が色々使えるなんて」
「そうですか?よく分からないけど、出来たんです。だから、霊幻さんは心配しないで大丈夫です」
「そ、そうは言ってもさぁ……。やっぱり、周りが見

えてると、気になるよな……」
周りから見えていないと言われても、場所は見晴らしのいい公園なので、安心出来るものではない。首筋に芹沢が吸い付いている霊幻は頭を動かせないので、視線だけで周りをキョロキョロと見回す。
その時、芹沢はいきなり、霊幻の尻の下に手を差し込んで、一気に持ち上げた。
「ふぇぇっ!?な、何するんだよ、芹沢っ!」
まさか抱き上げられると思っていなかった霊幻は、思わず声を上げた。
「いえ、霊幻さんの尻って、柔らかそうだったんで、つい」
「つい、じゃないっ!……っ!」
抗議しようと霊幻が口を開いた途端、尻に違和感を感じて、思わず口を噤む。
気のせいではなく、尻を揉まれている。
「お、おいっ……芹沢、どこ触ってるんだ……?」
「お尻です。今、俺の手は、霊幻さんのお尻を揉んでいます」
「言うなっ!」
「霊幻さんに、どこを触ってるかって聞かれたんで、俺、答えました」
「分かってる、分かってるけど……っ、ひぇっ」
尻の割れ目に指が入り、霊幻はヒクッと震えた。
「ちょっ、ちょっと、やめなさい、芹沢」
「霊幻さんのお尻……プニプニして、弾力があって、気持ちいいですね。ずっと触っていたいなぁ……」
芹沢の手が、霊幻の尻を両手で鷲掴みにして、ムニムニと強く揉む。
「やっ、芹沢っ、強いからっ……そんなに強く、尻を揉まないでっ……、んっ?んんっ?」
慌てて芹沢の行動を止めようとして、霊幻は気が付いた。霊幻を抱き上げている筈の芹沢の両手が、普通に尻を揉んでいるという事に。
「……あ、あれ?俺、もしかして浮いてる?」
今、霊幻は椅子に座っているような体勢で、芹沢の目の前にフワフワと浮いていた。
尻を揉みながら、芹沢は「はい」と頷いた。
「超能力で、ちょっと浮かしました。この方が、霊幻さんの体勢が安定するんで」
「こっ、こらっ!人に超能力を向けちゃ……っ!」
人に超能力を向けてはいけない。
常々、モブに言い続けて来た言葉を、芹沢にも言おうとした時、芹沢は「あれ?」と呟き、霊幻の尻を揉む手を止めた。急に芹沢の手が止まったので、霊幻も思わず言葉を止めて、芹沢を見た。
芹沢の目は胸元をジッと見つめている。
「……霊幻さん。胸に何か入れてます?」

「はぁ？何言ってんだよ、芹沢。俺が胸に何か入れてる筈ないだろ」
「でも……何かありますよ。何だろう？」
言ってから、霊幻も視線を落とすが、特に何もない。それでも、芹沢は穴が空きそうな勢いで、ジッと霊幻の胸を凝視している。気のせいか、目が青白く光っている。
「お、おい、芹沢？あんまり、見るなよ……」
「すみません、霊幻さん。ぼんやりとしか見えないんで、もっと集中します」
「え？集中するって？芹沢、さっきから何見てるんだ？」
「大丈夫です。ハッキリしてきました」
「い、いや、大丈夫じゃないよ？やめて、芹沢。俺、嫌な予感がするんだけど……」
芹沢の視線を遮ろうと霊幻が手で胸を隠した途端、芹沢は「あっ！」と何かを見つけたように声を上げた。次の瞬間、芹沢の指が、シャツ越しに霊幻の両方の乳首を強く摘まんだ。
「ひゃあん……っ！」
突然、芹沢に両乳首を摘まれた霊幻は、思わず、声を上げてしまった。
芹沢は感動したように目を輝かせて、霊幻を見る。
「やっぱりっ！これ、霊幻さんの乳首ですねっ！ようやく、ハッキリと透視出来ました！うわ……霊幻さんの乳首って、色が鮮やかで……エロい」
「透視って……！芹沢！俺を透視したのかっ⁉」
「俺、霊幻さんをいつでも見守りたいって思ってたんです。だから、透視出来るようになったみたいです」
「そ、そういう問題じゃないだろ……！勝手に人を透視するんじゃないっ！」
「俺も透視するつもりはなかったんですけど……急に霊幻さんの服が透け出して。そうしたら、乳首がぼんやり見えたんです。ほら、ここにある」
言いながら、芹沢は的確に、シャツで見えない筈の霊幻の乳首を引っ張る。
「やぁっ！……ばっ、馬鹿ぁっ！強く引っ張るなぁ……っ！」
霊幻は辛そうに顔を歪め、大声を上げた。今にも泣きそうな霊幻の姿に、芹沢は「あ、すみません」と慌てて、指を離す。それから、今度はそっと慎重に、霊幻の乳首を摘まんだ。
「んんっ」ピクンッ、霊幻の身体が小さく震える。
「えぇと……これぐらいでどうですか？痛くないですか？」
先程までの乱暴な指使いとは違い、芹沢の指は霊幻の乳首を捏ねたり、優しく刺激する。
「んっ、いっ、痛くないけどっ……へ、変な感じっ……」

芹沢に強く引っ張られた時とは違う、何処かもどかしい刺激に、霊幻は声が出ないように口元を手で覆い、恥ずかしそうに頬を赤らめて、モジモジと身体をくねらせる。
そんな霊幻の姿を芹沢は見つめ、大きく喉を鳴らした。
「今の霊幻さん……いつも以上に、エロいです」
そう呟いた芹沢の声は、掠れていた。霊幻の乳首を摘まむ芹沢の指に、自然と力が籠もる。
「せ、芹沢っ……？や、やめっ、やめてっ？……やぁ……っ」
「霊幻さんの乳首も、美味そう……」
ジッと霊幻の乳首を凝視していた芹沢は、舌舐めずりする。芹沢は霊幻の乳首に口を寄せていく。
途端に、
「それはダメッッ!!」
強い口調で、霊幻は言った。
あまりの霊幻の剣幕に、芹沢は思わず動きを止めた。
「霊幻さん、俺、分かりました。今の『ダメ』はマジの『ダメ』です」
「そうだ、芹沢。乳首を吸うのは、マジでダメだ。これから出勤するのに、乳首の所だけ、唾液でベタベタになんて、ダメすぎる……」
考えただけで霊幻は恐ろしくなり、大きくため息を吐く。
「じゃあ、脱がせば乳首吸ってもいいですか？」
「また着るの大変だから、ダメ」
霊幻が目の前に大きくバツ印を作ると、芹沢は明らかに不機嫌そうに顔を顰めた。
「シャツの上から、乳首吸うのもダメ。脱がして、乳首吸うのもダメ。……酷いです、霊幻さん。俺の自由がないじゃないですか。俺はどうすれば、霊幻さんの乳首を吸えるんですか？」
「芹沢……頼むから、俺の乳首を吸うという考えから離れて、お願い」
全然人の話を聞く気配のない芹沢に、霊幻はガックリと大きく肩を落とした。
霊幻は考える。
（いや、でも……。俺がダメって言ったら、芹沢はちゃんとやめられたよな……。知らないだけで、芹沢だって、言えばちゃんと分かるんだ。俺の事を命がけで助けてくれたし……俺の身体の心配もしてくれた。本当は優しいのに、何も教えられてないから、どうしたらいいのか、分からないだけなんだ。芹沢は『爪』にいても、自由がなさそうだったし、窮屈そうだった。何かに拘束されていたような……制限されていたような……。
半纏に、モコモコの髪の毛。挙げ句に、傘まで持って……。明らかに、世間に溶け込めない格好だ。わざとこんな姿形にさせていたのかもしれない。組織から抜けさ

せないように。
芹沢……強かったもんなぁ……。今思い出しても、芹沢の超能力は他の超能力者と比べて、強かった気がする、モブは別としても。島崎の話でも、芹沢の扱いには、組織も困っていたような口ぶりだったし……、でも、ちゃんと、社会の事を教えれば、芹沢だって、色んな事が出来るのに……引きこもりの後、テロリストだなんて、あんまりだ……）
チラリ、芹沢を見る。
芹沢は大人しく、霊幻を待っている。霊幻は芹沢に向かって、口を開いた。
「なぁ、芹沢」
霊幻は芹沢を呼んで、そのモコモコした髪の毛を優しく撫でた。芹沢は驚いたように顔を上げて、霊幻を見つめた。
そんな芹沢に、霊幻は微笑んだ。
「俺がダメって言ったら、ちゃんとやめられたな。偉いぞ、芹沢」
霊幻の言葉に、芹沢は大きく息を飲み、満面の笑みを浮かべた。
「は、はいっ！俺、ちゃんと霊幻の言う事を聞いて、やめられました！……俺、偉いですか？」
「うん。芹沢は偉いぞ。ほら、偉い、偉い」
言いながら、霊幻は何度も芹沢の頭を撫でる。芹沢はもっと撫でて欲しそうに、俯いて霊幻の手に頭を押し付ける。
「しょうがないなぁ」と言って、霊幻は芹沢の頭を撫でてやる。
霊幻にはどうしても芹沢を無下に出来なかった。
「ほら、芹沢。そろそろ俺を下ろしてくれ」
ひとしきり芹沢の頭を撫でた霊幻が言うと、芹沢は素直に「はい」と言って、霊幻の身体をゆっくりと下ろした。地面に足を着くと、霊幻は芹沢を見上げた。
「さーて、俺はそろそろ事務所に行くから」
「事務所……？さっき言ってた、自称・霊能事務所ですか？」
「自称とか言うな。俺自慢の『霊とか相談所』は、立派な霊能事務所なんだからな」
「そうですか……」と呟き、芹沢は考え込むように俯いて、口を手で覆った。
「あの、霊幻さん……その事務所って、人は来ますか？」
「ん？まぁうちは、『相談所』だからな、色んな客が来るぞ」
『霊とか相談所』はおかげさまで大好評で、客層も広い。
霊幻の言葉に、芹沢はどんどんと顔を顰める。そんな芹沢の姿に、霊幻は首を傾げる。
「あの、霊幻さん」

意を決したように、芹沢は口を開いた。
「超能力者の客が来たら、追い返して下さい」
「え？」思いがけない芹沢の言葉に、霊幻の声が裏返ってしまう。構わず、芹沢は更に続けた。
「超能力者はとても危険なんです。超能力者はバケモノの集まりなんです。まず、危険なので、絶対に素手で触らないで下さい。殴るなんて、もってのほかです。霊幻さんなら、すぐに懐かれます。話しかけるのは、もっと悪いですね。他の超能力者から庇ったり、逃がしたりなんて、絶対にあってはならない事です。その後、付きまとわれるに決まっています。……だから、超能力者に出会ったら、無視が一番です」
熱弁する芹沢の言葉の数々に、霊幻は顔を引きつらせる。
（やべぇ……全部、島崎に当てはまってるよ。どうしよう……）
霊幻の脳裏に浮かぶのは、島崎の顔だ。
（いや……まさか俺が、島崎に付きまとわれるなんて、ある訳ないよなぁ？……うん。ない、ない）
既に芹沢に付きまとわれている霊幻は、自分に言い聞かせる。芹沢は真剣な表情で、霊幻を見つめている。
「な、なるほど……参考になったよ。ありがとう」
「いいえ。当然の事です」
芹沢は霊幻を覗き込んだ。霊幻に向けられる芹沢の真っ黒な目に、霊幻は吸い込まれそうな錯覚に陥り、ブンブンと首を振って、歩き出した。
「そろそろ俺も、本当に事務所に行かないと。……ほら、行くぞ、芹沢」
「え？霊幻さん？」芹沢は戸惑いの声を上げる。霊幻は立ち止まり、「どうした？」と言って振り返る。
「い、いえ……。俺も、行っていいんですか？霊幻さんの側で、霊幻さんを見守ってもいいんですか？」
「あのなぁ、芹沢。俺だって大人なんだ。ここまで来れば、分かるよ。俺が止めたって、どうせお前は、俺をずっと見守る気なんだろ。芹沢がずっと後ろにいると、俺が落ち着かないから、一緒に行こう」
霊幻は自分の横を指差した。
表情を輝かせた芹沢は、霊幻の横に立ち、満面の笑顔で霊幻の顔を覗き込んだ。
「はいっ！霊幻さん、お供しますっ！」
言って、芹沢は「あれ？」と首を傾げた。
「その自称・霊能事務所って火事で焼けたんじゃなかったですか？様子見に行くって、霊幻さん言ってましたけど……行って、何するんですか？」
芹沢の素朴な疑問に、霊幻はニヤッと笑みを浮かべて、親指を立てた。
「自称って言うな。実は昨夜、保険会社から電話が来てさぁ。何とか火災保険、下りそうなんだよ。元々、リ

フォームするつもりだったし、この際だから事務所を引っ越そうと思ってさ。使えそうな物がないか、探しに行きたいんだ」
「なるほど。霊幻さん、スゴいです。分かりました」
「分かればよろしい。じゃあ行くぞ、芹沢」
霊幻が芹沢を見上げると、芹沢は視線を下に落とし、困ったように顔を顰めた。
「……でも、霊幻さん。乳首が透視しなくても分かるぐらい、ピンッと立っているんですが、いいんですか？」
「言うなっ、無神経だぞっ!!」
声を荒げた霊幻は、胸元を隠した。

† † †

「ふぅ……けっこう、残ってて良かったぁ」
霊幻は焼け焦げた事務所内を確認して、安堵のため息を吐いた。
事務所は焦げているが、全てが燃えた訳ではなかった。残念ながら、水を被ってテレビなどの電化製品は壊れてしまっていたが、使えそうな物は、霊幻が想像していたよりも残っていた。

「ここにある中で、使える物を出せばいいんですね」
芹沢がそう言うと、事務所内にある焼けていない物が次々に浮いていく。
「おぉっ！スゴいな、芹沢は。これなら、引っ越し業者を頼まなくて済みそうだ」
感心の声を上げる霊幻に、芹沢は照れ臭そうにに笑った。
「まだ、いる物といらない物は分けてないんで、どれが必要か、教えて下さい、霊幻さん。分けますんで」
「そうだなぁ、どれがいいかな。それじゃあ……」
霊幻は次々に、『いる物』『いらない物』を言っていく。芹沢はその指示に従って、物を分けるという作業を繰り返している内に、事務所内はすっきりした。
「……大体、こんな所かな？おぉっ！意外に使える物が多くて助かった。後は……次の事務所が決まるまでの保管場所か……。うーん、置く場所ない……。しょうがない、トランクルームをレンタルするか……」
「保管場所ですか？じゃあ、この荷物は公園に置いておきますよ」
「そっか。確か、あの公園……不可視化してるんだもんな。金もかからないし、一番お手軽だよな。……よし。芹沢、頼む」
「分かりました。じゃあ、この荷物も不可視化して、運びますね」

「あ、ちょっと待って、芹沢」
　霊幻は浮いている中にバリカンを見つけた。バリカンを手に取って、芹沢を見る。
「折角だし、芹沢の髪の毛も、ここに置いて行こう」
「え？」言われている意味が分かっていない様子の芹沢に、霊幻はバリカンを見せる。椅子を置いた霊幻は芹沢を見て、椅子を指差す。芹沢は不思議そうに首を傾げた。
「ほら、髪の毛切るから、ここに座って」
　霊幻はニッコリと笑って言った。

　そして、十五分後……。

「いや……誰、お前？」
　芹沢の髪をキレイに短く切り終わった霊幻は、呆然とした。
　床には、真っ黒なモコモコした芹沢の髪の毛。
　椅子に座っている芹沢は、モコモコしていた芹沢とはまるで別人。キリリ、とした凛々しい顔立ちをした芹沢が、そこいた。
「芹沢ですよ、霊幻さん」
　真顔で芹沢は言った。
「……知ってるよ。知ってるけどさぁ、芹沢、変わり過ぎ。ちょっと待ってろ、今、鏡を探すから。きっと、お前も自分で自分の顔見て、ビックリするぞ」
　鏡を探そうとする霊幻に、芹沢の手が伸びてきて、霊幻の両頬を包み込んだ。いつの間に距離を詰めたのか、芹沢の顔が目の前にある。
「霊幻さん……そんなに変わりました、俺？」
　言って、芹沢は霊幻の顔を至近距離で覗き込む。光も通さない、鴉の羽のような真っ黒な目に、霊幻は思わず息を飲んだ。
　霊幻の目をジッと見つめていた芹沢の口元が僅かに緩む。
「……本当だ。霊幻さんの目に映る俺って、まるで別人ですね。へぇ……こんな顔してんだ、俺」
　シミジミと呟く芹沢に、霊幻は顔が熱くなっていくのを感じて、慌てふためく。
「べ、別人過ぎるだろ。それに、何だか、性格も変わってないか、芹沢？さっきまでいたもこ沢は何処に行ったんだ？」
　何処かオドオドと何かに怯えていたモコモコした芹沢は影を潜め、やたらと堂々とした凛々しい芹沢が、霊幻の目の前にいた。先程までよりも、心なしか視線の位置が高い気がする。
（何だか、身長も違う気がする……。まさかなぁ、そんな訳、ある筈……。あ、そうか。モコモコした芹沢って、いつも背中丸くしてたんだ。だから、身長が低いよ

うに見えてたんだ……）
　今の芹沢は、背筋がしっかりと伸びている。だから、背が高くなったように感じたのだ。
　考えて、霊幻は一人納得した。
「俺は俺ですよ、霊幻さん」
　芹沢は霊幻の手を取ると、自分の頬に触らせる。
「それとも……霊幻さんは、前の俺が良かったですか？」
「どっちだって、芹沢は芹沢だろ。ただ、性格がさ……って、距離近いっ！」
　今にも唇同士がくっつきそうな程の至近距離に、霊幻は思わず声を上げる。少し、唇がくっつきそうになって、霊幻は「おっとっと」と口を噤んだ。芹沢はおかしそうに「ククッ」と喉の奥を鳴らして笑う。
「霊幻さん、って本当に可愛いですよね。こんな男に迫られたら、もっと警戒しないとダメですよ？」
「……警戒したら、お前はちゃんとやめられるのか？」
　霊幻の言葉に、芹沢は驚いたように瞬きを何度か繰り返すと、ゆっくりと口を開いた。
「やめられませんね。さすがは、俺の霊幻さんだ」
「そりゃどうも。ただなぁ、俺は『芹沢』の霊幻さんになった覚えはないぞ。それを言うなら、お前の目標はかなり遠い」
「はい、そうですね。……、……、あー、ちょっと待って下さい。暑いな、半纏着てると」
　芹沢は霊幻から身を離すと、素早く半纏を脱いでそこら辺に放り投げる。霊幻の視線が、半纏を追いかける。
「あっ！ 芹沢、その半纏いらないなら、俺にくれ。すっげー柔らかくて、気持ち良かったんだよ」
　半纏に伸ばそうとした霊幻の手を、芹沢は掴んだ。芹沢はそのまま、霊幻の身体を引き寄せて、抱き締める。
「……霊幻さん。半纏なんて、必要ありませんよ。俺が、霊幻さんを暖めますから」
「そういう事じゃないっ！ 馬鹿っ！ とにかく荷物を運ぶっ！ それから、半纏は没収！」
「でも……」
「芹沢。俺は、荷物を運びに来たんだぞ。あと、半纏よこせ」
　不満そうに霊幻を見ていた芹沢は、渋々という様子で半纏を霊幻に手渡した。
「霊幻さん、荷物運びますね」
「頼んだぞ、芹沢。……あ」
　窓の外を見た霊幻は、気が付いた。霊幻は窓の外を指差して、芹沢を見る。
「芹沢。『霊とか相談所』の看板も、よろしくな」
　霊幻の言葉に、芹沢は「はい」と返事をして、外の看板も外した。

霊幻の現状報告

（あぁ……何やってんだろ、俺）

所長用のデスクの革張りの肘付き椅子に腰掛けた霊幻は大きくため息を吐いて、チラリと、窓の外を見る。窓一面に、大きなブロッコリーが見えるものの、正直、今の霊幻にとって、ブロッコリーどころではない。何せ、せっかく新装開店した『霊とか相談所』なのに、客足がとても鈍いのだ。元々、予約の入っていた依頼をこなしたり、常連客の依頼を引き受けたりして、現状の事務所は成り立っているが、最近では徐々に、常連客の依頼まで減っている。

（どうしよう……何がいけなかったんだろう？『霊とか相談所』のホームページもリニューアルしたし、メールで相談を無料で受け付けるようにしたし……、『悪霊三体につき、悪霊一体無料』キャンペーンも始めた……、アロマオイルだって、新しく作ったし……、一体、何がいけなかったんだろう……。あぁ……っ）

自分の乳首をいじる指に、霊幻は力を込める。思わず仰け反った拍子に、椅子がギシリと音を立てる。

「んんっ、こんなことっ、ふぅ……っ、したらっ、だめなのにぃっ」

霊幻は乳首をいじる手を止められない。こねるように押し潰したり、摘まんで引っ張ったり、刺激を加えると、じわりと乳首から全身に、甘くてとろけるような快感が広がっていく。もうやめよう、と何度も自分に言い聞かせているのに、指がまるで違う意思を持っているように、言うことを聞かない。

（男なのに、乳首が気持ちいいなんて……。しかも、事務所でこんな風に乳首をいじるなんて……、現実逃避？いいや、違う。芹沢のせいだ、あいつがいつも、俺の乳首ばっかりいじるからっ）

いつの間にか、事務所に居着いていた芹沢を、霊幻は思い出す。それが『同情』からだったのか、命を助けてもらった『感謝』からだったのかは、霊幻自身分からない。ただ、霊幻は芹沢の話を聞いている内に、芹沢を放って置けなかった。事務所に居着いていた芹沢を、霊幻は正式な社員として雇い入れようと決心させるのに、時間は必要なかった。

超能力を制御出来ず、子供の頃から引きこもり、部屋から出て、初めての社会との繋がりがテロ行為。社会経験は浅いかもしれないが、人生としては濃すぎる内容に、霊幻は思わず頭を抱えてしまったのを思い出す。しかも、曲がりなりにも、三年間『爪』に所属して世界を回っていた筈なのに、芹沢には『社会常識』と呼べるもの、い

や、『一般常識』と呼べるものが何一つ備わっていない。それに加えて、周りからは馬鹿にされ、芹沢はますます怯えるようになり、周りの目を気にする性格へと変わってしまっていた。そんな常に怯えたような性格も、髪型を変えた途端に落ち着いたのだから、足りなかったのは、本人の『自信』だったに違いない。

最近では、すっかり『霊とか相談所』の所員として、不器用ながらも頑張っている。相変わらず、『一般常識』に欠けているし、過激な部分は多々あるが、仕方ないとある程度は割り切っている。教えなければいけない事は、山のようにあるのだ。

『爪』時代は事あるごとに超能力が暴走させていたらしいが、今ではすっかり超能力も容易にコントロールが出来るようで、芹沢自身戸惑っていた。

霊幻は以前、『ちょっと作ってみろ』と芹沢の超能力を固定化させる能力で具現化させたクッションに座った時の事を思い出す。

クッションの形をしていても固いと思い込んでいた霊幻は恐る恐る、ぽふんっ、と身を沈めてみると、今まで触った事のある柔らかいどの素材よりも肌触りがよくて、柔らかくて、霊幻は思わず顔を綻ばせた。そんな霊幻に、芹沢は嬉しそうに目を輝かせる。

『霊幻さん、気に入ってくれましたか？嬉しいな。俺、霊幻さんに喜んでもらいたくて、頑張って作ったんです！』

『うん、気持ちいい。ヤバい……これは今までで、最強の肌触り』

『何か好みの素材があったら、言って下さい。俺、何でも作れると思いますから』

「素材……」呟いて、霊幻は窓の外に広がる青空に浮かぶ雲を見た。雲はゆっくりと形を変えて、気ままに空に浮いている。

『俺、雲の上で寝てみたかったんだよなぁ』

子供の頃を思い出して、霊幻はポツリと呟いた。そんな霊幻に、芹沢は首を傾げる。

『雲？ただの水蒸気の集まりじゃないですか』

『お前ってヤツは、夢がないぞっ！……まぁ、別にいいよ。子供の頃の憧れだし』

拗ねたように霊幻がそっぽを向くと、芹沢は頷いた。

『分かりました。雲みたいなベッドですね。今度、作ってみます』

『それは……期待しちゃうなぁ』

霊幻は自分の座るクッションに触れる。このクオリティを作れる芹沢が作る雲のベッドなら、期待が持てそうだ。

「あっ、あぁ……っ」

自覚なく、霊幻の乳首をいじる指にも、自然と力が入る。
芹沢の問題行動の中には過剰なスキンシップとも言える『セクハラ』も含まれていた。
『霊幻さんの身体って、柔らかくてふわふわして、美味しそうです』
そう言って、芹沢は事あるごとに霊幻の身体に触れるのだ。拒絶しようにも、キラキラと無邪気に目を輝かせる芹沢を無下に出来ないで、「まぁ、ちょっと触るだけなら」と、『子犬のいたずらを見てみぬふりをする親犬』のような心境で、芹沢のしたいようにさせてしまったのが、そもそもの間違いだった。最近では、連絡用に渡したスマフォでネットばかり見て、変な知識ばかり吸収して、セクハラの過激さが増している。
『こうすると気持ちいいってネットに書いてありましたけど、本当ですか?』
と言って、芹沢は霊幻の乳首をいじるのだ。確かに、気持ちいい。ネット知識が恐ろしい。さすがに、『ネット情報は鵜呑みにしないように』と注意したが、芹沢がどこまで聞いているのかは分からない。
『霊幻さん。お尻は英語で『アナル』って言うんですよ』
芹沢が霊幻の尻を見ながら、真剣な顔で言った時には、『尻は英語でヒップだ』と誤魔化したが、芹沢が尻穴に興味を持っているのは間違いない。しかも、他の誰でもなく、霊幻の尻穴に興味を持っている。気のせいだと思いたい。思いたいが、気のせいではないだろう。ネットでエッチな情報ばかり集めているのかと思えば、どうやら違うようだ。
『霊幻さん。茶渋を取るには、塩がいいらしいですよ。ネットで見ました!』
ある日、一生懸命湯飲みを洗っている芹沢の姿に、霊幻は何とも微笑ましい気持ちになったものだ。
(ようするに……あいつって、子供なんだよなぁ……。何で、子供って尻とかおっぱいが好きなんだ?)
芹沢の事を思うと、なかなか厳しい事を言えないのも事実だ。今まで超能力に振り回されて、人生を無駄にしていた芹沢も、ようやく人並みの楽しみを見つける事が出来たのに、邪魔はしたくないという気持ちもある。
(そもそも……俺は男なのに、こんなに乳首が気持ちいいなんて……おかしいかな?どうしよう……誰かに相談したいけど、相談出来る相手もいないし……。まさか俺が、こんな悩みを持つ日が来るとは思わなかった……)
考えながら、霊幻はゆっくりと指を離した。これ以上は、本当に取り返しのつかない事になりそうで怖い。
(やばい……。俺、乳首弄りながら芹沢のこと考えてた?ああ、乳首に事務所、考える事だらけだ……)
霊幻は呼吸を整えながら、気持ちを落ち着かせようと、

事務所の中をぼんやりと見回す。目に飛び込んできたのは、つたない筆使いで描かれた『チューリップ』の絵だ。このチューリップの絵は、小学生だったモブが、霊幻にプレゼントしてくれた絵だ。

『これ、ししょうにプレゼントです。この花は『チューリップ』っていうんですよ』

全然チューリップに見えないが、本人がチューリップというのだからチューリップなのだ。以来、モブの絵は『霊とか相談所』にずっと飾られている。

チューリップの絵も火事で燃えてしまったかと諦めていたが、無傷で残っていたので、また飾る事が出来て良かった。

（そう言えば……モブ、最近事務所に来ないなぁ……まぁ、友達が出来たなら、いい傾向なんだけど……ちょっと違うみたいなんだよなぁ……）

以前、事務所を訪れたモブは様子がおかしく、調子にのってる顔をしていた。話しぶりも、完全に調子ぶっこいてる感じだったし、「僕にも、ついにモテ期が……」などと呟いていたのを、霊幻は聞き逃さなかったのだ。

「どうした？」と聞いても、「今はまだ言えません。その時がきたら、師匠に言います」と中学生特有の『黒歴史』の匂いを漂わせるモブの姿に、霊幻は一人ほくそ笑んだ。

（……モブのやつ。あれは、自分がモテてるって完全に勘違いしてるな）

あんな状態では、しばらくは『霊とか相談所』には来ないだろう。今のモブは『モテる事』に夢中なのだ。

（モブが健全な中学校生活を送ってるのか。うん、実によろしい）

後になって勘違いに気付いた時、モブの黒歴史確定の出来事だろう。霊幻から見れば、いかにも『青春』という感じで、今のモブの一生懸命さは実に微笑ましいものがあった。超能力に振り回されていたモブも、ようやく中学生らしい生活が送れているという事だ。

（ん？これって……芹沢と一緒？超能力者って、みんなそうなの？）

その時だった。

トントン

その時、事務所のドアがノックされた。どうやら、久しぶりの客だ。

「すみません……。実は、ご相談したい事があって……」

開いたドアから現れたのは、眼鏡をかけた若い男性だ。

「ようこそ。『霊とか相談所』へ！私が、所長の霊幻新隆です！あなたのお悩み、すぐに解決しますので、ご安心を！」

自分を指差して、霊幻はドヤ顔で言った。

第二章 謎の島崎と霊幻新隆

「皆さんは、私の超能力は『テレポート』だけだと思っているようですね。実際には、少し先の『未来視』も可能です。この力を使えば、突然の襲撃にも十分対応可能です。そこのあなたとあなた。銃を撃っても弾の無駄遣いなので、オススメは出来ませんね」

撤退後、島崎が訪れたのは、首相官邸の総理執務室だった。自力で調味タワーから脱出した総理大臣は無事保護され、首脳官邸は大騒ぎ。今回の『爪』によるテロ行為について、調味市復興について、総理大臣誘拐について。決めなければならない事が、山のようだ。休養を取っている暇など勿論ない。総理大臣は自力で脱出したその足で、そのまま首相官邸に戻った。

戻ってくれば、本来、総理大臣が座る執務用の椅子に腰掛けていたのは、総理大臣誘拐の実行犯である島崎。

総理大臣を誘拐した実行犯の大胆不敵な登場に、現場は騒然となる筈が、島崎が突然始めた演説に、一同誰もがポカンとした表情を浮かべて、動くのを忘れている。既に、その場の空気は、完全に島崎が支配していた。

島崎は周りの戸惑いなど無視して、『自分がどれだけ優秀か』という事を延々と語った。

その姿はまるで、舞台で演技をする役者のようだ。

「……と、いう訳で、私を雇い入れるのが、この国にとって一番のメリットとなるでしょう」

言って、テレポートした島崎は、執務室に入って来たまま呆然と突っ立っている総理大臣の横に立って、肩をポンッと叩いた。

瞬間、島崎の超能力で転移した総理大臣は執務用の自分の椅子に腰掛けている。

「いかがですか、総理大臣。私を雇う気になったでしょう?」

続きを聞くまでもないし、未来視を使う必要も無い。その先に総理大臣が言う言葉を、島崎は既に知っていた。

† † †

(やれやれ……霊幻先生の器の大きさには、いつも驚かされるものだ)

島崎はプリントされたレポートを指でなぞりながら、大きくため息を吐いた。

盲目の島崎には本来プリントの文字が見えない筈だ

が、研ぎ澄まされた島崎の感覚なら、プリントされたレポートでも、僅かなトナーの凹凸を指で感じ取り、指をなぞれば読む事が可能だ。

レポートに書かれている内容は『芹沢克也』についてだ。

正直、芹沢が『霊とか相談所』で働き始めたと知った時、島崎は驚いた。

何せ、『爪』の幹部となれば、要注意危険人物だ。まず、普通に社会生活を送れる筈がない。

普通に暮らしたければ、自分のように過去の経歴を全て抹消し、『国家公務員』になるしかないだろう。嫌なら『超能力者専用収容所』に入るか『逃亡生活』の二択しかない。

なのに、芹沢は無罪放免。あり得ない話だ、普通なら。芹沢の存在が国家に『黙認』されているのは、『彼は組織に『洗脳』を受けていて、全く現状を把握していないようだった』という、芹沢に逃がしてもらった総理大臣の証言。それを裏付けるような『ヤツは社会的常識に欠けており、超能力を制御出来ていない様子だった』というヨシフの証言。それから、『芹沢は親父のやっている事に抵抗感があった。最後は組織を裏切って、俺達を助けてくれた』という鈴木ショウの証言。

この三人の証言があったからだ。

そんな芹沢は現在『霊とか相談所』で霊幻の部下だ。

超能力を制御出来ている上、特に問題なく日常生活を送っているのだから、わざわざ『蜂の巣をつつく』ような真似を、国家がする訳にはいかない。だからと言って、放って置く訳にもいかず、一定の監視は必要だ。そんな厄介な役割に、白羽の矢が立ったのが、島崎だった。

（……と、いう名目で、霊幻先生にお会い出来る口実が出来た。やはり、国家権力。就職先を『国家公務員』にして良かった）

島崎はご機嫌に聞いていた音源を止めて、イヤホンを外す。

今聞いていたのは、島崎の最近のお気に入りの音源『霊幻先生の塩語りボリューム５・伯〇の塩・後編』だ。他にも『霊幻先生の塩語りボリューム３・エキストラ・ファイン・ソルト編』も筆舌に尽くしがたい。

島崎は別のボイスレコーダーを取り出して、イヤホンを差し込み、耳に当てる。

『お客さん、来ないなぁ……』

イヤホンから聞こえてくる霊幻の声に、島崎の背筋にゾクゾクと電流が走る。イヤホンから聞こえてくるのは、事務所に仕掛けた盗聴器の一つだ。今現在、事務所には霊幻ただ一人。こんな絶好のエロチャンスを、逃す訳にはいかない。

（もっと霊幻先生のいやらしい音源を増やしたい。出来れば、芹沢の声抜きで）

いつもいつも、霊幻の音源に入ってくる芹沢の声に島崎は苛立っていたのだ。多大なストレスで、またも新しい超能力が発現しそうだ

（あの野郎……霊幻先生の優しさに付け込んで、セクハラしまくりやがって……。セクハラし放題だなんて……最高の職場環境じゃないかっ！……あぁ、羨ましいっ！畜生っ！あの野郎、絶対に殺すっ！）

内心で、島崎は声を荒げる。

『……んっ』

その時、霊幻のくぐもった声が聞こえる。

ピタリ、島崎は動きを止め、耳を研ぎ澄ます。

荒い呼吸音。布の擦れる音。霊幻の指が何かを摘まむ音。

（これは間違いなく、乳首を自分で弄っているな。さすがは霊幻先生。……素晴らしいっ）

うっとりと、島崎は霊幻の声に夢中になって聞き入った。

（ずっと聞き入っていたいが……残念ながら、始まりがあれば、終わりがある。残念。非常に残念だ……。それでも、私は行かなくてはならない。仕方がないので、今録音している音源は、後で聞き直そう）

島崎はきっちりとオールバックにしていた髪の毛を無造作にバサバサと崩し、レンズに淡い色が入っている眼鏡を着用する。

「もう少しだけお待ち下さい、霊幻先生。今、あなたの下僕が参ります」

言うが早いか、島崎は『霊とか相談所』に座標を合わせて、テレポートした。

目の前には、扉が一枚。

ゆっくりと、島崎は扉をノックする。

トントン

「はーい、どうぞー」

室内から、声が返ってくる。

島崎の心臓が、大きく高鳴った。扉を開いた島崎は、ゆっくりと中に入る。目の前には、霊幻が立っている。

（今度は慎重に。声が外れないように）

島崎は自分に言い聞かせながら、ゆっくりと口を開いた。

「すみません……。実は、ご相談したい事があって……」

控えめに言えば、霊幻はニッコリと笑い、両手を広げ、

「ようこそ。『霊とか相談所』へ！私が、所長の霊幻新隆です！あなたのお悩み、すぐに解決しますので、ご安心を！」

と、霊幻は島崎を迎えた。

そんな霊幻の声を聞きながら、島崎は、

（あぁ……この音源、目覚ましにしよう）
と、心に決めた。

† † †

「初めてのお客様ですね。初回相談料は無料ですので、どうぞご安心を。まずは、こちらのアンケートにご記入下さい」
ニコニコと笑って、霊幻はソファに座る男性、島崎にアンケート用紙を差し出した。霊幻は目の前に座る男が、島崎とは気付いた様子はない。
アンケート用紙を受け取った島崎はさり気なくプリント用紙に触れ、質問内容を確認してから、さらさらと淀みなく字を書いていき、どんどんアンケート用紙を埋めていく。
「はい。これでよろしいでしょうか?霊幻先生」
「え?せ、先生?」
書き終わったアンケート用紙を霊幻に返すと、霊幻は戸惑いの声を上げげた。島崎は首を傾げる。
「どうかなさいましたか?霊幻先生」
「えぇと……、はい、先生ですよね、俺は。先生か……久しぶりに事務所の仕事してる……。先生……霊能者に戻ってきた感じだ……」
（よっしゃ!霊幻先生の可愛らしい声の音源ゲット!）
ブツブツと独り言を呟く霊幻に、素知らぬ顔をした島崎は、心の中で歓喜の声を上げた。
霊幻は戸惑いながらも、アンケート用紙にざっと目を通してから、大きく頷いた。
「えーと……名前は島崎亮さん、ですね。ご職業は……へぇ～、雑誌のライターさんなんですか。すごいですねぇ～」
「雑誌のライターと言っても、男性向けグルメ系雑誌や旅行系雑誌に、たまに記事を書かせてもらったりとか、その程度なのですけどね」
「いえいえ。立派な職業じゃないですか。男性向けのグルメ雑誌。俺もコンビニで見かけるとつい買っちゃうんですよねぇ、もしかして、この雑誌に今までも書いてました?島崎さんの記事、読んでみたいなぁ」
「ありがとうございます。実は、次に出る雑誌には私の記事が載るんですよ」
嘘ではない。偽りの職業とは言え、怪しまれては意味がないので、たまに記事は書くようになっている。なので本当に、今月発売する男性向けのグルメ雑誌に、記事が載る事になっていた。
島崎の言葉に、霊幻は身を乗り出した。
「買います、買います!うわぁ、楽しみだなぁっ!ど

の記事が島崎さんですか？」

霊幻の反応に、島崎は思わず笑ってしまいそうになる。

(霊幻先生……名前はフルネームを書いたのに、全然気付いていらっしゃらない)

確かにアンケート用紙に書いた島崎の経歴は偽りのプロフィールだが、名前は本名を書いた。見た目にしても、前髪を下ろし、眼鏡をかけただけで、他には何も変えていない。

なのに、霊幻は島崎を疑う気配もない。

「実はですね」霊幻の嬉しそうな声。きっと、島崎の目が見えるなら、霊幻は上機嫌に笑っているのだろう。

「島崎さんが、新しい事務所になって、初めての新規のお客様なんです。どうしても、常連客ばかりだったので」

「……そうなんですか？たまたま看板が見えたので入ったのですが……。それは、嬉しい偶然ですね」

「そう言ってもらえると、俺も嬉しいです。えぇと……質問内容は……、え？恋愛相談？」

霊幻から驚きの感情が島崎に伝わってくる。霊幻の視線が、痛い程に突き刺さり、島崎は興奮を覚える。

「あの……失礼かもしれませんが、島崎さん……モテますよね？」

「はい」島崎は笑顔で淀みなく、ハッキリと答えた。

「そうですよね」

「これはもう、覆しようのない事実ですから。ですが……」

笑顔を曇らせ、真剣な表情になった島崎は、霊幻の顔を見つめる『ふり』をする。

「私がモテるかどうかは、どうでもいいんです。どうしても、また会いたい人がいるんです。でも、どうやって声をかけたらいいか、分からなくて……」

「なるほど……」

島崎の言葉に、霊幻は考え込んだ。

そんな霊幻のオーラを見ながら、島崎は喜びに満たされていた。

(今日はなんと素晴らしい日なんだ。こんなに霊幻先生のお声を録音出来るだなんて……。帰って、音声の編集するのが楽しみだ。しかも、間近で先生の美しいオーラを拝見出来るなんて……。素晴らしい。客が来てくれて嬉しい気持ちと、今は芹沢がいないので本気の除霊じゃなくて良かったという安堵。それから、相談内容がいかにもモテそうな若い男性からの恋愛関係という戸惑い。複雑に混ざり合ったオーラは、何度見ても、美しい。……あぁ、堪らない。このまま、ずっと見ていたい……)

うっとりと、島崎が霊幻を見つめている内に、霊幻はゆっくりと顔を上げた。

「島崎さんの話を聞いている感じですと、その相手

の方とは一度お会いした事があるようですが……。初めて会った時は、どんな感じだったんですか？」
「殴られました」
島崎は即答する。
「は？」言われている意味が理解出来ない様子の霊幻は、素っ頓狂な声を上げた。素敵な音源をゲット出来た事を内心で喜びながら、島崎は更に続ける。
「初めて会った時、その方から殴られました。何度も」
「何度もっ⁉」
霊幻は驚きの声を上げて、身を乗り出す。島崎は「はい」と笑顔で頷いた。
「私はその方が側まで来ている事に全く気が付かなかったので、完全なる不意打ちですね。……惚れました」
うっとりと呟く島崎を、霊幻は呆然と見つめている。視線が痛い。ゾクゾクする。
「とっても言いにくいんですが……、島崎さん。あなたの話の中の何処に、惚れる要素があったでしょうか？」
完全に霊幻は困惑している。未だに島崎の正体に気付かない霊幻に、島崎は楽しいような、残念なような、複雑な気持ちだ。
「一目惚れ、とは違いますね。何と言いますか……殴られた瞬間に『この人だ』と思ったんです、霊幻先生。「私には、この人しかいない」と、そう思ったんです」
「えぇと……。島崎さんは『吊り橋効果』はご存じですか？」
言いにくそうに尋ねる霊幻に、島崎は大きく頷いた。
「存じております。カナダの心理学者が発表した『吊り橋理論』ですね。『生理・認知説の吊り橋実験』によって実証された感情の生起に関する学説です。吊り橋効果・恋の吊り橋理論とも呼ばれています。私も論文は拝見しました。さすがは霊幻先生、博識でいらっしゃる」
「そこまで知っているなら……吊り橋効果、という事はなさそうですね」
霊幻の言葉に、島崎は「勿論です」と力強く頷いた。
「そりゃそうですよね。島崎さん、頭良さそうですし。……でも、ファーストインプレッションで、殴られてるんですよね。失礼ですけど、島崎さんはその方に何かしたんですか？いきなり殴られるなんて……普通、ないですよね？」
「いいえ、何もしていません」
「え？」言われている意味が理解出来ていない霊幻は、島崎に聞き返した。島崎は口を開く。
「本当に私は何もしていないんですよ、霊幻先生。私は立っていただけなのですが、その方は突然殴りかかって来たんです。ムシャクシャしてたのかもしれません。最高ですよね？」
「最高ですよね？って同意を求められましても……俺、

困っちゃいますよ、島崎さん」
本当に困っている様子の霊幻に、島崎は思わず笑ってしまう。
「霊幻先生、私にとってその方は『最高』なんですよ。ですから……何とか声を掛けたいと思っているのですが……中々、勇気が出なくて……」
「相手の方の居場所はご存じなんですか？」
「はい。尾行しましたから、自宅は確認済みです」
「え……？尾行？」
戸惑いの声を上げる霊幻をそのままに、島崎は更に続ける。
「それから、盗聴もしているので、その方の行動は、大体把握しています。ただ、声を掛ける勇気がなくて……実に、不甲斐ないものです」
言いながら、島崎はため息を吐いた。そんな島崎を、霊幻はジーッと無遠慮に凝視する。
「え、えぇと……盗聴はさすがに……でも、相手はいきなり島崎さん殴ってるし……あれ？もしかして、お似合いの二人？」
ブツブツと霊幻は独り言を呟く。
「教えて下さい、霊幻先生。私はどうすればいいのでしょうか？」
島崎は立ち上がり、霊幻の座るソファに移動して、霊幻の横に密着して座り、霊幻の手を握る。初めて触れた霊幻の手のぬくもりに、島崎は興奮せずにはいられない。
「あ、あの……島崎さん……？」
困惑する霊幻を余所に、島崎は頬ずりしたい気持ちを抑えて、霊幻の手の感触を忘れないように、何度も撫でる。
（あぁ……霊幻先生の手は、何て温かいんだっ！まるで、先生のお人柄が出ているようで……いかん、勃つ）
この手で性器を触られたら、と思うだけで、島崎の息が自然と荒くなる。
「し、島崎さん？どうしました？何だか、ちょっと……気のせいかな……嫌な予感？」
「私の事はいいんです。実は……盗聴している感じでは、その方は同じ職場の部下にセクハラを受けているようで……私、とても心配なんです」
「えぇっ!?それは、大変じゃないですか？」
「そうなんです。だから、私もどうしたらいいのか……」
「セクハラですか。その方も、きっと悩んでますね」
「いいえ。本人は特に気にしていないようです。全然、セクハラされている自覚はないようで、平気にしてます。だから、余計に私の方が心配で……」
島崎は呟いて、大きくため息を吐いた。
「スゴいですよ、その人。盗聴されたり、セクハラされたりしてるのに、平気って……。図太すぎますって。

こうやって聞いてると、本当にムシャクシャしてたから殴っただけかもしれませんね」
「素敵な方なんです」
うっとりと呟く島崎に、霊幻は顔を引きつらせる。霊幻は手を離そうと、引っ張っているが、島崎が逃がす筈はない。寧ろ、島崎は霊幻に身体を近付けていく。
（あぁ……霊幻先生の匂い……堪らない。ずっと、嗅いでいたい）
霊幻は島崎から視線を逸らしながら、口を開いた。
「あ、あの、島崎さん。ご相談いただいたのに、このような結論に至ったのは非常に残念なのですが……。この件に関しては、あまりにも特殊過ぎて、俺からはアドバイスしづらいと申しますか……。やはり、本人達の気持ちが大切なので、お互いの気持ちを尊重するのが一番なのではないかと……って、距離、近いっ！」
ワタワタと慌てている霊幻がとても微笑ましくて、島崎は思わず笑ってしまう。それから、腰に手を回し、身体を密着させる。
「そうですよね、恋愛というものは、本人達の気持ちが一番大切ですよね。……ありがとうございます、霊幻先生。心に響きました」

ドサッ

島崎は霊幻をソファに押し倒した。
「霊幻先生……」
島崎はそっと霊幻の顔に自分の顔を近付けていく。霊幻は慌てふためき、島崎の肩を押す。
「あっ、あの……っ！しっ、島崎さんっ！えっ、えっと……っ！島崎さんには、盗聴する程、好きな方がいるんですよねっ⁉そんな事しちゃ、ダメだと思いますっ！」
「ご安心下さい。私の好いた方は、霊幻先生ですから」
「え……？」
瞬間、霊幻は固まった。ジーッ、と霊幻は島崎を凝視しているようで、視線が痛い。
（すぐには気付かれないとは思っていたが……まさか、ここまで気付いていただけないとは思わなかった。実に、予想外だった……。さすがは霊幻先生。いつだって、私の想像の斜め上を行く）
初めは、ちょっとした悪戯心だったのだ。せっかく、新しい事務所もオープンしたので、客になりたかった気持ちもあったので、簡単な変装で、霊幻を驚かせようと思ったのだ。盗聴すれば声は聞けるが、オーラを見る事は出来ない。出来れば、直接会いたい気持ちも強かった。それがまさか、ここまで全然気付かれないとは、さすがの島崎も思わなかった。
「私がお慕い申し上げているのは、霊幻先生ただお一

人です」
もう一度、島崎は言う。
霊幻は固まって、動けない。島崎は悪戯っぽく笑った。
「それから、霊幻先生。……茶渋を取るには、塩よりも重曹の方が早いですよ。今度、是非お試し下さい。あぁ、でも、霊幻先生は塩がお好きなので、塩が正しいのかもしれませんね」
「……っ!?あっ!そ、その話は……っ!え、えぇっ!?本当に、盗聴してるのっ!?」
キョロキョロと霊幻は事務所を見回す。勿論、すぐに分かる場所には、盗聴器は仕掛けていない。島崎は喉を鳴らして笑い、島崎は霊幻の耳に口を寄せた。
「霊幻先生の声は、本当に耳心地がいいですね。もっと、あなたの声が聞きたい。もっと聞かせていただけませんか?」
「ひゃんっ!」耳元で囁かれて、霊幻はブルッと身体を震わせた。
「霊幻先生は、本当に愛らしい声で鳴きますね。もっと、あなたを鳴かせたい……私の為に、もっと鳴いて下さい、霊幻先生」
言いながら、島崎は霊幻の肌に手を這わせる。
「やっ……、いっ、いやっ、いやいやいやっ、ダメですよぉっ、島崎さんっ!」
慌てふためく霊幻に、島崎は手を止めた。島崎は大きくため息を吐く。島崎は眼鏡を外し、髪の毛を掻き上げる。
「霊幻先生……島崎です」
島崎の言葉に、霊幻は首を傾げる。
「……?はい。島崎さんですよね。分かってますよ」
「そうではなくて……私の事、そろそろ思い出していただけませんか、霊幻先生?この島崎を」
「……え?う、うーん?島崎さん、島崎さん……あれ?そう言えば……島崎さん殴ったのって、俺ですか?違いますよね?」
違ってくれ、と言わんばかりの口ぶりの霊幻に、島崎は大きく頷いた。
「勿論、殴ったのは先生ですよ」
「……、……、い、いつだったかな……?全然、思い出せない……酔ってたのかな、俺?」
全くピンと来ていない霊幻の姿に、島崎はガクッと肩を落とす。
「先生~。私ですよ、島崎亮。元『爪』幹部、盲目のテレポーターの、島崎です。もう、思い出して下さい~」
「盲目、テレポーター、島崎、アホ毛、……、アホ毛?えぇーーっ!!島崎ーーっ!!思い出したっ!!」
『島崎』を思い出した霊幻は、大声を上げた。
「霊幻先生の私に対する認識は、アホ毛なんですね。よーく、理解しました」

霊幻は島崎の落胆に気付く様子もなく、島崎の肩を掴み、その顔を覗き込み、顔を近付ける。
「島崎っ⁉︎ウソッ、マジで島崎なのっ⁉︎あの島崎っ⁉︎普通に字、書いてたよねっ⁉︎どうなってんのっ⁉︎」
「あの島崎が、どの島崎かは分かりませんが……。そりゃあ、字ぐらい書けますよ。用紙の内容はトナーの凹凸で分かりますし。何せ、私は超能力者ですから、それぐらい出来て当然です」
「そうかもしれないけど……、全然、分からなかった」
ようやく、分かっていただけて良かったです。ここまで分かっていただけないと、逆に辛いですので」
ガクッ、と霊幻は大きく肩を落とした。
「いや、まさか、また会うなんて、思ってなかったからさぁ。別人だって、思い込んじゃったよ、うん」
気まずそうに言って、霊幻は照れ臭そうに笑う。そんな霊幻に、島崎は胸を撫で下ろした。
「良かった……。このまま、霊幻先生に思い出していただけなかったら、私はどうしようかと思っていました……。ようやくこれで、あなたに思う存分触れられる」
島崎は霊幻の首筋にチュッと口付けを落とした。
「ん……っ」ピクッ、霊幻の身体が震える。
「し、島崎っ……いや？島崎さん？あれ？どっち？」
不思議そうに、霊幻は首を傾げて、島崎を見る。島崎は思わず、吹き出して笑った。

「島崎で構いませんよ、霊幻先生」
「でも、島崎さんってずっと呼んでたからなぁ……今更、島崎呼ばわりも悪くない？」
「どうか、お気になさらずに」
「えぇと……じゃあ……島崎？」
「はい」と答えながら、島崎はチュッチュッと音を立てて、霊幻の首筋に口付けを落としていく。
「ひゃっ……んっ……」
すっかり芹沢に触れられる事に慣らされているようで、少し触れられただけで、霊幻の身体はすぐに反応を返してくるようになる。
「霊幻先生。今こそ『正当防衛ラッシュ』の出番だと思いますが？」
「んんっ……だって……っ、俺……正当防衛が必要な時なんて、今までなかったから、使った事ない……っ」
「では、私を殴った時が初めての『正当防衛』だったんですね？」
「んっ……、ごめんっ、島崎……っ、あれは……正当防衛じゃない……っ、過剰防衛だったんだ……っ」
重大な事実を告白するように、霊幻は今にも泣きそうな気配を漂わせながら言った。島崎は顔がニヤけるのを止められない。
「勿論、分かってましたよ。……ですが、この状況は、正当防衛するのにふさわしいと思います」

「うぅ……っ、俺が正当防衛っ、出来ないって、分かって、んんっ、言ってるだろぉ……島崎のばかぁっ」
よろよろと手を上げた霊幻は、島崎の頬をペチンッと叩いた。島崎の頬に、強い衝撃が走る。
「っ!? いや、これは意外に効きますよ、霊幻先生の一撃」
「ふぇっ？ そうなのか？ 芹沢には全然効かなかったけど……」
「ヤツは超能力者の中でも規格外ですから。あぁ、影山茂夫は基準に入れないで下さいよ。影山茂夫の存在は、全くの別種ですから」
島崎は霊幻の手を掴んで、チュッと手のひらに口付ける。
「まぁ……今の霊幻先生の動きは、非常に読みやすいですけど」
「しまった……不覚っ……んんっ」
「すみません。霊幻先生があまりにも美しいオーラを放つもので……つい、いじめたくなってしまいました」
島崎は霊幻の鎖骨の窪みに、舌を這わせる。
「やぁっ……やんっ」
イヤイヤをするように、霊幻はかぶりを振る。そんな霊幻の声を聞きながら、島崎は密かに感心していた。
（ふむ……悔しいが、霊幻先生をここまで開発するとは……いい仕事をするじゃないか、あの男。そう言えば……芹沢がよく霊幻先生の首の後ろをチューチュー吸っているが、そんなにいいのか？ ヤツの真似をするのは、大変不服ではあるが、興味がないと言えば嘘になる）
盗聴していると、芹沢が事あるごとに霊幻の首の後ろを吸い、注意を受けているのを思い出す。島崎は好奇心に駆られて、霊幻の後頭部の後ろに手を差し込み、頭を持ち上げると、首の後ろに唇を寄せ、チュッと吸い上げた。
「んんっ」
霊幻は身体を震わせる。
「あぁ、確かにこれは落ち着きますね……」
一人納得した島崎は、チューチューと霊幻の首の後ろを吸う。不思議と、霊幻の首筋を吸うと、気持ちが安らぐ。
「ひゃんっ！ もう……っ！ 何で、超能力者はみんな、首の後ろを吸うんだよぉ〜っ！」
「何故かは分かりませんが、とても落ち着きます。ですが……私は、こちらにも触りたいですね」
言うが早いか、島崎は霊幻の乳首を指で摘まんだ。途端に、霊幻の身体がビクッと大きく震える。
「……ひゃうっ！ そこっ……、だめぇ……っ！」
「あぁ……これが、霊幻先生の乳首なんですね。固くて、しっかりと立ち上がって、存在をしっかり主張している。……まるで、霊幻先生のようです」
クリックリッと摘まんだ乳首を、島崎は丁寧に刺激する。

「んっ、んんっ……ふぅっ」
霊幻は口を手で覆い、声を抑えようとする。島崎はそっと霊幻の手を外す。
「どうか声は抑えないで下さい、霊幻先生。私の目は機能しないので、是非その声を聞かせていただきたいのです」
乳首を捏ねるように指で摘まみ、優しく押しつぶすと、霊幻の血流に変化が生じてくる。
「おや？どうしました、霊幻先生？乳首周辺と、股間に血流が集中しているようですか？」
わざとらしい言葉で、島崎は霊幻の耳元で囁く。
「ひぅ……」
霊幻の身体が、小刻みに震える。
「どうなさったんですか、霊幻先生？お答え願えませんか？」
「うっ……くぅ……っ、お前に答える、義理はないだろ……っ」
キッ、と霊幻は島崎を睨む。島崎は霊幻の強い意志の篭もった視線に、興奮せずにはいらない。
「堪りませんね。やはり、あなたはそうでないと、落としがいがない」
ニッコリと笑って、島崎は霊幻の乳首をじっくりと刺激する。
乳輪、乳首、と輪郭を確認するように、島崎は霊幻の胸元を指でなぞっていく。
「霊幻先生の乳首は、こんな形をしているのですね……。乳輪も膨れて、とてもいやらしい乳首だ」
囁きながら、島崎は霊幻の乳首を押し出すように、乳輪ごと指で摘まんだ。
「ひゃうんっ！」
ビクンッ、霊幻の身体が大きく震える。
「やんっ……芹沢と、触り方っ、違う……っ」
思わず出たであろう霊幻の言葉に、島崎の手が止まる。
「ふむ……あんな男と比べられるのは、癪ですねぇ」
「んんっ？島崎……もしかして、怒ってる？」
「怒ってませんよ、全然。えぇ、怒ってませんとも」
「怒ってないって言うヤツに限って、怒ってるんだよなぁ……」
霊幻は呆れたように呟いた。その口ぶりは明らかに、経験済みの出来事から来ている様子で、島崎はイライラが込み上げてくる。
「比べましたね、霊幻先生。今また、あの男と比べましたね？」
「まぁ……どうしても、比べちゃうよなぁ。何で超能力者って、そんなに怒りの沸点が低いんだろ？島崎、何でかな？」
「それを私に聞きますか」
呑気に呟く霊幻に、島崎の笑顔が引きつる。

（やれやれ……。こちらとしては、挨拶だけで済まそうと思っていたというのに。この方は、私の『愛』を試しているようだ。試されているとなれば、引く訳にはいかない。受けて立つ他ないだろうな）

霊幻の問いに、島崎は大きく頷いた。

「……分かりました、では」

島崎は霊幻の頬を撫でた。

瞬間、

「え？……っ!?」

気が付けば、島崎に押し倒されていた霊幻の身体が、仰向けからうつ伏せに変わっていた。

「あ、あれっ？」突然変わった視界に、何が起こっているのか分からず、霊幻はキョロキョロと辺りを見回し、振り返った。目が見えているのなら、肩越しに見える霊幻は、きっと驚いた顔をしているに違いない。

「では、霊幻先生がお望み通り、他の誰とも比べられない事をしましょう」

これみよがしに、島崎は霊幻に『微笑んで』見せた。

島崎の笑顔を見た霊幻の背筋に、ひんやりと寒気が走る。

「し、島崎……？ひゃぁ……っ!?」

その時、突然霊幻は驚きの声を上げた。それもそうだろう。急に霊幻の履いていたスラックスが消えて、下半身が剥き出しになったのだから。

「なっ、なっ……っ!?」

「スーツが汚れては大変ですからね。脱いだ方がよろしいかと思いまして」

島崎の超能力の一つである『アポート』で物質転移させた霊幻のスラックスを、島崎は霊幻の目の前にひらつかせる。勿論、見せつける為だ。

霊幻の顔に、血液が集中する。きっと、今の霊幻は顔が真っ赤に染まっているだろう。途端に、霊幻はジタバタと暴れる。残念ながら、時既に遅し。体勢的には、圧倒的に島崎が有利だ。島崎は霊幻の臀部をゆっくりと撫でた。

「……ひゃっ！」

直接、臀部を撫でられた霊幻の身体が震える。霊幻は抵抗も忘れて、堪えるように拳を握り込んだ。

「霊幻先生が悪いんですよ。私を煽るから」

チュッ、わざと音を立てて、島崎は霊幻の臀部に口付けを落とす。

「バ、バカ島崎っ！尻を舐めるなんて、ダメでしょっ！やめなさいっ！」

「おやおや、霊幻先生。こんな事で大騒ぎしていては、この先大変ですよ」

「え？……うひゃあっ!?」

島崎は側にあった、霊幻が用意した『呪術クラッシュ』のサンプル用アロマオイルを、霊幻の臀部に垂らした。

事務所が、いい香りに包まれる。島崎はクンッと鼻を鳴らす。
「いい香りのアロマオイルですね。これは霊幻先生が配合なさったんですか？」
「おっ、分かってるじゃないか、島崎」
島崎の言葉に、霊幻は反応する。霊幻の全身から、喜びの感情が伝わってくる。
「そう。このアロマオイルは俺がエッセンシャルオイルから、こだわり抜いて作ったアロマオイルなんだ。しかもこれは、事務所を移転した記念に作った、新しいアロマオイルなんだ。いいだろぉ？」
「はい、とても。この香りが今後、霊幻先生の香りになると思うと、とても興奮しますね」
「は？何言って……、ひぃっ!?」
不思議そうに首を傾げた霊幻は、尻穴に感じた異物感に、思わず悲鳴を上げた。
「し、ししっ、島崎っ!?な、何してるんだっ!?」
「勿論、私は言っても構いませんよ。霊幻先生の精神的ダメージが非常に大きいかとは思いますが……それでも、聞きたいのなら、お答えしますが。私が今、しているのは……」
「聞きたくないっ!!」
霊幻は耳を塞いだ。そんな霊幻の姿に、島崎は喉の奥で笑う。
「大丈夫ですよ。痛い思いはしないように、じっくりと慣らしますから」
言いながら、島崎はアロマオイルのたっぷりついた指で、尻穴の輪郭を指でなぞった。「ひゃう……っ！」
霊幻の声を聞きながら、島崎は更に霊幻の尻穴を刺激していく。
尻穴の輪郭をなぞり、シワの一本一本を、丁寧に伸ばしながら、その都度、尻穴を指の腹でゆっくりと押す。初めは指で押されると、抵抗するようにキツく閉じて、押し返そうとしていた尻穴が、指で押すように刺激する度に、次第に抵抗が弱まっていく。
「後もう少しで、指が入りそうですよ、霊幻先生？自分でも、分かるでしょう？」
わざと耳元で囁くと、霊幻は頭を振った。
「ふぅ……っ、うぅんっ、んっ、んんっ……」
自分でも触れた事がない場所に触れられて、刺激されて、指を入れられようとしている。霊幻は、抵抗するのも忘れて、我慢するように唇を噛んだ。途端に、島崎の指が、霊幻の口内に差し込まれる。
「霊幻先生、いけません。唇が傷付いてしまいますよ。どうしても噛みたいなら、私の指を噛んで下さい」
「うぅ……っ、んっ、ふぅっ……」
本当に噛もうとしているのだろう。霊幻の歯が、島崎の指に触れるが、本当に噛むまで至らない。肝心な所で、

霊幻は優しさが出てしまうのだ。その優しさが、自分にも向いているのだと思うと、島崎は柄にもなく嬉しくなってしまう。
霊幻の目から、涙が零れる。
（『怒り』『戸惑い』『理性』『劣情』……。様々な感情が入り交じっている。何て、美しい涙なんだ）
思わず、島崎は霊幻の目元に顔を寄せ、チュウッと涙を吸い取った
「霊幻先生の味がします」
「ふぅっ、ふざけんなっ、んくぅっ、おのれっ、今に見てろっ、島崎めっ、……んんっ」
うっとりと島崎が呟くと、霊幻は忌々しいと言わんばかりの声を上げた。霊幻自身は気付いていないだろうが、島崎の刺激に、霊幻の声には快感が混じり始めていた。霊幻の感情の僅かな変化に気が付いた島崎は、ほくそ笑む。
「霊幻先生、初めにどの指を、入れてほしいですか？」
「はぁっ？な、何言ってんだよっ、島崎……っ！……え？島崎？」
振り返った霊幻が、島崎の顔を見て固まったのが、島崎には伝わってくる。霊幻の目には、自分が『真剣』な表情を浮かべているように見えるだろう。真剣に聞いているのだから、当然なのだが。
「おや？いかがなさいました、霊幻先生？私は何か、おかしな事を言いましたか？」
「え、えぇと……」
心を読む力がなくても、戸惑う声色を聞けば、霊幻の考えている事はよく分かる。
『もしかして、入れる指を決めるのって、普通の事なの？』
といった所だろう。分かりやすい。
「どの指がいいか、霊幻先生が決めて下さい。さぁ、遠慮なさらずに」
真剣な声色で島崎が急かすと、霊幻は慌て出したのが伝わってくる。様子を探るように、霊幻はオロオロと口を開いた。
「えっ、えっと、えぇと……じゃあ、人差し指？」
「人差し指ですか？本当に？」
「じゃ、じゃあ、中指……？」
「中指ですね。分かりました」
島崎は中指を、霊幻の尻穴に押し付ける。途端に、霊幻の身体が強ばった。
「待った！やっぱり、人差し指！」
「了解しました。では、人差し指を入れさせていただきます」
「う、うん……」いつの間にか、尻穴に指を入れる事が確定している事にも気付かずに、霊幻は不安そうに頷いた。そんな霊幻が堪らなく愛おしく感じる。島崎は霊

幻のこめかみに口付けを落とす。
「怖くないですから、力を抜いて下さい、霊幻先生」
「別にっ、俺は怖がってなんか……っ、ひゃふっ！」
抗議しようとした霊幻の尻穴に、島崎はゆっくりと人差し指を挿入する。
「ひっ、んふぅっ、んんっ」
「霊幻先生。痛くないと思いますが、いかがですか？」
「痛くないけど……っ、んんっ、よく、分かんな……んっ、あっ」
途切れ途切れに、それでもしっかりと答えようとしている霊幻の頭を、島崎は優しく撫でる。
「もう少し奥にいれますね。辛かったら、言って下さい」
「えっ？うそっ、動かすのっ？ちょっと、待って、それは……ひぃんっ！」
より深く指が奥に挿入されて、ビクンッ、と霊幻の身体が大きく震える。尻穴の入り口付近は、島崎の指を押し出そうとする動きをしていたが、奥に入れば、今度は中に引き入れるような動きをする。もしこの指が、自分の男性器だったらと考えるだけで、島崎の興奮も高ぶっていき、思わず、自分の唇を舌で舐めた。
「ふっ……、ふぅっ、んぁぁっ」
次第に、霊幻の息も上がっていき、声が途切れ途切れに漏れ始める。そこに、快感が混じっている事に、霊幻自身は気付いていないだろう。
「力は入れないで下さい。下手に力を入れては、霊幻先生が辛いですよ？」
「分かってるけど、勝手に力、入っちゃって……っ」
霊幻は今にも泣き出しそうに声を震わせる。
「あぁ、すみません。決して、あなたを責めたわけではないのです」
申し訳なさそうに言って、島崎はゆっくりと指を引き抜いた。
「んっ、島崎……？」自分の名前を呼ぶ霊幻の顔を、島崎はゆっくりと撫でる。今、霊幻はどんな表情をしているのだろう。物足りないと思っているのか。それとも、ようやく終わったと安堵しているのか。ふわふわと、浮ついている霊幻の声からは、島崎の優れた聴力でも判断が難しかった。
チュッ、島崎は霊幻の頬に口付けを落とした。
「急いては事をし損じる、と言います。霊幻先生の『蕾』は、少しずつ慣らして広げていきましょうね」
島崎は有無を言わせぬ雰囲気で、霊幻に笑って見せた。

芹沢克也の社会勉強

芹沢を社員にすると決めた霊幻だったが、実際、『霊とか相談所』に社員らしい社員を雇ったことは一度もない。モブはアルバイト兼弟子だったし、実際、顧客と話をさせる事なんて滅多になかった。

けれど、大人の芹沢ではそうはいかないだろう。顧客も話しかけてくるだろうし、せっかくなら芹沢にも、社会的な常識を覚えてもらいたい。『爪』にいる時は、超能力の使い方も教えてもらえず、社会常識にも欠けていた芹沢だ。組織に雇い入れたものの力が強すぎて、組織としても使いこなせなかったのかもしれない。

霊幻も様々な超能力者を知っているが、モブが『強い』と言った超能力者は芹沢だけだったし、事実、霊幻が目にする芹沢の能力は使いこなせさえすれば、組織の中では間違いなく『最強』レベルだったように思えた。

（まあ、性格のせいだろうな……って、どんな性格だ？優しいには優しいけど……結構、怒りの沸点低いしなぁ……）

霊幻は立ち止まると、スラックスに手を突っ込んだまま、後ろを振り返った。芹沢はまだまだスーツに着られている感じで、霊幻のかなり後方を歩いている。

「おーい、芹沢。さっさと俺の横に来いっ！」

呼べば、芹沢は嬉しそうに霊幻の隣りまで走ってくる。

「あのなぁ、お前には一般常識とかも教えなきゃならないから、出来るだけ俺の隣りを歩け」

「は、はいっ！れ、霊幻さんの……と、隣りですね？」

「そう、隣り」

「隣り……緊張しちゃうなぁ……あ、でも、俺みたいのが霊幻さんの隣りを歩いてて大丈夫なんですか？」

「いいんだよ、俺が言ってるんだからっ！嫌なのか？」

「いいえっ！嬉しいですっっ！」

「なら良いだろ？……で、歩道で前や後ろから人が歩いてきたら、俺の後ろに下がる。車道を歩く時は一列な。まあ、どちらにしても、俺が言うまで、俺から離れないように」

と霊幻は言った。

その姿に見惚れながら、芹沢はコクコクッと何度も頷く。

「まあ、人様の迷惑にならなきゃ大丈夫って事だ」

「なるほど……分かりました」

言って、芹沢はメモ帳に霊幻から教わったことを書く。何が書かれているのだろうと、チラリ、メモ帳を見た霊幻は「霊幻さんは右乳首の方が感じる」「信号は青になっても左右確認」と書かれたページを見て、頭を押さえる。

その時、進行方向の先から、大きな笑い声が聞こえてきた。
歩道を歩いていた人達はそれとなく反対側の車道に避けたり、道を曲がったりしている。
道の先には『チンピラ』がいる。典型的なチンピラらしく、何人か集まって、歩道を塞ぐように座り込んでジュースや煙草を吸っている。
（あれじゃあ、学校だって親だって、誰も注意なんて出来ないな……折りたたみナイフぐらい持っていそうだ）
実際、見た目で虚勢を張る人間は、弱い犬ほどよく吠えるの典型で、怒鳴ったり騒いだりナイフを振りかざしたりするが、喧嘩は基本集団だ。ただ、見栄っ張りで負けず嫌いだから、引き際が分からない。
「……あいつら、歩道いっぱいになって、道に座っています。人数は六人。でも、地面に置かれた缶ジュースの数から七人と推定されます」
芹沢は言う。
（お前は、スパイ映画の人か……）
と霊幻は思ったが、「我慢我慢」と自分に言い聞かせる。どちらにしても、芹沢のようなタイプを世間に放り出したら、捕まってしまうかもしれない。一つ一つ、丁寧に教えていくしかない。
「ああいう輩は放っておけばいい」
「でも、悪い奴らです」
「そうだけど……わざわざ喧嘩しても仕方ない。ナイフで刺されたりしたら大変だからな。『君子危うきに近寄らず』だ。」
「くん、しあや、うきわに……なんでしたっけ？」
「まあ、教養があって……って、う〜ん、立派な人は危ないものに近付かない、って事かな？」
「なるほど。『霊幻さんは霊能事務所を開いているけど、危ないものには近付かない』矛盾ですね……哲学ってヤツです、すっげぇ」
「はいはい。ほら、反対側の道に行くぞ、芹沢」
このままでは避ける事が出来ずに近付きすぎてしまう。喧嘩になっても、論破出来る自信はあるし、腕っ節でも勝てる自信はあるが、仕事でもないのにわざわざ近付く必要はない。
そんなことを霊幻が考えていると、
「霊幻さんは、ここで待ってて下さい」
と、芹沢は言って、チンピラが集まって座り込んでいる場所まで歩いて行ってしまう。
「ちょっと……芹沢……っ！何なんだ、あいつは。面倒を増やしやがって……命の恩人とは言え、セクハラするし、やりたい放題だな。社会常識教えないと、外に出せないよ」
と、霊幻は芹沢への不満を口にしながら、芹沢の後を

追う。

† † †

芹沢は、『チンピラ』と呼ばれる集団を見下ろした。

『爪』時代にも、こうして沢山の組織を潰して回ったことを今更のように思い出す。霊幻に会ってから、そんなことも忘れていたけれど、芹沢が霊幻のために出来る事と言えば『敵の排除』だ。

（霊幻さんは優しいから『放っておけ』って言ったけど、ビジネスマナーの本見ると、上司の言う通りだけで動くんじゃなくて、上司の本当に望むことをするのが良いって書いてあった。霊幻さんは『チンピラ』って、少し不快そうに言っていたっ！俺、すげーっ!!社会人やってるっっ!!）

そう思えば、突然目の前に現れた『チンピラ』には感謝だ。どんな思想で、どんな組織形態か分からないが、根絶やしにすればいい。

立ち上がった男の胸ぐらを掴み、そのまま持ち上げる。

「……手応えがないな。本気を見せろ」

芹沢は言う。

掴み上げた男が、怯えたように芹沢を見下ろす。それが気に入らなくて、手を捻ると、男の首元が締まる。もう一人、ギャンギャン叫びながら、小さな刃物を持った男の手が手を振り回してやってくる。手刀で手首を切り落とそうとするが、刃物を持った手が震えていて、きっと切れ目がぐちゃぐちゃになる。

（……『芹沢。敵の片手ぐらいちゃんと切り落とせないなんて……もうセクハラは禁止だ。お前みたいな不器用な男、こっちから願い下げだ』って霊幻さんに言われたらどうするんだよっ！冗談じゃねぇよっ!!）

せっかく、霊幻を不快にする『チンピラ』という敵を発見したというのに、計算が狂う。芹沢は逃げようとする人間に、重力を掛け、動けないようにする。向かってくる人間の重力は解く。

小さな刃物を持った人間の、その小さな刃物を指に挟むと、グッと顔を近付ける。

「悪いんだけどさ。刃物は両手でしっかり持ってくれない？そんなに手首ブンブンされたらさ、切り落とす時、断面がぐちゃぐちゃになるだろ？ああ、でもぐちゃぐちゃになるなら……折って、ねじ切っちゃえばいいか」

と言って、ニッコリと笑う。

芹沢は小さな小さな刃物『ナイフ』の柄を手刀で叩き切る。と、素早く、男の手首を掴み、ググッと力を込める。

「ああ、これなら折らなくてもそのまま、ねじ切れる

な……」
芹沢は言って、男の腕をねじ切るように力を込めていく。胸ぐらを掴んで持ち上げた男は「ごめんなさい」と泣きながら謝っている。その言葉の意味が、芹沢にはまるで理解出来ない。もう一人むかってきた相手の鎖骨に踵を振り落とす。パキッという音。それだけで男は「ギャーッ」と声を上げ、地面に転がった。

「芹沢っっ!!お前、何やってるんだっっ!!」

霊幻の怒った声がする。
「ほらっ、てめぇらのせいで、霊幻さんがお怒りなんだよっっ!!『チンピラ』って何だよっっ!弱過ぎんだろっっ!!せっかく霊幻さんに俺が役に立つところを見せるつもりだったのにっ……ああ、ムカつくっっ!!」
気にいらないから、腕を掴んだ男の手首を握力だけで粉砕し、胸ぐら掴み上げた男を地面に放り投げる。
「ほら。頭、庇わないと、割れるかもな」
その言葉に、もう重力の掛かっていない仲間の女性が必死に男の頭を庇う。
「ああ、苛つくなぁ……そういうの……二人お揃いで、肩の骨でも砕けとこうか?」

「芹沢っ!やめろっっ!!『命令』だっっ!!」

霊幻に肩を掴まれ、芹沢は純粋に嬉しかった。
「ほら、お前ら。ボケッとしてないで、さっさと逃げろっ!」
そう言って、霊幻は『チンピラ』を追い払う。
「話の通じる相手じゃないから、変なところに駆け込もうなんてするなよっ!さっさと病院でも行けっ!!」
「……顔、覚えたから。何かあれば、全員、五体満足にはしない」
「芹沢、やめろっ!!」
霊幻は言って、芹沢の手を掴んだ。
瞬間、芹沢の頬が照れくさそうに赤に染まる。
「芹沢。どうして『チンピラ』と揉めたんだ?」
「はいっ!俺、霊幻さんに褒めて欲しくてっ!!『チンピラ』って集団がどんな思想を持っているか知らないけど、霊幻さん、すごく不快そうだったからっ!俺の評価を上げたくって、やりましたっ!!」

えっ?俺の為なの?
やだっ……。
……分からない。その行動原理が……。

† † †

そして、本日。
芹沢は追い詰められていた。
今までの人生で、これ以上ない程に芹沢は追い詰められていた。
原因は、以前のチンピラ退治だ。芹沢の中で、あのチンピラの一件は、霊幻に役に立つところを見せるチャンスだったのに、相手のあまりの弱さに、芹沢は自分が『利用価値のある人間だ』という事がアピール出来ずに終わってしまった。むしろ、霊幻に不信感を抱かせる結果になってしまうなんて。もう、散々だ。
（どうしよう……これ以上、失敗したら……俺はきっと、事務所を追い出される……）
この前、霊幻何かの書類を見つめ真剣な表情をしていた。何が書かれているのか芹沢には分からないが、いつになく真剣な表情の霊幻に声を掛ける事が出来なかった。もしかすると、「芹沢、使えない」とか「やっぱり、モブの方がいい」とか、そんな事を考えていて、気持ちが沈んでいたのかもしれない。考える度に、芹沢の全身から血の気が引いていく。ちょうどそんなタイミングに、霊幻から「除霊に行くぞ」と言われたのだ。芹沢はその言外に潜む霊幻の言葉の意味をすぐに察した。
きっと霊幻はこう言いたいのだろう。

『芹沢。これがラストチャンスだぞ』
勿論、霊幻にそんなつもりは全くない。芹沢が勝手に思い込んでいるだけだ。
「……よし、着いた。芹沢、ここが依頼の場所で間違いないみたいだ」
ビルの名前を確認した霊幻は大きく頷いて、芹沢を見上げた。真剣な霊幻の顔を見て、芹沢は、
（霊幻さん、可愛いなぁ。何ていうか……、姿形だけじゃなくて、考え方とか、とにかく、何か存在が可愛いんだよなぁ）
全然、霊幻の話を聞かずに、そんな事を考えていた。
（俺は、霊幻さんにもっと利用して欲しいのに、霊幻さんは俺を全然利用しようとしない……。いや、ネットには、待ってるだけじゃいけないって書いてあった。今の時代は『自己アピールが大切』なんだ。俺もしっかり、霊幻さんに、『自己アピール』しないと）
今度こそは霊幻に良いところを見せよう、と芹沢は決意に新たにする。そんな芹沢の決意を想像もしていない霊幻は、依頼の説明を続けていた。
「依頼主は、このビルにオフィスを構えている会社の一つだ。最近、このビルに越してきたらしいんだが、社員の間で、幽霊の目撃談が多発していて、困っているらしい。だから、正確には除霊じゃなくて、幽霊がいるかどうかの調査だな。俺は話を聞いた感じ、幽霊はいない

と思うんだけどなぁ」
霊幻の説明に、芹沢は何も答えずにただビルを凝視している。芹沢は視線を外し、霊幻を見て、口を開いた。
「霊幻さん、その依頼主の会社って、五階にありますか？」
芹沢の言葉に、霊幻は意外そうな表情を浮かべて「あぁ、そうだ」と頷いた。芹沢は「よし！」と喜びに声を上げそうになるのをグッと堪える。除霊の場所を当てる事が出来た。これはポイントが高いかもしれない。芹沢は再び、五階の窓を見つめる。
「依頼主のオフィスは五階にある。よく分かったな、芹沢。……んん？」
首を傾げた後、霊幻の顔から血の気が引いていく。芹沢はまるで、猫が天井の隅を見たまま動かないのと同じように、ビルの五階の窓を見つめたまま動かない。それもその筈で、芹沢の目には、五階の窓にベッタリと張り付いている悪霊が見えていた。ぶんぶんと首を横に振って、霊幻は歩き出した。その動きはロボットのようにぎこちなく、手と足が同時に動いている。そんな霊幻の姿に、芹沢は首を傾げる。
（どうしたんだろう、霊幻さん？何だか、動きが可愛いなぁ……）
まさか、自分の発言と行動が、霊幻を怖がらせているとは思っていない芹沢は霊幻の動きに見とれて、ほんわかとした気持ちになる。その時、霊幻が芹沢を振り返った。
「ほ、ほら、行くぞ、芹沢！立会人として、会社の部長さんがオフィスに待っている筈だ！あんまり、待たせちゃ悪いっ！」
「え？……、その人、無事なのかな……？」
「いちいち、怖いこと言わないっ！ほら、早足っ！」
霊幻はビルに入っていく。「はい」と返事をした芹沢も霊幻の後に続いて、ビルに入っていった。

† † †

問題の五階に来てみれば、立会人の部長は、顔色がとても悪いものの、霊幻達を出迎えてくれた。「最近、どうにも肩が重い」と呟いていたので、霊幻はとりあえず呪術クラッシュをお勧めしている。どんな時でも、しっかりと『営業』をしている霊幻の姿に、芹沢は感銘を受けた。
「では、少々そこでお待ち下さいね。まずは幽霊の有無を確認しますので。大丈夫、すぐに終わりますから」
客用の営業スマイルを浮かべたまま、霊幻は芹沢の側に歩み寄り、こっそりと耳元で囁いた。霊幻の息が耳に当たり、芹沢はドキドキが止まらない。

「……なぁ、芹沢。幽霊、いるんだよな？」
霊幻が確認するように言うと、芹沢は大きく頷いたものの、芹沢は渋い顔をして考え込んでいる。
「幽霊……いるには、いるんですけど……」
「いるけど、どうした？もしかして、除霊出来ない？芹沢が除霊出来ないって、それってヤバくない？」
不安そうに呟く霊幻に、芹沢は首を振る。
「除霊は出来るんですけど……数が少なくて……これじゃあ、すぐに除霊出来てしまうので、霊幻さんにアピール出来ないから、どうしようって思ってます」
「はぁ？」芹沢の言葉に、霊幻は素っ頓狂な声を上げる。それから、唇に指を押し当て、霊幻は考え込んでから、恐る恐る口を開いた。
「……とにかく、ゆ、幽霊は、いるんだよな？」
霊幻の質問に、芹沢は大きく頷いた。
「でも、大きいのが一体だけなんですよ……。あっ、そうか。霊幻さんには霊能力ないから、見えないのか」
「言うなっ!!」
「すみません。じゃあ、今から可視化しますね」
「え？おい！ちょっと待……！」
霊幻が止めるよりも先に、芹沢は指を鳴らした。
瞬間、それまで何の変哲もなかった廊下が、一気に様変わりする。壁から人の顔がいくつも浮き出ていて、まるで内臓のように蠢いていた。

後ろから、「ひぃぃぃぃっ！」と悲鳴が聞こえる。霊幻が振り返ると、部長の肩に、天井からぶら下がった悪霊が、ベッタリと張り付いている。悪霊は今まさに大口を開けて、部長に喰らいつこうとしている。
「せ、芹沢っ！早く、助けるんだっ！」
「え？でも……自己アピール……」
「早くっ！」
言うが早いか、霊幻は悪霊に駆け寄り、
「ソルトスプラッシュ!!」
と声を上げ、塩を悪霊にぶつけた。塩が当たった悪霊は傷付いた様子はなく、寧ろ逆上した様子で、ギロリと霊幻を見て、ターゲットを霊幻に変えた。「……っ!?」
霊幻は大きく息を飲んだ時、悪霊が霊幻に飛びかかった。
瞬間、芹沢は抱き締めるように霊幻の後ろから手を伸ばし、霊幻を引き寄せると、空いた手で襲い来る悪霊の頭を鷲掴みにした。芹沢の顔は、怒りに歪んでいる。
「おい、てめぇ!!悪霊風情が、霊幻さんに何しようとしてんだよっ!!」
芹沢はエネルギー弾を悪霊の口に押し込んだ。瞬間、悪霊が爆発する。断末魔の叫びを上げて、悪霊は砂状になって細かく砕け散る。同時に、生き物のような壁も砂状になって跡形もなく消えていった。悪霊が消えると、そこには何の変哲もない廊下が現れた。どうやら、内臓のような壁と、悪霊は一体だったようで、ここは悪霊の

腹の中だったという事だ。一連の出来事の衝撃に、部長は気絶している。
安堵の表情を浮かべた霊幻は、芹沢を振り返った。
「ありがとうな、芹沢。助かった……」
「霊幻さんっっ!!」
笑顔を浮かべる霊幻の身体を芹沢は強く抱き締める。
「お、おい、どうした芹沢?」
「すんません、俺がモタモタしてたから、霊幻さんを危険な目に合わせてしまいましたっ！俺が自己アピールをしようとしたばっかりにっ！」
「何言ってる、芹沢。助けてくれたじゃないか」
泣きそうに声を震わせる芹沢を、霊幻は抱き締め返す。
「でも……怖かったでしょう?」
「芹沢が一緒にいるんだから、怖くないよ」
「良かった。あの……ケガはないですか?」
心配そうに顔を歪めた芹沢は、霊幻の頬を撫でる。霊幻はくすぐったそうに目を細めた。
「大丈夫だって。どこもケガしてないよ。芹沢は相変わらず、心配性だなぁ」
そう言って笑う霊幻の姿に、芹沢は安堵の溜息を吐いて、大きく肩を落とした。
「良かった。霊幻さんに防御壁は二重に展開してたけど、霊幻さんに怖い思いはさせたくなかったんです」
「何だ、そうだったのか?じゃあ、悪霊の奴を殴ってやればよかったたな」
と呑気に笑う霊幻に、
「霊幻さん、やめて下さいよ〜!!」
と芹沢は涙声で言った。そんな芹沢の姿を見て笑った霊幻は思い出したように慌てて、床に倒れて気絶している部長に駆け寄り「大丈夫ですか?」と声を掛けた。
目を覚ました部長は、悪霊を倒したのは霊幻だと信じ込み、感動と感謝でむせび泣き、霊幻に何度もお礼を言った。しかも、呪術クラッシュを予約して、報酬を大増量してくれたのだ。

「せっかくだし、帰りに何か食べていこう。俺達は大人だからな、とんかつを食べよう。キャベツとご飯とみそ汁が、おかわり自由なんだ。芹沢は今日頑張ったから、みそ汁は豚汁に変えていいぞ……あとこれ。お前が社員になるために必要な書類」
その手に持っていた書類は、あの日、霊幻が真剣な表情で見ていたものだ。霊幻の言葉に、芹沢は目を輝かせて、「ありがとうございますっ!!」と勢いよく、頭を下げた。

芹沢の社会勉強は、まだまだ続きそうだ。

たこ焼き

ガチャ、と扉の開く音に霊幻は顔を上げた。

「お久しぶりです、師匠。たこ焼き、買って来ましたよ」

そこには両手にビニール袋を持ったモブが立っていた。

中学生の頃はちょっと見ない間に成長するはずだが、モブはまったく変わっていない。と霊幻は思って、けれど、霊幻は怒濤の日々を送っていたが、そんなに日付けが経っていないことに気付く。

(……俺、一体、何をしてるんだ……)

思わず頭を抱えたくなりながら、モブに気取られないように、冷静を保ちながらモブに向かって、手を振る。

「おー、モブ。じゃあ、一緒にたこ焼き食おうぜ」

「はい」モブは頷くと、ビニール袋をテーブルに置いた。

「手ぶらで来れば良かったのに。ほら、小遣い」

霊幻はデスクの引き出しから今度モブにあったら上げようと思っていたポチ袋を取り出す。

「いらないですよ、師匠。僕だってもう子供とばかりは言っていられない歳なんですよ」

そんなモブの言葉に、

(さてはモブ、何か自慢したいことがあるな。ああ、あれか……『モテ期』。来たるべき時が来たら言うなんて言ってたもんな……将来、『黒歴史』になるとも知らずに……)

と霊幻は、内心でほくそ笑む。

「実は今日、たこ焼き屋さんの前を通ったら、変わったたこ焼きが売ってたんですよ」

「ふーん、変わった『たこ焼き』ねぇ。って言っても……『たこ焼き』だろ?」

「フフフ、それが普通のものとはソースが違うんです」

「辛いとか?」

何でも激辛にするブームはいつまでも続いていて、終わりは見えない。一時流行って廃れていくものの中にあって、『ハバネロ』の息は長い。

「いいえ、違いますよ。まあ、とにかく買ってきたんで食べましょうよ」

そう言って、モブはテーブルの上にたこ焼きを出す。

給湯室からはフワフワとお茶と牛乳がやってくる。トンッ、と湯飲みとコップが置かれるが、霊幻の前には牛乳。モブの前にはお茶の入った湯飲みが置かれる。それを見て、霊幻は笑いながら、コップと湯飲みの位置を変える。

「ほらほら、モブ君。君、自慢したい事があるのではないのかね？」
「師匠は気が早いですね。まずは、たこ焼きを食べましょうよ」
言って、モブはビニール袋からたこ焼きを2パック取りだした。
「二人で2パックは多いだろ、モブー」
「でも、これが違う種類なんですよ。こっちがジャーンッ！こっちが『ネギポン酢たこ焼き』で、こっちが『てりたまたこ焼き』です。期間限定らしくて、つい買っちゃいました っ！」
テーブルに置かれた二つのたこ焼きには、たっぷりの具材が乗っている。
一つは、たこ焼きの上にネギがたっぷり乗せてある。もう一つには、マヨネーズたっぷり卵サラダの上に照り焼きソースまで掛かっている。さっぱりとこってり、食べ合わせは最悪に違いない。
でも、それ以上に、
「うわっ、嫌でも『あいつら』を連想させるたこ焼きだな……」
霊幻は呟いた。
状況を知らないモブは首を傾げる。「ありがとな、モブ」と霊幻が言うと、モブは嬉しそうに「はい」と頷いて、ソファに腰掛けた。『爪事件』以降、なかなか霊幻に会えなかったモブは上機嫌で笑っている。周囲から見れば無表情でも、霊幻から見れば、モブも表情豊かだ。
「師匠、食べてみて下さい」
モブは『ネギポン酢たこ焼き』と『てりたまたこ焼き』を霊幻に勧める。
「ああ、いただきまーす」
霊幻は言って、両手にたこ焼きを刺した爪楊枝を持って、フーフーして十分に冷ましてから、順番に両方を口に放り込んだ。
「……うん。やっぱり、一緒に食べるもんじゃないな」
「師匠、一緒に食べちゃダメですよぉ。本当に、師匠は食いしん坊さんですね」
「そうだったな。たこ焼きだから一緒に食べられると思ってさ。ダメ、濃厚。『ネギポン酢』は初めて会った頃は、さっぱりしてそうな性格だったのに、付き合いが長くなっていくと、こってりと重たくなっていく感じだな」
霊幻の脳裏に、島崎が浮かんだ。
「うん。『てりたま』は……まぁ、初めて会った時から、こってり重厚で、今は更にこってりになってるな。まあ、とことん濃いな」
今度は芹沢が思い浮かぶ。
「さて、モブ。たこ焼きでも食いながら、お前の話を聞かせてくれよ」

霊幻はモブに近況を尋ねると、モブは待ってましたとばかり話し始める。

「はいっ！僕に『モテ期』が来たんですよっ！追い風、ビッグウェーブですよっ!!ハリケーンの如くっ!!」

思い込みが激しすぎる、と霊幻は思って、「超能力者って、思い込み激しいなぁ」と呟く。

「……師匠？」独り言のように呟いた霊幻の言葉に、モブは素早く反応し、事務所の空気が一変する。

「師匠……今、僕と誰かを比べました？」

仄暗い声色で、モブは言った。顔は暗く、モブがどんな表情をしているのか、まるで見えない。次第にモブの髪の毛が逆立っている様子に、霊幻の全身から、一気に血の気が引き、ブンブンと激しく首を振った。

「く、比べてないっ！モブを誰かと比べられる訳ないだろっ！」

瞬間、事務所はいつも通りの雰囲気に戻り、モブの顔もいつも通りに戻った。

「なら、いいんですけど……。師匠って、すぐに勘違いするから僕、心配なんですよ。あっ！僕がモテてるから、師匠は僕が構ってくれないって、寂しいんですね」

何故か、モブの中で『師匠が寂しい』という話になっている事に、霊幻は「え？いや、俺は」と、戸惑いの声を上げるが、モブは全く聞く耳を持たない。寧ろ、先程の不機嫌がなかった事のようにご機嫌だ。

「僕の師匠は、本当に寂しがり屋ですね。寂しいなら寂しいって言えばいいのに」

「いや。師匠としては弟子がモテるのは嬉しい限りだぞ」

うん、本当に。

多分、モブの勘違いだろうけど。

霊幻は思ったけれど、後で笑ってやろうと思った。思春期特有の誰もが持つ『黒歴史』というやつだ。

「僕は今、『モテ期』という名のビッグウェーブに乗ってはいますが、師匠を忘れたわけではありませんからね」

言うが早いか、モブはゆっくりと立ち上がった。その顔には、霊幻にしか分からないぐらいの僅かな変化があり、笑みを浮かべている。モブは霊幻の頭に手を乗せると、髪を梳くように、ゆっくりと撫でた。それを気にした風もなく霊幻は、「『モテ期』もいいけど、ちゃんと受験勉強しろよー」と言った。

「はいはい。ちゃんと勉強はしてますよ。史上最高にカッコイイ僕でいたいですからね！」

「すごいな。じゃあ、次に会う時は、もっとカッコイイ『モブさま』なのか？」

「フフフ、そうですよ『モブさま』ですよ。きっと天から舞い降りて師匠を助けちゃうくらいの僕なのです

よ」
「おっ、それまた大きく出たな！期待して待ってるよっ！」
「はいっ!!じゃあ、僕はそろそろ行きますね。はやく受験終わらせたいし。よーし、受験戦争だっ！」
「それじゃあ、師匠」とモブは言って、ソファから立ち上がる。霊幻はモブに小遣いのポチ袋を渡す。「いらないのに」と言うモブに、『モブさま』が、俺を助けてくれる前払いだよ」と霊幻は笑う。「それなら遠慮なく。必ず助けに行きますね」とモブは言って、それから、不意に足を止めた。
何かを考えるようにモブは立ち止まり、霊幻をジッと見つめる。
「ん?…どうした、モブ?」
モブの視線に霊幻が首を傾げていると、モブは口を開いた。
「師匠、何か困ってますか?困った事があれば、すぐに言って下さいね」
「あ、ありがとうな。モブ。でも、俺は何にもないから。お前はちゃんと勉学に励むんだぞ?」
霊幻がモブの頭を優しく撫でると、モブは嬉しさに目を細める。
（十八禁の相談事なんて、十四歳に言えるわけない。言えるはずもない）
霊幻は親指をグッと立てて、
「俺を誰だと思ってる、モブっ！希代の霊能力者、霊幻新隆っ！お前の師匠だぞっ!!」
と、満面の笑みで答える。
「……そういう事にしておきます。じゃあ、僕はそろそろ行きますね。何かあれば、か・な・ら・ず、僕に連絡下さいね」
「分かったよ。その時は、遠慮なくお前を呼ぶよ」
霊幻は満面の笑みを浮かべると、拳を突き出す。モブも拳を突き出し、コツンッとぶつけ合う。
「師匠、近々除霊行きましょうね。ああ、悪者退治なんかもいいですね！」
珍しく嬉しそうに『除霊』の事を話しながら、モブは事務所を後にした。
（モブは心配ないな。本人的にはモテすぎて困っているだろうけど。まあ、あの様子ならブロッコリーも、何とかしてくれるだろうし。と、弟子に丸投げ。となれば、後は俺か……。いっそ、このまま逃げちゃおうかなぁ……?無理だよなぁ……事務所も社員もいるし）
問題の一つがその社員だという事もすっかり忘れ、霊幻は一人、溜息を吐いた。

島崎亮の仕事

午前中、街中を歩いていた島崎がスマフォを取り出したタイミングで電話が鳴り、島崎が慣れた調子で電話に出ると、イヤフォンをしている島崎の耳に『上司』であるヨシフの声が聞こえて来た。
「ただ今、現場付近に到着しました。今回の依頼をもう一度確認しますが、対象の捕縛だけで殺さなくていい、と。……あぁ、すみません。ここは日本ですからね。日本政府は、良識を持ち合わせてらっしゃる。いえいえ、嫌味ではなく、本気でそう思っていますよ。……はい、了解しました。終わり次第、ご連絡します。そんなに時間はかかりませんよ。せいぜい、五分程度かと。……では」
通話を切った島崎は、手帳を取り出してスケジュールを暗号で書きつつ、手帳を指でなぞり、島崎は「しまった」と内心で声を上げげた。
（原稿の締め切りが近い。書きかけの原稿を仕上げなくては）
島崎には『表の仕事』と『裏の仕事』がある。『裏の仕事』は今から行おうとしている。簡単に言えば『国家公務員』というものだ。表沙汰に出来ない厄介ごとを、秘密裏に解決するのが、島崎の『裏の仕事』で、『表の仕事』は、『裏の仕事』が知られない為の『仮の仕事』の事だ。職業は多種多様で、主に『情報を集めやすい』職業を選ぶ事が多く、島崎に割り当てられたのは『雑誌記者』だった。
（やれやれ……まさか、私が雑誌記者だなんて……初めは勘弁してくれ、と思ったものだ……）
盲目である事を理由に断ろうとしたが、『超能力で記事ぐらい書けるだろ。嫌なら、やめろ』の一言で一蹴され、島崎は引き受けざるを得なかった。過去の犯罪歴を抹消し、新たな身分を日本に用意してもらえるのは魅力的だ。
雑誌の種類は好きなのを選んでいいと言われた島崎は、女性向けのファッション雑誌は面倒臭いので、男性向けのグルメ雑誌と旅行雑誌から記事の執筆を始めたのだが、グルメ系の記事は編集部から意外と好評だったが、島崎はグルメ雑誌はやめようと思っていたのだ。
（旅行雑誌ならテレポートでさっさと移動して取材出来るから、テレポーターの私にはピッタリだが……。グルメ雑誌となれば、店を取材をして、写真を撮って、料理の感想を書いて……手間が多すぎて、テレポーター向きじゃない。一回やって、すぐにやめようと思っていたのに……霊幻先生が、グルメ雑誌に食いついていただけるとは……）
やめるにやめられない。
ただ、話すきっかけ作りのつもりで、島崎が何気なく

出した話題がグルメ雑誌の話だった。まさか霊幻に喜んでもらえると思わず、今さら「やめます」と島崎は言えなくなってしまった。しかも、『霊とか相談所』に行く度、霊幻の口からグルメ雑誌の話題が出るのだ。

旅行雑誌に気持ちが傾いていた島崎が「霊幻先生は、旅行はいかがですか?」と聞くと、霊幻は全く興味のない様子で「旅行とか、疲れるし面倒くさい」と言い切られ、島崎の心はグルメ雑誌で決まった。霊幻と距離を縮めるチャンスを潰す訳にはいかないのだから、何としてもグルメ雑誌で記事を書いて、のし上がっていくしかないのだ。

(霊幻先生の喜びのオーラ……。堪らなく、愛らしかった。霊幻先生に喜んでいただけるなら、私は何でもします。……ん?)

決意を新たにした島崎の優れた感覚が、ターゲットの存在を捉えたのだ。ターゲットは追跡を警戒しているようで、人通りのない事を確認して歩いている。

(情報通りだ。日本の諜報機関も、なかなかのものだが……間違った情報もあるようだ。……いや、わざと黙っていたと言った方が正しいか)

島崎の請け負った仕事は『超能力を使う犯罪者の捕縛』だったが、本当の任務は『元・爪の残党の捕縛』のようだ。名前は覚えていないが、対象のオーラには元『爪』の支部長も含まれているようだ。ヨシフに煽られた外人部隊が倒した筈だが、捕まる前に逃げ出していた超能力者がいたのだろう。オーラを視れば、他にも『爪』残党が数人いるので、徒党を組んで強盗などの犯罪に手を染めていたようだ。

(この点は、第七支部は評価出来ますね。しっかりと職探しをして、社会に適応しようとしている。霊幻先生の素晴らしいお話で目が覚めた、と第七支部の連中は言っていたが……。さすがは霊幻先生、私の心を奪った豪腕の持ち主だけはある)

超能力者の存在は隠したい日本政府としては、大人しくしてくれれば、事を荒立てたくないのが本音で、形式上の聞き取り調査はしたものの、犯罪に超能力を悪用するつもりがないのなら、基本的に無罪放免なのに、犯罪行為に手を染めるとは馬鹿な話だ。

(まぁ……私は自分の犯罪経歴を顧みた結果、国家の庇護下に入るのが一番動きやすいという結論に達したから国家公務員を選択した訳で。……まあいい、『仕事』を終わらせるとするか。次の『予定』も控えている。モタモタしてはいられない)

取るに足らない任務だ。島崎はさっさとターゲットを捕縛する事にする。

島崎の姿が一瞬でかき消え、元『爪』の残党の頭上に転移する。全体重をかけて、一人の超能力者の肩に向かって島崎が落下すると、ボキッと音を立て、肩の骨が割

れた。「ぎゃあっ！」と悲鳴を上げ、肩の骨が割られた男は地面に倒れる。島崎は転移して、ターゲットの前に立って様子を見れば、他の『爪』の残党は、痛みにのたうち回る仲間の姿に、呆然と立ち尽くしている。一撃で昏倒させる事は可能だが、わざと意識を残して苦しむ姿を見せて、周りの戦意を喪失させるのは、一対多数戦の常套手段であり、島崎もよく使う手だ。

「皆さん、ここは大人なんですから、素直に投降していただけませんか？ここは平和大国日本ですし、投降さえしていただければ、悪いようにはしませんよ」

形式的な警告をすれば、何人かは島崎を見て「裏切り者！」と声を荒げているが、島崎には特に何も思う所はないので、島崎はさっさと射程範囲に転移して、未だに動揺している者達を気絶させる。何人かは冷静さを取り戻したようで、島崎を超能力で攻撃してくるが、島崎にとっては児戯に等しい行為だ。

幼稚なエネルギー弾を勢いを付けて跳ね返してやれば、猛スピードで戻ってきた自分で放ったエネルギー弾を避けきれずに、そのまま吹き飛ばされて、壁にぶつかって気絶した。島崎を挟み撃ちして攻撃しようとした超能力者もいたが、テレポーター相手には悪手でしかなく、島崎がエネルギー弾が着弾する直前に転移してしまえば、互いが互いに攻撃して、自滅した。

（超能力者と言っても、結局の所は、対人戦に変わりはない。こんな簡単な仕事でいいなら、楽なものだ）

島崎はすっかり戦意喪失して、地面に座り込んだ超能力者の前に立ち、島崎は笑みを浮かべて見せれば、「ひいっ！」と悲鳴のような雑音が聞こえたので、島崎は「黙れ」と内心で毒づいたつもりが全員が顔面蒼白で黙り込んだので、つい島崎の口から本音が出ていたようだ。

全員を無力化したものの、島崎は警戒を解かない。

（呆気なさ過ぎる……。報告書に載っていた犯罪被害から考えると、こいつらの行動はあまりにも軽率で幼稚だ。本来なら、もっと組織だった……）

思考に耽る島崎の『未来視』が突然発動して、島崎が全身に銃撃を受けている場面を映し出した。同時に、島崎の足元に何かが転がって来る。転がる金属音に、島崎は聞き覚えがあった。

（スタングレネード！）

別名・閃光発音筒。

非致死性兵器で、主に人質救出に使われる爆弾の一つだ。閃光は盲目である島崎には効かないが、爆発音は大変危険だ。考えるよりも先に、島崎はテレポートして、音の射程範囲から離れる。

ドォンッ!!

ビルの屋上に転移した瞬間、下から激しい炸裂音がす

る。きっと、閃光も放たれている筈なので、あの場に残されていた『爪』の残党たちは今頃、失明・目眩・耳鳴りで苦しんでいる事だろう。
　島崎は再びテレポートして、素早く屋上から離れた。瞬間、消えていく島崎の残像に、四方八方から一斉に、ガガガッと、銃弾が激しく打ち込まれた。先程、『未来視』に映し出されていたのは、この映像だ。
（スタングレネードで強制的に私にテレポートを使わせて、転移してきた場所に合わせて、一斉に攻撃する。なるほど、対テレポーターには非常に有用な手だ）
　スタングレネードの射程範囲から逃れるなら、上に行くのが一番手っ取り早い。各ビルの屋上に兵士を配置して、島崎が配置場所のビルに現れたら、すぐに射撃するという作戦だったのようだ。
（やれやれ……こんな回りくどい仕掛けをするなんて、相手は余程、私を消したいらしいな）
　島崎の能力をよく知った上で作られた戦法。これは間違いなく、島崎を狙って起こした行動だ。
「援助してやる」などと言って、元・『爪』の組織の人間を焚き付けて犯罪行動に走らせ、島崎をおびき寄せて、抹殺しようとしたのだろう。確かに、ただのテレポーターなら、きっと引っかかって抹殺されていたところだ。
（私はただのテレポーターではなく、『世界一のテレポーター』なんでね。そんな単純な手には引っかからない。残念だったたな）
　基本的に、他の組織に雇われていた時も、能力の全てを教えた事はない。手の内を正直に晒せる程、信用出来る組織は存在しない。
（……さて、私が狙われる原因だが……心当たりがないわけでもないんですけどね）
『爪』がなくなった直後、島崎の元に、いくつかの犯罪組織からスカウトの声がかかっていた。報酬はスカウトしてきたどの組織も莫大な金額を提示してきたが、霊幻の為にまともな職に就く事と決めていた島崎は、組織からのスカウトを全て断った。きっと、断られた後に日本政府に所属した事を知ったどこかの組織、あるいは、複数の組織が協力して、島崎を抹殺しようとしている可能性も高い。裏稼業を渡り歩いてきた島崎が、国家の組織に属する事を『危険』だと判断するのは自然な流れだろう。
（やれやれ……。こうなってしまっては、このまま逃げる訳にはいかないな。かかった火の粉は振り払うしかない。私も、少しだけ真面目に戦うとするか）
　ビルの更に上空でテレポートしながら静止する島崎は、ざっとビルの屋上を見渡す。上から見れば、人の配置は丸見えだ。周辺に建つ複数のビルにはそれぞれ、装備の違う兵士が待機している。
　兵士が口々に、日本語ではない言葉で大声を上げてい

る。日本語に訳せば、「奴は何処にいるっ⁉」「見つけ次第殺せっ！」といった感じだ。

（強襲部隊の最大の欠点は、自分達が強襲される側に立たされると思っていないという事だ。初めの一手を間違えたお前らが、私に勝てる筈がない！）

島崎は頭の中にある武器リストをざっと思い浮かべる。

テレポートの他に、物質転移『アポート』も使いこなす島崎は、専用の武器格納庫を所持していた。『爪』時代は、ボスである鈴木の意向により、殺傷能力の高い武器の使用は禁止だったので、武器を用いての戦闘は本当に久しぶりだ。

『超能力』は優れていると主張するという名目で、『爪』の構成員は、戦闘時は超能力の使用しか許されていなかった。私も雇い主の意思を尊重して、アポートの使用は禁止していたが……。やれやれ、契約が無効となった今、これからはようやく本気で戦えるというものだ）

思い浮かべたリストから、使用する武器をいくつか選択する。

（ここはやはり……意趣返しだろうな。私の貴重な時間をここまで使わせておいて、ただで済むと思うなよ）

島崎はアポートを使い、手元に武器を転移させる。格納庫から転移させた武器は『催涙弾』だ。非致死性兵器に分類される武器で、吸い込めば、咳・くしゃみ・落涙・嘔吐を誘発させる。効果は絶大だろう。敵はガスマスクを装着していないので、

「さて、戦闘開始だ」

島崎は催涙弾を各ビルに配置されている強襲部隊目掛けて、的確に放り投げる。ビルの屋上に転がった催涙弾から、一斉に白い煙が吹き出した。途端に、いたる所から、悲鳴や怒号が聞こえてくる。ガスマスクを装着した島崎はピストル型の麻酔銃を手元に転移させる。殺しても構わないが、ここが日本だという事と、死体の処理が面倒なのと、知っている情報を聞き出す必要がある、という三点から麻酔銃を選択した。

白い煙に覆われて視界ゼロな状況だが、元々視覚のない島崎にとっては関係ない話なので、わざわざ煙が晴れるまで待つ必要はない。島崎がテレポートして本格的な攻撃を開始すれば、後は戦いとも呼べないような一方的な戦いでしかない。

催涙弾を吸い込み、苦しんでいる連中に、麻酔弾を打ち込んでいく。ただの単純な作業だ。何人かは催涙弾に素早く反応してガスマスクを装着したようだが、部隊が混乱している今となっては、全てが手遅れだ。反撃しようとしてきた相手もいたが、島崎は簡単にいなして、敵を無力化していく。

いざ戦闘が始まれば、ものの数分で、島崎は敵の制圧を完了していた。

敵の苦しむ声を聞きながら、島崎はスマフォを取り出して電話をかけようとした所で、電話が鳴った。相手は上司であるヨシフだ。
『おい。もう十分経ってるぞ。ターゲットはどうした？お前にしちゃあ、遅いじゃないか。何かあったのか？』
電話越しに聞こえるヨシフの声は、焦っていた。当然だろう。今回のターゲットは『爪』の残党で、雑魚中の雑魚だ。そんな相手に、十分経っても島崎から連絡がないのだ。何かあったと思うに決まっている。
「おかげさまで、色々と手違いがありまして。真の黒幕の狙いは、私の命だったようですよ」
『……何？どういう事だ、しっかりと説明しろ』
『爪』の残党に犯罪行為をさせていたのは、島崎をおびき出す為の罠であった事、島崎を殺すつもりで、複数の組織が協力していた事を島崎がざっと説明すると、聞いていたヨシフの口から、盛大なため息が漏れた。
『おいおい、勘弁してくれよ……。あー、畜生。どこのどいつが余計な仕事増やしやがったんだ。徹底的に絞って、白状させてやる』
姿を見ていないので何とも言えないが、きっとヨシフは頭を抱えている事だろう。当然だ。銃の所持が禁止されている日本で突然始まった銃撃戦。どうやって揉み消せばいいのか、考えるだけで頭が痛い筈だ。
「普通に考えれば、日本側に裏切り者がいると考えた方が自然ですよね」
『……だろうな。あまりにも、話が上手く出来すぎてる。……めんどくせぇ』
連中を手引きした奴がいると考えた方が自然だ。
「組織の末端の人間である私にとっては、全くあずかり知らない話ですね。ターゲットは全員捕縛しましたので、そちらに送りたいのですが、よろしいですか？」
『構わない。さっさと送ってくれ。……ったく、末端とか、よく言えるもんだ』
ヨシフの許可をもらった島崎は「了解です」と応え、座標をヨシフの執務室に定めると、島崎は捕縛した敵全員をテレポートさせる。
『おー、届いた届いた。こりゃあ、大漁だな。テレポートってのは、本当に便利な能力だな』
「『爪』の残党はこの際、もうどうでもいいでしょう？別の組織がまだどこかに潜んでいる可能性もありますので、たっぷりと好きなだけ尋問して下さい。私も、周りをうろつかれたら迷惑ですので、徹底的にお願いしますよ」
何せ、島崎にとっては霊幻のいる今の生活が、何よりも大切なのだ。その為なら、何でもする。
『まあ、正直、『爪』の処理に追われている現状で、他の組織の動きまでは把握し切れていなかったから、助か

る。しばらくは、対テロ組織戦は頼んだぞ。何せ、『爪』で幹部だった時代のせいで逆恨み買ってんだ。責任をとれ』
「私はただ、『爪』と契約していただけですよ。言うなれば、契約社員です」
島崎はしれっと言い切った。実際、一番に目立つ実行犯ばかりやらされていたので、『爪』には信用はされていなかっただろう。
『犯罪組織と分かってて契約したんだから、お前も同罪だろ。俺はお前の犯罪歴を揉み消すんで、どれだけの書類にハンコを押したと思ってる。この後の事を考えると、頭が痛くなる。俺の苦労分は、仕事をしてもらうぞ』
ヨシフのうんざりとした声に、島崎は肩を竦めた。
「分かってますよ。……で、まだ時間帯は午前中ですが、今日の仕事はこれで終わりでいいですか？実はこの後、約束がありまして。そろそろ、向かわなくてはいけないのです」
『お前の今日の仕事は『犯罪者の捕縛』だけだ。任務遂行したんだから、午前中でも終わりで構わない。何か用事でもあるのか？厄介な事じゃないだろうな』
「ご安心下さい。この後、グルメ雑誌の取材で、喫茶店に行くんですよ」
島崎の言葉の後、沈黙が流れた後、『はぁ？』とクールなヨシフにしては、珍しい素っ頓狂な声がした。

島崎は全盲用の腕時計の蓋を開けて、指で針に触れて、時間を確認する。余計な仕事が増えたせいで、予定時間がずれてしまい、時間はそろそろ十時半になろうとしていた。テレポートを使うにしても、移動を開始しなくてはならない。
「そちらの喫茶店は、老夫婦が切り盛りしていて、客が増えても困るという事で、基本的に取材お断りなんです。ですが、今回、取材させていただける事になりまして……。しかも、本来なら、開店時間は午前十一時からの喫茶店なのですが、雑誌の取材という事で、開店を少し早めて、午前十時半にしてくれたのです。わざわざ開店時間を早めていただいたのに、遅刻しては失礼に当たりますので」
『お前……雑誌のライターなんて面倒だって、ずっと文句言ってたじゃねぇか。何で、真剣にライターやってんだよ。しかも、グルメ雑誌って……』
「今、とても大切な時期なのですっ！何度か記事を書き、読者と編集部の信頼を勝ち得て、このたび男性向けのグルメ雑誌で連載を持たせていただける事になりました。これから取材にお伺いする喫茶店は、私が連載する記念すべき第一回目の記事ですから、手を抜くわけにはいきません。何としても喫茶店に行って、話を聞かなくてはならないんです。……私は、今回の連載に全てをかけているのですっ!!」

『はぁっ!?い、いやいや、おかしいだろ、雑誌の連載とか。しかも、国の仕事よりも、気合い入ってんじゃねぇか』
「当然です。何せ、連載を持ったのが霊幻先生のお気に入りのグルメ雑誌なのです。霊幻先生が大好きなグルメ雑誌で連載出来るのに、手は抜けないでしょう?霊幻先生は、絶対に喜んで下さる」
『霊幻先生……。あぁ、お前や第七支部の連中が長々と語っていた先生か……。いや、まぁ、俺に言われても困るんだが……』
「その様子では他に仕事がないようで、安心しました。では失礼します」
島崎は電話切ろうとする間際、
『おいっ!結局お前は、何がしたいんだっ!?』
と、ヨシフの声が聞こえたが、構っている時間はない。島崎は聞こえないふりをして、通話を切った。
「……よし、行くか」
周りに人目がない事を確認した島崎は、取材先の喫茶店に向かってテレポートした。

† † †

「あぁ、美味しい……」
呟いた島崎が食べているのは、海老ピラフだ。
午前十時半喫茶店を訪れた島崎を出迎えてくれたのは、感じの良い老夫婦だった。着くとすぐに、席に案内された島崎は、料理を勧められたのだ。
「写真を先に撮った方が、料理を無駄にしないで済みますよ」
と島崎は言ったのだが、喫茶店の主人は首を振るばかりだ。
「熱々の料理を食べてもらった方が味が分かるので、温かい内にどうぞ」
言われて、テーブルに置かれた海老ピラフは、料理が見えなくても、オーラを見れば、美味しいとすぐに分かった。一度に二件の仕事をこなした後で、腹が空いていた島崎は、美味しい匂いにあらがえず、海老ピラフを食べてみれば、想像以上に美味しく、手が止まらなくなった。
(静かで落ち着いた雰囲気で、料理も美味い。霊幻先生を今度、この喫茶店にお誘いしたいものだ。きっと、霊幻先生も喜んで下さるだろう)
霊幻から色々な話を聞いていると、霊幻は『今時の流行りの店』よりも、『昔ながらの店』の方が好きなようだ。島崎も雑誌の編集部に『昔ながらの店』という記事の企画を持ち込んだ結果、その企画が通り、雑誌の連載が決

まったのだから、世の中分からないものだ。
一ヵ所に留まる事なく、世界中を飛び回る生活をしていた島崎は、あまり味にこだわりはなく、「口に入ればいい」程度の認識で食事をしていた。グルメ雑誌の記者をする事になり、霊幻の為に必死になって、色々な店に行き、様々な料理を食べる内に、すっかり美食家になってしまった。島崎自身知らなかったが、料理に関しては、こだわりが強かったようだ。
食事を終えた島崎の前に出されたのは、甘く香り漂う、店で評判の奥さん手作りのモンブランだった。断りを入れて、食べてみれば、予想以上に美味しい。
(今まで食べたモンブランの中でも、一番美味い。霊幻先生へのお土産で、帰りに買わせてもらおう)
島崎が料理を食べている間、老夫婦は料理を一つ一つ丁寧に、島崎に分かりやすく説明してくれた。話している間に、老夫婦の色々な話も聞けたので、記事を書くには十分だろう。食事を終えた島崎は、写真を撮れば今回の取材は終了する。島崎は早速、撮影用に準備されたサンドイッチとモンブランに、カメラを向ける。
(作り手の自信と、料理自身が放つ自信のオーラが伝わってくる。こういう被写体は、非常に撮りやすい)
視覚の機能しない島崎にとって、人や物体の放つオーラだけが、相手を識別する手段だ。
カシャカシャとシャッターを切った島崎は、自分で写真の確認は出来ないので、店主に写真の出来を確認してもらう。
「美味しそうに撮ってくれてありがとうございます」
主人は嬉しそうに、島崎に礼を言った。社交儀礼ではなく、本心で言っているのが伝わってくる。
元々、雑誌の取材を断っていたのは、料理を知ってもらいたいのに、長く喫茶店をやっている老夫婦の話ばかりを記者が聞こうとするので嫌になったという話だ。島崎の取材を受けたのは、島崎が老夫婦の取材ではなく、店と料理の取材をしたがっているとすぐに分かったからだそうだ。
時間を確認すれば、そろそろ十一時になろうとしていた。客が来る時間に邪魔をしてはいけないので、島崎は出来上がった原稿を持ってまた来る事を伝えれば、奥さんから「どうぞ」とモンブランが二つ入った箱を渡された。買うつもりだったモンブランを渡されて、島崎は恐縮して「料金を支払う」と言ったのだが、頑なに受け取ってもらえなかった。今度は仕事ではなく、プライベートで来る事を約束した島崎はモンブランを受け取り、老夫婦に見送られて、喫茶店を後にした。
すぐにテレポートしても良かったのだが、今は歩きたい気分になった島崎は、ゆっくりと歩道を歩く。
(霊幻先生に気に入られたい一心で始めたグルメ雑誌の記者だが……案外、面白いものだな。ご夫婦も丁寧に

話をしてくれたから、記事も書きやすい。
その時、島崎はふと気が付いた。
（もしかして、あの老夫婦は……私が盲目であると気付いていたのかもしれないな……）
何か根拠がある訳ではないが、島崎は自分が盲目である事を知られている気がした。手に持ったモンブランの入ったケーキの箱を、島崎は軽く持ち上げる。思い出すのは、霊幻の事だ。
（せっかくの美味しいケーキだ。ぜひ、霊幻先生にも食していただきたいな）
島崎は一応、手帳でスケジュールを確認する。予定はこの後、一件も入っていない。
（……あぁ、霊幻先生に触れたい）
思えば、霊幻の元に何度も行っているが、軽く尻を揉んだりのスキンシップは来訪する度にしているが、しっかりと霊幻にしっかりと触れたのは、だいぶ前になってしまった。

（恋しい……霊幻先生が。そして、霊幻先生の尻が）

島崎には、今の仕事の安定と、霊幻からの信用を得る事が最優先事項だったので、霊幻への本格的なアプローチを我慢していたのだ。その努力の甲斐あって、霊幻は島崎が来訪にも、警戒しなくなってくれた。事務所に行くと、嬉しそうに出迎えてくれる霊幻の声に、島崎は喜びを抑える事が出来ず、帰ってから盗聴している霊幻の声を何度も聞き返した。初めは盗聴を気にしていた様子だった霊幻も、最近では全く気にしなくなっていた。盗聴を受け入れてしまうのもどうかと思うが、芹沢を社員として雇い、島崎が来て喜ぶような霊幻の懐が広いという事だろう。
（そろそろ、私と霊幻先生も、次の段階に進んでもいいのかもしれない）
盗聴している今の霊幻の音声を確認してみれば、芹沢はちょうど不在で、霊幻は暇をしているようで、霊幻に迫るなら今しかない。
島崎はテレポートする。勿論、座標は『霊とか相談所』だ。

こうして、島崎の一日の仕事は午前中に終わり、島崎の個人的な時間が始まった。
それは、ある意味波乱の幕開けになる事を、島崎自身、そして、霊幻も知る由もなかった。

島崎亮と霊幻新隆

「こんにちは、霊幻先生。また、来ました」
「あ、いらっしゃい、島崎」
　パソコンから顔を上げた霊幻は、手を振って島崎を迎える。最近では島崎の突然の来訪にも、すっかり慣れた。むしろ、寂しがり屋の霊幻だ。島崎の来訪を、最近では密かに楽しみにしている程だ。島崎は霊幻の気持ちを知ってか知らずか、手に持った箱を霊幻に差し出した。
「はい、どうぞ。今日は、モンブランをお持ちしました」
「モンブランかぁ、どれどれ……おっ！昔ながらの黄色いモンブランだ。美味しそう～」
　受け取った箱を開けて中を見ると、黄色いモンブランが並んでいる。思わず、霊幻は顔を綻ばせた。
「古くから営業している喫茶店で提供している評判のモンブランなのですが……確かに、最近のケーキショップで食べるモンブランとは味が少し違いますが……色も違うのですか？」
　超能力のおかげで日常生活に支障のない島崎だが、色の識別は出来ない。島崎の問いに、霊幻は頷いた。
「昔の黄色いモンブランは、栗の甘露煮を使っているんだ。で、最近の茶色いモンブランは、マロングラッセを使ってる。だから、味も違うけど、色も違うんだ」
「なるほど。同じ栗でも、使っている栗の加工品が違うのですね。霊幻先生は、どちらがお好きですか？」
「俺？……うーん、選べないなぁ。でも、黄色いモンブラン大好き。なあ、さっそく食べようっ！」
　言うと、霊幻はコーヒーを淹れ、モンブランも皿の上に乗せた。
「いい香りですね」
「老舗の喫茶店に行った後にインスタントで悪いけどな。さあ、食べよう」
　と、霊幻は自分が待ちきれない様子で「いただきますっ！」と言って、モンブランを食べ始めた。
「おいひぃ～～っっ!!」
「それは良かった。私は色々ご馳走になりましたから、良かったら私の分もどうぞ」
　言って、島崎は霊幻にモンブランの乗った皿を差し出す。
「えっ？いいの？」
いけない、いけない。
と思いながら、霊幻は島崎から差し出された皿を受け取ってしまう。
「そんなに気に入って頂けたら嬉しいです。来月から連載を持つ事になりまして、その第一回目のお店のケーキなんですよ。……、……では、こちらもどうぞ」

島崎は霊幻に紙袋を差し出した。思わず受け取って、霊幻は首を傾げる。袋を開けて見ると、中には男性向けのグルメ雑誌が一冊入っていた。
「グルメ雑誌に私の記事が載っているので、霊幻先生に是非、読んでいただきたくて持って参りました。付箋を貼ってありますので、参考までに」
「ありがとう。もう、記事になったんだな。どれどれ……。へぇっ、こうして読んでると島崎って、普通のグルメ記者だよなぁ。あっ、この店、美味しそう。今度、行ってみようかな……」
パラパラとページを捲って、霊幻は感心の声を上げた。書かれている店の紹介記事は、とても美味しそうに表現されている。とても、仮の肩書きとは思えない。
「もし、霊幻先生がご希望でしたら、美味しい店にご案内しますよ。この調味市にも隠れた名店も多いですから」
「マジで?じゃあ、今度美味い店に連れてってくれよ」
霊幻の言葉に、島崎は驚いたように息を飲んだ。
「……まさか、霊幻先生からデートのお誘いをいただけるなんて思いもしませんでした。こんなに喜ばしい事はありません」
「デートだなんて……大げさだって、島崎」
島崎の勢いに押されながら、霊幻も満更ではない様子で頷いた。

「霊幻先生」と島崎の真剣な声が霊幻の名前を呼び、その手が霊幻の首筋を撫でる。急に感じた島崎の手の感触に、霊幻の身体がピクリと震える。
「……え?島崎?」
「美味しい料理もいいですが、まずは霊幻先生のお味を堪能させて下さい」
言って、島崎は霊幻の首筋をペロリと舐めた。
「お、おい……俺は別に、美味くないって」
慌てふためく霊幻は、オロオロと声を上げて逃げようとするが、優男な見た目の割に、格闘術の心得がありそうな島崎は、ガッシリと霊幻の身体を押さえ込んで逃がさない。島崎の指が、霊幻の乳首を的確に摘まんだ。
「ひゃうっ!」
思わず、霊幻の身体は乳首の刺激に反応して、震えてしまう。恥ずかしさに、霊幻の頬が赤くなる。
「どこも、美味しそうですね。特に、霊幻先生の乳首はピンと立って、とても美味しそうです。前回のご相談の時はあまり堪能出来なかったので、今回は霊幻先生の乳首をじっくりと味わいたいと思っていたのです」
島崎の言葉に、霊幻は俯く。何も言わない霊幻に、島崎は手を止めて、不思議そうに首を傾げた。
「……おや?いかがなさいましたか、霊幻先生?もっと抵抗なさるかと思っていましたが」
「……、なぁ、島崎。ここだけの話なんだけど……」

言いにくそうに口を開いて、霊幻は島崎を見上げる。霊幻の顔は、今にも泣き出しそうだ。
「本当に、どうしたのですか？霊幻先生がそんな顔をなさるなんて、私は驚きを禁じ得ないのですが」
島崎は珍しく動揺した様子で、霊幻を見る。霊幻は不安そうに顔を歪めて、口を開いた。
「俺……男なのに、乳首が気持ちいいなんて、おかしいかな……？」
「乳首、ですか？霊幻先生は、乳首が気持ちいいと？」
確認するように島崎に聞かれた霊幻は「う、うん」と、小さく頷いた。
「こんな事、誰にも相談出来ないし……。でも、乳首気持ちよくて……。つい、乳首を自分で弄っちゃってさ……。俺、変なのかなって、ずっと心配で……、最近は乳首が立ちっぱなしで、シャツに擦れて、恥ずかしいし……」
言いながら、霊幻は自分の乳首を摘まんで、確認するように、ゆるゆると引っ張る。
「んん……っ、んっ、ふぅ……っ、なぁ……っ、島崎……、俺、変かな……？」
乳首をいじりながら、縋るように島崎を見る霊幻の姿に、島崎は大きく息を飲む。それから島崎は、安心させるように霊幻に笑いかけて、ゆっくりと手の甲で霊幻の頬を撫でる。敏感になった霊幻の身体は、その刺激にも反応して、小さく震える。
「安心して下さい、霊幻先生。乳首が気持ち良くても、全然おかしい事ではないですから」
「本当に？」尚も不安そうに聞いてくる霊幻に、島崎は大きく頷いて見せる。
「本当ですよ。男女で多少の差異はあっても、性感帯に変わりはないという話がありますから」
「そ、そっか……」
島崎の言葉に、霊幻は安堵したように、霊幻は小さく息を吐いた。
「霊幻先生。そんなに乳首が気持ちいいのでしたら、私が乳首を舐めましょうか？」
「乳首を舐める？」霊幻は思わず、島崎に聞き返すと、島崎は「はい」と答えた。
「乳首はさすがにご自分じゃ舐められないでしょう。……きっと、気持ちいいですよ？」
耳元でゆっくりと囁いて、チュッと耳たぶを吸い上げると、霊幻の身体が小さく跳ねる。霊幻のオーラが僅かに『期待』に揺らめくのを、島崎は見逃さない。島崎は霊幻のシャツを軽く引っ張る。
「では、霊幻先生。このシャツを、ご自分で開けていただけますか？」
「で、でも……」
恥ずかしそうに身体をくねらせる霊幻に、島崎は笑い

かけて、自分の閉じた目に触れた。
「私はご覧の通りの盲目ですので、霊幻先生が恥ずかしがる事なんて、何もないですよ」
「はっ、あっ……」
暗示をかけるように、島崎はじっくりと霊幻の耳元で囁き続け、島崎は霊幻の手を取り、霊幻のシャツのボタンへと手を導く。
「さあ、霊幻先生」
「んんっ……」
熱に浮かされたように、霊幻は震える指で、ネクタイを外し、シャツのボタンを一つ一つ外していく。露わになった乳首に熱が集中しているのを感じて、島崎は大きく喉を鳴らした。
「残念です。もしも、私の目が正常なら、霊幻先生の固く立ち上がる乳首をこの目に焼き付けたものを」
悔しそうに呟き、島崎は霊幻の身体をソファに優しく横たえる。島崎はソファに押し倒した霊幻の上に乗ってその身体を押さえつけ、乳首に口を寄せて、チュッと吸い上げる。途端に、霊幻の身体が大きく跳ねた。
「ああっ！」
霊幻の口から漏れた声には想像以上に快感が混じっていて、自分の声に驚き、戸惑った霊幻は思わず口を手で覆う。島崎はそのまま、霊幻の乳首を口に含み、チュッチュッと強く吸い上げる。

「んっ、んっ、んっ……うんっ、ふぁっ、あぁっ……」
声を抑えきれない霊幻の声が、次第に漏れ出す。快感に揺れる霊幻の乳首に、島崎はカリッと歯を立てた。
「ひぃ……っ！」
乳首に当たる歯の感触に、霊幻の身体が『恐怖』と『期待』に震えるのを島崎はしっかりと確認する。霊幻の感情の揺らぎに、島崎の興奮は次第に上がっていく。
「あぁっ、島崎ぃ……っ！怖いっ！」
「怖がる事なんて何もないですよ、霊幻先生。何も考えず、その身を私に委ねて下さい」
言いながら、島崎は片方の乳首を口で吸い上げて刺激して、もう片方の乳首を指で摘まんで刺激する。
「ひっ、ひぅん……っ、ふっ、ふぅっ、はっ……」
霊幻の身に纏うオーラの感情の揺らぎがなくなり、次第に『快感』へと染まっていく。それと共に、霊幻の身体から放たれる体臭が、僅かに甘いものへと変わっていき、島崎の鼻腔を刺激する。味さえも、甘く変わっていくようだ。未だに残る『理性』が消えて、全てが『快感』へと染まった時の霊幻はどんな味なのか、どんな匂いなのか、と考えるだけで島崎の興奮が高まっていく。
「島崎っ……島崎っ……」
霊幻の手が、何かを探すように宙を彷徨い、島崎の頭に触れると、「もっと」と強請るように、島崎の頭を抱えるように抱きしめる。

「全く、あなたという方は……たまりませんねぇ」
うっとりと呟き、島崎は乳首をチュッと吸い上げると同時に、霊幻のスラックスと下着を転移させる。剥き出しになった下半身に、霊幻は身を震わせる。
「えっ、えぇっ？今日は、尻をいじる日？島崎、いきなりそんな気分になっちゃったの？」
最近は島崎のセクハラも鳴りを潜めていたので、すっかり油断していた霊幻は戸惑いの声を上げる。そんな霊幻に、島崎は大きく頷いた。
「はい。今日はとても、霊幻先生の尻穴をいじりたい気分なんです」
「いや、でも、俺はまだ、心の準備が出来てないし……」
咄嗟に逃げようとする霊幻の身体を、島崎はしっかりと押さえ込む。
「以前、霊幻先生は尻穴に指を挿入されても、痛みを感じておらず、寧ろ、快感を感じていたように見受けられましたが？」
「そ、それは……っ」
島崎が確認すると、霊幻は言葉を詰まらせた。
「ご安心下さい。霊幻先生の尻穴も、乳首同様に性感帯にして差し上げますので」
満面の笑みを浮かべた島崎は、手にボトルを転移させた。突然現れたボトルに、霊幻は首を傾げる。
「ローションです。霊幻先生新作のアロマオイルもいいのですが、やはりあなたの尻穴を愛するのであれば、ローションは絶対的に必要ですので。ですが、ご安心下さい。このローション、実は無香料なのです。霊幻先生のアロマオイルと混ぜて使いましょう」
「アロマオイルにこだわるなよぉ……っ！せっかく作ったのに、呪術クラッシュで使えないだろっ」
不満そうに呟く霊幻に、島崎は自分の目に触れる。
「オーラが見えると言っても、私はこんな目ですので。霊幻先生のお作りになったアロマオイルの香りで、霊幻先生を抱いているという実感が欲しいのかもしれませんね。申し訳ありません。個人的なワガママで」
「……わざと言ってるだろ、島崎。そう言えば、俺が何も言えないと思って」
霊幻が島崎を見つめると、島崎は軽く肩を竦めた。
「いいえ？ですが、ご聡明な霊幻先生なら、私の言いたい事を、全て分かっていただけるかと思いまして」
「ダメに決まってるだろ……っ！そもそも、尻まで許してない……って」
「ありがとうございます。ご許可をいただけたようで、喜ばしい限りです。では、早速続きをしましょう」
言って、島崎は嬉しそうに笑う。
「おっ、おい……っ！俺は許可なんて、してないだろっ、何を勝手に……っ」

「霊幻先生の口はそう言っていますが、オーラを見る限りでは、霊幻先生のお気持ちは既に『期待感』に染まっていましたので。違いましたか？」
「……っ！」島崎の言葉に、霊幻は大きく息を飲む。頬を赤く染め、霊幻は俯く。
「超能力なんて、卑怯だ……。俺なんて、何の力もないのに……」
今更、『霊能力がない』事を隠すつもりのない霊幻は、ふて腐れたように呟く。霊幻の言葉に、島崎は首を振る。
「何をおっしゃるのかと思えば。何の力もないあなたに翻弄されている私達、超能力者なんて、本当に下らない存在ですよ。何せ、あなたを手に入れたいと思っているのに、超能力を使っても、何一つままならないのですからね。せいぜい、あなたの心の動きを、ほんの少しだけ覗き見る事が出来るぐらいです。超能力は無意味なものだと、霊幻先生を目の前にすると痛感します。超能力であなたが手に入れば、と思わずにいられません。
出来れば、霊幻先生とはじっくりと互いの今後について語り合いたいと思うのですが……今は、あまり私の気持ちに余裕がなくて……。今すぐ、あなたに触れたいなんて、こんな利那的な感覚は初めてです。申し訳ありませんが、多少の強引になる事を許して下さい。大丈夫ですよ。強引と言っても、霊幻先生の可愛らしい『蕾』を傷付けるつもりはありませんので」

島崎は自分の手に、ローションをたっぷりと垂らす。手から零れたローションが、霊幻の股間に垂れて、ピクンッと霊幻の身体が震えた。
「あっ、冷たい……っ」
「すぐに暑くなりますよ」
当たり前のように言って、島崎は手に垂らしたローションに霊幻お手製アロマオイルを手の中でしっかりと混ぜ合わせて乳化させる。それから、霊幻の男性器を握り込み、たっぷりと塗りつける。
「ひゃふ……っ！」
直接的な刺激に、霊幻の身体が大きく跳ねる。霊幻の男性器を触りながら、島崎は安心したように、大きく息を吐き出した。
「……霊幻先生が本当に感じていただけているようで、安心しました」
「島崎は俺の気持ちが分かるって言ってたじゃないか。別に触らなくても、俺が感じているか、分かってただろ」
先程の口ぶりでは、霊幻の感情の動きを把握していたというのに、本当に安堵している様子の島崎の口ぶりに、霊幻は不思議そうに首を傾げる。
「オーラが視えていると言っても、何の根拠もないじゃないですか。こうして直に触れて、霊幻先生が私の手で感じていると分かると、非常に安心します」
言いながら、機嫌良く笑う島崎を、霊幻はジーッと冷

たい目で見る。
「オーラが見えるって言ってみたり、根拠がないって言ってみたり……結局、どっちなんだよ、バカ島崎」
「霊幻先生。人という生き物は、ワガママな生き物なんです。視えていても、確認したくなるのです」
「おい、開き直るなよ……」
全く悪びれた様子もなく、平然と言い切る島崎に、霊幻は呆れたように息を吐き出す。島崎は小さく笑う。
「では、霊幻先生のお気持ちが再確認出来ましたので、自信を持って霊幻先生へのご奉仕に、励もうと思います」
「何を偉そうにっ、……んっ、んんっ……」
文句を言おうとした霊幻の男性器を、島崎は壊れ物を扱うように優しく包み込む。
ピクピクと霊幻の身体が小刻みに震える。霊幻の意識が男性器に集中している間に、島崎は霊幻の尻穴を人差し指でそっと押す。
「ひゅう……っ」
霊幻は思わず身体を強ばらせる。
「怖がらないで下さい、霊幻先生。大丈夫、何も怖くないですよ」
子供をあやすように言って、島崎は霊幻の男性器を上下に扱く。ピクンッと霊幻の身体が跳ねる。
「う、うぅ……っ、くぅっ、恥ずかしいっ」
霊幻は顔の前で腕を交差する。恥じらう霊幻の姿に、島崎はつい口元が緩む。
「わざわざ顔を隠す必要はありませんよ、霊幻先生。何せ、私の目は機能していないのですから」
「そういう問題じゃないっ……んんっ、気持ちの問題なんだよっ、気持ちのっ」
「本当に、あなたは面白い方ですね。ここまで追い詰められても、あと一歩の所で踏み留まっている。……そうでなくては、やはり落としがいが、ない」
言って、島崎は霊幻の瞼にそっと口付ける。島崎を上目遣いに見て、霊幻は目元を赤らめながら、それでも、それを誤魔化すようにして、不敵に笑ってみせる。
「俺は絶対に逃げるんだからな。お前の好きになると思ったら、大間違いだぞ」
霊幻の言葉に、島崎は呆気に取られたような表情を浮かべた後、吹き出すように笑った。普段はニヒルな笑みばかり浮かべる島崎の自然に笑う姿に、霊幻は不満そうに島崎を見る。
「おい、笑い事じゃないぞ。俺は本気で言ってるんだからな」
「急に笑い出してしまい申し訳ありませんでした。勿論、霊幻先生が本気でおっしゃっているのは、存じ上げていますよ」
島崎は笑いすぎで目元に浮かんだ涙を指で拭う。
「さすがは、霊幻先生。『世界一のテレポーター』を自

負する私から逃げようと、あなたは本気で考えてらっしゃる。霊幻先生には、驚かされるばかりですよ」
「うるさい。俺はとにかく逃げるっ！」
力強く宣言する霊幻に、島崎は大きく頷いた。
「私も霊幻先生を逃がさないように努力しなければなりません。どうすれば、霊幻先生が私から逃げたくなくなるのか、考えなくては。……こんなにやりがいを感じるミッションは初めてです。では、まずは……」
瞬間、島崎の空気が変わる。霊幻の男性器を握り込んでいた島崎の手が、ゆっくりと動き出す。
「ふぇっ?……あぁぁっ！」
急な強い刺激に、霊幻の口から一際大きな声が漏れる。自分の声に、霊幻は慌てて手で口を覆おうとして、その手を島崎に掴まれ、手の甲に口付けられる。
「はぁ……っ、はふっ、島崎っ、だめぇっ、声っ、出ちゃっ」
「声を抑えるなんて野暮な真似はおやめ下さい、霊幻先生。是非とも、私にもそのお声を私にも聞かせて下さい。あぁ……、霊幻先生の声と身体をこんなにも堪能出来るなんて、私は何て幸せ者なのだろう。さぁ、霊幻先生。今は私に、全てを身を委ねて下さい」
うっとりと呟いた島崎は、霊幻の男性器を扱きながら、霊幻の尻穴もゆっくりと刺激していく。霊幻の尻穴はローションの力を借りて、前回よりもスムーズに少しずつほぐれていく。それと共に、ローションと混ざり合ったアロマオイルの香りが辺りを漂い、島崎の鼻腔を刺激する。
「ひっ、くぅっ、島崎っ、お願いっ……手っ、離して……っ」
霊幻の口から切羽詰まった声が上がると、島崎は、
「はい、分かりました」
素直に頷き、霊幻の男性器からすんなりと手を離した。
「え?」まさか島崎が、手を離すと思っていなかった霊幻は、拍子抜けの声を上げる。
「霊幻先生の男性器に血液と熱が集中していますので、そろそろ絶頂が近いと判断しました。さすがは霊幻先生、ご自分の事をよく分かっていらっしゃる」
「えっ、えっと……その……」
島崎の手から射精寸前に解放され、霊幻は複雑な気持ちで島崎を見上げる。
(いや、いいんだよ?やめてもらえたんだから、良かったんだよ。うん、良かった良かった)
自分に言い聞かせる霊幻だったが、どうにも落ち着かず、モジモジと身体をくねらせる。霊幻の視線を感じた島崎は、安心させるような笑みを浮かべて、霊幻の頬を撫でた。
「大丈夫ですよ、霊幻先生。私は別に、あなたに意地悪するつもりありません。ただ、せっかく絶頂を迎える

のでしたら、男性器を扱いて普通に射精するのではなく、尻穴の刺激で絶頂されたらよろしいかと思いまして。射精するだけなら霊幻先生の普段されているオナニーの方が刺激的ですので」
「ちょっ、ちょっと、待って！俺、乳首だけじゃなくて、オナニーも変なのか……っ!?」
「いいえ、とても素敵なオナニーですよ。いつもありがとうございます、霊幻先生。ごちそうさまです」
「答えになってないっ！大体、尻でイクとか、そんなの俺は……！んひゃっ！」
文句を言おうと霊幻が口を開いた時、尻穴が何かに押し広げられるような感覚に、霊幻は身体を震わせた。
「では、入り口は随分と解れたので、そろそろ指を霊幻先生の中に挿入しますね。今回も、一本目は人差し指でよろしいですか？」
確認されて、霊幻は唇を指で押しながら考えた。
「う、うーん……よく分からないから、人差し指でいいかな？」
「では、人差し指を挿入しますので、何か違和感を感じたら右手を上げて下さいね、霊幻先生」
まるで歯医者のような物言いに、霊幻は思わず頷いてしまう。島崎は霊幻を安心させるように額に口付けを落とし、霊幻の尻穴に押し当てた指に力を込めていく。体内に侵入してくる異物感に、霊幻は顔を歪める。

「んっ、はぁっ……」
「霊幻先生、力を抜いて下さい、……と言っても無理なのは理解していますので、大丈夫ですよ。私に任せて下さい」
そう言った島崎の顔は、何処か楽しそうだ。島崎は霊幻の乳首にカリッと歯を立てる。途端に、霊幻の身体が跳ねる。
「ひゃふん……っ！」
思いがけない乳首の刺激に、霊幻は声を上げる。思いの外、自分の口から漏れる声の高さに、霊幻の顔は赤く染まる。瞬間、島崎の指が更に奥まで入り込む。
「んんーっ！」
下腹部に異物が入り込む違和感に、霊幻は息を詰める。そんな霊幻の頬を、島崎は優しく撫でる。
「霊幻先生。ほら、ちゃんと呼吸して下さい。息吸うの忘れてますよ？」
「はっ……はぁっ、んんっ……ふぅっ」
島崎に言われるまま、霊幻は深呼吸を繰り返す。懸命な霊幻の様子に、島崎は何処か楽しそうに笑いながら口を開いた。
「はい、霊幻先生。ここでクイズです。今、霊幻先生の尻穴には、指が何本入っているでしょうか？さぁ、お答え下さい」
急にクイズ番組のような物言いをする島崎に、何を言

われているのか理解出来なかった霊幻は目を丸くする。それでも、霊幻は「えぇと……」と呟いて、考え込む。島崎の指の存在は確かに感じるが、何本入っているかまでは分からない。
「い、一本、だよな？」
「……では。答えは、『一本』でよろしいですか？」
「えぇっ？違うのか？」
大げさに肩を竦めて見せる島崎に、霊幻は不安になり、物は試しに、尻穴にキュッと力を込めてみる。
「……んんっ」
力を込める事で、より明確に島崎の指を感じる事が出来る。霊幻は何度も、キュッキュッと尻穴を締め付けてみる内に、じんわりと痺れのようなものが広がっていく。
「はぁっ……あっ、んっ、んんっ……んぅっ……指っ……島崎の指がぁっ……ふぁっ……あぁっ」
霊幻は何度も尻穴を締め付ける内、息が上がっていき、その表情が快楽に染まっていく。本人も気が付いていないが、腰が僅かに揺れている。
霊幻の痴態に、島崎は獲物を見つけた猛獣のように、舌を舐める。
「全く、あなたという人は。いつも私の想像以上だ」
呟いて、島崎は霊幻の耳元に口を寄せた。
「霊幻先生の尻穴に入ってる指の数。正解は『二本』です。残念、不正解でした」
「ふぇっ……？嘘っ……二本、入ってる？」
驚きのあまり聞き返す霊幻に、島崎は頷いて見せる。
「興味津々なご様子ですね。さすがは霊幻先生、好奇心旺盛ですね。是非、私の指でもっと感じていただきたかったのに……あぁ、舐めたかった」
残念そうに呟いた島崎は、大きくため息を吐いて、ゆっくりと指を引き抜いた。島崎は見せつけるように、霊幻の目の前で手を広げる。確かに、人差し指と中指の二本がローションでしっとりと濡れていて、霊幻の顔が羞恥に赤く染まる。島崎は霊幻の下着とスラックスをアポートで履かせると、口角を上げる。
「非常に残念ですが、そろそろタイムアップです。本当は、霊幻先生が尻穴だけで絶頂するお姿まで見たかったのですが……。尻で感じられるようになっていただけるようになりましたし、次回のお楽しみに取っておきましょう。世の中思い通りに事が進まないものですが、大丈夫ですよ。……ヤツを始末すれば、またすぐに二人きりになれますので。それから、続きをしましょう？」

「……？島崎、さっきから何言ってるんだ？」
言われている意味がさっぱり分からない霊幻は、快感の余韻に浸って、ぼんやりとした表情で首を傾げた。

第三章 超能力バトル

ギィ……

事務所のドアが、ゆっくりと開いた。霊幻は視線を向けると、ドアの向こうに立っていたのは、芹沢だった。

「お疲れ様です、霊幻さん」

芹沢は、霊幻に会釈すると何事もないかのように事務所に入って来る。まるで、島崎の姿が見えていないように、視線も向けない。

霊幻が時計を見れば、まだお昼前だ。

「お疲れ、芹沢。まだお昼前だぞ。除霊、もう終わったのか。早かったな」

「簡単な除霊だったんで、すぐに終わりました。今から、報告書書きますね」

「芹沢、問題なかったんなら、報告書はいいよ」

「分かりました。……霊幻さんは、まだかかりそうですか？」

「え？えぇと……いや、俺の方も、そろそろ終わりそうかなぁ」

チラリ、霊幻は島崎を見る。島崎は警戒している様子で、神経を集中させているようだ。

芹沢はお札を取り出す。そのお札は、除霊が午後までかかると思って、お昼代にと芹沢に渡したお札だった。

「じゃあ、お昼に何か食べましょうよ、霊幻さん。俺、『また』とんかつがいいなぁ。……その前に、まずは邪魔者を始末しますね」

天気の話でもするような気軽さで芹沢は言うと、お札を胸ポケットにしまい、パチンッと指を鳴らした。

「……っ!?霊幻先生っ!!」

島崎の手が、霊幻に伸ばされた。あと少しで島崎が霊幻に触れそうになった瞬間、ネクタイを締めようとしていた霊幻を光の膜が覆い、島崎を弾き出す。霊幻の身体は光の膜に覆われて、ふわりと宙に浮いた。

「ちっ！」

弾き出され、壁にぶつかりそうになった島崎は、素早く霊幻の側に転移する。

「霊幻先生っ！大丈夫ですかっ!?」

珍しく取り乱した様子の島崎が、ドンドンッと霊幻の周りを覆う光の膜を強く叩いている。

「ふぇっ？何だ、これ？」

光の膜に触ってみると、感触はふかふかのクッションのようだ。気が付けば、霊幻は柔らかいクッションのような物に包まれていた。音からすると、膜の外側は固そうだ。この膜は、内側は柔らかいが、外側は固いらしい。

「霊幻さんの周りに防護壁を展開しました。これで、

霊幻さんはこいつに間違って攻撃を受けても絶対に安全です。あ、俺は間違っても、霊幻さんに攻撃を加えるような事はしないので、安心して下さいね。でも、こいつはきっと頭に血が昇って、霊幻さんでも構わずに攻撃するに決まっています。危険なヤツなんです、こいつは」
芹沢は言って、霊幻を安心させるように笑っているものの、その目は全く笑っていない。霊幻の背筋に、寒気が走る。
「おい、芹沢……っ!」
「今、邪魔者を始末するんで、ちょっと待ってて下さいね」
「違う。そうじゃなくて……」
霊幻が芹沢を止めようと声を上げた瞬間、

ガァンッ!!

芹沢の側に転移した島崎が、躊躇いなく芹沢のこめかみに回し蹴りを放った。人を蹴ったとは思えない重厚な金属音が、事務所に響き渡る。
「始末されるのは、お前の方だろう。この『化け物』が」
島崎は芹沢に向かって、冷たく言い放つ。蹴りの速さと切れは、『爪』幹部として戦った時と比べてものならない程、圧倒的に速い。芹沢は回し蹴りを放った島崎の足を掴もうとするが、島崎はすぐに転移して拘束から逃れる。そのまま高速で転移を繰り返しながら、島崎は芹沢に的確に攻撃を加えていく。
あまりの目にも止まらぬ島崎の素早い連続転移に、霊幻は呆然とする。あまりの速さに、島崎が複数いるように見える程だ。
「島崎、こんなに強いんだ。あんなスピードでヒット&アウェイされたら、相手の攻撃が追いつかないな。でも、芹沢はさっきからきっちり攻撃避けてる」
思わず、霊幻の口から解説めいた言葉を呟く。
見ていると、一方的に攻撃を受けている様子の芹沢だが、表情一つ変えずに、きっちりと攻撃を受け流している。つまり、芹沢は島崎の攻撃を読んでいるという事だ。いや、野生の勘と言った方が正しいかもしれない。攻撃を避けられた島崎は、焦れたように舌打ちすると、そのまま姿を消した。
「……お前って、前から『世界一』なんて偉そうな口を叩いてたから、どんな強さかと思ったけど、実際は大した事ないんだなぁ」
興味なさそうに呟いた芹沢は、何もない空間に手を伸ばして何かを掴んで、引きずり出すように引っ張った。芹沢の手が掴んでいたのは、島崎だった。芹沢は掴んだ島崎をそのまま床に叩き付ける。床にぶつかる寸前、島崎の身体が再び消える。
「これが本気の訳ないだろ。お前と一緒で、私も様子

を見ていただけだ」
島崎の声が先に事務所内に響き、島崎自身が姿を現す。同時に、島崎は何かを投げるアクションをするが、何も起こらない。
（……？…島崎、何をしてるんだ？）
霊幻が不思議そうに首を傾げていると、芹沢がパシッと何かを掴む動作をすると、何かが光った。よく見ると、
「ナイフ？…え、嘘？…もしかして、ナイフ？…」
驚いた事に、島崎はガラス製と思わしき透明なナイフを、芹沢に放ったようだ。パキン、と芹沢の掴んだナイフは呆気なく砕け散った。
島崎が霊幻に視線を向けて、にこやかに笑いかける。
「よく気が付かれましたね、霊幻先生。実はこれ、暗殺用のナイフなのです。耐久性はないに等しいので一回使い捨てになりますが、透明なので投げても気付かれないし、凶器にピッタリでして。しかもこれ、対超能力者戦でも非常に有効なのです。行動が派手な連中ばかりなので、ガラスのナイフに全然気付かない。超能力者なんて、選民思想の強い、バカな人間の集まりですよ」
「……島崎が調味タワーの前で戦っている時に、本気の本気で手を抜いていた事が、よーく分かって、良かったよ」
「あの時、連中を殺さずに戦うのは、非常に苦労がかかりました。私の労をねぎらって下さい、霊幻先生」
「スゴいよ、島崎。ホントに、偉い」
本心からそう伝えれば、島崎は機嫌良く笑って、頭を下げた。
「ありがとうございます。では、抱きしめて、とびきりサービス出来るように、励んでこの化け物退治を遂行致します」
言うが早いか、島崎は更に次々と見えない攻撃を加えている『らしい』。曖昧な表現になってしまうのは、仕方がない。何せ、攻撃が『見えない』のだから。戦闘を見ていると、時々、芹沢が動かない時があり、もしかすると島崎は、フェイントも織り交ぜているのかもしれない。確かにこれは地味に、精神を削られていく、嫌な攻撃だ。その時、攻撃を避けた芹沢の頬にピッと線が入り、血が吹き出した。芹沢は傷付いた自分の頬に触り、血が付いた手を見て、意外そうに目を見開いた。
「しっかり避けた筈なのに……驚いたな」
驚いている様子の芹沢に、島崎は肩を竦めて、嫌味っぽく鼻で笑った。
「引っかかったな、バカめ。人の目は単調な動きが続くと、急な動きの変化に対応出来ないように出来ているんだ。少し力を込めてやれば、ナイフの軌道を変えるのは簡単だからな」
「なるほどな。……所詮は、大道芸の一種という事か。

くだらないな」
「勝手に言っていろ、力押ししか出来ない化け物が」
睨み合う二人の全身から、殺気を吹き出す。互いに一歩踏み出した、瞬間、

ガキィンッ！

島崎は鉈状ナイフを、芹沢が超能力を具現化した手斧の形状をした物体を、二人が同時に放ち、中間でぶつかり合って消えた。その間に、島崎は何もない空間からハンドガンを二丁取り出し、躊躇いなく芹沢に向けて発砲する。芹沢は超能力で具現化した盾状の物体を目の前に展開し、弾丸を弾くと、そのまま島崎に向けて突進する。転移した島崎は、芹沢の真後ろに出現して、別の銃を転移させ、再び発砲するものの、芹沢に着弾する前に、芹沢の念動力でピタリと弾丸が動きを止めた。芹沢が銃弾を確認すると、目を見開いた。
「弾が違う？」
島崎が放った弾丸は、ハンドガンのような小さな銃弾ではなく、大きな銃弾だった。銃弾の向こうで、島崎が親指を下に向けた。咄嗟にその場から離脱しようとした芹沢の頭上から、人が一人入れそうな金属製のコンテナが降ってきて、銃弾と共に、芹沢を閉じ込める。

次の瞬間、

バァァァンッ‼

大きな爆発音と共に、コンテナが爆発する。真っ黒な煙が立ちこめる中、島崎は不敵に笑う。
「ピストルグレネード。グレネードランチャーより威力は落ちるが、中々のものだろう？一発しか装填出来ないので、ここぞという時にしか使えないし、派手なので暗殺向きではないが……。お前のような化け物退治には、最適だ」
言いながら、島崎は余裕の態度でピストルグレネードに弾を再装填し、構える。
黒い煙の中から、ゆらりと人影が揺らめく。人影に向けて、島崎は再び発砲した途端、強い衝撃と共に、島崎の身体が吹き飛んだ。
壁にぶつかりそうになった所で、島崎の身体は消える。元々、島崎の立っていた場所には、芹沢が立っていた。芹沢の服は所々焦げていたが、傷はない。煙が晴れてみれば、人影に見えたものは、芹沢ではなく、爆発でひしゃげたコンテナの一部だった。防御壁を展開し、爆風を防いだ芹沢は、コンテナを囮に煙に紛れて移動し、島崎に攻撃を加えたのだ。
「驚いたな。ただのバカな引きこもりのサルが、頭を

使うようになったのか。霊幻先生のご教育の賜物だな。せいぜい、霊幻先生に感謝を捧げるといい」
転移した島崎はひしゃげたコンテナの上に着地すると、芹沢を見下ろす。芹沢は鋭く島崎を睨み付ける。
「お前なんかに言われなくても、俺は霊幻さんを毎日拝んでいる。盲目で同情を誘って、霊幻さんに近付いたのか？小手先ばかりで、正々堂々勝負出来ない男が、偉そうな口を利くな」
「聞き捨てならんな。霊幻先生が慈悲深い方である事には同意するが、私が盲目を理由に近付いたと思われるのは心外だ。霊幻先生には、私は常に誠心誠意、接している」
堂々と言い切った島崎は転移すると、芹沢の真上に出現し、そのまま蹴りを放つ。芹沢は島崎の足を掴むと、島崎にエネルギー弾を放とうと、手をかざした。瞬間、島崎の姿はかき消え、代わりにピンの抜けた手榴弾が芹沢の手の中に残されていた。

バァンッ!!

手榴弾が爆発し、芹沢は爆風に包まれるが、超能力で起こした風で、すぐに爆風は治まる。
「三つ子の魂百まで。知恵が多少付いた所で、傘を持った力押しのバカに変わりはないようだな」
姿を現した島崎は、煙を上げる芹沢を見て、馬鹿にするように肩を竦める。ギロリ、芹沢の目が動き、島崎を捉える。
「俺はもう、霊幻さんと出会う前の俺とは違う。俺は、変わったんだ」
「変わらんさ。お前は何処まで行っても、所詮はテロリストだ。何も変わっていない」
「黙れっっ!!」
怒りの表情を浮かべた芹沢は声を荒げる。
「どいつもこいつも、俺を怖がっていたのに、俺をバカにしていたっ!!お前もそうだっ!!俺をバカにして、見下していた！どいつもこいつも、大嫌いだ！でも、霊幻さんは違うっ！俺をちゃんと見てくれた！霊幻さん以外、全員いなくなってしまえばいいっ！」
「当然だ！私は心の底から、お前をバカにしていたさ！何故、お前のような力があるだけのただの化け物が、組織のナンバー2なのか、常々疑問だった！『超能力者』も『ノーマル』も、どいつもこいつも、バカばかりだっ!!霊幻先生こそが、至高の存在！それ以外、全員クズだっ！霊幻先生以外、全員必要ないっ!!」
「霊幻さんに近付くヤツは、全部消えろっ!!」
「霊幻先生に近付くモノは、全て排除する!!」

互いに睨み合い、動き出そうとした瞬間、
「芹沢っ！島崎っ！やめろっ!!」
光の球体に守られた霊幻は、大声を上げた。ピタリ、島崎は動きを止めて、霊幻を見た。
「ご安心下さい、霊幻先生。必ずあなたをお救いしますので」
島崎が霊幻に笑顔を見せた所に、芹沢の肘打ちが島崎の側頭部に炸裂して、島崎の身体が壁に叩き付けられる。
「戦闘中に余所見なんて、大した余裕だな」
冷たく言い放った芹沢は、そのまま追い打ちをかけようと、島崎目掛けて拳を振り下ろした所で、島崎の姿がかき消える。
「やはり、化け物は化け物だ。霊幻先生の慈悲深いお言葉が通じないとはな」
芹沢の真後ろに現れた島崎は、芹沢に向かって蹴りを放つ。寸での所で蹴りを避けた芹沢の肩から血が吹き出す。靴の踵に仕込んだナイフが飛び出して、芹沢を切り裂いたのだ。
「お前を消して、俺は霊幻さんを手に入れる。ただ、それだけだ」
「……えっ？芹沢が悪役？」と、霊幻はポツリと呟く。
芹沢は自分の周囲に円盤状のノコギリを具現化する。円盤状のノコギリが高速回転を始め、島崎に向かって、射出される。島崎は素早くノコギリを転移して避けるが、追尾機能が付いているのか、再び現れた島崎の後を追ってくる。島崎は舌打ちすると、手のひらに収まる大きさの鉄球を転移させ、ノコギリの一つに投げつける。キンッと金属音が響き、ノコギリが軌道を変え、別のノコギリにぶつかり、ビリヤードの要領で、連鎖的に別のノコギリへとぶつかって、次々に破壊されていく。
島崎は素早く手榴弾を転移させると、芹沢に向かって放り投げた。飛んで来た手榴弾に、芹沢がエネルギー弾をぶつけた瞬間、事務所内に煙が充満する。手榴弾の中身は火薬ではなく、煙幕だったようだ。
「この隙に、さっさと逃げたらどうだ？」
芹沢の声だけが、周囲に響き渡る。
ヒュン、と空を切る音を立て、芹沢の眉間目掛けて、ナイフが飛んできたのを素早く掴む。先程の奇襲用のガラス製ナイフではなく、投げるのに適したダガーナイフと呼ばれるナイフの一種だ。芹沢はダガーナイフを消し去ると、ナイフの飛んで来た方を睨み付けて、一歩踏み出す。カチッ、とスイッチの入るような音と共に、芹沢は固い何かを踏んだ。
瞬間、

ドォンッ!!

島崎の置いた地雷が起動し、爆発音と共に、爆炎が芹

沢を包み込んだ。芹沢の身体が壁に叩き付けられる。
同時に、霊幻を包んでいた球体の防御壁が砕け散った。そのまま床に落下する霊幻を、島崎が素早く受け止める。
「お待たせしました、霊幻先生。少々遅れましたが、島崎があなたを助けに参りました」
「し、島崎……」
何が起こっているのか、全く状況に付いていけていない霊幻は、呆然と島崎を見上げる。霊幻の視線に気が付いた島崎は目を開けて、霊幻に向かって笑いかける。焦点の合わない目は、確かに霊幻を見つめている。
「安心して下さい。あなたの事は私が必ず守りますから。では、テレポートしますので、しっかり掴まってて下さい」
言うが早いか、島崎は霊幻を抱き上げたまま、テレポートを開始しようとした瞬間、島崎の身体が事務所内に弾き戻された。
「な……っ!?」
転移した筈なのに、事務所内に弾き戻され、島崎は驚きの声を上げる。立ち上がろうとした島崎は、自分の身体が動かない事に気が付いた。自分の身体を見た島崎は、大きく息を飲んだ。まるで蜘蛛の糸のような粘着質な糸が身体にへばり付いて、島崎を床に拘束していた。
「霊幻先生はっ!?霊幻先生っ！」
「お……おい、大丈夫か、島崎っ！」
「霊幻先生、ご無事で良かった」
慌てた様子で、霊幻が島崎に駆け寄る。糸を外そうとするが、糸はビクともしない。
その時、周囲に立ちこめていた煙が急激に引いていく。視界が晴れていく事務所に、芹沢が佇んでいる。その手の中に、煙が集まっていた。
「こんな手に引っかかるなんて、バカなヤツだなぁ」
手の中に集めた煙を握り潰した芹沢は、鼻で笑う。
「お、おい、芹沢。島崎に何したんだ？」
「俺は何もしてませんよ、霊幻さん。ただ、こいつが勝手に蜘蛛の巣に引っかかっただけです」
言っている意味が分からず、首を傾げていると、芹沢は更に続けた。
「俺、防御壁張るだけじゃ弱いと思って、対超能力者用に、事務所の周りに蜘蛛の巣みたいな糸を張っていたんです。ネットで調べたら、蜘蛛の巣がとても強力だって見たんで、参考にしました。ホント、スゴいですね、蜘蛛の巣って」
芹沢は霊幻に笑いかける。目は冷たいままで、霊幻の背筋に寒気が走る。呆然とする霊幻の側に歩み寄った芹沢は、霊幻を見下ろして、口を開いた。
「霊幻さん。アナルってお尻の穴の事なんですよ。知

らなかったでしょ?……あぁ。でも、霊幻さん、島崎にアナルいじられて、喜んでましたもんね。じゃあ、知ってるのか」
「そ、それは……っ!」
「霊幻さんって、可愛いなぁ」
芹沢は笑って、顔を赤らめる霊幻を見つめた後、床に拘束されている島崎の頭を容赦なく足で蹴りつけた。霊幻の顔から血の気が引く。
「芹沢っ!やめろっ!」
「こいつは霊幻さんを連れて行こうとする悪いヤツです。だから、始末します」
「やめてくれ、芹沢っ!頼むから、島崎を助けてやってくれっ!頼む、芹沢っ!」
今にも泣き出しそうに声を上げる霊幻を見て、芹沢は霊幻に向けて手を伸ばした。
「霊幻さん、俺と一緒に行きましょう」
「……一緒に行ったら、島崎は助けてくれるのか?」
「さあ?それは、霊幻さんの態度次第じゃないかなぁ」
芹沢は楽しそうに喉を鳴らして笑う。
「霊幻先生っ!化け物の甘言を聞いてはいけないっ!私の事はいいから、逃げて下さい!」
「どうしますか、霊幻さん?俺は、どっちでもいいですけど」
言いながら、芹沢は更に島崎を踏みつける足に力を込めていく。ミシミシ、と軋む音が無情にも霊幻の耳に響き渡る。
霊幻は震える手で、芹沢の手を取った。
「分かったよ、芹沢。俺は、お前と一緒に行く。だから……」
「ああ、霊幻さん!俺を選んでくれるんですね、嬉しいです!」
霊幻の手をしっかりと握り締めると、芹沢は島崎の頭から足を外して、霊幻の身体を引き寄せ、強く抱き締めた。
「さあ。行きましょう、霊幻さん」
「……ああ」
頷いた霊幻は、芹沢に促されるままに歩き出した。芹沢は既に島崎の事を忘れたように、一瞥もくれないで事務所を後にする。事務所から出る直前、チラリ、島崎を見た霊幻は目を細め、視線を外す。
事務所には、島崎だけが、一人取り残された。

「畜生っ!畜生っ!ふざけんじゃねぇぇぇぇっ!!」

島崎の怒号が、事務所中に響き渡った。

芹沢と霊幻とえろと

『どうしてあの男を選んだんですか……？』
になるのだろう？
霊幻はむしろ、芹沢に尋ねたかった。
「……お前さ、芹沢。島崎のこと、殺そうとしただろ？」
「はい。殺すつもりでした」
「で、俺がお前に付いていったら、島崎を殺さなかっただろ？」
「はい。殺しませんでした」
「……まあ、つまりだ……」
「つまり？」

「うん。雰囲気に飲まれた」

と、霊幻は言った。
自分の行動、心情を分析すると、それしかない。
「あっ……、……そうですか……」
芹沢は何とも言えない顔で、霊幻を見た。
「まあ、島崎が目の前で死ぬのも、お前が島崎を殺すのも、どっちも後味が悪いし……、あれはもう、俺がお前と一緒に出て行くしかなかっただろ？違うか？」
「……ま、まあ、そうだと思います」

「霊幻さん、どうしてあの男を選んだんですか……？」

と、芹沢が言った。
その言葉に、霊幻は、「いや、待てよ」と思った。
周囲が超能力者ばかりとは言え、超能力者同士の本気の殺し合いを目前で見た事は一度だってなかった。『爪』事件の時、殺されそうにはなったが、その時は死を覚悟して、恐怖心も何もなかった。実際、手をかざされただけで、超能力を受ける実感はなかった。その上、芹沢に助けられ、それから、モブが戦ったり、ブロッコリーが生えたり、芹沢が後を付けてきたり、芹沢が入社したり、島崎がやってきたりと霊幻の一生の中でも目まぐるしい日々の連続だったのだ。
そして、芹沢と島崎から重い『執着』も受け、セクハラを受ける。そんな毎日の中で、芹沢の言うような、『どちらかを選ぶ』なんて、出来るだろうか？いや、出来ない。
霊幻は、ただ目の前で起こる『超能力バトル』に見入っていた。大人の超能力者ってえげつない、と本気で思った。
さて、それが、

元々、口下手な芹沢と、口喧嘩で負けたことがない霊幻だ。勝敗は最後まで聞くまでもない。

「……多分、お前が島崎に殺されそうになっても、俺は同じように流されて、島崎と一緒に行く、自信がある」

「嫌な自信ですね」

「ごめんな。シリアスに持っていってやれなくて……」

「いいえ。それは大丈夫です……えっと、霊幻さんは『島崎が好き』だから、俺に付いてきたわけではない、と？」

「俺は……好き嫌いで動く人間じゃない。確かに最近の俺は『快楽』に支配されつつある。けど、お前と島崎で、島崎を選ぶ決定打はまだないなぁ……あ、お前を選ぶ決定打も、もちろん、まだないぞ」

って、ここって何処なの？
と、霊幻は足下を見る。パニックで気付かなかったが、立っていたのは半透明の螺旋階段だった。周囲を見れば、そこは霊幻のアパート向かいにある、芹沢が寝泊まりしている公園だった。公園の大きな木に、超能力を巻き付け、階段状にしてあるようだ。上を見れば、ツリーハウスのように木々に紛れるように、半透明の家がある。何度も公園の前を通っているが、一度だって目にしたことはない。

「ここ、透明だけど……外から見えないのか？」

「超能力で不可視化してるんです」

「お前、そんな能力、元々あったのか？」

「霊幻さんを守らなきゃって思ったのと、霊幻さんを影ながら見守る為に発現した能力だと思います。ボスと戦わなきゃって思った時に、能力を固定化する方法も分かりましたし……」

芹沢も、「どうして自分は霊幻と超能力談義をしているのだろう？」と思った。しかし、仕方がないのだ。自分は霊幻に勝てないし、霊幻は自分に負けるはずがない。

結局、一時的に怒っても、霊幻に怒りをぶつける事なんて出来ないし、してはならない事なのだ。

「どうぞ。足下、気を付けて」

芹沢はツリーハウスのドアを開けた。どうせ雨も風も入ってこないのだから、ドアはいらないのに、何故か、ドアを付けてしまう。そう考えれば、自分は自分の常識で霊幻を図っていたのかもしれない、芹沢は思った。

ここに霊幻を連れてきた時、芹沢は霊幻を無理矢理にでも自分のものにしようと考えていた。十八禁では表現出来ない事だってする覚悟だった。「俺はネットを越えていく」そんな事まで考えた。

それなのに、霊幻は喜々としてツリーハウスに入り、周囲をキョロキョロと見回している。テレビゲームと雑誌とベッドが置かれているくらいの、芹沢が引きこもっていた時と同じような『つまらない』部屋。違うのは、いつか霊幻が座ってくれるかもしれないと作ったベッ

ド。
芹沢はベッドでは眠らず、床で眠っていた。床に横たわると、ちょうど霊幻の住むアパートが目に入った。誰も霊幻の部屋を訪れる人はいない。それはとても嬉しいけれど、時々、こっそりと覗き見ると霊幻はベッドにぼんやりと座っている事が多かった。その姿は、引きこもっていた頃の自分を思い出し、芹沢を落ち着かない気分にさせた。
「芹沢？なあ、芹沢……ベッド、乗ってもいいか？」
霊幻が言った。
芹沢は言葉にならず、コクンと頷いた。
「俺は、雲で寝るのが夢だったんだ……覚えていてくれたのか」
雲に感触はなかったから、結局、再現は出来ず、イメージと形だけだ。それでも霊幻は嬉しそうにポフポフとベッドの上に転がっている。そんな霊幻を見ていると、確かに、『雲』のように見えた。
（もっと、ちゃんとした『雲』を作らなきゃ……）
霊幻が望んでいるのは、『雲』だ。霊幻の望む『雲』だ。現実の『雲』じゃない。
「霊幻さんは……俺と、島崎が殺し合ってるのを見て……傷付きましたか……」
呆然とした様子で、芹沢は言った。
その言葉に、霊幻は身を起こし、
「もちろん。どっちが死んだって嫌だったよ……付き合いは短いけどさ。お前達は、俺の人生に……すっごく食い込んでるんだからさ。」
と言った。
「俺は？俺が死んだら、悲しいですか？」
「当たり前だろ？お前は俺の命の恩人で、大切な事務所の社員で……俺を抱きたいって、いっつも思っている男だろ？」
霊幻は少しだけ恥ずかしそうに、頬を赤らめた。
芹沢は顔を歪めると、ボロボロと涙を流した。「しょうがないな」霊幻は呟き、芹沢の身体を抱き寄せると、背中をポンポンと叩いた。
「俺、霊幻さんの事、無理矢理に、お、犯そうと、ご、ご、ご、強……姦……しよう、と、したんですよ？」
「『犯そう』とか『強姦』って単語で躊躇う奴が、そんなこと、出来るはずがないだろ？」
霊幻は言うと、自分の隣りに芹沢を座らせる。背中を丸め、ボロボロと泣き続ける芹沢に、置いてあったティッシュの箱を渡す。ティッシュの箱は半透明ではなくて、市販のものだった。部屋を見渡すと、半透明の転がったひしゃげたペットボトル、無造作に置かれた半透明のカップラーメンの容器、壁に刺さる文房具。

テレビと古いテレビゲーム機は本物で色彩がある。部屋の隅にも色があって、ゴミ袋の中に空になったコンビニの容器が入っていた。芹沢はそれに手をかざすと、力でゴミを光の粒子に変える。強力な超能力を使えば、ゴミだって消える。なら、散乱している半透明のゴミはいったい何だろう。

霊幻は思いながら、不意に気付くいた。

（ここは、芹沢が引きこもっていた部屋だ……）

積み上がったゴミと、散乱する破壊の家具。壁に浮かぶ不自然な襖。霊幻はふわふわのベッドから立ち上がると、半透明のペットボトルを拾い上げた。

「……触れられる」

なら、なんでわざわざこんなものを作るのだ、と霊幻は思って、そんな芹沢が切なく思えた。家族から疎まれていたかもしれない。組織からも疎まれていたかもしれない。そんな芹沢には、自分しかいないのだ、と霊幻は今更に思う。

「……霊幻さん？それ、ゴミです。俺、片付け苦手だから……」

「ゴミじゃなくて、お前が作ったものだろ？」

飲みかけの液体が入ったペットボトルを具現化しているものは、液体もそのまま再現されている。傾けると揺れるペットボトルに、霊幻は大きく溜息を吐く。

「おい、芹沢。部屋片付けるから手伝え」

「えっ？」

「俺は、セ、セックス……初めてなんだよ……。初めての場所が汚れてるなんて……、駄目だろ……」

「れ、れれ、霊幻さんっっ!?」

「俺を連れ去ってまで家に連れ込むんだから、準備くらいしっかりしておけよ。部屋も片付けておくとか、おい、コンドームは準備してあるのか？」

「えっと……あ、あります……ネットで、コンドームもっ、ローションもっ、ローションはアナル用のものを探しましたっ!!」

直立不動になって、芹沢は言った。

「なら、部屋の片付けもしておけ、バカ」

霊幻は言うと、半透明のゴミが詰まっているゴミ袋の山を見つめて溜息を吐く。まだ半透明のゴミが半分しか入っていない半透明のゴミ袋を拾い、その中に半透明のゴミを詰めていく。

「れ、霊幻さん……能力を具現化しているだけなんで……消せます」

「俺を連れ込むなら、ゴミくらい片付けておけ……だけど、誰かの手を掴む時は、もう少し優しくしな……」

言って、霊幻は自分の手首を芹沢に見せる。そこにはくっきりと芹沢が霊幻の手首を掴んで出来た痣が残っている。どうせ隠していても、いずれ気付かれるに違いない。なら、先に伝えておくしかない。

「……それ……っ！」
「大丈夫。骨は折れてないし、痛みもそんなにないんだ……」
「良かった…、でも……何でっ、そんな事っ、言うんですかっ⁉霊幻さん以外の誰かの手首を握る時は、握りつぶすかっ、捻って切る時ですっっ‼」
「……いや、それは……そういう意味じゃなくて、な」
「俺の事、どうでもよくなったんですか……？部屋が汚いから、『芹沢なんて死んでもいいや』って思ったんですか？」
「……どういう思考だ、お前は」
「だって……霊幻さん……『誰か』って……『誰か』に腕を掴まれるんですか？」
「違うって。人の話をちゃんと聞けよ。お前が、俺以外の誰かの手を握る機会があったら……って言ったんだ」
今の芹沢には霊幻しかいない。
けれど、身なりも整え、自分に自信を持った芹沢は、優しい性格で感受性も豊かだ。体格も良いし、身長だって高い。あと少し一般常識を覚えれば、どこに出しても恥ずかしくない男になる。
「……霊幻さんって相変わらず、すぐに俺の人生に口出ししますよね？俺、霊幻さんの腕以外、握りたいなんて思いませんっ！そんなの考えもつきません。それなのに、どうして『もしも』の話ばっかりするんですかっ⁉」
言うと、芹沢は霊幻の腕を引いた。
「痛っ！」
掴んだ箇所がちょうど霊幻の手首で痣になっていた。
芹沢は驚いて、霊幻から手を離す。
「あっ……霊幻さんの手首が……っ」
自分の手は、また誰かを傷付けるのか……と芹沢は思って、思わず自分の手を見つめた。
「超能力を使ってないのに……っ！それなのに、霊幻さんを傷付けるなんて……っっ‼」
ガタガタと半透明のゴミ袋や落ちている半透明のペットボトルが震え始める。半透明の文房具は天井や壁に刺さり、ペットボトルの中の液体はブクブクと沸騰している。
「ああっ……怖がらないで……霊幻さんっ……霊幻さんに嫌われたら……っっっ‼」
自分はどうなってしまうんだろう。
芹沢は自分の頭を抱えた。
誰も自分を必要になんてしてくれない。
霊幻を見守れれば『幸せ』だったはずなのに、近付きすぎた。

多くを求めすぎた。
全部を欲しがってしまった。
もう、終わりだ……霊幻さんに嫌われてしまう……。
芹沢は思って、自分の力で半透明のツリーハウスが地震のように震え出す。結局、心の具現化。心が震えると全ての超能力が暴走を始める。

バチンッッ

不意に、思いっきり両頬を叩かれた。ハッとして顔を上げると、霊幻の顔が触れるほど側にあって、霊幻の両手に挟まれている。一瞬、芹沢は何が起こったか分からず、目を瞬かせた。
「芹沢、落ち着け」
霊幻は芹沢の両頬を挟むように叩かれた。芹沢は驚いたように霊幻を見つめる。
「……俺と誰かを比べるな」
言うと、霊幻は芹沢の首にしがみつくように抱きついた。勢いよく抱きつかれて、芹沢はベッドに倒れ込む。
「れ、霊幻さん……っ⁉」
「いいか、芹沢っ‼この『霊幻新隆』と、他の人間を比べるなっ‼」

霊幻は言うと、芹沢の両頬を押さえたまま、思い切り口付ける。覚えたての口付け、自分から口付けるなんて初めてだ。それでも、後には引けない。思いっきりしゃぶりつくように口付け、驚きに半開きの芹沢の口に舌先を突っ込む。芹沢は不安定な姿勢のまま、霊幻の頭に腕を回すと、そのまま、霊幻の顔をもっと自分の方に抱き寄せる。
「んっぐ……」
芹沢に本気を出されると、霊幻は太刀打ち出来ない。
「霊幻さんから……キスされるなんて……っ！」
嬉しくて、信じられなくて、でも、やっぱり嬉しくて。芹沢は霊幻の身体を抱き上げ転がすと、霊幻をベッドに押し倒した。ふわりとしたベッドに二人の身体が沈んだ。
「ああ、霊幻さんっ……」
芹沢は霊幻を見下ろし、その首筋に顔を埋めた。
「霊幻さんの側にずっといたいです……霊幻さんをずっと見守っていれば、それで良かったはずなのに……俺は、俺は、どうしてこんなに欲深くなっちゃったんでしょうか……？俺には、また『罪』が増えるんですか？」
芹沢は震えながら、霊幻の身体を抱き締める。霊幻も必死に手を伸ばし、芹沢の身体を抱き締める。
「俺の側にいたいくらいで『罪』になるかっ、バカっ‼」

「でも……俺は……」
家族にも、組織でも疎まれて……。
霊幻はその言葉を遮り、
「だーかーらー、この俺っ！『希代の霊能力者・霊幻新隆』と、他の人間を比べるなって言ってるだろっ!!」
「……俺……、霊幻さんと誰かを比べてましたか？」
「比べてたっ！自覚しろっ！俺はここから落ちたって大丈夫だっ！」
「そんな……俺と一緒にいたら、霊幻さんっ、怪我しちゃいますっ!!」
このくらいの木の上から落ちても怪我をしてしまう。
芹沢が言おうとして顔を上げると、パチンッ、もう一度、霊幻は芹沢の頬を叩く。
「れ、霊幻さん……」

「俺にはお前がいるんだ。お前が俺を守ってくれるんだろ？ここから落ちたって大丈夫だ。俺には芹沢、お前がいる……チンピラの時だって、除霊の時だって、俺に危険は及ばなかった……お前が島崎と戦った時だってそうだ。それなのに、何を心配する事がある？」
霊幻は言って、芹沢に口付けるが、
「そこ、鼻です」
と、芹沢が言う。
目を開けて芹沢を見ると、「あれ？」霊幻の唇は芹沢の鼻にくっついていた。
「あれれれれ？」
「霊幻さん、ありがとうございます……」
芹沢は言うと、霊幻の唇を塞ぐ。開いた霊幻の唇の隙間から、芹沢が舌を差し入れると霊幻からも舌を絡めた。
今日の芹沢を拒む事なんて、霊幻には出来そうになかった。
チラリ、部屋を横目に見れば、いつの間にか半透明のゴミが減っている。
芹沢はそれに気付く事なく、霊幻の服を脱がす。性急な芹沢の手に、霊幻は自分の手を添える。
「落ち着けって……俺だって、緊張してるんだぞ。もう少し、ゆっくりしよう……」
「……霊幻さん……」
芹沢は霊幻の目元に口付ける。
「尻は……まあ……お前は嫌だろうけど……島崎が解してくれてるし……」
霊幻は言いづらそうに言うと、その言葉に怒ると思っていた芹沢だったが、特に怒る事はなく、「そうでしたね」と答えた。
「怒らないのか？」
「……俺、霊幻さんのする事にいちいち怒ったりするの止めようと思ったんです。霊幻さんのアナルさんは浮

気性で優柔不断なんですよ、きっと。雰囲気に流されて島崎に絆されたり、俺に絆されたり。関わっちゃいけない人間じゃないですか、俺も島崎も……それなのに、逃げずに近付いちゃうし」
芹沢は真剣な目で霊幻を見た。真っ直ぐで迷いのない、自分自身で言った言葉を信じ切っている顔だ。本当に、部屋の中にあった半透明のゴミは大半消えている。本当に、超能力は心の有り様に左右される、霊幻は改めて実感した。
(怒りたい、怒りたいけど……)
霊幻は思いながら、「今日は仕方ない」と思い留まり、そんな事を考えている間に、霊幻の服は芹沢の霊能力ですっかり脱がされ、服はベッドの端に丁寧に畳まれて置かれている。いつの間にか、芹沢も裸になっていて、服はきちんと畳まれて、霊幻の服の隣りに置かれている。
(相変わらず几帳面だ……)
と、霊幻は思って、芹沢を見上げた。自分を見下ろす芹沢は、幸せそうに、けれど、切羽詰まったような顔をしていて、
「芹沢は俺の事、そんなに欲しいのか?」
と、霊幻は尋ねた。答えは聞かなくても分かっているのに、「卑怯者だな」と思った。
「……もちろん。欲しくて仕方ないです……」
「本当に?」
「本当です」
「本当の本当に?」
「本当の本当の本当です。芹沢克也は霊幻新隆さんが欲しくて仕方ないんです」
その言葉に、霊幻の胸の奥が熱くなる。
「あっ、乳首もピンッて立ってますよ、霊幻さん?」
芹沢は言うと、霊幻の乳首を指でピンッと弾いた。
「バカッ!今、芹沢の事、格好いいと思っていたのにっ!」
「ああ、それは幻想ですから気にしないで下さい……それより、霊幻さんの乳首が問題なんですっ!可愛いんですっ!!」
「うるさい、うるさいっ!!」
霊幻は芹沢の腕の中でジタバタと暴れるが、芹沢は気にした様子もなく、片手を霊幻の背中に回し、なだめるように撫でた。もう一方の手で、霊幻の乳首に触れる。
「熱いですね。熱、持ってます……」
芹沢は霊幻の乳首をクニクニと押し潰しながら、霊幻の唇を喰らうように口付ける。
「うっ、ふぅ……っ」
舌で口内を掻き混ぜられ、霊幻は大きく吐息を漏らす。霊幻の舌よりも大きくて厚い芹沢の舌を絡められると、それだけで息苦しくて、けれど、苦しいだけではない何かを感じる。芹沢は霊幻に口付けたまま霊幻の身体を弄る。無骨な動きだったが、大きな手で触れられる感覚に

慣れた身体は、芹沢の手に反応してピクピクと震える。
「可愛いです」
芹沢は言って、霊幻の胸元に顔を埋める。首筋から胸の溝に伝う汗を舐めると、霊幻の口から「ふぅ……んっ」と、喘ぎ混じりの吐息が漏れる。
「……んっ、芹沢……」
霊幻は芹沢の腕に縋るように手を添える。無意識に触れた瞬間、手首が痛んだ。芹沢は霊幻の手首に触れ、力を込める。直す事は出来なくても、少しでも早く直りますように、と願いを込めて。
（怪我をさせたのは俺なのに……危険物なのに……どうして、俺は……霊幻さんから離れないんだろう……どうして、霊幻さんは俺から離れないんだろう……）
芹沢は思って、霊幻の手をベッドの上に置いた。
「冷やした方がいいかな？」
言う芹沢に、霊幻は首を振る。
「さっきから……お前の、が当たって……俺のも……、だから……手首は……後でいいよ」
モジモジと内股を擦るように動く霊幻に、芹沢は息を飲む。そうだ、自分のペニスは霊幻と口付けただけで勃起している。霊幻のペニスは芹沢のものに比べて小さいけれど、勃ちあがって震えている。
「……キス、気持ち良かったですか？」
「お前は違うのか？」
「霊幻さんらしい言い方だ」と芹沢は思って、でも、そんな霊幻の意地っ張りで照れ屋な性格が大好きだった。毎日、毎日好きになっていく。だから、本当の自分を、超能力に飲み込まれ暴走していく自分を、知られたくなかった。
それなのに、そんな自分を受け止めて、受け入れてくれようとしてくれている霊幻が、芹沢は愛しくて堪らないのに……身体はそれだけでは足らずに、霊幻を抱いて自分のものだと確認したいと思ってしまう。芹沢は霊幻の足を無理のないように、ゆっくりと持ち上げる。尻穴まで芹沢の視線に晒されるような格好になり、霊幻は慌てて、尻穴を手で隠すが、チラチラと見える様は、一層に芹沢の気持ちを煽った。
「み、見るなぁ……っ！」
霊幻は羞恥の涙を浮かべながら芹沢に訴えるが、手の隙間から見える霊幻の尻穴はヒクついていて、芹沢はゴクッと喉を鳴らした。ネットで情報を手に入れても、霊幻を想像してイメージトレーニングしても、結局、想像は想像でしかなくて、現実の霊幻を目の前にすると、そんな想像は吹き飛んでしまう。
「でも……霊幻さんは、流されちゃうんですよね？俺に……抱かれてくれるんですよね？」
言うと、霊幻は「嫌だ」とは言わず、グッと言葉に詰まる。それが嬉しくて、芹沢は自分と霊幻のペニスを両

方握り込む。芹沢のペニスからは先走りの汁が出ていて、滑りがいい。そこに冷たいローションを垂らすと、霊幻の身体はビクビクと震えた。
「あっ……芹沢の、熱い……っ大きいし、熱い……っ！これが、俺の中、入るのかっ？」
入らない、壊れちゃう。
と、霊幻は繰り返し言う。でも、芹沢の腕の中から逃げようとはしない。
（こういう時、どうするんだっけ……）
芹沢は頭の中で段取りを思い出そうとするが、目の前の霊幻の姿に頭の中がポワポワとなって、何も考えられない。ただ、霊幻の呼吸に合わせて上下する胸や、真っ赤に色付き、ピンッと立った乳首や、一緒に握り込んでいるのに、硬度が足りずにどこか柔らかく感じる霊幻のペニス、その隙間から見える尻穴のいやらしさ。霊幻は羞恥に、必死に腕で自分の顔を隠そうとするけれど、刺激される度、動いてしまうから上手に顔を隠す事は出来ていない。
ほんのりと赤く染まった霊幻の目元に、芹沢は口付けし、
「キス。ねだって下さい」
と言った。
霊幻は顔を真っ赤にしながら、それでも、芹沢の唇に指で触れる。
「俺の唇と感触が違う……」
言って、霊幻は芹沢の首に腕を回し、触れるだけの口付けをすると、芹沢の口がお返しとばかり霊幻の唇を吸い、舌を絡め、吸う。
「んっ……俺がっ……んあっ、キスするんじゃ……あっ、乳首、ひっぱるの……卑怯だ……ぞっ……っ！」
「でも、霊幻さんの乳首が俺の身体に当たって……、擦りつけてきてますよね？」
芹沢が口付けの合間に囁く。
図星。
霊幻の顔が真っ赤に染まる。
「お、お前だって……チンポ、すごく堅くなって……」
「それはお互い様……ってわけではないですね……霊幻さんは乳首とアナルを弄られないと、チンポは堅くならない、やらしい身体なんですか？」
芹沢は言うと、霊幻のペニスから手を離し、指で霊幻の乳首を弄りながら、もう一方の乳首を唇で吸う。チュウチュゥとわざと音を立てて吸い上げると、
「違うっ……っっ！あっん、んぁ……ああぁ、んっんっ！やぁっ…んっ……あ、歯は、立てちゃだめぇ……っ！」
その刺激に合わせて、霊幻はあられもなく声を上げた。
「本当に？」
霊幻の乳首を口に含んだまま、芹沢は尋ねる。前歯で

乳首を引っ張ると、霊幻の身体がブルッと震えた。
「乳輪からぷくっとして、乳首もピンッってしてます。痛くないんですか？」
言いながら、芹沢は強く乳首を抓った。
「ああっんっ！やっ、やぁっ！痛いっ、痛い！」
「本当に……？なら、止めますか？抓ってもあげませんよ？」
「あっ……だめぇっ！気持ちいいっ……芹沢ぁ、気持ちいいからぁ、止めない……でっ」
「こうですか？」
触れるか触れないかの刺激に、霊幻は身体をくねらせた。
「……んっ、えっと……もっと。……強いのが……」
「でも、痛くなっちゃいますよ？」
「うん……えっと……あの……、その……」
「痛いのが好きなんですか、霊幻さん？」
耳元で囁かれる声に、霊幻は思わず、「うん」と頷いてしまう。
「あ、えっと……芹沢は……痛くても……痛くしないから……その……」
恥ずかしそうに頬を赤らめる霊幻に、芹沢は思わず鼻の上を押さえる。
（ヤバい……今、鼻の奥がツーンッとした……鼻血出たら台無しだ）
芹沢は能力で鼻の上をかるく押さえる。そんな事を考えているのを必死に隠し、動揺を出さないようにして、芹沢は誤魔化すように霊幻の臀部を揉みしだく。
（やべぇ……霊幻さんの尻、弾力があって……それでいて、堅いだけじゃない。揉んだら押し返して、でも、手が食い込む柔らかさが……。これか、これに島崎は執着していたのか……っ!?）
霊幻の尻に触れていても、どちらかというと、撫でている方が多かった芹沢は自分が一層追い込まれていくような気持ちになり、額の汗を拭った。室内はすっかりゴミもなくなり、すっきりとした空間になっている。
「……芹沢。雲、浮いてる……」
言われて、芹沢が天井を見れば、半透明の雲の形をした能力の具現化したものが浮いている。
「霊幻さん、雲、抱っこしますか？」
恋愛偏差値も、セックス偏差値もマイナスな芹沢では、霊幻を満足させる事なんて出来るはずがないと思っていた。だから、無理矢理に抱こうとした気持ちがなかったかと言われれば、嘘になる。島崎と霊幻の関係には、もちろん気付いていた。それを見て見ぬふりをしていたのは、他の誰でもなく芹沢はだった。
（……俺はいつもそうだ。馬鹿にされていても、欲しいものが手に入らなくても、無気力装って……っ！でも、霊幻さんだけは誰にも渡せないっ!!）

今、腕にの中にいる人だけは、誰にも渡せない。
芹沢は雲の一つを手に取ると霊幻に渡した。
「少しふわふわ感が足りないけど、うん、雲のぬいぐるみだな」
と言って、言葉の割には満足そうに笑う。
「れ、れれ、霊幻さん、あのっ!!」
芹沢は霊幻から離れると、床に正座をして頭を下げた。
「せ、芹沢っ!なんで、土下座なんてしてるんだ!?」
「霊幻さんっ!俺に抱かれて下さいっ!俺のものにならなくていいですから、俺に霊幻さんを抱かせて下さいっ!!」
お願いします。
と、芹沢は何度も頭を下げた。
霊幻は、芹沢に連れ去られ、口付けされ、裸にされ、ペニスも扱かれ、乳首も執拗に弄られ、尻穴も見られた。それなのに、何故今更に『抱かせてくれ』と土下座されなきゃいけないのか、と霊幻は思った。
(……まずは、連れ去った事を謝れ、馬鹿者)
と思ったけれど、芹沢があまりにも真剣で、茶化す気にもなれなかった。
芹沢は『恋』だって初めてで、まして『セックス』なんて考えた事もなく今までの人生を過ごしてきたのだ。誘い方も、セックスの流れもネットでは見たとは言え、想像出来ないに決まっている。

「俺だって詳しくないけど……まあ、お前よりは知識がある。除霊と一緒だな、俺の方が先輩だ」
「……除霊って言っても、霊幻さん……霊能力なんてないじゃないですか……」
「たわけっ!お前は一言多いっ!!抱かれてやらないぞっ!!」
霊幻が言うと、芹沢は「ごめんなさいっ!」と頭を下げた。
「ほら、側に来い。俺だって、半透明のベッドで落ち着かない……ちゃんとクッションじゃなくて、芹沢。お前が抱き締めてくれ……」
恥ずかしさはあったが、拾ったのは自分だ、という自覚が霊幻にもあった。恥ずかしかったけれど、霊幻は自分の太ももを持ち、足を広げた。
「俺の足の間に、身体を……俺の足がお前を抱き締められるように……」
言えば、芹沢はコクコクと頷いて、霊幻の足の間に身体を滑り込ませた。ずっと足を抱えている格好は恥ずかしかったから、霊幻は芹沢の足に、自分の足を掛けた。きっと芹沢の目にはペニスも尻穴も晒されているはずだ。無理に開かれたのと、自分で開いたのではわけが違う。
「俺……お前達のせいで……最近、ペニスより……その……アナルとか、乳首の方が感じるんだ……オナニー

も……あ、一人エッチな。それも……乳首でしちゃって
……」
「もしかして『チクニー』というヤツですか？」
「……お前と俺の二人なんだから……ネット情報は忘れろ、バカ」
「はいっ、了解ですっ！」
「声、大きいっ……何か言いたい事があるなら、俺に覆い被さって、耳元で囁いてくれた方が、嬉しい……」
霊幻が言うと、芹沢は鼻息も荒く霊幻に覆い被さった。
「……霊幻さん。俺に乳首触られるの、嫌いじゃなかったんですね？」
「うん。なあ、耳朶噛んで……乳首も、クリクリして欲しい……」
「もちろん」
芹沢は言うと、霊幻の耳朶を甘噛みし、耳に息を吹きかけた。そうしながら、霊幻の乳首を指で押し潰すように触れると、霊幻の息が荒くなる。
「キスもして欲しい……」
チロリ、唇から覗く舌に芹沢はしゃぶりつきたくなる衝動を抑え、舌先で舌先を突いた。舌先で舌先を舐めていると、焦れたのか、霊幻の舌が芹沢の舌に絡んだ。
「んっ……ふぅっ……なぁ、乳首……反対側も……」
霊幻のおねだりが嬉しくて、芹沢は霊幻に言われた通り、反対側の乳首に触れた。ピンッと指で弾くと、霊幻は「あんっ」と声を上げた。
「弾かれるの、嫌いですか？」
芹沢が耳元で尋ねると、霊幻は「好き」と答えた。「それなら良かった」と芹沢は思って、霊幻の乳首を引っ張ってみる。霊幻は芹沢の頭を抱き寄せ「あぁんっ！」と喘ぐ。
「可愛い声です。もっと聞かせてください」
芹沢は霊幻の耳元で囁き、自分を落ち着かせるように大きく深呼吸する。霊幻をいじめたいわけではない、もっと優しくしたいのだ。
「霊幻さんは、チンポくんよりアナルさんの方が好きなんですよね？」
確かめるように尋ねると、霊幻は恥ずかしそうに頷く。けれど、芹沢に尻穴を見られたくないのか、霊幻は芹沢の腰に足を絡めた。こうすれば、臀部の奥にある尻穴を見られる事はない。ただ、勃起というより怒張した芹沢のペニスが尻の割れ目に挟まれ、ペニスの筋が時々、霊幻の尻穴を掠める。
「あっ……んっ……んんっ……あ、当たる……」
「れ、霊幻さんが押しつけてきてるんじゃないですかっ……俺だって大変ですよー」
言いながら、芹沢はグリグリと霊幻の尻穴にペニスの先っぽを押し当てる。
「霊幻さーん。アナルさんが魚の口みたいにパクパク

と吸い付いてきますよ。すごくチンポを欲しがってます
っ！」
「うぅ……そんな事ない……っ！俺のアナルは島崎の
指しか入った事ないんだ……チンポなんて欲しがるなん
て、はしたない事はしないっ！」
霊幻は今にも泣き出しそうな声で言った。
『島崎』という単語が出てきたら、霊幻を責めてしま
うかもしれない、と芹沢は思っていたが、特に何も思わ
ず、むしろ、
（やっぱり霊幻さんは優しくて優柔不断で、そんな霊
幻さんのアナルさんも霊幻さんと一緒で、優しくて優柔
不断で、困ってる『超能力者』を放っておけないんだ）
と思った。
「あ、ごめん……」
霊幻は咄嗟に謝った。
「？何で謝ったんですか？あっ、本当は俺のチンポが
欲しいのに嘘ついたからですね」と言った。
「……俺、『島崎』の名前、出した……」
「ああ、いいですよ。霊幻さんって空気読まないし、
デリカシーないの知ってますから」
芹沢はあっけらかんと言って、笑った。
「バカ。でも……マナー違反だから」
「いいですよ……霊幻さんのアナルさんの初めてをも
らうんですから、俺。あんなに霊幻さんのアナルさんを
育ててたのに、島崎のヤツざまぁありません。『鳶に油
揚げ』ですね。だから、名前くらいいいですよ。」
「そっか……ありがとう、芹沢。格好いいよ、お前」
と、霊幻は言った。
「可愛いな、霊幻さん。今からアナルさん苛められち
ゃうのに、お礼を言うなんて」
「いいんだよ……でも、先に指でいじってくれるか？」
尋ねる霊幻の目元が真っ赤に染まっていて、目はほわ
ほわと、焦点が艶やかに揺れている。
「指、一本入れればいいんですか？」
「汚いからヤダ？」
「そんな事あるはずないじゃないですか？舐めていい
なら、舐めたいですよ」
「えっ!?」
芹沢の言葉に霊幻の尻穴は怯えるように、キュッと締
まった。
「ほら、怖がった……だから、我慢しますね？指で頑
張ります」
「あっ、ローション使ってくれるか？」
霊幻は自分の尻に押しつけられている芹沢のペニスを
見た。明らかに大きい。自分のペニスを標準と考えれば、
『巨根』と呼んでもいいかもしれない。
「はい。垂らせばいいんでしたっけ？」
と、尋ねる芹沢に、霊幻はローションをそのまま垂ら

すと冷たい事を思い出す。
「あ、でも霊幻さん。オナニーしてる時、ローション
そのまま垂らして「冷たい」って言ってましたよね」
芹沢は言って、ローションを自分の手に取り温める。
「……何故、俺のオナニーを知っているんだ？」
「そこの座布団に座ると、霊幻さんの部屋が見えるん
です」
「カーテン閉まってるよな？」
「でも、見たいんで、見てるんです」
「答えになってないっ！」
「……霊幻さん。島崎には盗聴を許してて、俺がちょ
っと覗くぐらいいいじゃないですか」
それを言われると、霊幻は何も言えない。部屋の中ま
で盗聴されているとは思えないが、事務所は完全に盗聴
されている。最初こそ盗聴器を探したが、テレポートと
アポートが使える相手に、盗聴器を必死で探したところ
で探し当てるはずがない、と霊幻は早々に諦めてしまっ
たのだ。
（トイレは盗聴されてなければいいけど……）
と、霊幻は思った。
「これ以上は、待てません……この先を教えて下さい。
霊幻さん？」
尻穴に押しつけられた指は入り口をグリグリと押す。
放っておけば、指はするりと霊幻の中に入ってしまうだ
ろう。
「指、奥まで入れて……ゆっくり掻き混ぜて？」
「はい……霊幻さんの入り口もこんなに温かいんです
から、中は、きっともっと温かいですね？」
言うと、芹沢の指がゆっくりと霊幻の中に入ってくる。
太い指が霊幻の尻穴の入り口を押し広げると、それだ
けで圧迫感があった。
（……これで、芹沢のチンポが入ったら……どうなる
んだろう……）
霊幻は思って、無意識に芹沢のペニスに手を伸ばした。
手で握ると、ドクドクと脈打つそれが一層に堅くなった。
「れ、霊幻さん……」
芹沢の声が掠れている。
（……芹沢……『俺が欲しくて仕方ない』って声して
る……どうしよう……ここに来るまで、島崎に指で解さ
れてたし……芹沢の指もスルッと入ったし……。入るか
な、芹沢のチンポ……）
霊幻の手に触れた芹沢のペニスは先走りの汁に濡れて
いて、今にも爆発しそうだった。
「……芹沢。チンポにローション付けたら……俺の中、
入ってきてもいいぞ」
初めてのセックスをそんな風に簡単に言っていいの
か、霊幻にも分からなかった。指とペニスでは質量も違
うし、形だって違う。だけど、切羽詰まった顔で必死に

我慢する芹沢の顔を見ていたら、絆されてしまっていた。
「……コンドーム、付けますんで……」
芹沢はワタワタとコンドームを付け始める。何度か失敗したようで、破けた袋がベッドの上に落ちていた。
「……落ち着け。ちゃんと待っているから……」
と、霊幻は言って、芹沢の手に自分の手を重ねた。
（……結局、俺って流されやすいのかも……）
抱き締められる体温の熱さ、腕の力強さ。『超能力』は個性と言っても、自分が持っていない能力。その全てを、今、自分は独り占めにしている。霊幻は芹沢の身体に頬をすり寄せる。
「で、でも……霊幻さん……」
「いいから。ほら、頑張れ。……今はお前に抱かれてもいいって気分なの、俺」
言って、霊幻は芹沢の唇に自分の唇を重ねる。芹沢は目を瞬かせ、けれど、すぐに霊幻の舌に自分の舌を絡めた。
「……外が半分見えるところで、初セックスとは……俺も驚く」
と、霊幻は言った。
「？周りからは見えませんよ？」
「でも、俺からは見えるから落ち着かないの」
「へぇ……そんなものですかねぇ……」
芹沢がのほほんと言った瞬間。

「ふにゃぁぁぁっっっ!!」
霊幻の悲鳴が響いた。
「くうっ！あんっ……ふ、不意打ち……ひゃっ……ひ、卑怯……」
「カウントダウンしたら、身体が強ばっちゃうでしょ？……って、無茶苦茶、温かいです、霊幻さんっ！」
「俺は……あんっ、ひゃん……熱い熱いっ！」
温かいどころか熱いくらいの芹沢のペニスに、霊幻は芹沢にギュッとしがみつく。思わずきつく爪を立てた。内臓が押し上げられる。他には表現出来ない感覚に、身体を掻きむしりたくなるような衝動にかられ、霊幻は身をくねらせる。
「ああ、霊幻さんっ！気持ちいいですっ！俺、俺っ……」
「はぁはぁ……んんっ、あんっ、ああっ熱い、っうぁっ……熱い、熱いっ……！」
霊幻はそれしか言葉を知らないように、うわごとのように「熱い」と繰り返す。
「霊幻さん。まだ動いてないですよ、俺」
と、芹沢は霊幻の耳元で囁き、その耳朵をチュウチュウと吸う。
「……え、動いてない？でも、うねってる……っ、ん

んっ、あん、動いて……るんだろ？ふぁあんっっ！」
「霊幻さんの中が唸ってるんですよ。俺は、どのくらいで動けばいいか分からないから動いてないですよ」
やっぱり痛いんだろうな、と芹沢は思って、霊幻のペニスを見た。すっかり硬度を失い、くったりしている。せめて少しでも楽になるように、と芹沢は霊幻のペニスに触れる。やわやわと触れていると、少しだけ硬度が戻る。
（……チンポの大きさ、俺と霊幻さんの全然違う。霊幻さんはどこもかしこも可愛い。可愛いって言ったら怒られるだろうけど、可愛いっ！でも、俺の腕の中にいる霊幻さんが、一番、可愛いっっ‼）
芹沢はいやらしくうねる霊幻を見下ろしながら、思い切り霊幻を突き上げたいと思った。けれど、霊幻の腰はとても華奢で、自分が突き上げたら、壊れてしまうかも、と思い我慢する。霊幻の額に脂汗が浮かんでいる。それをタオルで拭いながら、霊幻が少しでも楽なように、と芹沢は自分の位置を変える。
「ひゃんっ！あっ、深いっ！あっ、気持ちいいとこにっ！んっ、気持ちいいところに……っ‼」
喘いで、霊幻は芹沢の首にしがみつく。
「そこっ！芹沢ぁっ、そこ、気持ちいいよぉっ！」
「少しだけなら、動いても、大丈夫ですか？」
「……奥の……奥の壁、んんんっ、あんっ、グリグリってっ……あぁっ、なぁ……乳首っ、乳首もピンとして……痛いよぉっ！」
「乳首はそっと舐めてあげますね？動く時もゆっくり動きますから……動いていいですか？まだ『待て』ですか？俺、霊幻さんの命令がないと……本当は動いちゃいけないんですよ？」
芹沢は言って、霊幻の乳首をペロペロと舐めた。乳輪からぷっくりと膨れた乳首は充血したように真っ赤で、とてもやらしく、でも、指で押したら痛そうに見えた。
「あっあぁあっ、だめぇっ！乳首だけで、イっちゃうからぁっ！」
「大丈夫ですよ、霊幻さん落ち着いて下さいっ！俺のチンポ、ギュウギュウ締め付けないでくださいよぉ～。動きたいです、もうそろそろ、お願いしますっ！」
「うん、うん……いいからぁ……もっと気持ち、あんっ、良く、んんんっ……なりたぁ、いっ……っ！」
「許可ですか？動いていい、許可ですか？」
芹沢は、快楽に目をとろんとさせる霊幻の頬をペチペチと叩く。これで動いて「芹沢は、俺の言う事も聞けないのか……デリカシーのないヤツって嫌いだ」なんて言われでもしたら、芹沢は必死で霊幻に尋ねる。自分だって限界なのだ。自分の腕の中で身悶える霊幻の姿に、暴走寸前の自分のペニス。
（……よく我慢したよ、俺。もうこっそり動いちゃお

うかな……）

芹沢はそんな事を思って、霊幻の内壁にグリグリとペニスを押しつけた。ゆっくりと律動を繰り返すと、それに合わせて、霊幻は声を上げる。芹沢はすっかり気分を良くして、「もう少し、もう少しだけ」と律動に勢いを付ける。

「あっあっあっ、芹沢ぁ……んんっ、あんっあんっ……動いてるだろぉ……っ！」

「……だって、霊幻さんだって気持ちよさそうですよ？俺だって、初めてだし……ゆっくりですからっ！」

言った側から、芹沢は律動を早めた。早く動くと霊幻の中はキュッキュッと締まり、入り口と違うタイミングで動いた。

気付けばあっという間に射精して、芹沢は勢いよく、ペニスを霊幻の中から引き抜く。

「ひゃんっっ！そんなに……勢いよく、動くなぁっ！」

霊幻は芹沢が霊幻の中から抜けた事に気付いていない。芹沢はコンドームを超能力で素早く付け替えると、思い切り、霊幻の奥にペニスを叩き付ける。超能力を使った方が器用なのは念動力を使う超能力者特有の常識のようだ。

「あぁぁんっ!!駄目っ……はぁはぁ……息、出来ない……っ！」

胸を突き出すように背を反らした霊幻はなんとも言えず魅力的だった。芹沢はゴクッと唾を飲み、苦しげに喘ぐ霊幻の口を塞ぎ、息を吹き込む。霊幻はそんな芹沢の唇にしゃぶりつき、舌を絡める。

「余計に、息苦しくなりますよ」

芹沢だって余裕は欠片も残っていない。

霊幻に激しくキスされれば、理性も余裕もブチ切れる。

元々、気の長い方ではない、短気な方なのだ。

「ああ、もう我慢出来ませんっ！動きますっ！霊幻さん、足腰立たなくなったら、俺、面倒見ますからっ、許して下さい!!ごめんなさいっ、あとで土下座します!!」

芹沢は言うと、片手で霊幻の肩をベッドに押しつけ、霊幻に腰を打ち付ける。パチンパチンと肉のぶつかる音がして、

「やっ、やぁっ！死んじゃうっ！あっあっあっ……だめぇ………っ、……ああっ、死んじゃう……んふぅっ！」

霊幻は「死んじゃう」と繰り返し喘ぐ。

芹沢の腰にしがみつくように回されていた足はぐったりとベッドに落ち、霊幻はクッションに顔を埋める。

苦しげに顔を歪める霊幻に、芹沢の心は痛むが、霊幻を征服しているような気持ちにもなって、優しくしたいのに、優しくする事が出来ない。

「ああ、霊幻さんっ！」

ごめんなさい、ごめんなさい。

と、心の中で繰り返していると、霊幻が芹沢の頬をペチッと力なく叩く。
「泣きたい、のは……んん、んんっ……あっ……こっちだ、……バカっ……」
言われて、芹沢は自分が泣いている事に気付く。なんて卑怯なんだ、と思ったけれど、自覚なく流れる涙をどうする事も出来ない。
「気持ち、いいからっ……大丈夫、痛くな……い……だから……っっ！」
きっと、半分本当で、半分嘘だ。もしかしたら、全部嘘かもしれない。
芹沢は思ったが、霊幻の言葉に甘えるしかなかった。
頭の中は元から霊幻でいっぱいだった。一目惚れで、誰からも守るんだって決めていたのに、結局、自分が一番、霊幻を傷付けている。
その事に芹沢は傷付いたが、霊幻から離れる事なんて、考えも出来なかった。
「ひゃうぅんっっ!!」
霊幻が甲高く鳴いて、芹沢のペニスが思い切り締め付けられた。瞬間、芹沢も射精して、ぐったりと霊幻の上に倒れ込む。大切な霊幻を押し潰してしまわないように、芹沢は呼吸を整えながら、ベッドに手を付いて、自分の体重を支えた。ぐったりとしたまま、ピクピクッと小さく震える霊幻の姿に、芹沢は顔を青ざめさせる。

けれど、不意に、自分の腹に温かいものを感じ、見てみれば、霊幻の射精した精液が芹沢の腹に飛んでいた。勢いはなかったが、確かに霊幻も絶頂を迎えたのだ、という事実に、現金なもので芹沢は嬉しくなる。
「……霊幻さん、大丈夫ですか？」
芹沢は霊幻の耳元に口を寄せ、尋ねる。
霊幻は呼吸を整える事も出来ず、「はあはあ」と胸で息をしている。焦点も定まらないが、それでも、瞳は芹沢を探して、睨もうとしている。
きっと怒られるだろうな、と想像して、芹沢は嬉しくなった。霊幻は絶対に自分を無視したり、いない者として扱ったりしない。怒っていても、悲しんでいても、自分を叱ってくれる。
「霊幻さん。早く、俺の事、怒って下さい。俺、霊幻さんに殴られても、包丁で刺されても大丈夫ですよ」
芹沢は霊幻の心臓の辺りに耳を当て、心臓の音を聞く。とても早いが、少しずつ落ち着いてきている。
「……お前……なんて……包丁で刺しても……はあはあ……傷くらいしかつかないだろ……バカ……」
霊幻は芹沢を睨んだ。睨まれて、芹沢は嬉しそうに笑った。
「……明日から、また、こき使うからな……ふぅ、はあ……苦しい……」
「……殴って下さい。もっと、怒って下さい……」

「うりゃ」
霊幻は芹沢の腹にパンチするが、力はまったく篭もっていない。力が戻らないのか、本気で殴るつもりがないのか、芹沢には分からなかった。「もし、本気で殴るつもりがなかったら……」芹沢は顔を真っ青にするが、霊幻はそんな芹沢の感情にすぐに気付いたのか、
「バーカ。俺が抱いて良いって言った……『霊能力者』に二言はないんだ……」
「霊幻さん……『霊能力』ないくせに……」
「なんだお前……包丁で刺されても良いって言ったくせに……口答えするな」
霊幻は言って、クッションを芹沢に投げつける。それを顔面で受け止めて、芹沢は「でも、本当の事です」と言った。
「……もう少し、相手の身になって考えろっ！」
「えっ？無理ですよ……霊幻さんの身になって考えるなんて……だって俺、自分に付きまとわれるって想像しただけで、力暴走するし、絶対に殺しますよ。許しません」
芹沢は、きっぱり言った。
「なんだそりゃ、お前は～～っ!!」
霊幻は、そんな事を真面目な顔で言う芹沢を怒ろうとしたけれど、何だかそんな芹沢が芹沢らしくて、思わず笑ってしまう。
「ほら、芹沢。お前も横に寝ろよ」
ポンポン、と霊幻はベッドを叩く。
「いいんですか？」
「ああ、もちろん。少しは休憩しろ」
「？それは、霊幻さんですよ。少し休んだ方がいいですよ」
芹沢は言って、けれど、せっかくの霊幻からのお誘いだからと、霊幻の隣りに横になる。
「まあ、俺は休むけどさ……」
と、霊幻は言って、目を閉じた。
「お前も少しは休んでおけよ。」
「はあ……」
よく分かっていない様子の芹沢に、霊幻は言った。
「そろそろ、島崎が来るから……少しでも体力温存しとけよ？」
霊幻はクッションを抱き締め、笑った。
そんな霊幻を見つめ、「大変なのは俺じゃなくて霊幻さんなのに」と、芹沢は思った。

霊幻奪還攻防戦

「あーあ、そろそろ服を着ないとなぁ……」
雲のベッドは気持ち良くて、霊幻はベッドの上をゴロゴロと転がる。そんな霊幻の身体を芹沢は丁寧に拭く。すっかりこの状況にも慣れ、裸でいる事にも抵抗がなくなっていた。家が半透明といっても慣れてしまえば、その開放感が過ごしやすい。
「……癒やされる〜」
「霊幻さん、そろそろ服を着た方が良いですよ」
そう言った芹沢は、上着とネクタイこそ着ていないが、すっかり服を着込んでいる。
「もう少し……だけ……」
うとうとしながらクッションに顔を埋めていると、しょうがないな、と芹沢が霊幻の頭を撫でた。
「そろそろ起きないと、島崎が襲撃してきちゃいますよ」
「えっ!?襲撃っっ!?」
芹沢の言葉に霊幻は目を開けた。
その時。

ドォォンッッッ

大きな爆発音がして、芹沢の能力が具現化したドアが思い切りひしゃげる。もし防音壁がなければ、鼓膜が破けていそうなほど激しい音だ。
後に、霊幻は「島崎は武器マニアか？」と思うのだけれど、今はそれどころではない。
「てめぇ、この『化け物』野郎っっ!!」
突然の音に霊幻がベッドから身を起こすと、そこには怒りを背に背負った島崎が、ライフルを肩に担ぎ立っていた。霊幻でもゲームや映画で見て知っている対物ライフル『M82』だ。
「ぶっ殺してやるっっ!!」
普段の丁寧な口調は何処へやら、島崎はライフルの銃口を躊躇う事なく芹沢に向ける。2キロ先から撃っても胴体を打ち抜くほどの威力を持つライフルだ。今だって、芹沢の能力を具現化したドアを壊すほどの威力がある。それを超能力者とは言え、芹沢に向けたら、その反動と音はいかほどになるのか、怒り心頭の島崎は目を真っ赤にして今にも引き金を引きそうな勢いだった。
芹沢は面倒だとばかりに島崎の頭上にギロチンの刃を

具現化させると、刃はそのまま島崎にむかって勢いよく落ちていく。島崎は瞬時に転移し、芹沢に向かい、ハンドガンを連打で撃ち込む。それを難なく粘着質の盾型の防御壁で捉えると、弾はボトボトと床に落ちる。

「ええっ!?」

いきなり始まるのっ!?

霊幻は慌てて畳まれている服を着ようとするが、慌ててしまって上手に着る事が出来ない。

(これだ……浮気現場に踏み込まれた時の感じっ！初めて経験した……確かに焦るっ！これは焦るっ！)

焦って上手に服が着られそうにない霊幻は諦めたように、服を抱き締める。銃撃戦の中、ベッドの上からまったく動く事が出来ない。

(……人間は、服を着ていないと、こんなにも無力なのか……)

事務所の時は、もう少し動く事が出来ていた気もするが、今は到底、動けるものではない。

(……チンポも縮こまっている……)

まあ、使ったのは尻で、チンポは関係ないのだけど。

霊幻は思って、そのあまりの虚しさに、銃撃戦の中、一人だけ裸という状況から、現実逃避しただけで、状況を忘れるには至らない。

「ちょ、ちょっと……あの……話せば分かるって……」

その口調は完全に浮気現場に押し入られた人間のものだったが、霊幻に自覚はない。慌てていると、そのままベッドの上に転ぶ。

「うわっ!?」

と思った瞬間、島崎が霊幻の身体を抱き留める。その手にはデザートイーグルが握られていて、霊幻は思わず「ヒイッ！」と声を上げた。

(どれも映画で見た事がある……。そして、浮気現場に包丁持って押し込まれた時の心境はこれだ……)

霊幻はその場にへなへなと座り込む。ベッドに触れるかと思ったが、霊幻は数センチ浮いたままだ。島崎の手も、直接は霊幻には触れられない。

「あっ、島崎……」

「霊幻先生っ!?」

気付けば霊幻の身体は風船のようにゆっくりと宙に浮く、裸のまま。

「霊幻さんは、特等席で見てて下さいね」

芹沢は言うと、パチンッと指を鳴らす。一気に空間が広がり、霊幻はふわふわと宙を漂いながら、それを見る。

「良い度胸だなぁ、芹沢っ！さっさと俺の先生を返しやがれっ!!」

「冗談だろ?どうして霊幻さんを手放さなきゃならな

いんだ？」
「元々、俺のものなんだよっっ!!」
「俺は、『霊とか相談所』の社員なんだよっ!!」
「自慢すんじゃねーよっっ!!」
「利口な癖に分かんないのかっ、自慢してるんだよっっ!!」
「なんだと〜〜っっ!!」
島崎は怒り心頭という形相で、対物ライフルを至近距離から芹沢に撃ち込む。
「こんなもの、効くか」
芹沢が言った。
瞬間。
「死ね」
冷たく言い放つと共に、島崎は、ライフルに気を取られていた芹沢の首筋に、銃型の注射器を押し付け、引き金を引いた。
プシュッ！
大きな音を立てて、何かが芹沢に打ち込まれる。
「……っっ!?」
注射器を打たれた芹沢は、すぐに自身の異変に気が付いた。手で触れた箇所から手足が痺れ出したのだ。芹沢は体勢を維持出来ずに、床に倒れ込む。身体に力が入らない。全身の力が抜けていくのを感じる。口を開こうとするのに、身体が言うことを利かない。
（筋肉の収縮と弛緩が出来ない？……分かった。神経の伝達を遮断されているから、身体が動かないのか。これは超能力？……じゃないな。こいつは、超能力者としては『弱い』。そんな能力は持っていない筈だ。なら、これは……）
考える芹沢の頭を、島崎は蹴り飛ばした。
吹き飛んだ芹沢はそのまま床を転がった。
何とか動こうとするのに、芹沢は動けない。超能力を練ろうとするが、神経同様、超能力も上手く伝達出来ないようで、超能力のイメージを具現化出来ない。ぐにゃり、と歪んだエネルギーが発生して、そのまま消えていく。動けず、超能力も使えない芹沢の姿に、島崎は声を上げて笑った。そのまま、怒りをぶつけるように、何度も芹沢を踏みつける。
「毒だよ。神経毒。馬鹿なてめぇには分からないだろうなぁ。この世には、超能力なんかに頼らなくても、いくらでも人を殺せる材料があるんだよ。超能力者なんて、偉そうに言ってても、結局は毒で神経おかしくされたら

何も出来ねぇ。呆気ないもんだ。本当に超能力なんて、くだらねぇな。いくら力があったって、毒を注射されたら、この有様だ。お得意の超能力で、血清でも作ってみたらどうだ？」

島崎は吐き捨てるように言って、芹沢に背を向ける。
「心臓と肺。どっちが先に根を上げるかね？ナンバー2がざまぁねぇな」

「う、嘘……、今度は島崎が悪役……しかも、芹沢が……」
霊幻は地面に突っ伏したまま動かない芹沢に近付こうとするが、風船状の防御壁が邪魔で動く事が出来ない。
「うわぁぁっ！芹沢〜〜っっ!!芹沢が死んじゃった〜〜っ!!」
さっきまで元気だったのに。
霊幻は風船の中、突っ伏すようにして泣きじゃくる。
その時、防御壁は空気の、足下の膜が薄くなる。その穴に落ち、霊幻は身動きが取れなくなる。そうしている間に、周囲を囲っていた風船状の防御壁が消え、霊幻は床に落ちた。あまり高さがなかったから叩き付けられる事もなかったが、家の床も芹沢の能力で出来ているから、床が波状にうねっている。
　固定化された能力にまで影響を及ぼす毒がなんなのか、霊幻には分からない。後に『キングコブラの毒』と知り、霊幻は綺麗さっぱりとツチノコ狩りから足を洗う事になる。

「うわぁ!?」

霊幻はうねっている床にコロンと落ち、そのまま、下に向かって転がっていく。

「霊幻先生っ！」
島崎は霊幻の身体をサッと支えると、抱き寄せ、きつく抱き締める。
「あぁっ……ようやく抱き締められた……っ！」
「し、島崎っ！」
落ちるかと思ったよ〜〜っ!!
と言う霊幻の言葉を遮るように、島崎は霊幻の唇にしゃぶりつく。
そして今更に、芹沢が「大変なのは霊幻さんですよ」と言っていた言葉の意味に気付く。
半透明の壁の向こう、人が歩いている。
このままでは見られてしまうかもしれない。
「芹沢っ!!ヤバいって、人に見られるっ!!俺、裸なん

だよ～～っっ！
　島崎～っ！後生だからバスタオル～～っ‼」
「先生、申し訳ありません。私の武器庫にはバスタオルはないと思いますので、私の上着をどうぞ」
「俺は裸なんだよっ‼下も素っ裸なんだよーーっ‼芹沢～～っっ‼死ぬなーーっ‼ここは俺の近所なんだぞーーっ‼」
「でしたら、先生。場所を移動しましょう……」
「半裸の男が、しかもうちの社員なんだぞっ！俺のアパート、そこにあるしっ！俺っ、絶対に疑われるだろ～っ！『霊とか相談所』って怪しい事務所開いてるし……うわぁぁん、芹沢ーーっ‼」
　防音壁が壊れ始めているのか、公園を歩く人がチラッと上を見る。見えてはいないようだが、微かに音は漏れ始めているのかもしれない。
　慌てて、霊幻は声を潜め、
「芹沢～……起きて～……」
と小さな声が言った。
「諦めましょう、霊幻先生」
「島崎～、お前がやったんだろ～っ！」
「芹沢の自業自得というものです」
　と、島崎は悪びれる様子もない。そして、芹沢の能力が消えるのを待っているのか、あるいは芹沢が死ぬのを待っているのか、テレポートしない。
「うぅ～～、どうして……こんな事に……」
　霊幻は目からボロボロと涙を流す。
「マ・ジ・勃・つ」
「俺の涙を、変な四文字で返すな、バカっ！」
「……死ぬな、芹沢～～っっ‼また一緒に除霊に行こう～～っっ‼」
「無理ですよ、一滴で人を殺す『毒』ですよ」
　あっけらかんとした調子で、島崎が言った。
「お前が言うなよ～、ばかぁ～っ！」
　霊幻は島崎の胸に縋って泣く。
　そんな霊幻の様子に、島崎は「困った」という風に頭を掻く。
（霊幻先生のオーラは実に複雑だ。芹沢を殺そうとしている私を頼りながら、芹沢の心配もしている。そして、芹沢が死ぬとはまるで思っていない……相変わらず、矛盾に満ちていて……美しいな）
　この複雑な心は『超能力者』との関わりで一層濃いものになっている。
　その時、芹沢の指先がピクッと動き、空間が一気に凝縮する。それには島崎も驚いたらしく周囲を見渡す。

「死にぞこなったようですね､やはり『化け物』は『化け物』だ。」
「なんで、芹沢を『化け物』呼ばわりするんだよーーっ!?」
こんな芹沢が死にそうな時に。
「?私は芹沢の外見を指して言っているのですよ、霊幻先生?」
「えっ?でも、島崎って目が見えないよな?」
「はい。ですからオーラを視て……芹沢、頭が割れて脳味噌むき出しでしょ?頭からは角も生えていますし……先生と一緒にいるようになり、輪郭もぼやけ、『化け物』度は、増しています」
「……え?そうなのか」
ようやく納得。
霊幻は島崎が芹沢を馬鹿にして『化け物』と言っていると思っていたが、それだけが理由ではなく、島崎にはそう視えていたらしい。
(それだけ芹沢の潜在意識が強いって事なのかな……?)
盲目の超能力者である島崎の見える世界は、一体、どんなものなのだろう。霊幻は芹沢が死にかけているにも関わらず、好奇心を抑える事が出来ない。
実際、霊幻には芹沢が死ぬなんてこれっぽっちも思えなくて、その芹沢に対する信頼が、島崎には腹立たしい。けれど、そんな嫉妬している素振りも見せず、島崎は片手にハンドガンを持ち､常に照準を芹沢に合わせている。
そんな風に会話を交わしている間に、床が安定し、室内も新しく構築される。
「あ、雲のベッドが進化した……」
元々、雲のように柔らかかったベッドが、一層、雲のようなディティールになっている。
「……芹沢……自分が死にかけていたって言うのに……」
わざわざ俺のために。
霊幻は感動しているが、元々は、その芹沢が島崎を殺そうとして始まった闘いだ。もちろん、雰囲気に飲まれやすい霊幻はそんな事は過去の事になっている……実際には、本日昼頃の出来事だとしても。
でも、まだ力が安定していないようですね……今の内に逃避行と洒落こみましょう、霊幻先生?」
「島崎～～、お前は～～っ!」
「私も負けっぱなしというわけにはいきませんからね。では、参りましょうか、先生?しっかりと服を掴んでいて下さいね。ここに忘れていってしまうと大変ですよ」

第四章

島崎と霊幻とえろと

「霊幻先生。あの男に流されましたね？」
　と、島崎は言った。
　今、二人がいるのは『霊とか相談所』のソファだ。島崎が相談に来た時と同じように、向かい合って座るはずが、今日は並んで座っている。実際、この頃は島崎と並んで座る事が多くなっているのだから、霊幻としても何の違和感もない座り方だ。ただ、怒りを必死に抑えながら話そうとしている盲目の超能力者が隣りにいると状況は、いささか居たたまれなかった。
（……しかも、俺……裸だし……）
　テーブルの上には霊幻が食べたモンブランの皿が残っていて、事務所を去った時のままで、否応なく、今までの出来事が一日で起きているという事に気付かされる。
「ど、どうしてここに戻ってきたんだ？」
　もっと違うところに転移すると思っていたのに、と霊幻が尋ねると、
「ここで霊幻先生を愛していましたし……芹沢も、すぐにはここに気付かないでしょう」
　と言った。
（確かに、そうか。……芹沢の結界も張ってある訳だし……戻っているとは考えないか……あいつ、真面目だからなぁ……）
　なるほど、考えているな。
　思っていると、島崎が怒りを抑えたような笑顔で、霊幻を見ている。
「……芹沢のこと。お気になりますか？」
「俺は芹沢と一緒にいる時。お前の事も気になっていたぞ」
「卑怯な答え方ですね、先生？」
　島崎は言って、
「霊幻先生。あの男に流されましたね？」
　と、もう一度、言った。
　その言葉に「イエス」と答えるのは、本日二度目の事だ。一回目は自分で自白して、二回目は自白を強要されている。
　でも、仕方ないのだ。霊幻自身、自分がこんなに流されやすい性格だとは思ってもいなかったし、事実、霊幻自身は認めないが、他人のためなら、時には死を厭わないほど優しく責任感のある性格なのだ。
「俺だってさ……島崎が殺されちゃうと本気で思ってさ……お前も慌ててたし……」

しどろもどろに、霊幻は答えた。
実際、芹沢に頭を踏みつけられた島崎の顔は悲痛だったし、芹沢が力を込めたら、島崎の頭は粉砕されていただろう。それに、ようやく社会常識を覚え始めた芹沢に人を殺させたくなかった。島崎にだって死んで欲しくなんてなかった。
二人とも付き合いの長さは一緒だけど、どちらが好きでどちらが嫌いで、なんて事はなくて、二人とも、短期間で霊幻の人生に強引に食い込んでいて、忘れられないのだ。
プライベートを誰かに踏み込まれる事を苦手にしていた霊幻だけれど、そんな霊幻の気持ちなんて関係なしに、覗き見、盗聴、ストーカー紛いの行為。「そんなの犯罪だろ?」と思うのに、霊幻はモブに助けを求めるまでには至らなかった。モブに勝てる『超能力者』なんて、皆無だ。モブに「困っているんだ」と助けを求めれば良い。中学生に助けを求めるなんて……と思うけれど、それは霊幻のプライドの話であって、本当に嫌なら、プライドなんて関係ないはずだ。
けれど、結局、助けを求める事もなく、気付けば、「芹沢に抱かれてしまった後」で、今は、目の前に、「霊幻を抱こうとしている島崎がいる」状態だ。
「……まあ。私の心配をして下さって、そう言って頂けるのは大変に嬉しく思います。何も言えなくなってしまいますが……」
事実、霊幻のオーラは今でも島崎を心配している。『心配』と『不安』と『早まったかな?という反省』と諸々の感情が混ざり合って、結局、『島崎の怪我は大丈夫かな?』という結論に落ち着いている。こうなってしまうと、島崎も何も言えなくなった。
(……まあ、芹沢相手なら……先生だって本気で抵抗する事もなかったでしょうし……何であんな『化け物』が良いのかは分かりませんけど……ああ、あんな野郎に出し抜かれるなんてっ!!畜生っっ!!)
イライラすると、島崎の口調はどうしても乱暴になる。出来る限り、周囲に心の中を悟られないようにと口調を変えていたら、丁寧語が標準の言葉となり、丁寧語でなければ、本音に近い部分は語れなくなってしまった。それでも、何の不自由もない。誰かに本音を語るタイミングなどなかったからだ。
けれど、霊幻に会って、不意に本当の自分を知って欲しいと思う時が、度々あった。隠し事をしたくないと思っているだけかもしれない。どちらにしても、そんな感情を他人に対して持った事がない島崎にしてみれば、「これがいっそ殺意の変形であれば」と思わずにはいられなかった。けれど、島崎の霊幻に対する感情は「殺意」とはまるで違っていて、島崎自身持て余すものだった。
(セックスの順番なんかにこだわるほど……了見の小

さな男になった覚えはないんですがね……）
思うのに、目の前の人は、自分の前から連れ去られ、他の男に抱かれたのだと思うと、『怒り』と『殺意』に意識を引っ張られる。と同時に、「霊幻が嫌っている人間でなくて良かった」と、『安堵』もした。霊幻の感情に『恐怖心』がないかを何度も確かめ、それが見つからない事に『安堵』する。独占欲よりも、霊幻に対する気持ちの方が上だった。
そんな自分の感情を、島崎は未だに持て余していたが、（……霊幻先生に大事がなかった事だけは……幸運と思いましょう……）
と、自分に言い聞かせる。
その時、不意に、

「セックス、した事なかったんだよ」

と霊幻が言った。
「ああ、アナルセックスですね？　そんな機会、ないでしょう？　私とて、霊幻先生以外では衛生上の都合によりお断りですし。案外、潔癖症なんです」
島崎は答えた。

「違う。セックス自体、した事ないんだ……」

と霊幻は言った。
「あ、お茶飲む？」なんて言って、霊幻はソファから立ち上がろうとするが、島崎はそれどころではない。
「はあっ？　アンタ何言ってるか分かってんのか、おいっっ!!」
島崎は思わず怒鳴った。
「しょうがないだろ？　誰とも『したい』なんて思わなかったんだから」
「じゃあ、俺は……『童貞処女』のアンタをみすみす見逃したっていうのかっ!?」
「まあ、そうなるな」
霊幻は言って、給湯室まで行くとコップに冷たいお茶を入れて戻ってきた。それを島崎に渡すと、島崎はそれを勢いよく飲み干す。
「先生……あんた、本気で言ってるのかっ？」
「……だって、本当だし。こんな事、嘘ついてどうするんだよ、島崎相手に」
と、霊幻は言った。
事実、霊幻の纏うオーラに嘘はない。少し照れているが、島崎を信頼しているのが、オーラを視なくても分かる。島崎は誰かにそんなに信用された事がないから、照れくさい。自分の失敗を嘆くより、霊幻に信用されている事の方が嬉しい。島崎はそんな自分の感情を持て余す。
持て余すが……今は、それどころではない。

「本当に……セックスした事ねぇのか?」
「まあ……うん。隠しても仕方ないから言うけど、まったくない。そういう雰囲気になったのは、お前と芹沢くらい。ここ数年はモブもいたから、煙草も止めたくらいの健全な生活。酒は飲むけど……酒だと思って飲んでたのは、ただのレモンスカッシュ」
「……真面目。いや、真面目過ぎるだろっ!でもさあ……先生さ。ぶっちゃけ、モテるだろ?」
すっかり敬語も忘れ、島崎は普段からは想像出来ないほど砕けた調子で霊幻に話し掛ける。霊幻も友人と話すような気楽さで受け答える。
「うん。学生時代はクラスの人気者で、運動神経も良いし、成績も悪くないし、社交的だし、コミュニケーション能力高いし、社会人になったら、一年目で営業成績一位になってさ。ぶっちゃけ、顔も悪くないし。合コンでは常に二、三人の女の子達が取り合ってくれてたよ?まあ、相手も遊び半分で告白してたんだろうけど、学生時代からの告白される回数なんて、覚えてないし」
「……おかげで『超優良物件』の先生が売れ残っててくれたのか」
「付き合っても、どうせ最後に言う言葉なんて、最初から分かってる。時間の無駄だろ?『こんな人だと思わなかった』って」
「ああ。先生は裏表あるからな」
「そう。だから、嫌だったんだ……誰かに関わるの……」
「霊幻先生、人間不信ですからね……まあ、仕方ないと思いますが。でも、それなのに『影山茂夫』には関わってしまったんですね?」
「そう。で、『芹沢』にも関わっちゃったし『島崎』にも関わっちゃったんだ」
「それはそれは……ご愁傷様です」
「おっ、島崎の口調が戻ってきた。まあ……島崎の裏表も相当なものだけどな」
「……霊幻先生は、相変わらず私に対して意地悪だと思いますよ?でも、私は……正直に申し上げて、裏も表も同じような人間に興味すら持ちません。裏も表も側面も、天気によってさえコロコロ変わる先生は、とっても魅力的ですよ」
島崎は言うと、霊幻の肩に手を回し、抱き寄せると、耳に、耳朶に、頬に、口付けを落としていく。それに抵抗する事のない霊幻に、島崎は顔を綻ばせる。
「俺、格好つけるところあるの、自覚あるし……嫌だったんだよ……セックスしてる自分を想像するの。だーかーら、芹沢は初めて」
霊幻は言った。
「ああ、畜生っ!!あんたは、セックスくらいしまくってると思ったんだ。だから『未来視』で、あんたが芹沢

に抱かれるの分かったし、無理に追い掛けなかったんだっ！分かっていたら俺の腕が引きちぎれても追い掛けていたっっ!!」

島崎は唸る。「ああ、畜生っ！」と納得出来ず呻く島崎の肩を、霊幻はトントンと叩く。「また言葉戻ってるぞ」と霊幻は言うが、島崎はそんな霊幻の手を掴むと、爪先に口付けし、そのまま、口に咥えた。

いつも涼しげな島崎の悔しげな様子に、霊幻は少し機嫌が良い。

「超能力者って超能力ばっかりに頼るからな。……でも、まあ……そんなお前の性格も含めての『未来視』だったんだろ？お前は無理に追わないってさ」

「うるせぇっ……その通りだよっ！ああ、畜生っ！あんな『引きこもり野郎』にしてやられるなんてっ！」

「俺なんて初体験なのに、リードさせられたぞ？まあ、結局……途中で芹沢が『待て』を出来なくなっちゃったけどな」

「こんなにムカつくことなんて、人生初だっ！」

と、島崎は笑う。

「そりゃあ良かったっ！何でもない島崎の一日におめでとうっ！」

「……あー、俺も焼きが回ったな。『世界一のテレポーター』を自負するあまり、超能力に頼りすぎた……俺自身の性格に足を引っ張られるなんてな」

「まあ……でも、島崎が俺の二番目の相手になる訳だ」

「……自分のせいで二番目になるのは納得出来るもんじゃない」

「俺は正直、数日の休みが欲しい」

「あー、それは駄目だ。俺は物覚えがいいんでな、先生？この日は霊幻先生が『化け物』に抱かれた日。その三日後が先生が俺に抱かれた日……なんて覚え方してたら、気がおかしくなる」

島崎は言うと、霊幻の口元に口付けし、

「……今度は、私にも流されて頂けますか？」

と、言った。

「……うう、困った。そんなはっきり言われると、『うん』って言いづらい……」

「あなたのアナルを教育したのは私ですから……どうぞ、成長のほどを確かめさせて下さい」

「……う〜ん……それは、『はい、お願いします』とは……その……」

「芹沢に犯された霊幻先生のやらしいアナルを、私にも堪能させて下さい」

「やだよ、その言い方は」

「……男なんだ、覚悟決めろっ！何言われたって、あんたを抱くぞっ！」
言うと、島崎はソファに霊幻を押し倒し、唇が触れるか触れないかの距離で止まった。鼻は触れあっていて、見えないはずの島崎の目と、目が合った。
「流されて、頂けるようですね？」
島崎は言うと、霊幻に口付けた。舌先だけをペロペロと舐められ、霊幻はじれったくなって、自分からも島崎の舌先をペロリと舐めた。瞬間、服は霊幻の手から離れ、手で霊幻の服に触れた。島崎は霊幻の舌先を吸うと、向かいのソファに無造作に置かれた。
「さて、まずは私が大切に育てた霊幻先生の『蕾』がどうなっているのか、確認させて頂きますね？」
島崎は言うと、躊躇う事なく霊幻の尻穴に触れた。
「いつも人差し指でしたが……。今日はどの指が入っても分からないほど霊幻先生の秘密の園は踏みにじられてしまっているのでしょうね……嘆かわしい」
「それ、一言で言うと？」
「芹沢を殺したい」
「うん……多分、芹沢も同じ事考えてると思う」
「……では、霊幻先生。人差し指でよろしいでしょうか？」
島崎は言って、人差し指で霊幻の尻穴に触れた。
「おや？思ったほど、踏みにじられてませんね……いつもより大胆ではありますが、引っ込み思案でもあります」
もっと緩んでいても、傷付いていてもおかしくないと思っていたが、霊幻の尻穴は特に傷付いた様子もない。『超能力者』ではない霊幻には、超能力者特有の回復速度はないはずだが……、と島崎は思ったが、今そんな事を吟味するのは野暮だと、口にするのを控えた。
「んっ、んんっ……昼間から……お前にも弄られて……その後、芹沢で……またお前で……もうっ……最初から……あんっ、……頼むからぁ……焦らさ、ないで……」
「大胆な霊幻先生も、大変に魅力的です……」
島崎の指が霊幻の尻穴に挿し込まれる。そのまま、もう一本挿し込まれ、霊幻の身体からくったりと力が抜ける。
「尻はキュッと締まっていて、それなのに、柔らかくて。大変に素晴らしい」
「んっんっ……あっ、はぁ……んっ」
「……足りなかったでしょう？芹沢のテクニックで満足出来ましたか？」
「……比べられるの、嫌いなんだろ？」
「そうですね。上手なお返しです。私が勝手に「比べ

るまでもなく私の方が上手い」と思っておく事にしましょう」

「そうして……んんっ……あっ、そこ……当たる……っ……ひゃんっ……」

元々、島崎に慣らされていた尻穴だ。身体はすっかり島崎の指を覚えていて、島崎の指だというだけで、尻穴はキュッキュッと締まった。

「ここが気持ち良いんですよね？」

島崎の指は的確に霊幻の気持ち良いところに触れる。グリグリと指で押し、時に引っかかれると、それだけで、霊幻のペニスは上を向く。

「元々やらしい身体だったというのに……男の味を覚えて、一層やらしくおなりになりましたね？」

言って、島崎はニヤリと笑う。

「うるさい」

「なあ、先生、別嬪なんだろ？あんたほどの別嬪が大切に保管されてたと考えろって方が無理な話だ。ここはすっぱり忘れて、俺の育てた先生を堪能するよ……ん？先生、乱暴に口説かれると心臓の音が早くなる」

「……うるさいっ！普段丁寧な口調だから、ギャップがさ……何だか、格好良くて……その……」

「……アンタも、普段は裏表のある隙のない性格なのに、腕の中では素直だなぁ……そのギャップ、堪らなくそそるよ、霊幻先生？」

島崎は霊幻のこめかみに口付けると、霊幻の中から指を引き抜いた。そして、いつの間にか勃ち上がっていたペニスを霊幻の尻穴に押しつける。

無意識に霊幻の腰が動き、自分の尻穴を島崎のペニスに、押しつけてしまう。もう少し動けば、島崎のペニスを霊幻の尻穴は奥へと迎えてしまうだろう。

いけないいけない、と理性では分かっていながら、もたらされる圧迫感を知っている霊幻の身体は、霊幻の心とは裏腹に、勝手に動いてしまう。

（もう、このまま抱かれてもいい……）

思ったのに、島崎のペニスは霊幻の尻穴から離れ、尻の肉に擦りつけられる。堅いペニスは霊幻の尻肉をグイッと押す。

それじゃ、足りない。

と、霊幻が島崎を見れば、島崎はニヤニヤと笑っている。

「……んっ、島崎……っ、っ」

霊幻は島崎を睨もうとするが、瞬間、敏感な乳首を指で摘まれる。

「ひゃうっ！」

身体がビクッと震え、霊幻は思わず息を止める。

「霊幻先生は、『蕾』だけでなく、『小さな果実』を刺激されるのも弱いのですね？」

と、島崎は霊幻の耳元で囁く。

そんなことない。
言おうとしたのに、霊幻の身体は乳首への刺激を「もっと」と求めてしまう。
「おやおや、はしたない」
島崎は言って、霊幻のペニスから垂れる先走りの液を指で掬って、霊幻の唇に塗りつける。島崎はそんな霊幻の唇に口付ける、広がるじんわりとした苦み。
口付けの合間、
「乳首とアナルに触れられただけで、こんな風になってしまうんですか？」
と、島崎は尋ねる。
「違っ……っ！」
「そうですか？」
島崎が霊幻の乳首をクリクリと弄ると、霊幻はその刺激に合わせて、「あっあっ」と声を上げげた。振り回されている自分が恥ずかしくて、霊幻は唇を噛む。噛めば、残った先走りの液の味がする。
「ああ……っ、島崎のばかぁ……っ！」
「はい、バカですよ。ですが……言って頂ければ、あなたのご命令通りに従います」
ゆっくりと瞼が開き、超能力を発動させているのか仄暗い瞳にぼんやりと光が灯っている。
「……俺……今、何を考えてる？」
霊幻は島崎に尋ねた。

自分自身、何を考えているのか、分からなかった。思えば、午前中からずっと、こんな風に誰かと一緒にいて、ずっと執着を受けている。それは、恋情とも愛情とも呼べるものだったけれど、霊幻にはどうしても、それを素直に受け入れる事が出来ない。きっと、芹沢に言わせれば「意地っ張り」で、島崎に言わせれば「そうでなければつまらない」となるのだろうけれど。
「言ってしまってはつまらないですか？こちらこそ、お聞きしたい。霊幻先生は、私の指に乳首を弄られ、私のペニスで尻に触れられ、その上で、何をお考えですか？」
耳元で悪魔のように囁いて、島崎は微笑む。
俺。
何を考えているんだろう？
朝から仕事もしないで、こんな事をしてる。
島崎に身体を弄られて、それから、芹沢が仕事から戻って来て、そのまま、二人が殺し合いになって、芹沢の家でセックスをして、今度は島崎が来て、殺し合いになって、今はまた事務所に戻って。
で……島崎とセックスしている途中？
まだ、『セックス』と言わないのだろうか？
それとも、『セックス』と言うのだろうか？

「考えは、まとまりましたか？」
島崎が尋ねる。
「……俺、お前と『セックス』してる？」
と、霊幻が尋ねた。
一瞬、島崎は内心の動揺を隠しながら、「はい、その通りです」と頷いた。
（……まだ、そのレベルですか……どれだけ奥手なのか想像も出来ません。一連の流れは完全にセックスだと思いましたが……セックスでないとすれば……霊幻先生は……あー、畜生っ！あんたは尻弄られてアンアン喘いでたじゃねーかっ!?）
これはまた難攻不落だ、と島崎は思った。
思考の中が、丁寧語と乱暴な口調と、ごちゃ混ぜになる。島崎自身、自覚はあるが、完全にパニックに陥っている。
（明日になったら、『昨日のは、きっと島崎も疲れてたんだな』とか、なるのでは……）
思って、島崎は一縷の望みをかけて、霊幻のオーラを視る。
（……私が、あの『化け物』に対抗心を持ってるからこうなったとっ!?あなたが喜ぶからグルメ雑誌のライターまでやっている私を疑ってらっしゃるっっ!?むしろ、そうに違いないと確信してらっしゃるっっ!?）

これは、本当に一筋縄ではいかない。
と、島崎は思い、また一層に霊幻にのめり込んで行くであろう自分を想像し、溜息を吐いた。
その溜息を勘違いし「……『セックス』してない？」と、霊幻は不安げに島崎を見て、悲しそうに眉尻を下げる。
「俺とアンタがセックスしてねぇならっ、誰と誰がセックスしてんだっ！」
島崎は怒張したペニスを霊幻の尻穴に押しつけた。そして、手にローションを転移させると、思い切り自分のペニスと霊幻の尻穴に絞り出した。
「ひゃっ……冷たいっ!?」
「すぐ、熱くなりますよ」
島崎は言って、思い切り霊幻の中に自分のペニスをねじ込んだ。
「あっ！急にっ……深いっ!!」
「まだ、奥があります。ご安心をっ……」
必死に口調を落ち着かせながら、島崎は言う。
霊幻の肩を押さえ付け、自分のペニスを根元まで霊幻の奥まで、挿入すると、そのままゆっくりと律動する。
「えっ？いきなり……っ？」
「おや？いきなりは、お嫌いですか？」
言いながら、島崎は霊幻の前立腺をグリグリと刺激する。
「ひゃっ……いきなりは……ちょっと、あんっ、あ、

ね？誰が来るともしれない事務所で乳首を弄り、私に股を開き、アナルを苛められて喜んでいられた。今もこうして、あなたはあなたの事務所のソファで、喘いでいらっしゃる……」
「そ、それは……えっと……」
「……鍵、空いてますよ？私は残念ながら『念動力』が使えませんから……」
「鍵、締めさせて……誰か来たら……なあ、島崎……」
「ああ、私に縋るあなたは、なんと愛らしい……」
島崎は言いながら、ローションを霊幻のペニスに塗りつける。
「霊幻先生？尻を突かれながらペニスを扱かれたら……どんな気持ちでしょうねぇ？」
と、胸元で囁きながら、島崎は霊幻の乳首をチュッと吸う。
「おや？汗の味が変わりましたか？先生は恥ずかしい事が好きなんですね？それとも、興奮するのですか？」
言って、グリッと島崎は霊幻の奥を抉る。
「ひゃんっっ！」
霊幻が声を上げるのと同時に、島崎は霊幻のペニスを扱いた。ローションにぬめり、ペニスは堅くなる。後ろからも刺激され、霊幻は身を捩る。けれど、乳首と尻穴とペニスへの刺激は同時に霊幻を襲い、霊幻の目から生理的な涙がポロポロと零れた。

「許してぇっ……あっん、あっ、あっ、んっ……っ、激しい……っ！」
『誰か』と比べて、『激しい』とおっしゃっているのですか？それとも、私が『激しい』とおっしゃっているのですか……？」
島崎は霊幻のペニスの根元をグッと押さえ込み、尋ねた。
「ひゃっ！駄目ぇ、だって……島崎ぃ、島崎が……比べな……い……誰とも、比べてなんて……んんっ……あんっ……許してぇ……イかせてっ……っ！」
ペニスへの刺激は、男ならば我慢出来るものではない。射精の時間を訓練で延ばす事は出来るが、そんな訓練を霊幻がするはずがない。前立腺を抉られる感覚と、ペニスを扱かれる感覚で、霊幻はすでに絶頂を迎えてもおかしくない。身体を掻きむしりたくなるほど敏感になった皮膚は、島崎に触れられ、自分の汗が流れるだけで、粟立つ。
「射精しても、苦しいだけかもしれませんよ？それでも、よろしいのですか？」
耳元で、島崎は囁く。
「……苦し……い？気持ち……良くない……？」
「気持ち良いですよ？」
「……はあ、はあ……んんっ……あん……んん、っん……我慢、出来ない……っ。痛いっ……んっ、んんっ……」
「では、そのように」
島崎は言うと、霊幻のペニスを思い切り扱いた。
行き過ぎた快楽は、苦痛になる。
「ひゃっ……んっんんっ、あっ、熱いっ……動いちゃ、あっんっ……動かないでっ！」
「ねだったのは、あなたですよ？」
「あんっ、んんっ……っ！あぁぁぁっ!!」
霊幻は射精し、仰け反った。瞬間、島崎はニヤリと笑い、霊幻のペニスを握り込む。そんなはずないのに、精液が逆流していく感覚が、霊幻を襲う。
「あっ……ああっ……はぁはぁ……あんっ……いじわる……悪魔……鬼畜……」
「どれも褒め言葉として受け取っておきましょう」
答えながら、島崎にも余裕はなかった。自分に付けていたコンドームを取り替えると、既に堅さを取り戻しているペニスを霊幻の中に突き刺す。
「今度は、尻だけでイきましょうね？」
島崎の言葉に、霊幻は焦点の合わない瞳でコクコクと頷いた。
「こんなに快感に弱いというのに……素直じゃないなんて、『ギャップ萌え』というやつでしょうか？」
「……、はぁはぁ、あっ……だめぇ……」
微かな振動が伝わるだけで、霊幻の身体はそれに合わ

せてビクビクと跳ねた。
「……ねぇ、霊幻先生?我々はセックスしているでしょうか?それとも……セックス未満ですか?」
言いながら、島崎は怒張したペニスを一層奥へと押し進める。
「ひぃんっ!な、なんでぇ……そんな奥に……っんぐ!」
「どうしてこんな奥まで……と思うでしょう?テレポートを使うのですよ。ほんの数ミリ、ほんの数センチ、奥へ奥へと進む事が出来るのです。ああ、尻穴はこれ以上ないほど広がっていますよ?」
言って、島崎は確かめるように霊幻の尻穴に触れた。蕾のように閉じていた尻穴はすっかり開き、花が咲いたようだ。
「……ギチギチですね?でも、霊幻先生の大好きな指も入れてみましょうか?」
「やっ!やぁだぁ~っっ!」
「想像しましたか?それとも、期待されましたか?」
島崎の指が押し広げられた霊幻の尻穴を指で押す。
「~~っっあぁっ!!」
「ああ、爪の先は入りそうですよ?もう少し、爪を伸ばして置けば良かったですね?」
カリッ
島崎は霊幻の尻穴を引っ掻いた。
「あっ、んんっ……ひゃっ……っ!」
「ほら、イってからの方が大変でしたでしょ?」
「……み、みらい……見た?」
「視えてしまったんですよ?まあ、もう振り回されたりしませんが……」
言って、島崎はにっこりと笑う。
「……んっ……ん、ぐっ……はぁはぁ……もういい……動いてぇ……、……もっと、あんっ……」
「動くというと?掻き混ぜた方がよろしいですか?」
島崎の言った瞬間、霊幻の尻穴の中に何かが溢れる。
「えっ?」
「ローションを転移させました。私も思った以上に興奮して怒張していたようです……思いっ切り溢れてしまいましたね」
「あっ……あふぅ……んんっ、ああ……」
「……ザーメン、ぶちまけられたと思いましたか?」
「思ったっ!思ったぁ~っっ!」
霊幻は縋るように島崎にしがみつく。それを咄嗟に抱き締め、島崎は顔を赤くさせる。
「あっ、えっと……れ、霊幻先生?」
「もっと、もっと……んっ、ああっ、もっと、強く抱き締めとけよぉ~~っ!バカ~~っ!気持ち良いだろぉ

〜〜っ!!」
「私も、霊幻先生と繋がれて気持ち良いですよ?」
「んんっ、あんっ、俺の方が……あんっ、気持ち、いいんだ〜バカぁ〜〜っっ!」
涙混じりに、霊幻は島崎の首に腕を回した。
「……ったく、先生には敵う気がしねぇな。動くぞ」
言って、島崎は霊幻の中を掻き混ぜるように動く。斜に構えている余裕なんて元々なかったけれど、霊幻に甘えられては、理性など吹き飛んでしまう。
「チッ……こっちが振り回すつもりだったのになぁ……アンタ相手じゃ上手くいかねぇなぁ」
島崎は言って、霊幻の身体を抱き寄せ、そのまま一気に抱き起こす。
「ひゃゃぅんっっ!!」
これ以上ないほど深く島崎を迎え入れているのに、重力で一層深くまで、島崎のペニスが霊幻の尻穴に突き刺さる。その拍子に霊幻は思い切り島崎のペニスを締め付けてしまう。トロトロと溢れるローションがまるで島崎の精液のように感じ、霊幻はガクッと首が後ろに倒れる。島崎はそんな霊幻の後頭部を支え、息さえ奪うように口付ける。
「んっふぅっ……」
霊幻は全身が性感帯になったような錯覚に目眩がする。息を整える間もなく、島崎は霊幻を下から突き上げる。
「あっ……激し……っ!」
「あなたを前にして、落ち着いていられたら……男ではありません」
そう言った島崎も、息が上がっている。
「ああ。私の腕の中で乱れるあなたを、何度も想像していました……」
「……んっんんっん、あっ……あんっ……」
「想像以上ですよ?」
島崎は囁くが、霊幻は聞こえていないのか、答えはない。けれど、汗のにおい、声の響きだけで、島崎には霊幻が喜んでいる事が手に取るように分かった。
「島崎ぃ……もう少し、ゆっくりぃ……んっ、あっ……だめぇ……」
「おや?まだ意識があるのですね?では、私も、もっと頑張って励まなければ……」
「ゆっくり……なぁ……」
「しかし、霊幻先生のオーラは、もう少し激しいのを望んでいるようですが?」
「ち、違う……そんなの……ゆっくりがいい……優しいのがいい……」
「嘘ですね?もっと、激しく抱いて欲しいんですね?」
島崎は言うと、霊幻の乳首をチュッと吸い上げる。
「あっ……んっ……それは……っ」

「優しい方が？激しい方が？」
島崎が尋ねると、霊幻は島崎の頭を抱き寄せる。
「……激しい方がいい」
霊幻が言うと、島崎は驚いたように顔を上げ、霊幻を視た。
「……本当に……超能力ばかりに頼るのはよくありませんね？」
「え？」
「霊幻先生……『優しくして欲しい』とオーラが出ていたのですが……。本心より、雰囲気に流される事もあるのですね」
「ええ？」
「霊幻先生と初めて出会った時から……私の能力は、まったく効果がありませんでしたものね？」
と、島崎は霊幻と初めてあった日を思い出す。
『島崎亮』の人生は、誇れるものだ。
『敗北』なんて言葉は、書き方さえ分からない。
『勝利』という言葉も、わざわざ使う事のない言葉だ。
闘いには自分なりの美学があり、『超能力』には絶対的な自信がある。
そんな自信はたった一発の拳で、打ち破られたのだ。
それなのに、霊幻の心は揺れ動く。芹沢も島崎も、刷り込みのように自分を好いているだけで、『本当』ではない。でも『本当』であってほしい。甘えたい。でも、甘えられない。誰しもが感情は動くけれど、霊幻の心だからこそ、惹かれるのだ。
『初めて会った時』と言われて、不安げに揺れたオーラに、島崎は興奮する。
「ああっ、霊幻先生っ！たまらない……興奮が止まりませんっ！」
島崎は霊幻を抱き締め、その顔に頬ずりする。
もう地面にも置かずに甘やかしたいくらいなのだ。
「ああ、可愛いっ！可愛すぎますっ！」
「だ、だめだってっ！ここ、事務所だぞっ！」
「知ってますよ……霊幻先生も知っているでしょ？もう今更ですよ……霊幻先生の尻穴からは私のザーメンが溢れ出てますよ？」
「ロ、ローションだろっ!?」
「見た人間はそうは思わないという事です。先生も激しい方がお好きなようですし」
「それは……お前だからで……」
思わずという風に、霊幻は言う。
深い意味があったのか、と言われれば違うかもしれない。島崎は、本当に自分が嫌な事はしないでいてくれる、そんな妙な安心感が霊幻にはあった。

「……では、その信頼に応えるべく、先生のお好きな体位を一緒に探しましょうね？」
言うと、島崎は霊幻を押し倒し、下半身だけを抱え上げた。バランスが取れなくて、霊幻は慌てて島崎の腰に足を絡める。
「すばらしい」
島崎は言うと、本気の笑顔を見せた。その笑顔に、霊幻は思わず見惚れて、けれど、その後に自分に訪れるであろう身体の負担に顔を引き攣らせた。
「笑っているあなたも、戸惑っているあなたも、どうすればいいのかわからないあなたも……どれも素敵ですよ。きっと、万華鏡というのは、こういうものなんでしょうね？」

† † †

それから、どれくらいの時間が経っただろう。
霊幻は身体をアロマオイルを垂らした濡れタオルで、丁寧に身体を拭かれていた。島崎はこういう時は真面目な男で、霊幻にいたずらをするなんて感覚はなく、身体の汗から尻のローションまで拭かれ、すっかり綺麗になっていた。事務所のソファも磨かれ、窓も開けられて、セックスの名残はすっかり消えていた。

ギィッ

その時、事務所のドアが、開いた。
霊幻はハッとして視線を向けると、そこには芹沢が立っている。
「せ、芹沢……身体は大丈夫なのか？」
「まあ、比較的元気です。霊幻さんこそお疲れ様です」
芹沢は、事務所に入ると、ペコリと霊幻に頭を下げた。
（デジャブ……だ。これ、絶対、デジャブ的なヤツだ……）
「お疲れ、芹沢」
「時間が掛かってしまってごめんなさい。完全に毒の効果を打ち消すのに少し時間が掛かってしまって……」
「芹沢。何ともないなら良かったよ……」
「すみません。完全に気を抜いていました……そんなヤツにしてやられるなんて」
芹沢は、島崎を睨み付けた。
「まあ、無事で良かったよ。死ぬ気配とか、あった？」
「いいえ。ただ、これが『車酔い』とか『二日酔い』か……って感覚はありました」
「そ、そうか……うん。何よりだよ。いい経験だったと割り切った方が良いぞ……俺も『二日酔い』はきついから」

霊幻は、ソファから立ち上がろうとして、そのまま、ソファに突っ伏した。
「霊幻先生。もう少し、ジッとされていた方が……」
「……島崎、お願い……後生だから、服着せて……」
拝むような気持ちで、霊幻は島崎の服を引っ張る。セックスしたのが嘘のように、島崎の着衣に乱れはない。
「……はい。」
島崎はアポートの能力で、霊幻に服を一瞬で着せる。
「うわっ、便利……これなら、遅刻はなさそう」
「遅刻なんて、私が側にいれば大丈夫ですよ？先生を遅刻させる事なんて決してありません」
そんな話をしている間に、芹沢は向かいのソファに座った。
「ほら、霊幻さんの方が大変だったでしょ？一日に二人の男に抱かれるのは大変でしたか？それとも霊幻さんほどになれば、気持ち良かったのかな？」
「霊幻先生ほどになれば、我々二人程度に抱かれたところで物足りないに決まっているだろう。オードブル程度のものだ」
そんなわけあるかっ！
バカどもめっ!!

霊幻は適当なホラ話をする二人を睨み付けるが、結局身体に力が入らず、ぐったりと倒れ込んだまま、「はあはあ」と息を整えるのが精一杯だった。
そうして、霊幻が何も言い返せない間にも二人は、
「霊幻さんはエロい身体だからセックスで疲れない」とか。
「霊幻先生を疲れさせる事など、我々凡人には無理だ」とか。
言いたい放題だった。
それを聞きながら、霊幻は、
次にセックスする時は、チンポを尻の筋肉で引き千切ってやるっ！
と、考えた。
それは、尻穴に入ったペニスを思い切り締め付けるという事で、結局、二人を喜ばせる事になるとは、霊幻自身は考えもしなかった。

霊幻立てこもる

事務所のソファに倒れ込んだまま、霊幻は「はあはあ」と苦しげに息をする。

（……何でこんな事に……）

霊幻は自身に起こった『霊幻の長い一日』を思いを馳せた。

「……一体、何だったんだ……」

と呟く自分の声が掠れていて、霊幻は一層苦しげに呻いた。

（分からない……ただ、俺が流されやすい性格だという事と、あいつらが見た目以上に『狡猾』だという事は分かった。俺を『詐欺師』呼ばわりする奴もいるけど、こいつらに比べればマシだ。こいつらは……『クラッシャー』だ。俺の尻を破壊する『クラッシャー』どもめっ！）

流されたのは自分だが、いくら何でも無遠慮過ぎはしないだろうか。

『今日、絶対に決めようと思っていたんです』

なんて敬語で言えば良いという問題ではないはずだ。

ぐったりとした霊幻をソファに寝かせたまま、島崎と芹沢は『超能力バトル』をしながら、罵り合っている。初めて間近で見た戦闘と日々のセクハラに感覚が麻痺していたに違いないと、霊幻は思った。

（……この機会にソファ入れ替えておいて良かった……）

そうでなければソファは粉砕されていただろう。

（まさか、芹沢より島崎の方が激しいとは思わなかった。いや、芹沢は経験値もないし……って、島崎に経験値があるかどうかも分からないけど……）

と、霊幻は現実逃避のように考える。

そして、気付く。

（はたして、今日は終わったのか？）

と。

二人に抱かれたのだから、もうこれ以上、抱かれる事はないはずだ。けれど、はたしてそうなのだろうか？ 目の前で戦いを繰り広げている二人は、一体、何のために戦っているのだ？

「一回ぐらいの先生のお情けで調子乗るなよ、『化け物』がっっ!!」

島崎は両手の人差し指から小指の間に挟んだ八本のナ

イフを同時に投げた。それは八本、十六本、二十四本、三十四本と数を増えていく。芹沢はシールドを展開しているとは言え、そのナイフは常に一カ所のみを狙ってくる。
「……防御壁が、一枚破られる」
言った瞬間、芹沢の周りに展開されていた防御壁がパリンッと音を立てて、弾け飛ぶ。
「爆弾にも耐えるのに……同じ場所を一点で攻撃されるのには向かないようだな。改良の余地がある」
芹沢は手を払い、弾け飛んだ防御壁の破片を、全て島崎に向けて打ち返す。

その戦いをぼんやりと眺めながら、霊幻は考えた。
身体はすでに無理が効かない。手足を動かすのだってままならない。尻は見ていないが、絶対二つに割れている。
それなのに。
こいつらには、気遣いってものがない。
仮にも、「愛おしくてたまらない」という雰囲気で、「あなたなしでは生きていけない」と言いながら、霊幻を抱いたにも関わらず、『気遣い』がない。無我夢中なのは分かるが、『超能力者』の体力でこられては、霊幻の身体がボロボロになる。今は戦闘ではなく、「俺をねぎらうべきではないか、と。
「霊幻さんは俺を受け入れてくれたっ！俺のものだっ！」
「脅して、無理矢理に霊幻先生に無体を働いたくせにっ、何が「俺のものだ」だっ！『化け物』のお前に『人間』の何が分かるっ⁉」
「黙れっ！お前こそ、霊幻さんをボロボロにしたっ！」
「ボロボロ？快楽の海を漂ってらっしゃるだけだっ！それになぁ、おまえの棒ごときで霊幻先生が満足すると、本気で思っているのか、バカめっっ‼」

うん。こいつらの性欲は、全然収まっていない。
芹沢は俺が島崎に抱かれた事を、島崎は俺が芹沢に抱かれた事を嘆いている。
それを払拭するには……うん。また俺を抱けば良いと思ってる。
しかも、日付は、今日。
そう、この後。

(こいつら、バカだ。どうして『超能力者』は極端なんだっ⁉)

いや。

これは……俺も悪い。
　今日一日の自分の行いを顧みた霊幻は、決意した。
（よし、逃げようっ!!）
　決めたら、即実行。霊幻は一気に駆け出すが、戦闘状態を解除した芹沢にすぐ捕まった。
「どうしたんですか、霊幻さん？　元気いっぱいですねー。俺と島崎の二人とセックスしたのに、まだ走れるなんて。さすがは霊幻さんです」
　霊幻を羽交い締めにしながら、芹沢はニコニコとご機嫌に言った。
「言うなっ！　それは言わないでっ！」
「よし、芹沢。そのまま、霊幻先生を離すなよ」
　島崎も戦闘状態を解除し、霊幻の顔を覗き込んでいる。その目は、霊幻の心の中を探っているようだ。
「往生際の悪い霊幻先生も、素敵ですよ。……ですが、我々から逃げたところで、霊幻先生のやらかした事実は決して消えません。諦めた方が、よろしいかと」
　抵抗されるのが嬉しい天邪鬼な性格をしている島崎も、霊幻の姿に嬉しそうだ。
「やらかしたって言うなっ！　こうなったのは、誰のせいだと思ってるんだ？」
「勿論、寛大で聡明な霊幻先生が、私の思いを真正面から受け止めてくれたからに違いありませんよ」
「え？　それって、俺のせいってこと？」
　思わず、霊幻が聞き返すと、島崎は申し訳なさそうに顔を歪めて、首を振った。
「誤解があったのなら、申し訳ありません。私は霊幻先生のご慈悲でこうして、今この場所に存在出来ているのです。その事実を、私は一度だって忘れた事はありません。これ以上、望む事なんて事ありませんよ。私は、あなたの愛に生かされていると言っても、過言ではありません。あなたと出会えた。これ以上の奇跡があるでしょうか？　いいえ、ありません。地球が始まって以来、最大の奇跡かと思います」
「えぇと……その心は？」
「霊幻先生。あんたを、逃がすつもりはない、って事だよ。……お分かりいただけましたか？」
　島崎は不敵に笑った。
「くぅ……っ、不覚っ！」
　霊幻は声を荒げながら、それでも諦めきれずにジタバタと暴れる。現状の霊幻は、芹沢に後ろから拘束され、真正面に立つ島崎に監視されている。霊幻に逃げ場がない。これぞまさしく、四面楚歌。
「お前らの思い通りになってたまるかっ！　俺は、最後まで諦めないっ！」
　力強く、霊幻は声を上げた。

第四章

「今さらですよ、霊幻さん。俺といっぱい愛し合っちゃったじゃないですか」
「今さらですね、霊幻先生。私とあんなに激しく愛し合ったじゃないですか」
二人は同時に言った。それを言われては、霊幻は「違う」と言い返したいが、自信がなかった。正直、セックスしている時は、気持ちがふわふわしていて、記憶が曖昧なのだ。自分としては、かなり男らしいつもりなのだが。どうしてこんな事になったのか、と思うけれど、考えた所で無駄だという事を、霊幻自身理解していた。起こってしまった事実は、変わらないのだ。
(……最早、これまで！)
腹を括った霊幻は、
「くっ……殺せっ！」
霊幻は苦渋の決断を下した。
そんな霊幻に、島崎は呆気に取られた表情を浮かべた。
「……はぁ？あんた、何言ってんだ？」
突然の霊幻の突飛な発言に、島崎はつい敬語を忘れてしまう。
「このまま生き恥を晒す事になるなら、俺はこのまま死を選ぶっ！さぁっ、殺せっ！」
「あー、いや、落ち着けよ、霊幻先生？話、わけ分かんねぇ方に行ってねぇ？」
「うるさいぞ、島崎めっ！俺は、本気だっ！」
島崎は大きく咳払いしてから、口を開いた。
「あなたが本気で言っているのは、オーラを視ればすぐに分かります。……ただ、本気で言っている事が問題でして……」
「御託はいいから、殺せっ！」
「霊幻先生、とにかく落ち着いて下さい。既に我々に尻穴を晒した後なのですから、今更、生き恥などと言っても、意味がないかと……」
「尻穴とか言うなっ！とにかく、殺せ〜〜っっ!!」
「……参ったな。聞く耳持たねぇ霊幻先生も可愛いが……こっちも色々と話したいことがあるのによぉ」
まるで聞く耳を持たず、完全にヤケになっている霊幻の姿に、島崎が困り果て、肩を竦める。その時だった。
「……さん、だ」
霊幻の『殺せ』発言からずっと黙り込んでいた芹沢がポツリ、と何かを呟く。芹沢の声に、霊幻は顔を上げて、芹沢を見上げた。
「芹沢〜〜っ！とにかく、俺を殺せ〜〜っ！」
一際、大声を上げて訴える霊幻に、芹沢は目をキラキラと輝かせて、霊幻を見つめた。

『『くっころさん』じゃないですか～～!!霊幻さんって『くっころさん』だったんですね～～っっ!!」

「……ふぇっ？」

さすがの霊幻も、今にも踊り出しそうな雰囲気の芹沢の様子に、霊幻は一瞬で冷静さを取り戻した。

「なぁ、芹沢。その『くっころさん』って何？」

「エロマンガとかによく出て来る『くっ、殺せ！』っていう人の略称ですっ！うわぁっ！本当に実在するなんて、夢みたいですよ～！しかも、霊幻さんが『くっころさん』だなんて……嬉しすぎます、俺っ！」

「芹沢のバカッ！俺が本気で死を覚悟してるっていうのに、エロマンガとは何事だっ！」

「そうです！『くっころさん』は、本気で死を覚悟してるんですっ！霊幻さん、わかりみが深いですっ！」

「芹沢は、ネットを見過ぎだっ!!ネットでそんなのばっかり読んでたら駄目だろっ！」

「失礼ですよ、霊幻さん。俺が見てるのは『美人上司もの』だけです。人を節操なく、何でも見てるような言い方しないで下さい」

「相変わらず、怒りの沸点低いな、芹沢っ！でもなぁ、『くっ、殺せ』っていう美人上司がいるかっ！それ、ファンタジーもののエロマンガだろっ！」

「ファンタジーの美人上司ものですっ！今の『くっころさん』は幅広いんですっ！多様化が進んでいるんです！」

「多様化の意味も知らないで、多様化を語るなっ!!」

芹沢と言い争っていた霊幻はふと気が付いた。

（あれっ？俺、今、自由じゃん！よっしゃ！今の内に逃げるぞっ！）

芹沢が興奮のあまり、いつの間にか霊幻の拘束を解いてしまっていたようだ。いつの間にか自由になっている事に気が付いた霊幻は、考えるよりも先に走り出した。

「あっ！霊幻さん、逃げたらダメですよっ！」

芹沢の手が、霊幻に向かって伸びてくる。この手に捕まれば、もう逃げられない、と霊幻はすぐに勘づいた。

瞬間、

「芹沢っ！ステイッ!!」

霊幻の命令に、芹沢はピタッと動きを止める。その僅かな隙を見逃す霊幻ではない。霊幻は、芹沢の横を擦り抜け、ドアの一つに向かった。

ガチャッ！バタンッ！

素早くドアを開け閉めして、中に滑り込む。

場所はトイレだ。人が一人、入るのがやっとの狭いトイレに入った霊幻は、素早く鍵を掛け、トイレの便座を開けた。狭い空間に、霊幻はホッと一息吐く。

瞬間、

トントン

トイレのドアを誰かがゆっくりと叩いた。霊幻は大きく息を飲む。

「霊幻さん。どうしたんですか？……ねぇ、霊幻さん。島崎が嫌で逃げちゃったんですよね？別に、俺から逃げた訳じゃないですよね？俺達、あんなに愛し合ったんですから、俺から逃げた訳じゃないですよね？」

芹沢の不安そうな声に、霊幻は「違うぞ、芹沢」と言いそうになって、口を噤んだ。

（……って、ダメだっ‼思い出せ、俺っ！こうやって、芹沢に何度騙されたっ⁉芹沢のその大型犬特有の穏やかそうな雰囲気に誤魔化されるなっ！犬が意外と計算高いんだ……っ‼）

犬という生き物は、自分が可愛いのを知っている。どうすれば許してもらえるのかも、よく知っている。ただ、忘れてはいけないのが、犬という生き物は、元を正せば全て『猟犬』であり『狼』だという事だ。一度、獲物と認識したものを執拗に追跡し、何処までも、追い詰める。

「やめろ、芹沢っ！」

咄嗟に霊幻が声を上げると、芹沢が大きく息を飲んだのが聞こえた。

「芹沢……今、俺に無断で、勝手に超能力で鍵を開けようとしただろう？」

霊幻の言葉に、芹沢は「うっ」と言葉を詰まらせる。気まずい雰囲気の芹沢に、霊幻は「やっぱり」と確信した。芹沢は幼い頃からずっと引きこもった後、よく分からないままテロリストに転身したせいか、芹沢の善悪の判断は一種独特だ。霊幻に関しては、特に善悪の境界線が酷く曖昧になる。

「それはダメだぞ、芹沢。超能力は人に使っちゃいけないって、教えただろ？」

「でも、俺は人じゃなくてトイレの鍵に使おうとしたので、全然セーフだと思います」

「芹沢っ、それは屁理屈って言うんだっ！それを言い出したら、何でもオッケーになるだろっ！」

「でも、それを言ったら、霊幻さんだって一緒じゃないですか。島崎に流されて、霊幻さんはアナルさんをいじられて、俺のチンポをアナルさんに突っ込まれて、島崎にもアナルにチンポを突っ込まれた事実を、トイレに立てこもって、なかった事にしようとしてますよね？」

「う……うるさいっ！しょうがないだろっ！俺だってさぁ、色々あるんだよっ！」

泣きそうになった霊幻は、思わず声を荒げる。トイレの外から、芹沢は慌てたような気配が伝わってくる。

「ああ、ごめんなさい、霊幻さん。俺は別に、霊幻さ

んを責めてるわけじゃないんです。ただ、事実を言っただけなんです。霊幻さんは、チンポをいじられるよりも、アナルをいじられる方が好きなやらしい人だって、俺はそれが言いたかっただけなんです」
「余計悪いだろ、その言い方っ！」
「でも、事実ですよ。自分のアナルを受け入れるべきです、霊幻さん。霊幻さんのアナルは、とってもやらしいんです。島崎にアナルをいじられて感じちゃったのはしょうがないと思います。やらしいアナルを認めて、褒めてあげて下さい」
「覚えたからって、アナルばっかり連呼するなっ！」
「でも……」
「退け、芹沢」
尚も言い募ろうとした芹沢の言葉を遮り、島崎の声が聞こえてきた。
「霊幻先生、出て来て下さい。無駄な抵抗ですよ。芹沢の言葉通り、事実は変わりませんよ」
「おのれ、島崎っ！」
声を荒げる霊幻に、島崎は楽しげに笑う。
「私の能力が何なのか、もちろん霊幻先生はご存じだと思いますが？ですが、そのような実力行使に出たくはありません。霊幻先生、投降して下さい」
「中にテレポートして来るつもりなら、テレポートして俺を捕まえてみろ！」
「おや？霊幻先生にしては、潔いですね」
意外そうに呟く島崎に、霊幻は「チッチッチッ」と舌を鳴らした。
「俺は今、トイレの便座を開けた。トイレの広さを考えれば、島崎はトイレの便座の上にテレポートするしかないだろう。今、島崎がテレポートすれば、トイレの中に足を突っ込む人になるぞ!!どうだ、トイレに足を突っ込むのは、嫌だろうっ!?」
確信を持って霊幻が言い放つと、島崎の困惑する声が返ってきた。
「え？いや、それは別に構わないですが……。そもそも、トイレの縁に立ちますし……」
「なら、テレポートすればいいいっ！事務所のトイレを舐めんなっ！本気で狭いんだからなっ！天井だって低いから、間違いなく頭をぶつけるぞ！」
「……なるほど。現場の状況はよーく理解しました。つまり、私がトイレにテレポートするのは非常に難しい、と先生はお考えなんですね」
「その通り。よく分かったな、島崎。テレポートで何処でも行けると思ったら大間違いだっ！お前は例え欧州に行けても、事務所のトイレには転移出来ない！」
「ですが霊幻先生。おっしゃっている事は、もっともですが。いつまでトイレに閉じこもっているつもりですか？そのトイレ、窓もないですし、他に逃げ場がないじ

ゃないですか。まぁ、窓があったとしても二階ですし、脱出は不可能と言っても過言ではないでしょうね。霊幻先生は、次の一手は考えておられるのですか？私としては、霊幻先生が勢いでトイレに飛び込んだようにしか思えませんが」

　クスクスと、島崎は楽しそうに笑う。島崎の言葉はもっともだった。霊幻は特にこの先を考えている訳ではなかった。それでも、霊幻は諦めるつもりは毛頭ない。

「こうなったら、根比べだっ！お前らがトイレに行きたくなって、事務所から出て行くまで、俺は断固、ここから動かない！」

「いえ、霊幻先生、それは……」

困惑する島崎の声を遮ったのは、芹沢だった。

「すっげーっす、霊幻さん。そこまで考えてるなんて……俺、感動しました」

「当然だ。俺が、ただ流されているだけの男と思うなよ。俺は一度、死を選んだ。そう簡単に諦めてたまるか」

　霊幻は決意を込めて、握り締めた自分の拳を見つめる。

「でも、俺が我慢出来ません。『くっころさん』の霊幻さんと、またエッチな事がしたいです。ねぇ、霊幻さん。俺とセックスした霊幻さんはとても気持ち良さそうでしたよ？なのに一体、何が気に入らないんですか？」

「私情を抜きにして、私も激しく同意します。私の腕の中にいた霊幻先生は、非常に美しく咲き乱れていました。何も不満に思う事などないと、私は見受けましたが。なのに何故、そのように私を試すような真似をするのですか？」

　口々に言われて、霊幻は言葉に詰まる。

（そりゃあさ。ハッキリ言っちゃえば、気持ち良かったよ。……でもさ、それとこれとは、話が違うんだ！これは、俺の男としての誇りをかけた……『戦い』だっ！）

　揺らぎそうな自分の気持ちに、霊幻は気合いを入れる。

「えぇいっ！うるさいっ！とにかく、これは引けない『戦い』なんだっ！男の矜持って奴なんだ」

　霊幻は声を荒げる。

「俺は負けないっ！例え、負けたとしても、俺は最後の最後まで戦い抜くんだっ！」

　更に霊幻は続ける。

「きっと俺の勇気は、後世にまで語り継がれる筈……！……、……んんっ？んー？」

　ふと、霊幻は気が付いた。二人から何の反応がない事に。気のせいか、気配すら感じない。まるで、誰もいないようだ。

「あ……あれ？二人とも？おーい？」

　霊幻がいくら呼びかけても、二人から返事はなかった。

審判

「愚かな」
冷たく言い放ち、モブは二人の超能力者を念動力で壁に叩き付ける。メキメキ、と何かがひしゃげる音がするが、モブの心にはまったく届かない。相手が傷付くことなど気にする事なく、力を込めていく。
「無様な姿ですね、お二人とも」
言って、モブは二人の超能力者、芹沢と島崎を見下すように口角を上げる。
芹沢からモブに向かってエネルギー弾が放つ。モブはそれを避けようともしない。エネルギー弾はモブの身体に近付くとそのままブーメランのように軌道を変え、芹沢に向かっていく。モブはそのエネルギー弾を後押しするように力を込める。着弾した瞬間、芹沢の身体をコンクリートの壁にめり込む。グシャッと何かが破裂したような、へしゃげたような音がした。
「がはっ！か、影山君……何を……」
「影山『君』？……影山『先輩』ですよね、芹沢さん？いつから、あなたはそんなに偉くなったんですか？」
髪の毛の逆立ったモブの顔には影が落ち、表情が見えない。モブの目の部分だけが、不気味に赤く光っている。
それは、突然起こったのだ。
あと少しでトイレに立てこもった霊幻を引っ張り出せそうなタイミングで、気配もなく、音もなく、突然、強い力で強制的に外へと引っ張り出された。気付けば、二人ともゴミ捨て場の壁に叩き付けられていた。「何事か」と、強い力の方角に視線を向ければ、ゴミ捨て場の前には『影山茂夫』。霊幻が『モブ』と呼んでいる少年が俯き加減で立っていた。背中に焔を背負うように超能力を纏い、その足下は地上からほんの数センチ浮いていた。
相手が子供だからと手を抜くような良識を持ち合わせていない芹沢は、何の躊躇いもなく、モブに攻撃を加えようとしたが、一瞬で壁に叩き付けられた。壁から抜けようと力を込めた拍子に肺が圧迫され、芹沢は血を吐き出す。そして、どういう力の使い方をしたのか、芹沢の背中はコンクリートに張り付いたようになって、まるで動かない。
「まさか、こんなに力の差があるなんて……」
なす術のない圧倒的なモブとの実力差に、芹沢は悔しそうに歯ぎしりする。
「嘘だろ……まさか、テレポートが出来ないなんて……」

壁にめり込んだ芹沢の横で、信じられない、と言わんばかりに島崎は呟いた。島崎の身体は既に、半分以上がコンクリートの壁に埋まっていた。芹沢と違い、島崎の周囲の壁にヒビや穴はない。最初、突然現れたモブの攻撃を避けようと咄嗟に島崎がテレポートした際、座標をねじ曲げられて、コンクリートの壁の内部に強制転移させられたのだ。そのまま島崎は、コンクリートに埋まってしまう。先程から、何度もテレポートを試みているが、強い力にジャミングされて、テレポートが全く発動しなくなってしまっていた。アポートも同様で、別の場所に格納している武器を呼び出せなくなっている。こうなっては、テレポーターの島崎は全く手も足も出ない。島崎は忌々しげに舌打ちする。

「化け物……いいや。君の事は、『希少種』とでも表現した方がいいかもしれませんね。よくもまぁ、そんな巨大な力を持ったまま、正気を保っていられるものだ。霊幻先生の素晴らしき教育の賜物でしょうね、きっと。本当に、素晴らしいお方ですよ、霊幻先生は」

島崎が呟くと、モブは赤くポッカリと空いた目で、島崎をギロリと睨み付けた。

「……師匠の事を、お前が語るなっ！」

モブが言い放った瞬間、島崎の身体が更にコンクリートの中にずぶずぶと沈んでいく。

「お前達、師匠をいじめたな。師匠をいじめて、タダで済むと思うなよっ！」

モブは大人二人の『超能力者』を怒鳴りつける。自分自身抑えきれない『怒り』がモブの中に湧き上がる。

（やっぱり、師匠は困っていたんだ……っ!!）

中学生とは思えないモブのプレッシャーが、見る見る内に増していく。そのプレッシャーだけで、身体は少しずつ壁にめり込んでいく。

「誤解だよ、影山君……いいや、影山先輩。俺が霊幻さんの事、いじめる訳ないだろ」

「誤解ですよ。尊敬し、敬愛する霊幻先生を私がいじめる訳、ないじゃないですか」

二人はほぼ同時に抗議の声を上げた。

しかし、「黙れ」の一言で返される。

それから、モブは首を振った。

「もういい。口を開くな。……お前達はそこで反省でもしてろ」

モブは壁にめり込んでいる二人をゴミ捨て場に放置すると、そのまま事務所へと向かった。

† † †

「お、おーい？無視？無視とか、酷くない？」
急に返事がなくなり、霊幻は不安の声を上げる。それでも、芹沢からも島崎からも、返事がない。
「ど、どうしよう……」
不安に駆られた霊幻は、トイレのドアを開けようかどうしようか悩む。
その時だった。
「師匠？師匠、何処にいるんですか？」
「……え？モブ？モブか？俺はトイレにいるっ！」
「小ですか？大ですか？」
「……モブ、デリカシーっ！……もういい。あのな、俺は今、瞑想の為にトイレに立て篭もってるんだ」
「そうですか、お疲れ様です。お茶淹れますね」
壁越しにモブは言うと、トイレの前から離れていく。
霊幻は、
「なあ、モブ。事務所に誰かいるか？……芹沢とか……えっと、お客さんとか？」
と言った。
（まさかと思うが、モブの『偽物』って事はないよな？）
島崎が声真似しているとか。
不安に思った霊幻は、モブに尋ねる。
「モブ……好きな飲み物は？」
「？師匠……？僕の好きな飲み物、忘れちゃったんですか？」
「……俺は今、色々あってな。モブが本物だという確信が欲しいんだ……」
「師匠……傷付いているんですね？……チッ、海にでも沈めれば良かった」
「ん？モブ？何か言ったか？」
「いいえ、師匠。僕の好きな飲み物は牛乳で、尊敬する人は、師匠ですよ」
モブが言うと、霊幻はトイレの中で沈黙した。急に静かになった霊幻が心配になり、モブはトントンとトイレのドアを叩く。
「罠だっ！モブが俺を尊敬するはずないっ!!」
「師匠、完全に人間不信ですね。……これは、やっぱりあの人達ブロッコリーと一緒にするべきだった」
「ああ、携帯電話はテーブルの上だし……モブに連絡も……いや、モブを巻き込む訳にもいかない」
霊幻はブツブツと呟く。モブはトイレの壁に耳を付けて、霊幻の言葉を聞き取る。
「……僕が子供の頃に描いたチューリップの絵が、事務所に飾ってあります」
モブが言うと、ガチャッ、と大きな音を立て、半泣きの霊幻が飛び出してきた。
「モブーーッッ!!ラーメン食いたいっ!!日常を取り戻

したいーーーっっ!!」
「はい。チャーシュー追加で。今日は『モブさま』の奢りですよ」
「いいって、俺が払うよ」
「報酬は、すでにもらってるじゃないですか」
「モブ～～っ!!……あのさ……モブ。俺ってどこか……その……変わっちゃったかな?」
霊幻は神妙な面持ちで尋ねた。モブは霊幻が何を言っているのか分からず、目を瞬かせ、それからジーッと霊幻を見つめる。
「……特に、変わったところはないと思いますけど。あ、新しいアロマオイル作りましたね?リラクゼーションに使うんですね!?」
「違うっ!『呪術クラッシュ』だっっ!!」
「はいはい。ほら、師匠はまるで変わってませんね。じゃあ、ラーメン食べに行きましょう」
久しぶりに訪れた日常に、霊幻は腕を伸ばし大きく伸びをする。スーツの上着を羽織るとネクタイを締める。霊幻は久しぶりにネクタイを締めたような気がするし、モブとたこ焼きを食べたのも、本当に昔のように思えるが、どちらもごく最近の出来事だ。ネクタイに至っては、朝は確かに締めていたはずだ。
(今日は本当にひどい一日だった……いや、ひどいだけじゃなかったのかもしれないけど……でも、ひどかったか……。あーあ、俺がセックスしちゃうっていうか、されちゃうなんて。あ、……そう言えば、あいつら何処行ったんだ?)
考えるけれど、頭の中は『?』マークでいっぱいだ。
「……また喧嘩でもしに行ったのかな?」
事務所の中で戦われないだけましか。
なんて、霊幻は思って、モブと連れだって事務所の階段を下りる。いつものようにゴミ置き場のある方角に向かおうとすると、モブが反対を指差した。
「こっちに美味しいラーメン屋さんが出来たって、聞きましたよ。師匠、行ってみましょうよ」
行きつけのラーメン屋はあるけれど、いつもそこに行っているわけではない。珍しくモブが自己主張してきたこと、自分が変わっていない事に霊幻は嬉しくて、何の疑問も持たず、モブの後を付いていく。
久しぶりに食べたラーメンに、霊幻は、『俺は何処でも暮らしていけるかも』なんて強気なことを考えた。

† † †

「そう言えば、モブ。『モテ期』どうしたんだよ～?」

霊幻は弟子をからかってやろうと、ニヤニヤしながら尋ねた。きっと、モブの『モテ期』は儚く消えているだろう。思春期なんてそんなものだ。
「ああ、『モテ期』ですか？今年の『モテ期』は終わりましたよ」
「今年の……『モテ期』？」
「はい。今年の『モテ期』です。また来年も『モテ期』のビッグウェーブ来ますよっ！寄せては返す波のようにっっ!!」
「……ま、毎年来るのか？」
「もちろん。『モテ期』から逃れる事なんて出来ませんよ、師匠」
「えっ？逃げる方法ないのかっっ!?」
それは困る。現在進行形で『モテ期』の場合はどうすればいいのか？
霊幻は答えを聞くのが怖いと思いながら、モブに尋ねた。
「師匠。もしも、師匠の年齢で『モテ期』が来たとしたら……逃れる事は出来ません。きっと、ずっと『モテ期』ですよ。良かったですねっ、師匠！」
「……い、いや……まだ『モテ期』と決まったわけじゃ……」
「いいえっ！『モテ期』と思った時が『モテ期』ですよっ!!僕も『モテ期』来たっ!!って分かりましたもんっ！」
いつになく感嘆符を多用するモブに、霊幻は乾いた笑いを浮かべる。事務所の側までやってくると、霊幻は事務所の明かりを消していないことに気付く。
霊幻は、モブと事務所の前で別れる事にした。
「じゃあ、今日はありがとな、モブ。ご馳走さまっ！」
「こちらこそ。結局、チャーシューいっぱい追加してもらっちゃったし。また何かあったら呼んでくださいね」
そう言って、モブは霊幻に頭を下げると、ゴミ置き場のある道を真っ直ぐに歩いて行く。モブの背中が見えなくなるのを待ってから、霊幻は事務所への階段を上ろうとした。

その時。
「……霊幻先生」
「……霊幻さん」
と、自分を呼ぶ声に気付いた。
どこからだろう、とキョロキョロしていると、
「ゴミ置き場です、霊幻先生」
「ゴミ置き場にいるんです、俺」
と、声がする。

「えっ!?ゴミ置き場っ!?」

霊幻が慌ててゴミ置き場に駆け寄ると、ゴミ置き場のコンクリートにめり込んだ島崎と芹沢がいた。島崎はすっかりコンクリートに埋まっていて、芹沢はコンクリートにめり込んでいた。

「二人ともどうしたっ!!怪我はないかっっ!?」

霊幻は二人の側に膝を付く。島崎は怪我こそないが、コンクリートに身体が半分埋まっていて息苦しそうだ。芹沢は大怪我をした後に、超能力者特有の自然治癒で治ったのか、服にべったりと血が付いていた。

「霊幻先生。……お恥ずかしい話ですが、テレポートも出来なくて……」

「霊幻さん。怪我はないんですが……コンクリートが張り付いて取れないんです」

「……だから喧嘩はやめろって言っただろ?人の忠告も聞かないで、馬鹿だな、お前達」

霊幻は言うと、二人の頭を撫でた。「そうじゃないんだけど」と、言いたい二人だったが、霊幻に頭を撫でられてた事が嬉しいのと、霊幻の弟子に『こてんぱんに負けた』とは言えず、口を噤む。

「お前ら、本当に……どうしようもないな。そのくらい、大人しくしててくれると良いんだけどなぁ……」

言いながら、二人の頬をツンツンと突く。

「私は、そんなに手間の掛かる男ではありませんよ、霊幻先生?」

「俺だって、霊幻さんの言うこと聞いていい子にしてますよ?」

「はいはい。喧嘩してコンクリートから抜け出せなくなってるヤツらが何言ってるんだ。バーカ」

「……言葉もありません、霊幻先生」

「……ごめんなさい、霊幻さん」

「ちょっと待ってろ?まったく……」

言いながら、霊幻は何故だか嫌な気がしない。

「あーあ、島崎。髪の毛ぐちゃぐちゃだぞ?」

霊幻は言うと、島崎の髪を丁寧に整えるように、髪を撫でる。

「芹沢は……血で汚れちゃったな」

霊幻は、顔に付いた血の跡を指で拭ってやる。

「手が汚れますよ、霊幻先生?」

「血が付いちゃいますよ、服が汚れるかも。霊幻さん」

「ああ、あんまり気にならないから大丈夫だ……、う～ん、……セックスしちゃったからかなぁ?」

「霊幻先生っ！」
「霊幻さんっ！」
二人は嬉しさにコンクリートに埋まっている事も忘れ、無理に動こうとして、「ぐっ」と痛みに顔を顰める。
「すぐ助け呼ぶから待ってろよ」
霊幻は言うと、携帯電話を取りだした。
「あっ、モブ？うん、俺。悪いんだけど、ちょっと来てくれる？さっきの今で悪いな。ああ、事務所前のゴミ置き場。……おう、よろしくな。」
電話を切ると、島崎と芹沢の側のコンクリートに腰を掛ける。
「モブ、すぐ来てくれるってさ」
「そうですか……影山茂夫ですか……」
「影山くん……じゃなかった……影山先輩ですか」
程なく、モブが姿を見せる。
「モブ、こいつらコンクリートから出してくれるか？」
「……放っておけばいいんじゃないですか、大人なんだし。自分で何とかしますよ」
モブは言って、蔑むような目で二人を見る。そんな『思春期』のモブに霊幻は苦笑いして、
「大人になってもさ、どうにもならない事があるんだよ。」
と言った。
「モブ～。頼むよ、二人とも悪い奴らだけど、良い奴らだからさ」
霊幻は笑いながら、両手を合わせると、悪戯っぽくウインクする。絶対にモブに断られるとは考えてもいない表情だ。
「もう、しょうがないなぁ……師匠は。ちょっと離れて下さい」
モブはそう言って、コンクリートに埋まった二人に手をかざす。
コンクリートごと二人を持ち上げると、思い切り地面に叩き付ける。

ガンッ、ガンッ

「モ、モブ……さん？」
「師匠。今のコンクリートは丈夫ですね。でも、あと何度かで壊れそうですよ」
コンクリートの塊を建物の二階の高さまで持ち上げる

と、手を払うようにして思い切り地面に叩き付ける。

ガンッッッッッ

コンクリートが地面に思い切り叩き付けられ破片が弾け飛ぶ。けれど、破片は一つとして霊幻の元には届かない。勢いとは裏腹に、破片は地面に落ちることなく宙に浮いている。

「おーい、モブ。音は大丈夫なのか？」

「はい。音はしません。あとでコンクリートも元に戻します。あと、『超能力者』なら痛くない程度です」

「あ、そうかー。じゃあ、思いっきりやっちゃって。こいつら、『超能力者』だから大丈夫だ」

「はーい。じゃあ、次で仕留めますねっ！」

「仕留めるって言ってますよ、霊幻先生」

「霊幻さん。殺す気ですよ」

「大丈夫だって。お前ら強いんだから。モブだって大丈夫だって言ってるだろ？」

霊幻はハハハッと笑う。

そんな霊幻の隣りで、モブは、

「師匠に意地悪するからこうなるんだ、反省しろ」

と冷たく言い放ち、コンクリートの塊を空にまで持ち上げ思いっきり地面に叩き付けた。

すると、コンクリートは呆気なく割れて、島崎と芹沢は、ゴミ置き場に転がった。

「なるほど……いつでもコンクリートを壊せたのに、痛めつけるためだけに強度を増していたとは……」

「うう……参考になる戦い方だけど……えげつない……」

霊幻は放り出された二人に駆け寄ると、「もう喧嘩は止めろよ」と笑って言った。

「おっ、こうなると俺の勝ちって事だな。俺がいなきゃ助からなかったわけだしな。感謝しろよ、感謝」

「霊幻先生に出会えたことに感謝してますよ」

「霊幻さんに会えなかったら、今の俺はいませんよ」

「うんうん、分かれば良いんだけどさ」

と、霊幻は上機嫌に笑った。

コンクリートからようやく解放された二人は『影山茂夫』だけは怒らせてはいけない、と心に刻みつけた。

芹沢克也の仕事

（一、二、三、四、五……）
芹沢は一つ一つ、悪霊の数を丁寧に数えていく。
室内には、悪霊が複数飛び回っている。柱の影には今回の除霊を依頼した依頼人が隠れていて、目の前を飛び回っている悪霊の姿を見て「ひぃぃぃぃっ！」と悲鳴を上げている。
（こんな時、可視化能力は便利だ。依頼人に悪霊を見せれば、後で騒がれずにすむ。俺は霊幻さんみたいに口が上手くないから、見せてしまうのが一番手っ取り早い）
芹沢の持つ超能力の一つである『可視化』のおかげで、除霊のクレームが圧倒的に減った。以前は、悪霊が見えない事をいい事に「悪霊なんていないのに、人を騙して金を取るつもりか」と難癖を付けてくる悪質な客もいた。見えないならば、と悪霊を可視化してやれば、すぐに客は金を支払って逃げていったのだ。以来、除霊に行った時は、まず芹沢が悪霊を可視化してから除霊している。
考えている間も、悪霊を攻撃を避けながら、芹沢は悪霊の数を数える。
（六、七、八、九……、ん？この悪霊、さっきも数えたか？まあ、いい。十体以上はいるだろう。でもなぁ……もう少し、数えるか）
芹沢は再び、一から悪霊を数え始める。実はこれも、演出の一つだ。芹沢の実力なら、悪霊の数がどんなに多くても、全く何の問題もなく倒せてしまうのだが、あまり呆気なく倒しても「大した霊じゃなかったんじゃないのか」と難癖を付けられる。ある程度、除霊を長引かせるのも大切なので、芹沢は初めの内は攻撃しないで避けて、苦戦している風を装うのだ。悪霊と戦っているように見せるのはいいのだが、何せどんな悪霊も芹沢の敵ではないので、正直に言って、暇だ。そこで芹沢が編み出したのが、『悪霊の数を数える』だった。これなら、芹沢が退屈しないし、悪霊の数を数えている姿が、何か難しいことを考えているように見えるので、とても効果的だ。
（よし、そろそろいいだろう）
そう判断した芹沢は、超能力を発動した。
瞬間、十体以上いた悪霊が爆発し、消し飛んだ。芹沢は既に、悪霊の数を数えながら、悪霊に超能力で具現化した小型の爆弾をつけていたのだ。
突然消え去った悪霊に、何が起こったのか分からないで呆然とする依頼人を見た芹沢は、
「これで除霊終了しました」
と、言った。

†　†　†

「これでお金が稼げるなんて、ボロい商売だよなぁ」
受け取った報酬の入った封筒を手に、芹沢は呟いた。除霊に感動した依頼人が、多めに除霊代を現金で払ってくれたのだ。
（前は霊幻さんと一緒に除霊に行けたから楽しかったけど……しょうがないよな。最近、事務所が忙しいから）
引っ越してからの『霊とか相談所』は開店休業状態がずっと続いていたが、最近の事務所は以前の忙しさを取り戻し、除霊は基本的に芹沢が一人で全てこなしていた。
霊幻が事務所で客の話を聞いて、霊が本物かガゼかを判断して、芹沢に一日の除霊件数を割り振り、芹沢は実際に現場に行って除霊をする。芹沢が除霊で外回りしている間に、霊幻は事務所で『お祓いグラフィック』や『呪術クラッシュ』をしていて、芹沢が一日の除霊を終えたら、霊幻も仕事を終わりにして、一緒に事務所を閉めて帰る。
『霊とか相談所』の一日の流れは、大体いつもこんな感じだ。
ただ今日は少しだけ、霊幻の予測よりも悪霊の数が多かった。悪霊一体という話だったのに、どういう訳か悪霊が十体以上いたのだ。その分、時間がかかってしまった。
芹沢は少し早足で『霊とか相談所』に戻った。
（これで、俺の仕事は終わりだ。これからは、俺の使命が始まる）

†　†　†

「霊幻さん。その箱に触らないでください」
事務所に戻った芹沢は、机に置かれた箱に触ろうとしている霊幻を止めた。「え？」不意に声をかけられた霊幻は手を止めて、顔を上げる。芹沢は霊幻の前に立ち、箱に手をかざし、エネルギー弾をぶつけた。瞬間、箱の中に潜んでいた悪霊が金切り声を上げて、箱ごと消滅した。もし、霊幻が触れていたら、悪霊が霊幻に取り憑いていただろう。
「……、もしかして、ヤバい奴だった？」
消えた箱を呆然と見つめていた霊幻が芹沢を見上げると、芹沢は「はい」と大きく頷いた。
「箱の中には悪霊が入っていました。霊幻さん、この箱はいつからここに？」
「……それが、分からないんだ。気が付いたら机に置

いてあったから、開けてみようとしたら、芹沢が帰ってきたんだ。ありがとう、助かった」
「これぐらい、当然です。霊幻さんを守ることが、俺の『使命』なんですから」
言って、芹沢は霊幻を安心させるように笑いかけると、箱の置いてあった場所を睨み付ける。机にはまだ、悪霊の残滓が残っている。
「きっと、これは霊能力者の仕業だと思います。さっきも、俺の除霊に行った場所に悪霊がたくさんいたので、足止めのつもりだったんだと思います」
「でも、どうしてこんなことを？」
わざわざ悪霊を送り込む理由が分からない霊幻が首を傾げていると、芹沢の顔が不機嫌に歪む。
（こいつは霊幻さんを狙ったんだ。許せない）
箱を見た時、芹沢は箱から霊幻に対する悪意をしっかりと感じ取っていた。
「う～ん……いたずらにしては、悪質だな。俺は芹沢が助けてくれたからよかったけど、普通の人だったら、危なかったよ」
まさか自分が狙われているとは思っていない霊幻は、呑気に呟いた。
「関係ないです。霊幻さんに危害を加えようとしたんですから、こいつは悪い奴です」
芹沢は霊幻の手を掴むと、歩き出した。

「行きましょう、霊幻さん」
「え？ どこに？」
「悪霊を送りつけてきた奴のところです。また悪霊を仕掛けてくる前に、さっさと駆除してしまいましょう」
「おいおい、虫みたいな言い方だな。……って、居場所分かるのか？」
まるで場所が分かっているような芹沢の口ぶりに、霊幻が聞くと、芹沢は大きく頷く。
「悪霊の残滓がずっと続いていますから、場所は分かります。わざわざ待ってる必要はないので、こっちから出向いてやりましょう」
芹沢の言葉に、霊幻は「そうだな」と頷いた。
「誰かが被害に合う前に、さっさと解決した方がいいに決まってる。行こう、芹沢」
芹沢と霊幻の二人は、悪霊の送り主の元へと向かった。

† † †

「なぁ、芹沢。こんな所に、悪霊を送りつけてきた霊能力者がいるのか？」
芹沢の案内で辿り着いた場所は、古びた洋館だった。
老朽化が進んでいて、人が住んでいるようには見えない。

霊幻が尋ねると、芹沢は大きく頷く。
「ここで間違いありません。強い悪意をこの中から感じます」
迷うことなく頷いた芹沢を見て、霊幻は、
「大体、悪い奴は古びた洋館にいるのが定番だもんな。じゃあ、芹沢。中に入って確認しよう」
と言った。
「待ってください、霊幻さん」
歩き出そうとした霊幻を芹沢は呼び止めると、霊幻は足を止めて、芹沢を振り返った。
「どうした、芹沢？」
「気配がおかしいです。これは……下がった方がいいかもしれません」
言いながら、芹沢は霊幻に気付かれないように、超能力を発動させる。途端に、空が暗くなる。「あれ？」霊幻が空を見上げると、驚きに大きく目を見開いた。
「え？えぇっ？空に、足？」
霊幻の視線の先、洋館の真上に、巨大な人の足が浮かんでいた。突然のことに何が起こっているのか、霊幻には全く分からない。
その時、巨大な人の足が動いた。
ドオォォォォンッ!!
轟音を立てて、巨大な人の足が、古びた洋館を踏み潰した。一度だけではなく、二度、三度と何度も洋館を踏み潰す巨大な足に、呆然と立ち尽くす。その時、霊幻の身体がグイッと引っ張られる。
「霊幻さん、危ない！」
霊幻を抱き寄せた芹沢は、飛んできた瓦礫を消し去る。同時に、芹沢は超能力を解除して、具現化した巨大な足を消し去った。
「大丈夫ですか、霊幻さん？」
「……大丈夫だ。ありがとう、芹沢」
霊幻は芹沢に寄り掛かりながら、崩れ去った洋館のあった方を見つめる。
「今の足……何だったんだ？」
呆然と呟く霊幻に、芹沢は首を傾げてみせる。
「さあ？ただ、あの足からは、強い怒りを感じました。ここにいる霊能力者は相当恨みを買っていたのかもしれませんね」
芹沢の言葉に、霊幻は「そうみたいだな」と納得したように頷いて、崩れ去った洋館を見つめていると、砂煙の向こうに、人影が見えた。
「霊幻さん、下がってください」
言って、芹沢は霊幻の前に庇うように立つ。霊幻も芹沢に言われた通り、一歩後ろに下がった。
「霊幻先生、こんにちは」

「あれ？　その声は、島崎？」
聞き覚えのある声に、霊幻は思わず島崎の名前を呼んだ。霊幻の言葉通り、砂煙から島崎が姿を現した。島崎の手は、誰かを引きずっている。
「このような古びた洋館の跡地で、霊幻先生にお会いできるなんて……私達はやはり運命の糸に結ばれているのでしょうね。非常に喜ばしい限りです」
「そんなこと言って……。いつも会ってるだろ？」
「会っている会っていないの問題ではありませんよ。大切なのは、今の、この瞬間なのですから。私は霊幻先生に会えて嬉しい。この気持ちを大切にしたいですね」
相変わらずの大げさな島崎の言い方に、霊幻は困ったように笑う。ふと、霊幻は島崎が引きずっている誰かを指さした
「……そう言えば、そいつは誰？　どうしたの？」
霊幻の言葉に、島崎は自分の手元を見て、思い出したように「あぁ」と声を上げた。
「こいつは、元『爪』に所属していた『超能力者』……ではなく、『霊能力者』の残党ですよ」
『『霊能力者』？　『爪』なのに？　『爪』って、『超能力者』にこだわりがあるんだろ？　なのに霊能力者って……」
霊幻は驚きに目を見開き、思わず聞き返すと、島崎は大きく頷いた。
「数は少ないですが、超能力者と称して、霊能力者も何人か所属していたのですよ。こいつも、その一人です」
「へぇ……実は、俺の知り合いにも元『爪』の霊能力者がいるんだけど。第七支部の……」
「ご安心下さい。第七支部の者ではありません。違う支部に所属していた霊能力者ですよ」
島崎は霊幻に向けて、掴んでいる人の顔を向けた。霊幻が見た顔は、確かに全く知らない人間だった。
「……よかった。変な奴だけど、何度か助けてもらったことがあるからさ」
霊幻が安堵の息をそっと吐き出した時、芹沢の手が、島崎の胸ぐらをガシッと強く掴んだ。
「おい……何で、そいつを殺さなかった？」
島崎は芹沢の手を振り払う。顔は笑顔だが、不機嫌そうだ。
「何故？……こいつには色々と聞きたいことがあるからに決まってるだろ」
「ふざけるな。生かしておく意味はない」
「やれやれ……短絡的思考だ」
「霊幻さんを危ない目にあわせる奴は、全員容赦する必要はない」
「単細胞生物が。こいつに他の『爪』の残党のことを聞き出して、全て処理をした方が、霊幻先生に危険が及ばないだろう。それが何故、分からない」

「そんな理屈で、割り切れるかっ!!霊幻さんの命を狙った！だから、殺すっ!!」
「うるせぇよっ！俺だって、こんなクズすぐにでも殺してやりてぇが、しょうがねぇだろっ!!」
島崎と芹沢は、それぞれ手に武器を出現させて、相手に放とうとした、その時だった。

「二人とも、喧嘩はやめろよ！」

今にも殺し合いが始まる寸前の二人に、霊幻が慌てて間に割って入った。途端に、二人とも動きを止める。
「お前たちはいつもいつも……。何でいきなり喧嘩始めるかな？仲良くしろとは言わないけど、俺はどっちが死んでも嫌だから、喧嘩はダメ。分かった？」
霊幻の言葉に、二人とも黙ったまま返事をしない。今でも、隙があれば殺そうとしている空気を漂わせている。
「ほら、返事！」

「喧嘩をしないという約束はできませんが、善処します」
「俺も……努力はします。約束はできませんけど」
渋々と言わんばかりに頷いているが、結局、喧嘩はやめないと宣言している二人に、霊幻は顔を歪める。

「もうっ！お前たちは〜〜っ!!」
大声を上げた後、霊幻はふと、二人の顔を交互に見てから首を傾げた。
「……って、あれ？俺って、そいつに狙われてたの？」
意外そうに霊幻が呟くと、島崎は大きく頷いた。
「その通りです。こいつは不届きにも、霊幻先生の命を狙っていたのです」
「どうして、俺なんかを？……俺、霊能力も超能力もないよ？」
「単純なやっかみですよ。最近の『霊とか相談所』は評判が非常に良かったですから。……まぁ、芹沢が霊幻先生の事務所にいると知っていれば、絶対に手は出さなかったでしょうけど」
言って、島崎は安心させるように霊幻に笑いかけた。
「どうぞご安心ください、霊幻先生。私がしっかりとこいつを拷問……尋問をして、今後、同じようなことが起きないように、『爪』の霊能力者は全て根絶やしにしますので」
「あれ？今、拷問って言った？言ったよね？」
「いいえ？全く何も？」
ニコニコと笑って、島崎は全く悪びれた様子もなくすっとぼけた。そんな島崎の顔を見つめた霊幻は、小さく息を吐き出して、肩の力を抜いた。
「まっ、しょうがないか……。そっちは島崎に任せるよ。

じゃあ、芹沢。俺達は帰るか。……そうだ、芹沢！帰り、とんかつでも食べて帰ろう！」

霊幻の言葉に、芹沢は目を輝かせて、「はい！」と元気良く頷いた。霊幻は振り返って、島崎を見る。

「島崎は？島崎も一緒に行く？普通のチェーン店のとんかつ屋だけど、ご飯と豚汁、キャベツの千切り、おかわり自由なんだ」

「……っ!?」思いがけない霊幻の言葉に、島崎は大きく息を飲んだ。

「えー、霊幻さーん。何で島崎を誘うんですかー？二人で行きましょうよー」

芹沢は気に入らないとばかりに不満そうに言うが、反対に霊幻は呑気に笑っている。

「いいじゃないか、芹沢。三人で外食もいいだろ。……で、どうする、島崎？」

言って、霊幻が島崎の顔を覗き込むと、島崎は今にも血を吐き出しそうな勢いで、唸り声を上げる。

「……、ご一緒したい。ご一緒したいですけど……実は私、これから、会議なのです……っ!!無念っ!!」

言ってから、島崎は我に返ったように霊幻を見る。

「……いや、もしかすると……サボっても大丈夫か？サボっても大丈夫ですよね、霊幻先生？」

「ダメだよ。島崎、頑張れ」

「霊幻先生、そんなご無体なっっ!!」

本気で悔しがる島崎の肩をポンポンと叩いた霊幻は、すたすたと歩き出した。

「仕事ご苦労さま、島崎。ほら芹沢、あんまり島崎の邪魔しちゃ悪いから、俺達は行こう」

「はいっっ!!」

すっかり機嫌を良くした芹沢も、霊幻の後を付いて歩き出した。振り返った霊幻は、島崎に手を振った後、そのまま芹沢と並んで歩いて行ってしまった。

後に残された島崎の機嫌が最高潮に悪く、『爪』の残党の駆除を心に誓った

† † †

とんかつ屋に着いた霊幻は、テーブルの向かいに座ってとんかつを食べる芹沢を見て、頭を抱えていた。

「あ、すみません、おかわり下さい」

芹沢は通りかかった店員に、茶碗とお椀と、キャベツを入れる器を渡す。「はい」と器を受け取った店員は、そのまま厨房の奥へ入っていく。こんなやり取りを、もう何回繰り返しただろう。

大食いの芹沢は、とんかつ一切れでご飯を何杯も食べ、

とんかつがなくなった今もおかわりを要求している。
（やばい……こいつ、とんかつ一枚じゃ満足出来ない顔してる……）
先ほどから、芹沢の目がチラチラとメニューと霊幻を交互で見ているのを、霊幻は気付いているが気付かないふりを続けた。でなくては、何を言い出すか、考えるだけで怖い。
（これで、とんかつ一枚を許可してしまったら、絶対に坂道転がるように、とんかつの追加を要求してくるに違いない……。伝票を見るのが怖くなるのは嫌だ。確かに、お前は『霊とか相談所』の社員として、よく頑張ってくれている。俺だって、たまには芹沢の好きに食わせてやりたい。……だが！それとこれとは話は別だっ!!そうはいかないぞ、芹沢！お前の野望は、俺がここで止めてみせるっ!!）
「あの、霊幻さん……とんかつ……」
「俺のとんかつ、半分あげただろ。これ以上は、ご飯にキャベツ乗せて、ソースかけて食べなさい。あと、とんかつの衣が皿の上に残ってるだろ。乗せると、とんかつみたいになるから」
「なるほど！さすが霊幻さん！わかりみ深いです!!」
感動したように声を上げた芹沢は、早速霊幻に言われたとおりにご飯の上にキャベツを乗せて、皿に残っている衣のかけらを乗せて、ソースをたっぷりとかけ、自作の丼を作ると、一気にかっ込んだ。
「うん！これはこれで、美味いです！」
「おっ、おい！食べ方が雑だぞっ！一気に食べないで、ちゃんと味わって、よく噛んで食べなさいっ！」
あまりにも雑な芹沢の食べ方に霊幻は思わず声を荒げたものの、芹沢の箸は止まらない。
「だって俺、すっげー腹減ってて。何かもう、よく分かんねーですけど、すんません」
「謝り方も雑！」
その時、霊幻は見てしまった。すっかり皿の汚れはなくなり、まるで新品の皿のようにキラッと光っている。もう、衣のかけらすら残っていない。霊幻の背中に、冷たい汗が流れる。
「あのー、霊幻さん……」
「豚汁にご飯を入れて食べるんだ、芹沢。もう、それしかない」
「いや、そうじゃなくて……。パフェ、食べてもいいですか？」
言われて、霊幻は気が付いた。芹沢が見ているのは、デザートのページだったのだ。霊幻は小さく息を吐き出して、頷いた。
「……ミニパフェまでな」
「あざーっす！」
勢い良く頭を下げた芹沢は、早速店員を呼び止めた。

「すんません。チョコレートパフェ大盛一つお願いします」
「こっ、こらっ、芹沢っ！俺はミニパフェって言っただろっ⁉」
チラッ、と見えたメニューには、確かに『大盛りプラス百円』と書かれている。
勝手にパフェを大盛りで注文する芹沢に、霊幻は慌てふためいた。そんな霊幻に、芹沢は「あ、すんません」と頭を下げてから、店員に顔を向けた。
「あと、追加でミニパフェお願いします」
「えぇっ⁉」思わず、霊幻は声を上げげた。芹沢はどうやら「霊幻さんがミニパフェを食べたがっている」と考えたようだ。
（そうじゃない。そうじゃないだろ、芹沢っ！俺は、ミニパフェも頼めって言ったんじゃないからっ！）
ここはしっかりと注意しなくては大変な事になる、と霊幻は口を開いた。
「なぁ、芹沢……っ！」
慌てて声を上げた霊幻に、芹沢は笑いかける。
「霊幻さん、ミニパフェの種類は、ストロベリーでいいですか？いいですよね？」
まるで悪意のない芹沢の笑顔に、霊幻は言葉を詰まらせる。
「……、うん、いいよ。ストロベリーで」
「じゃあ、ミニパフェはストロベリーにして下さい」
頷いた霊幻を見て、芹沢はミニパフェを注文した。
すぐにテーブルに運ばれてきた大盛りパフェを、芹沢は勢い良く食べていく。美味しそうに大盛りパフェを食べる芹沢を見ている内に霊幻は、
（やれやれ……しょうがないな）
という気持ちになり、ミニパフェの上に乗っているバニラアイスをスプーンですくって、芹沢の食べている大盛りパフェに乗せる。
「ほら、芹沢。俺は腹いっぱいだから、食べていいよ」
「霊幻さん、ありがとうございますっ！」
元気よく返事をした芹沢は早速、霊幻に貰ったアイスを口に入れる。芹沢の顔は、ニコニコと上機嫌だ。きっと、これで犬だったら、尻尾がメチャクチャに揺れているだろう。霊幻は想像して、おかしくなってしまう。
「芹沢。とんかつ、追加で一枚食べるか？」
「……いいんですか？」
芹沢の表情が、露骨に明るくなる。ついつい、霊幻もつられて笑う。
「いいよ。今日は芹沢、頑張ったからな。……でも、一枚だけだからな？」
「はいっ！ご馳走さまですっ‼」
霊幻は店員を呼び止めて、とんかつを追加で注文した。
その時、メールの着信音が鳴った。霊幻は携帯電話を開

けて、メールを確認すれば、メールの相手は島崎だった。
（島崎……会議中の筈なのに……。ちゃんと真面目に会議に参加しろよ）
思いながら、霊幻はメールを確認する。メールには、
『これは差別ですか？区別ですか？』
と書かれている。
書かれた内容読んで、霊幻は素早く島崎に返信する。
『体格です。身長です。体重です』
送信した直後、すぐにメールが返ってくる。
『大きい方が好みだと解釈しても？』
（何で、すぐにエロ方面に話を持っていくんだっ！……って、島崎って盲目なのに、どうやってメール読んでるんだ？まあ、超能力か何か使ってるのかな？）
そう霊幻は言いたかったが、長文が返ってきそうなのでやめた。
『違います』
返信すれば、すぐに返信がくる。
『なら、何故ですか？芹沢と私は、何が違うのですか？霊幻先生は、あいつばかり可愛がっていませんか？酷いです』
（島崎の日頃の不満が……）
霊幻が返信する前に、島崎からまたメールが来る。余程、芹沢に対する不満がたまっていたようだ。
『霊幻先生は芹沢を甘やかしすぎです。私は、霊幻先生に甘やかしてもらったことがないのに』
今にも携帯の画面から這い出てきそうな程の恨みを感じる。これは返信を間違えれば、大変な騒動を巻き起こす可能性が高い。霊幻はゆっくり慎重にメールを打ち込む。
『ごめんな。俺が先に島崎に甘えちゃうから。今度は一緒に行こう』
そこまで打ち込んだ霊幻は少し考えてから、文章の最後に『♥』を追加して、メールを送信する。途端に、島崎から返信が来る。
『りょ♥』
（島崎、お前もかっ!!……って、お前がハートを使うなよっ!!）
短い『了解』と『ハート』に、霊幻は内心で声を上げる。何はともあれ、島崎の機嫌は直ったようだ。
「霊幻さん……ズルいです」
その時、目の前で大盛りパフェを食べ終わり、追加のとんかつを食べ始めた芹沢が、不機嫌そうに霊幻を見つめている。
「俺だって、霊幻さんに『♥』を使ってもらいたいです!!」
「お前は黙って食べてなさい」
力強く声を上げる芹沢の頭を、霊幻はパシンと叩いた。

第五章

2212

人生はままならない。
妥協は必要だ。
だから、これは決して『負け』ではない。
俺が『こいつら』の面倒をみるしかないのだ。

調味市某所

「……ですから、霊幻先生。何度もご説明させて頂いていますが、どうしてもご納得頂けませんか？」
島崎は霊幻の手を取り、言った。相変わらずの慇懃無礼な物言いに、霊幻はムッとした表情で島崎を睨むが、島崎にはそんな霊幻の感情さえご褒美でしかなく、ニコニコと上機嫌に笑った。
「俺は、週休三日を要求する」
霊幻の言葉に、島崎は「困った」という表情を浮かべるが、纏う空気は「上機嫌」そのものだ。最近、霊幻は身に染みて知った事だが、島崎は霊幻に反抗される事が好きらしい。『反抗』、『反論』、『抵抗』、『逃亡』をする度、「嬉しくてたまらない」という顔をする。
（今更気付いたところで遅いけどな。……いや、俺はまだ二十代じゃないかっ！遅いなんて事はないいっ、今からでも遅くないいっ、『逃げる』っ!!）
島崎の手から逃げようと、そっと手を退く。思ったよりもするりと簡単に手が抜けて、霊幻は拍子抜けする。
（……なんだよ、前なら絶対に離さなかったのに……、いやいや、逃げるチャンスが出来たんだから、いいじゃないか……うん）
思って、霊幻は立ち上がろうとした瞬間、肩を掴まれる。
「どちらへ？」
その声に、霊幻はギギギとロボットのような動きで振り返る。
「や、やあ。島崎」
しまった、島崎は『未来視』の出来る『テレポーター』だった。
と、霊幻は内心で汗を掻く。
（……最近気付いたけど、むちゃくちゃ短気なんだよな……こいつ。怒りの沸点が低いところ、芹沢と一緒だな。『超能力者』特有か……）
そんな事を霊幻が考えていると、
「先生？芹沢と私を比べましたか？あるいは、『超能力者』として、一般論でまとめましたか？」
「ま、まとめてない、まとめてないっ！」
「では……霊幻先生。ご着席を」

「……、……はい」
もう一度、ソファに座ると、既に島崎が隣りに座っている。差し出される島崎の手に霊幻は手を重ねた。
「では、霊幻先生。もう一度、最初から説得させて頂きます。まず第一に、このマンションに私とともに暮らして頂く。それはご納得頂けていますか？」
「……お前と俺と、あと芹沢もいいんだよな？まあ、芹沢の場合は勝手に住み着いてるんだけど。……うん、そこは納得している。ただし、『霊とか相談所』では絶対にお触り禁止だし、お前に関しては出禁。それが条件だよな？」
「ええ、構いません。芹沢を無理に霊幻先生から引き離しても、あいつは先生の迷惑を顧みず、毎日私から大切な霊幻先生を奪うために襲撃して来るでしょうし。ヤツが先生と職場も自宅も一緒というのは腹立たしい限りですが、私は『世界一』を自負するテレポーターですから、『会いたい』と願えば一瞬でお会い出来ます。
ああ、それから霊幻先生。『霊とか相談所』での『お触り禁止』は、もちろん芹沢にも適応されますよね？」
「当然だ。主に、芹沢に向けた禁止事項であると言っても過言ではない。そうでなくては、俺とは住めないって言ってある」
「霊幻先生の思慮深さと慈悲の心に感謝いたします」
と言って、島崎は頭を下げると、霊幻の手の指先に口付けを落とす。そのまま、手首にも口付け、島崎は口角を上げて『微笑む』。その表情が本物か偽物か、霊幻には少しずつ分かるようになってきていた。
（……今のは、『嫌味』だ）
とは言え、短気で凶暴性もある男が、島崎だ。霊幻からすれば他の超能力者に対してと同様、島崎の能力も、彼の個性の一つでしかなく、性格も同様に考えていた。
（島崎は俺に対して『嘘』はつかない。頭が良くて、慇懃無礼で嫌味っぽい。でもまあ、『短気で、喧嘩っ早い』だけとも言えるな。ん？まさかの江戸っ子？）
霊幻がそんな事を考えていると、島崎の指が霊幻の頬をつつく。
「先生。顔に出ていますよ？私は『慇懃無礼』ですか？」
「何だよ、島崎。お前も俺の心の中は読み切れないらしいな」
「と、言いますと？」
「お前の事は『短気で、喧嘩っ早い江戸っ子』だなぁって、考えてたんだよ」
「なっ!?」
霊幻の言葉があまりにも突然で、島崎は驚きと恥ずかしさに顔を真っ赤にする。
「おっ、真っ赤だ。案外、素直なところもあるなぁ」
「……あんまり苛めないでくれ。アンタには弱いんだ

「……」
「敬語忘れてるぞ、島崎。これは本気で照れたな」
「……チッ。……まあ、霊幻先生の『霊能力』に掛かれば、私の稚拙な能力など、何の役にも立ちませんでしたね」
「無理に敬語で話さなくてもいいんだぞ？」
「それは、勘弁してくれ。……私から霊幻先生に対する『愛』を奪われてしまっては、声を失った鳥と同じです」
「なるほどな。島崎は、猫被らないと恥ずかしい事が言えないんだな。芹沢は素で色々言ってくるけどな」
「あの野生動物と一緒にしないで下さい、霊幻先生」
島崎は不機嫌そうな声で言った。
その時。
「霊幻さん。プリン食べ終わっちゃいましたけど、まだ話終わらないんですか？そいつは所詮口ほどにもない奴でしたね」
向かいのソファでプリンを食べていた芹沢は空になったガラスの瓶を空中でクルクルと回し、そのまま、力を放つ。プシュッ、と音を立て、ガラスの瓶は小さく光って消えた。
「……芹沢。お前は黙れ」
島崎が言う。
けれど、芹沢は無視しているのか、気付いていないのか、興味がないのか、霊幻を見つめたまま微動だにしない。
「俺は霊幻さんがいれば、公園でいいんだから、ここに住まなくてもいいです、霊幻さん。事務所で『お触り禁止』の方が嫌です……」
と芹沢は言うが、霊幻は、
「芹沢。ここに住まなくても『お触り禁止』だから。そこはダメだぞ、譲れないからな」
と言った。芹沢は「そんなぁ」と言って、肩を落とす。
「絶対ダメだ。嫌なら、もっとダメな事が増えるぞ」
「霊幻さん、横暴ですよ」
「ところ構わず俺に触ろうとして。横暴はお前だぞ、芹沢。事務所は中学生だって出入りするのは、お前だって知ってるだろ？超能力者も出入りするしさ。頼むからその辺は理解してくれよ、なっ？」
霊幻が言うと、芹沢は少し考えてから「はい」と頷いた。芹沢は本当に霊幻が嫌がっている事、『見守る』という目的を忘れる事は、今までなかった。
（言っても分からない時もあるけど、だいたいは言えば分かってくれるし……仕事の時は芹沢がいるといないとでは、安心感が違う。受験生のモブに無理も言えないからな……まあ、芹沢では対応出来ない仕事なんて、モブしか対応出来ない。『モブ案件』なんて、滅多に起きないけどな）

そう思えば、芹沢は近々『見習い』から『副所長』に出世するであろう有望株だ。そんな『霊とか相談所』の唯一の社員が、一番に風紀を乱すなんてあってはならない事だ。
「偉いぞ、芹沢。分かってくれたんだな」
「はい、霊幻さん。じゃあ、ここに住んで俺と毎日『セックス』しますか？」
「うん。って、違うっ！俺は週休三日を要求してるんだ、ねっ！」
「なんでですか？でも、そっか、四日間は大丈夫です毎日なんてとんでもないっ！」
「ダメだ、島崎もいるんだぞ。二日は島崎だ」
「じゃあ、霊幻さんのお休みは二日にして、一日俺に下さい」
「いやいや、滅茶苦茶な事言うなっ!!」
「霊幻さんの方が滅茶苦茶ですよ……なら、その一日、島崎にくれてやるつもりなんですか？霊幻さんだからって許される事と許されない事ありますよ？」
「相変わらずお前の怒りの沸点低すぎるっ！週に二日は休まないと俺の身体がボロボロになるだろ？芹沢、自分達の体力を基準に俺の事を判断するなっ！」
「でも、霊幻さんは身体鍛えてますよ？必殺技使えるし」
「まあなぁ……俺は体力ある方だと思うぞ、『霊能力者』の中では。必殺技も使えるしな。でも、週二回は休まないと俺でも無理だ。お前達『超能力者』の体力と回復力を舐めるんじゃない。特に芹沢も島崎も超能力者として、体力ある方だろ？
いいか、芹沢。必殺技とセックスを一緒にするな」
霊幻は芹沢を説教するが、芹沢はきょとんとした顔で霊幻を見つめるだけだ。
元々、懐に入れた人間には優しい霊幻だったが、芹沢に対しては特に優しい対応になってしまう。芹沢が命の恩人で、自分の事務所の社員という事。そして、初めて会った時からの現在まで、常に側で芹沢の努力を見てきた事が関係しているが、霊幻は話がすっかり『週休二日』になっている事に、まるで気付かなかった。

「……では。霊幻先生は、週休二日という事で」

その声に、霊幻はハッと顔を向けた。
声はすぐ隣りから聞こえてきた。
「……っ!?」
見せつけるようにICレコーダーを持って微笑んでいる島崎の姿が霊幻の目に飛び込んできた。
「……し、島崎」
「週二回のお休みで大丈夫という事で、私としても嬉しい限りです、霊幻先生」

「いや、それは……」
『週に二日は休まないと俺の身体がボロボロになるだろ?』
『週二回は休まないと俺でも無理だ』
と、ICレコーダーが霊幻の声を再生する。
「うっ……さすがに盗聴慣れしているだけあって的確に再生してくる」
「お褒め頂き光栄です。霊幻先生、まさかとは思いますが……芹沢に言った事と私に言う事が『異なる』。そんな事はありませんよね?もしそうでしたら……先生のお身体に確認しなければならない事がたくさんありますが……」
「違うっ!週二回は確実に休まないと駄目だけど……あと一日余暇が欲しいんだよっ!週四日は付き合うって言ってるんだから、いいだろっ?大概にしろよ、俺のケツが爆発するだろっ!?」
霊幻は身振り手振りを加え、必死に島崎に訴えるが、島崎は顔に笑みを貼り付けたままだ。
「でも、先生の引っ込み思案な『花』は、いつだって堅く閉じた『蕾』のままですよ?
なあ、お前もそう思うだろ、芹沢?」
島崎が芹沢と話しかける時も、芹沢が島崎に話しかける時も、霊幻にとって良い方に向いた事はない。
「……霊幻さんの蕾?霊幻さんの尻穴か……なるほど、蕾。うん、蕾。いつだって蕾ですね、霊幻さんの尻。週二回も休みいらないですよ、ねぇ、霊幻さん?」
芹沢は霊幻向かって言った。
それは霊幻の耳に『死刑宣告』のように届く。けれど、霊幻は諦めない。
(一週間は七日。俺が週休二日で、島崎と過ごすのが二日、芹沢と過ごすのが二日とすると……残るのは、あと一日っ!!絶対に喧嘩になるっ!開戦だ、開戦っ!!こいつらが相容れられるはずがないっ!!)
圧倒的に仲が悪い二人だ。こうして三人でいても、基本的に話をする事はない。互いに相手がいないものとして、というより、いないと思っているかのようだ。
今、霊幻達がいるマンションは島崎のもので、周囲にはこのマンションより高い建物はなく、そんなマンションの最上階のため、誰の目にも触れる事はない。エレベーターもエントランスから直通で、プライバシーと安全はかなりのものだったが、基本的には島崎のテレポートで行き来している為、霊幻はそのエレベーターをまだ利用した事はない。テレポートで霊幻をここに連れてきた島崎は、抵抗するなら霊幻の安全のために監禁する覚悟だったが、霊幻に拉致された自覚はなく、『居心地が良

いので居座っている』と、霊幻自身は思い込んでいる。
　そんな霊幻の後を追って芹沢がやってきて、マンションにあるとは思えないほど広いバルコニーに勝手に住んでいるというよりも、住み着いている。以前の公園での生活と同じように超能力を固定化して色々と便利に暮らし、ゲーム機やらも持ち込んでいる。そんな芹沢だが、一度霊幻を抱いたせいか、側にいるせいか分からないが『独占欲』が肥大化してきている。
　ならば。

「……島崎。週休二日でいいよ」

と、霊幻は言った。
　確かに勝算はあった、「どうせ二人で仲良く話し合いなんて出来るはずないしな」と。
「おや。急に納得されましたね？その悪戯を思いついた時のあなたの顔は、とても魅力的です」
「い、いたずらなんて思いついてないっ……まあ、心境の変化かな？」
「良い心境の変化ですね、霊幻先生……では、霊幻先生の安息日は週に二日。私と過ごして頂けるのが二日。先生が芹沢に餌をやる日が二日。
　……で、あと一日は、なかなか納得出来るものではないですが。霊幻先生が、私と芹沢を選べず、流され困り果てて、結果、『３Ｐ』になる日という事で。いかがでしょう、先生？」
　島崎はそういうとニッコリ笑った。

「えっ？」

　一瞬、島崎が何を言っているのか分からず、霊幻はきょとんとした顔で、島崎を見返す。盲目とは思えないほど自然に、島崎は霊幻を見つめる。
「さ、さんぴー？えっ、あのサン、ピー？ええっ!?」
「はい。結果、そうなると思いますよ？聡明な霊幻先生なら理解頂けると思いますが？」
　言われて、霊幻は考え込む。
「……、……隔週になる可能性もあるけど、芹沢がそれを納得するとは思えない……意外に唯我独尊のところあるからな。そう考えると、島崎だって同じだ。絶対に俺の事を言いくるめようとするに違いないっ……となると、必然的に……『さんぴー』？えっ？さん、ぴー？ええっ？エロ動画の中だけ都市伝説のはずじゃ……」
「霊幻さん、超能力者だって都市伝説ですよ。俺、引きこもってる間、俺の力を目にするまでは、相談所の人も市役所の人も、誰も信用しませんでした。神主来たり、坊主来たり、あ、霊能力者も来ましたよ。偽物。霊幻さんの方がすごい霊能力者ですよ」

芹沢は二つ目のプリンに手を伸ばしつつ言った。
「おい、芹沢。そんなに甘い物ばっかり食べちゃダメだぞ……」
霊幻はつい手を伸ばし、芹沢の手を掴もうとする。反対にそんな霊幻の手を芹沢は掴むとニッコリと笑う。
「ねぇ、霊幻さん。『さんぴー』って何ですか？」
「えっ？せ、芹沢……変な事に興味もたなくていいんだ。島崎の言う事なんて無視しなさい、無視」
霊幻の言葉に、芹沢は大きく頷く。
「……霊幻先生？私の言う事は、先生も『無視』ですか？それとも芹沢に対する『命令』ですか？」
霊幻の背後に瞬間で移動した島崎は、霊幻の肩を揉みながら、その手を腕に滑らせ腕を撫でる。そして、ゆっくりと霊幻の顔を覗き込む。常に閉じている瞼が開き、何も映さないはずの瞳が、確かに霊幻の瞳を真っ直ぐに見つめる。心の奥底まで覗き込むようなその目に、霊幻は蛇に睨まれたように肩を竦める。
霊幻は、しどろもどろに、
「……そ、それはさ……芹沢に言った言葉で、お、俺はさ、島崎が、さ、さんぴーって言うからさ……で、でも、あれは、『さんぴー』都市伝説だろ。なぁ、島崎……都市伝説だよな？あんなの、エロ世界の作り出したフィクションだよな？」
と言いながら、霊幻はすっかり染みついた癖で、島崎を上目遣いに見る。
「アンタ、威力ありすぎだ……」
「素が出てるぞ、島崎。なあなあ、画面の中だけだよな？」
「あ、い、いや、先生は、『蕾』も『初心』ですが……心も『初心』ですね……」
「……で、でも……フィ、フィクション……だよな？い、いじわるするなよっ！」
霊幻の言葉に、島崎は笑みを返す。
「フィクションでも、ノンフィクションになる事が多々ありますよ？」
まさか、本当にあるのか？
と、霊幻は混乱する頭で、チラリと芹沢を見る。最近、芹沢がネットから情報を得ている知識の量は半端ではない。スマートフォンを開いて、さっそく『３Ｐ』を検索しているようで、顔を赤くしたり青くしたりしている。
霊幻は、記者会見以降、ネット検索は苦手になってしまっていて、ネットの知識には疎くなっている。もちろん『３Ｐ』なんて単語はだいぶ昔からあるものだが、見た目や言動によらず、性に初心な霊幻は斜に構えて、「ああ、あんなの作り話だろ？」くらいに思っていたのだ。その危険が目の前にやってくる日があるなんて、思いもせずに。
「か、隔週は……無理かな？」

「あの馬鹿を納得させられますか？」
島崎は芹沢を指差す。
芹沢はスマートフォンの画面と霊幻を交互に見つめ、大きく深呼吸している。鼻息も荒い。
「さあ、ご納得頂けますか？それとも、我々を説得して、屈服させて頂けますか？『爪』を壊滅させたあの時のように……もう私は、あの時からあなたの虜のままですよ？」
「そ、それは……」
どちらも退かず、挙句、互いに会話もままならない二人だ。そんな二人を相手に間に入るのは自分自身だという事を、今更のように、霊幻は気付いた。
「……えっ？俺が間に入って、この二人を止めるのか!?戦闘になるのを防ごうとして、何とか落ち着かせようと……無駄だ、無駄。二人とも障害物を取り除こうとしているだけで、それが喧嘩を通り越して戦闘で、場所によっては戦争にさえなるという事に気付いてないっ！で、結局、戦闘しないから、お願いします……って話になるっ!?……ああ、俺……俺、絶対にその罠にかかる自信あるっ!!」
思わず叫んで、頭を抱える霊幻の足下に影が掛かる。左右から見下ろされるような圧を背中に感じる。
「……、落ち着けよ、島崎。なあ、分かるだろ、芹沢？」
怖くて顔を上げられない。顔を上げたら最後、どんな目に合うか分からない。
霊幻は、頭を抱えたまま説得を試みようとするが、
「霊幻先生。『島崎、助けて』とおっしゃって頂ければ、お助けしますよ？」
と、島崎が言う。
「霊幻さん。俺が助けますよ？『命令』して下さい。『お願い』も好きですよ？」
と、芹沢が言う。
「お前達が『はい、そうですか』と納得するわけないだろっ！台詞も一緒なんだぞっ？もう、完全に……似てる……い、いや、に、似てないって……」
完全に口が滑った。霊幻は自分の口を慌てて手で押さえたが、遅かった。
頭上からのプレッシャーが大きくなる。
「霊幻先生？」
「霊幻さん？」
「私が、こんな『化け物』と同じだ、とおっしゃりた

い？」
「俺が、こんな『変態』と似てるって、言いましたよね？」
「どうでしょうか、霊幻先生？」
「どうなんですか、霊幻さん？」
「うるさーいっ!!そっくりだろっ！馬鹿どもっ!!……って、俺って嘘下手〜〜!?」
自分は『嘘』をついて生きてきたと思っていたが、そうでもないようだ、と今更のように霊幻は思う。
そんな霊幻の耳元に、島崎は口元を寄せ、
「先生のそういうところ、好ましいですよ？……一言で言うと、『好きだ』……でしょうか？」
と囁く。その言葉は霊幻を肯定していても、声音は『悪魔』そのものだ。
霊幻は反対の耳から芹沢の気配を感じる。
「霊幻さん、素直ですもんね？俺、大好きですよ、霊幻さんの事……霊幻さんのために、性格から髪型まで変えたんですから」
と、芹沢は言って、チュッ、と霊幻の耳元に口付ける。

芹沢が懐いてくれている事は霊幻にも痛いほど理解出来る。出来るが、相手は馬鹿なフリをする見た目に寄らず『知能犯』だ。
「何事も経験ですよ、先生？『3P』してみましょうか？」
「えっ!?これからっ!?」
驚き、二人を止めようと、島崎と芹沢の顔を交互に見つめるが、まるで、付け入る隙がない。二人とも、霊幻を抱いた日の、その瞬間と表情がそっくりだった。「これはヤバい」と霊幻が気付いた時には、芹沢はギラギラした目で霊幻を見ているし、島崎も気合いが入りまくっています、という雰囲気を醸し出している。
「いいえ。私は五分後からでもいいですし、霊幻先生がお風呂に入る瞬間からスタートしても構いませんが？なんでしたら、ソファを使って気持ちを高めて頂いて……」
「俺っ、霊幻さんのオナニー、大好きですっ！チンポ触ったり乳首摘まんだり、すっごく可愛いですよ、霊幻さんっ!!」
「霊幻先生のオナニーは、どれも素晴らしい音源として、私は就寝前にコーヒーを飲みながら、スピーカーで大音量で聞いていますよ？防音のせいですかね、気付きませんでした？

ああ、先生は、自慰行為に夢中だったのかもしれませんね。……私に抱かれている時は初心な反応ですのに……自慰行為は意外に大胆ですから？もちろん私の腕の中でも、途中からは大胆ですよ？」
と、島崎は言って、霊幻の目元に口付ける。
「俺の腕ん中にいる霊幻さん、とっても色っぽいですよ？大胆になっちゃうところも、可愛いです」

えっ？なんで、俺の『オナニー』当たり前に見学したり盗聴したりしてるの、この人達？
て言うか、俺、オナニー、激しいの？ん？セックスも大胆なの？
俺は、大人しいと思ってたのに……えっ？違うの？

霊幻は島崎と芹沢を交互に見つめ、「俺、激しい？」と尋ねる。

「ええ、とっても素敵でしたよ。これからは、あなたを独り占めしたり、間近で私以外の誰か……しかも化け物に抱かれる霊幻先生の声を聞いたり……楽しみですよ。二人がかりで攻められるあなたは、それはそれは大胆に乱れ咲くのでしょうね……楽しみです」

「霊幻さん、覚えてます？俺が霊幻さんの恥ずかしがる事すると興奮しますもんね？気持ちいいの、好きなんですね？間近で見られるの楽しみです。俺は霊幻さんを独り占めしたり。霊幻さん、変態にも抱かれるんですよね？で、そんな霊幻さんが俺の目の前で、その変態に抱かれるんでしょ？間近で見るのか……霊幻さん、すごいやらしい顔すると思いますよ……興奮します」

「い、いや……そんなはずないよ……俺はいつだってキリリッとしてまだろ？」
霊幻は困惑しながら答えるが、正直、自信はなかった。二人に抱かれている最中の記憶は曖昧で、まるでジェットコースターに乗っている気分だ。しかも、いつだって初めて乗るジェットコースター。長さもどんなコースなのかも分からない。ただただ翻弄されて、霊幻は自分がどんな風になっているのか、まるで分からなかった。

そして、話はすっかりと一週間を『2・2・1・2』で分ける事に決まってしまっている空気に、霊幻は気付かなかった。

さんぴー

「……そ、そんなに……俺、声とか、大きかった？」
自分では声を抑えているつもりでも、大声だったかもしれない、と霊幻は急に不安になる。
「ああっ、霊幻さん可愛いっっ!!」
芹沢は辛抱堪らんという風に霊幻を抱き締め、ソファに押し倒した。のしかかってくる芹沢を退かそうとするけれど、ビクともしない。完全に大型犬と飼い主の気分だ。
「うわぁっ!……って、痛くない」
思い切り押し倒されても痛いと思ったのに、まるで痛くなかった。痛くなかったのは、頭の下に島崎の膝があるせいだ。
「……し、島崎……」
「先生。このまま少し芹沢に餌でも与えてはいかがですか？私はそんな先生の声を聞いたり、神経視たり、血流視たり、リンパ液視たり、心臓視たり、オーラ視たりしてますから」
「……そこまで見えて、どうして俺の表面は見えないんだ？」
もう皮膚を見られるより恥ずかしいよ。

と、霊幻が言うと、
「なるほど。先生は、私にも触って欲しいと」
と言って、霊幻の唇の輪郭を指でなぞる。
「な、何を言ってるのかな、島崎？俺は別に……、んっ！」
更に言い募ろうとした霊幻の唇を、島崎は指の平で押さえ、ゆっくりと指を動かす。それに合わせるように、霊幻の唇が緩み、島崎の手に霊幻の歯が触れる。
「あなたは、素敵だ」
言って、島崎は身を屈め、霊幻の唇に自分の唇を重ねた。反射的なのか、意識的なのか、霊幻の口が微かに開く。それを唇で感じ、島崎は顔を綻ばせる。
「霊幻先生は、私を喜ばせるのがお上手ですね」
言うと、島崎は霊幻の歯列を割り舌を差し入れる。ねっとりと濃厚に、島崎は霊幻の舌に自分の舌を絡める。くちゅくちゅ、と粘着質な液体が混ざるような音がして、霊幻は首を竦める。恥ずかしいと思うのに、自分の舌は絡みつく島崎の舌に応えるように、ペロペロと島崎の舌を舐める。霊幻の頭に堅い物が当たり、「何か？」と霊幻は口付けしながら、ほんの少し首を動かす。そこにはボトムスを押し上げるように勃ち上がった島崎のペニスがある。布越しでも分かるほど勃ち上がったペニスに「こんなに早く勃起するとは思わなかったのだろう」島崎の顔が苦笑いする。

「……私も、そんなに……年寄りではありませんから」
照れ隠しのように言って、島崎は霊幻の唇ごとしゃぶりつく。
「……っ!?」
霊幻は声にならない悲鳴を上げる。口は、余すところなく島崎の口の中だ。口の周り、口内、歯、どこもかしこも舐められて、霊幻は必死に顔を逸らそうとするが、島崎の両手はしっかりと霊幻の頬を両サイドから挟んでいる。
息苦しさと羞恥に真っ赤に染まったであろう霊幻の顔を想像し、島崎は興奮に笑みを浮かべようとして、上手に笑えない。
(私などが、本気で誰かを好きになるなんて……天変地異の前触れですね)
と、島崎は内心で自嘲気味に笑う。
凶暴で加虐的な性格は『爪』に入ってから落ち着いていた。雇い主であった、元『爪』のボスである『鈴木統一郎』ああ見えて、町の破壊に躊躇いはないが、無抵抗の人間を痛めつける事、殺す事には抵抗があった。何度も、刃向かってくる人間を見逃したのを、島崎は視ていた。芹沢が『殺せなかった』のではなく、ボスが『殺させなかった』。島崎に言わせれば『故郷の調味市に戻ってきて浮かれて乱暴ぶっていたけれど、結局、市民の避難する時間はたっぷりと用意』していた。それが島崎には面倒臭くもあったが、雇い主の『命令』と割り切っていた。
(時間稼ぎしていたから……こうして『霊幻新隆』に会えたわけだ……)
たった一人の人間に会って、超能力者の『優越感』と『絶対性』から足を洗おうなんて馬鹿げた事だ。と思いながら、結局こうして、目の前にいる『霊幻新隆』に夢中になっている。息が触れる距離で島崎は霊幻を見下ろす。息をするのも忘れ、呆然と島崎を見ているのだろう、息が肌に当たらない。そんな事を不安に思う自分を見つけ、島崎は自嘲する。
「霊幻先生。呼吸を忘れてますよ?」
空気を吸い込み、島崎は霊幻の口に息を吹き込むと、そのまま、深く口付ける。
「んっ、……んんっ、あふ……っ、んちゅっ」
呼吸が出来なかったのが怖かったのか、霊幻は、息を吸い、ケホケホと小さく咳き込む。島崎は霊幻の身体に手を回し、少し身を起こさせると、霊幻は大きく息を吐き出した。
「島崎……っ、お前……っ!?」
何やってるんだ。
という言葉は、島崎の口の中に吸い込まれた。「んっ」と小さく喘ぎ交じり声が霊幻の唇から漏れ、島崎は機嫌良く口角を上げる。霊幻はほとんど無意識に島崎の舌に

自分の舌を絡める。それに答えるように、島崎は霊幻の口内を犯すように激しく舌を絡め、口内で触れていないところはないと思うほどに執拗に、霊幻の舌を追い掛ける。

「んっ、ふぅっ……あっ……」

口付けだけで勃ち上がっていくのを感じ、霊幻はギュッと目を瞑る。

「すっかりキスがお上手になりましたね、霊幻先生」

「うっ、うぅーっ、全然、嬉しくないっ！」

顔を逸らして霊幻が抗議すると、不意に、霊幻の勃ち上がったソレを芹沢の大きな手が掴んだ。

「ズルいですよぉ、霊幻さん。俺も霊幻さんとキスしたいです……霊幻さんのチンポ堅いですよ？こんなになっちゃうほど変態とのキスで感じちゃったんですか？」

霊幻の身体を弄っていた芹沢が、島崎を押しのけ、霊幻の顔を覗き込んできた。霊幻の視界いっぱいに芹沢の顔が広がり、霊幻は思わず身を退こうとするが、頭を島崎の手が優しい手付きでしっかりと押さえていて、身動きがとれない。足をジタバタさせようとするけれど、芹沢の手は霊幻のソレを撫でていて、霊幻の身体は島崎の口付けの余韻と、芹沢の手が霊幻のソレを握り扱く刺激に、ピクッピクッと震え、身体に力が入らない。

「芹沢、ちょっと、落ち着け、芹沢……っ」

霊幻の話を聞くつもりが全くない様子の芹沢は、そのまま乱暴に霊幻の唇を奪う。

「んっ、んーっ！」

噛み付くような口付けに、霊幻は抵抗しようとするが、芹沢のがっしりとした腕は全く動かない。そうしている間に、芹沢は更に深く、霊幻に口付ける。

まるで、このまま食われてしまうのではないか、と錯覚してしまう程の芹沢の無骨で激しい口付けに、霊幻の思考は一層に深みに落ちていく。

「んんっ、んっ……、はふっ……」

芹沢の唾液と霊幻の唾液が混ざり合い、飲み込みきれなかった唾液が、霊幻の口の端から首筋に流れ落ちていく。

「ぷはっ……、待て、って、んっ……せっ、芹沢っ」

慌てて、霊幻は芹沢の口付けから逃れようとするが、芹沢に顎を固定されて、上手くいかない。

「霊幻さん、俺、待ちたくないです。もっと霊幻さんとキスしたいです」

尚も、芹沢は霊幻に口付けようとする。何とか芹沢を止めようと、霊幻はクラクラする頭で考えた。

「えっ、えぇと……っ！あっ！間接キスッ！芹沢っ！島崎と間接キスになるぞっ、芹沢は嫌だろ、間接キス？」

「え？間接キスですか？」

不思議そうに、芹沢は首を傾げて、それから、霊幻の

言葉の意味が分かったのか、芹沢は吹き出すように笑った。
「何言ってんですか、霊幻さん。間接キスなんて言って大騒ぎするのは、子供だけですよ……中学生くらいなら気にするのかな？どうだろう、気にしないいんじゃないかな？ホント、可愛いなぁ、霊幻さんは」
「偉そうに言うなっ！」
「俺は変態に汚されちゃった霊幻さんの唇を綺麗にしてるんですよー」
まるで子供をあやすように、芹沢は霊幻の顔中にチュッチュッと口付けを落とす。
「芹沢っ。精神年齢が子供のお前が、俺を子供扱いするんじゃないっ！」
照れ隠しも入ってしまい、大声で怒る霊幻に、芹沢は吹き出すように笑う。
「はいはい、了解です。霊幻さん」
抗議する霊幻をそのままに、芹沢は唾液の流れた跡を追うように、舌先でゆっくりとなぞっていき、首筋にカプッと歯を立てた。
「ひゃう……っ」
首筋に当たる芹沢の歯の感触に、ビクッと霊幻の身体が震える。
「やっぱり霊幻さんって、全部可愛いです。食べちゃいたいです。霊幻さん、ちょっと食べてみてもいいですか？」
芹沢は呟いて、チューチューと霊幻の首筋を吸う。思わず、霊幻の身体が強ばる。
「んっ、食べちゃだめだからぁっ！」
今にも泣きそうな声を上げて、霊幻は首を振る。怯える霊幻の姿に、芹沢はニッコリと笑ってみせるが、その目は決して、笑っていない。
「ヤダなぁ、霊幻さん。ホントに食べる訳ないじゃないですかー」
「芹沢？本気に聞こえたんだけど？嘘はなしだぞ？大丈夫だよな。俺は、お前を信じてもいいんだな？」
「……、味見ぐらいなら、いいでしょ？霊幻さんが怪我した時に舐めたり、とか」
「怖っ！怖い事を珍しく真剣な顔で言うなっ！」
「霊幻さんが嘘を吐くなと言うので、答えただけです。……大丈夫ですよ、ちょっと味見するだけですから」
まるで悪びれた様子のない芹沢は霊幻の肩を、カプッと甘噛みし、はむはむ、と歯を立てないように噛んでいる。完全に動物の親子になった気分だ。しかし、この姿に騙されてはいけないことを霊幻は知っていた。
芹沢はその見た目や言動とは裏腹に、戦闘で島崎を出し抜いたり、島崎と霊幻がキスしていても、それを見ながらスイーツを平気で食べる。芹沢が霊幻を好きで好きで仕方ない事は、霊幻自身、身を以て知っている。そん

な芹沢が、自分の目の前で霊幻が誰かと仲良くしている事に納得出来ているはずがない。モブ相手にも嫉妬する男だ。

『霊幻さん。影山先輩と距離、近すぎません？迷惑なら迷惑って言った方がいいですよ』

と真剣に言うくらいだ。

それなのに、今の状況に関して不満をまるで見せない。そのメンタルの強さとしたたかさは、霊幻でさえ、まったく読めない。

だから、もうそんな事は気にしないで、普通に接するしかない、と霊幻は割り切っていた。いや、割り切るしかなかった。

「こらっ！ダメって言っただろっ！」

子供の悪戯を見つけたお母さんの如く、霊幻は声を荒げた。芹沢は反省した様子もなく「はーい」と返事をする。

「さてさて……そろそろ私の事も思い出して下さい、霊幻先生？」

言うと、島崎は片手で芹沢の頭ごと顔面を掴み、無理矢理に霊幻から引き剥がすと、身を屈め、霊幻の顔を覗き込む。

チュッチュッ、と島崎は音を立て霊幻の頬に口付ける。

「……キスは？」

「構いませんが、『間接キス』になってしまいます」

「そ、そんなの……気にするの、子供だけだ……ろ？」

「ええ。しかし、どうやら私は『間接キス』を気にするほど『子供』のようでした」

と、島崎が思うはずもない事を嘯く。

「……俺が芹沢に抱かれた直後でも気にせず抱く癖に……」

霊幻が言うと、島崎の纏う空気が一段二段と下がる。

「な、なんでもない」と霊幻が慌てると、島崎は「なら良かった」と口角を上げる。

（……ヤバい。本性が垣間見える……）

凶暴で残忍で、今の口調だって『猫かぶり』だ。見た目よりも小心者の自分とは大違いけれど、『猫かぶり』は一緒だな、と霊幻は思う。

「……じょ、冗談だよ」

「そうですか？まあ、ですが……あなたが全身へのキスを望むのでしたら、口付けもその一部という事になりますが？」

「ぜ、全身……、俺の身体にもキス、したいのか？」

「もちろん。そうすれば私も大人になって、『間接キス』も『穴兄弟』も気にしませんよ？」

「あ、穴兄弟……」

「はい。あの化け物と私は、渋々ながら、霊幻先生の『アナル』を通じた『穴兄弟』ですからね？」

「……た、確かに」
同じ女性を抱いた男達を俗語で『穴兄弟』と呼ぶ事は知っていた霊幻だったが、遠い世界の話だと思っていたし、まして、自分が『兄弟』ではなく『穴』の側になるとは、一度だって想像もしていなかった。
「……どんなご気分ですか？」
「人生、色々あるなって気分……」
「そうでしょうとも……あなたの言うとおり。では、私も『人生色々』という事で、大人にならなければいけませんね？」
言うが早いか、島崎は霊幻の顔中に啄むように口付ける。鼻を口に含むと、霊幻は驚いたように目を見開く。島崎の舌先が霊幻の鼻の穴の付近をペロリと舐める。
「やっ、やだ……って」
霊幻は手で島崎を押しのけようとするけれど、自分の身体にのし掛かっているのは芹沢だった。
(頭を押さえているのが……芹沢？いや、違う……こっちが島崎。身体を押さえ込んでるのが……大型犬……じゃなくて、芹沢……ああ、混乱してきた……っ、ダメ……思考が飲み込まれてく……)
「霊幻さん……鼻、感じるんですか？なら、おへそも感じるのかな」
と、芹沢は言って、霊幻のシャツをめくり、舌先を躊躇いなくへそに突っ込んだ。
「いやぁっ……汚いからぁっ、あんまり掃除してない……っ！どっちもダメだってぇっ！」
助けを求めるつもりも、霊幻自身分かるほどに鼻に抜けるような甘い声が上がる。
それをからかうように、島崎は薄目を開け、見えないはずの目で霊幻を視ると、にんまりと笑う。
ペロリ、と鼻の穴の周りを舐められる感触に、霊幻の肌が粟立つ。
「わっ、わざとだろっ！」
「おやおや。見えないので、つい唇ではなく鼻にキスしていましたか？でも、どちらも可愛いですよ？」
言うと、島崎は霊幻の鼻に舌先を入れる。
霊幻は思い切り逃げようと、身体を捩るが、身体はしっかりと芹沢に押さえ付けられている。
「ヤダヤダヤダっ!!鼻の穴は舐められたくない穴、ワースト1だぞっ!!ケツの穴よりヤダーーーッッ!!」
泣き出しそうな、いや、既に泣いているような声で、霊幻は叫んだ。唾が飛んで島崎の顔に思いっきり掛かるが、島崎は上機嫌だ。
「それは……堪んねぇなぁ」
島崎は霊幻の顎を掴むと、その顔を深淵のように真っ暗な目で覗き込む。

「先生は、ケツ舐められてぇのか？んー、どうなんだ？」
「ヤダッ！どっちもヤダって……島崎ぃ……」
縋るように島崎を見上げれば、島崎は「しょうがない」とばかり顔を離し、ガシガシと頭を掻く。
「甘えた声出すなっ！……ったく、二人でイチャつく時は尻穴舐めんぞ、せいぜい綺麗に洗っておけっ！……、……ご理解頂けましたか、霊幻先生？」
島崎は思わずという風に乱暴な言葉で霊幻を怒鳴り、けれど、慌てたように言葉を整える。乱暴な言葉遣いをしていると、島崎は若々しい青年に見えた。決して年齢や出身など、自分の事を語ろうとしない島崎だったが、霊幻はそんな島崎の乱暴な口調を聞いていると、島崎が自分に心を許している、そんな気がして、悪い気がしなかった。
それどころか、『嬉しい』と感じている自分を見つけて、霊幻は照れくさくて顔を赤くする。
それを目ざとく見つけた芹沢は、

「……霊幻さん。その変態に絆されてませんか？まあ、いいんですけど……霊幻さん、俺なんかにも絆されちゃってますもんね」
と言って、霊幻のヘソの輪郭をペロペロと舐めた。

腰が細いこともあって、霊幻のへそは見た目には深くないが、芹沢はグリグリと舌で肉を押している。肉越しに内臓を押される感覚はセックスを思い出させる。
霊幻がそんな事を考えている間、島崎は霊幻のシャツのボタンを器用に外し、中に着ていたタンクトップも、何事もなかったかのように脱がす。霊幻の肌を観察するように手を這わせる、滑らかさ、柔らかさ、弾力、匂い。霊幻が知られたくないと思う事まで暴かれそうで、霊幻はどうしていいのか判断出来ない。上半身を島崎に撫でるように触れられ、下半身は芹沢に無遠慮に触れられている。
霊幻は自分を襲う快感がどこからやってくるものなのか分からなくなって、思考がぽわぽわと浮いたり沈んだりする。しかし、芹沢の舌がヘソに入った瞬間、霊幻はハッと我に返る。
「せ、芹沢っ!?」
「霊幻さんと同じで霊幻さんのおへそは、引っ込み思案ですね。逃げようとします。じゃあ、霊幻さんのチンポがこんな風になっているのは……その変態のせいなんですか？」
芹沢は言うと、霊幻のボトムスの上から半勃ちになっている霊幻のソレを手で握り込む。自分の手よりも大きい、自分のソレよりも大きい手で掴まれて、霊幻は反射的に目に涙を浮かべる。それでも、芹沢は手を緩めず、

霊幻のソレを握る手に力を込めていく。それが霊幻を誰かに取られそうになる不安からだという事は分かっているが、霊幻の目から涙が皮膚を伝って落ちた。
「霊幻先生を泣かすな、化け物」
言って、島崎は至近距離からナイフを放る。それを難なく芹沢は力を飛ばすと、一瞬光って、そのまま消えた。
「……霊幻さん、泣いてるんですか?俺、霊幻さんのチンポ、強く握りすぎましたか?」
不安そうに霊幻の顔を覗き込む芹沢に、霊幻は小さく頷く。
徐々に、握り込む手に力を込められ、本能的に怖くなったのかもしれないし、二人に見下ろされている状況が怖いのかもしれないし、流されてしまいそうな自分が怖いのかもしれない。
「芹沢は俺が嫌いなんだろ?だから、チンポ、握りつぶそうとしてるんだろ?」
「そんな事しませんよ?」
「お前の力なら俺のチンポなんていちころだ」
「ごめんなさい霊幻さん。霊幻さんを怖がらせるなんて……俺はなんて事を……」
と、芹沢も泣きそうな顔で霊幻を見下ろすが、霊幻のソレから手を離さない。それどころか、強く握ったのがいけないのだろうと判断して、優しく撫でるように触れている。

「……怖くないですよ、霊幻さん。霊幻さんのチンポさんも」
いい子、いい子。
と、あやすように霊幻のソレを撫でるが、手を離しては島崎に横取りされると思っているのか、絶対に『霊幻さんのチンポは俺が死守する』と顔に書かれている。
「芹沢ぁ、何だ、そのあやし方?あと、俺のチンポを撫でながら、俺の尻が動かないように腰を掴むな」
島崎は言いながら、霊幻の乳首の先端に爪を立てたり、クニクニと押しつぶしたりしている。
「んふぅ」と霊幻の唇から吐息が漏れる。二カ所の刺激は受けたことがあるが、同時に何カ所ともなると、話は違う。しかも別の人間に触れられているから、タイミングも違うし、触れる強弱も違う。霊幻は必死に自分を保とうと身体に力を込めると、すかさず島崎が霊幻の身体を解すように肩をスッと撫でる。
「んあっ……だ、め……二人で、触るの……っ」
「可愛いですね、霊幻先生……強ばった身体を、もっと解してさしあげますよ?」
島崎の手が霊幻の乳輪ごと乳首を揉み上げる。
「そんなこと言って……霊幻さん、食べられちゃいますよ?相手は変態です。そいつは俺を『化け物』って言いますが、俺が『化け物』なら、ヤツは『変態の化け物』ですよ?本当に気を付けて下さい。」

芹沢は真剣な顔で言うが、霊幻は『どっちもどっち。どんぐりの背比べ』だと思った。

「霊幻先生。そいつと私を、『似たようなものだ』と考えましたか？」

「霊幻さん。俺とそいつは、『似てない』ですよ？俺は霊幻さんの為を常に考えてますし、そいつは霊幻さんの覇道を邪魔する『悪』です」

「霊幻先生の覇道を一番邪魔している駄犬はどこのどいつだ、化け物め」

『覇道』って何？

俺、チンポ握られたり、ケツ触られたり、乳首弄られながら、『覇道』目指すの？

乳首開発されちゃってるぞ？ケツだって開発済みだぞ？

それで『覇道』って、どんな『覇道』だよっ!?

そんな霊幻を置き去りに、島崎も、芹沢も、「お前こそが霊幻さん（先生）の覇道を邪魔している」と喚き散らしている。

（どうしてこうも『超能力者』って沸点が低いんだ……）

思えば、霊幻が出会う超能力者は押し並べて沸点が低かった気がする。目が合った、声を掛けられたくらいで『モテ期』が来たと勘違いしたり、好きになったり、怒ったり、ストーカーになったり、他にも色々と厄介ごとばかりだ。

（とにかく、こいつらは似ている……怒るところが一緒だ）

霊幻が現実逃避のようにそんな事を考えていると、島崎と芹沢が、ジッと霊幻を見つめていた。

島崎は盲目だから見えるわけではないのだが、その目は霊幻の表面は見えないが、心臓は視える。それがやっかいで、嘘が付けないのだ。

「先生？鼓動が早いようですが……また『世界一』の私と、愚かな自称『超能力者』を比べましたか？あるいは、そこの『化け物』と比べましたか？」

「比べてないっ！」

それだけでもやっかいだというのに、芹沢は『野生の勘』なのか、人目に怯えて生きてきた『過去』のせいなのか、霊幻の微かな変化を見逃したりしない。

「霊幻さんって自分の事『嘘つき』って言うくせに、『嘘』下手ですよね？俺とそこの『変態』の事、『似てる』って思ってませんでした？」

図星。
だったが、認めるわけにはいかない。
認めたら最後、どれほどの事をされるのか。
と、霊幻は思ったが、『3P』以上に衝撃的なことなんて、二人からされるはずがないという事には思い至らない。

「考えてもいないし、思ってもいないっ！」

霊幻は叫ぶが、すっかり着ていた服はただ身体にまとわりついているだけの布となっている姿では説得力がない上に、セックスのエッセンスにしかなっていない。
「霊幻先生。一応、私の部屋、霊幻先生の部屋とは別に、ただ大きなベッドが置いてあるだけの部屋も用意してあります。ソファが海外サイズの大きなものとはいえ、身体がお辛いでしょう？そちらに行きますか？」
「えっ？そんなところまで準備してあるの？」
「はい。想定の範囲内の出来事でしたので。おい、芹沢。あの角部屋の扉が豪華なところがそうだ。霊幻先生を超能力でお運びしろっ」
「いちいち指図するな、霊幻さんから離れろっ」
いちいち喧嘩腰の二人だ。
けれど、霊幻としてもソファでこのまま大男を二人相手するのは辛い。
（一人ずつだって辛かったのに……まあ、不思議な事に体力はすぐに戻ったんだけどさ……）
鍛えてるからかな？
なんて考えて、霊幻は深く考えない間に、身体が宙に浮く。主に『念動力』を使うモブを弟子にしているせいもあって宙に浮くのは慣れている霊幻だが、芹沢の『念動力』は少し違う。同じ能力でも個性があるらしい、と霊幻は考える。このままいくと『超能力』の論文が書けてしまうだろう。
「霊幻先生……あなたの事は常に、一生涯、私がテレポートでお運びしたいのですが、そこの化け物にドアを壊されては……霊幻先生の好みに合わせて欧州から運んできたものですから」
「……運んできた……？ああ、島崎は『世界一のテレポーター』だもんな。と、なると、家具も？すごいなぁっ！」
「お褒め頂き光栄です。……それよりも、霊幻先生……、……裸同然で運ばれながら余裕の態度。感服いたします」
「……ああ、『現実逃避』だから何も言うな」
「なるほど」
「霊幻さん、すぐに『現実逃避』しますよね。結果は、まったく変わりませんよ？」

「霊幻さんが拘束して欲しいなら俺が拘束出来るから。わざわざ道具使わないといけないなんて、役立たたない能力だな」
芹沢は島崎に向かって言った。
話せば喧嘩腰の二人に、霊幻は自分がいつの間にか裸になっていることから目を背けつつ、
「芹沢、人に超能力は向けちゃいけないって教えただろ？島崎、お前の手に掛かったら拘束具なんていらないって自分で知ってるだろ？わざわざ芹沢に喧嘩売るような真似するなよ」
と、二人に注意する。真面目に注意するが、もちろん霊幻は裸だ。
ふわり、とベッドの上に下ろされる。
「おっ、すごく良いマットレスっ！」
今から自分の身に起こることから現実逃避しつつ、霊幻はベッドの感触を確かめる。いつの間にか、島崎は霊幻の足首を掴んでいて、チュッ、と、脛、足の甲、爪先へと口付けていく。霊幻はもちろん知らないが、脛への口付けは『服従』、足の甲への口付けは『隷属』、爪先への口付けは『崇拝』だ。
「先生の部屋のベッドも同じメーカーのものです。私の部屋はあえて違うメーカーにしています。そちらも喜んで頂ける寝心地ですよ？」
「芹沢は考えが子供なんんだ。結果は少し変わるんだよ」
「？」
「ここで俺が暴れたら、島崎が興奮するだろ？芹沢、お前は怒るだろ？静かに運ばれていれば、島崎は比較的落ち着いていて、お前は嬉しいだろ？」
「はいっ！霊幻さんが俺に運ばれますっ！」
めちゃくちゃ不機嫌になりながら抵抗したら、
「めちゃくちゃ不機嫌は……不機嫌すぎるぞ、芹沢。ちょっとだけ不機嫌にしておきなさい」
「りょ、あるいは、り、です。」
「……またネット知識だなっ！若者言葉を使うな、社会人だろ？ちゃんと『了解です』って言いなさい」
「はーい、了解ですっ！」
返事しながら、芹沢は器用にドアと呼ぶには重厚な扉を開ける。部屋の中にはダブルベッド数個分ありそうな大きなベッドが鎮座している。
そして、壁には。
「……し、島崎……、壁にさ……」
「はい、霊幻先生はお目が高い。各種コンドームとローションと、先生が喜んで頂けそうなオモチャを大量に用意いたしました。SMグッズや拘束具など、霊幻先生の人権に関わる物はございません、ご安心下さい。もちろん、用意して欲しいならば用意いたしますが？」
「いらない、いらないっ！拘束具なんてっっ‼」

「霊幻さん。俺が超能力で作ったベッド、前よりグレードアップしてますよ？雲の上で寝てるみたいですよ、ちょっと浮いてるんです。霊幻さん、雲の上で寝てみたいって言ってましたよね？」

「……ちゃんと、寝かせてくれるんだろうな？」

思わず、霊幻が呟くと、二人は嬉しそうに笑う。
「喜ぶタイミングも一緒だな」と霊幻は内心で思ったが、さすがに喜んでいる二人は気付かなかったようだ。
「似ている」という言葉は、思うだけでも禁句らしい事は、霊幻も身を以て知っている。知ってはいるが、『似ている』ところを見ると、つい口にしてしまうし、ついつい思ってしまうのだ。
（考えるだけで怒るのは反則だよな）
と、霊幻は思う。

「さあ、霊幻先生の機嫌が悪くならない間に、始めましょうか？私の前で芹沢に抱かれるあなたも、芹沢の視線を気にしながら、私を受け入れるあなたも、どちらも綺麗ですよ、きっと」
「変態の島崎に抱かれる霊幻さん、側で見たいです。本当は俺以外の男に抱かれる霊幻さん見たくないけど……何でしょう……NTRも『漢』のロマンなんですよ……悲しい男の性ですね……」

何をそれっぽいこと言ってるんだ？
結局、俺の恥ずかしがるところと、嫌がるところを見たいだけじゃないか。
これだから、『エロ』で頭が支配されている奴らは。

どうせ結果は変わらないんだ、と睨み付ければ、島崎はニコニコと笑って、芹沢は困ったように眉尻を下げる。
気付けば裸でベッドに横たえられた霊幻は、まな板の上の鯉だ。ジタバタしてもしょうがない。

「霊幻先生は、実に肝が据わってらっしゃる。その怯えながらも覚悟を決めたオーラ、実に堪らない。興奮で胸が張り裂けて臓物飛び出しそうです」
「……そこまで興奮するな」

「霊幻さんっ、男の中の男っすっ！『超能力者』二人相手ぐらいドンと来いって感じですね！感動して泣きそうですよ、霊幻さん～」
「本当に泣くな、バカ」

「俺だってもう四捨五入すれば三十路だ、子供じゃない。お前達から逃げられるなんて甘く考えていた俺は卒

業した……ごく最近の事だが。まあ、俺の周りには、二種類の人間がいる。」
霊幻は悟ったように言った。
「どんな人間ですか？燃えるゴミと燃えないゴミですか？」
「霊幻さん、二種類って、ゴミとゴミじゃない？ですか？」
基本的に『ゴミ』から離れろ、と霊幻は思ったが、こいつらに何を言っても仕方ないと思い直す。
「お前達と、俺だ」
霊幻はドヤ顔で言った。もう霊幻自身、自分が何を言おうとしているのか自信がないが、裸のせいか、開放的な気分になっている。
「その心は？」
「お前達は、俺が逃げれば逃げるほど、追い掛けてくるバカ共だーーっっ!!」
霊幻は思い切り起き上がると、芹沢の額に頭突きする。ゴンッと大きな音を立て、二人してベッドに転がる。
「うぅ、芹沢の石頭……これじゃあ、島崎にまで頭突きをする耐久性は、俺の頭に残されていない……無念」
「……痛いです、霊幻さん。かなり頭固かったですよ……絶対にコブになります。これも霊幻さんからのプレゼントだと思えば、嬉しいです。ありがとうございます」
「霊幻先生、私には頭突きをして下さらないのですか？こういう贔屓を戯れに与え、我々の競争心を煽る事を覚えてしまったのですね？」
「うるさい。元気になっても頭突きしてやらないからな。殴られて一目惚れした『島崎さん』？」
「……ほぉ。それはそれは。私に優しさは必要ないと？」
「ひ、必要ないとは言ってないだろ？」
「でしたら、頭突きは？」
「え？……頭突き、して欲しいのか？」
いや、そんな、まさか。
仮にも『イケメン枠』の島崎なのに。
霊幻は思ったが、島崎は霊幻に頭突きされた芹沢が羨ましいらしく、ブツブツと小声で呪詛のように独り言を言っている。よく耳を澄ませば聞こえるだろうが、霊幻は怖くて聞きたくはなかった。
「し、島崎……頭突きの方がいいのか？」
霊幻が言うと、島崎はハッとしたように顔を上げる。
「ああっ！流されやすい性格の霊幻先生の下半身に血流が集まっています。心臓の音も早くなっていますね……ああ、しかも先生の『蕾』にも血流があつまって……ああっ、目眩がっ！」
「や、止めろっ！見るなっ!!」
島崎は霊幻の足首を掴むと、グッと霊幻の身体の方に押しつけ、M字にさせる。股を開かれ、体勢からも、島

崎の目の前には霊幻のペニスも尻穴もあるはずだ。
特に、尻穴には霊幻自身の意識が集中する。島崎の視線を気にしないように、島崎には見えていないのだから気にしないように、そう思うけれど、島崎の全神経が霊幻の尻穴に集中している。
(ど、どうしよう……匂いとか嗅がれたら……)
視覚が失われている分、島崎の感覚は常人のそれよりも優れている。それに超能力が関係しているのかいないのか、そこまでは霊幻にも分からなかったが、とにかく並の人間とは比べものにならない。
(誰に会ってきたとか、何を食べたとか、何処に行ってきたとか……いや、盗聴もしてるんだからさ……匂いにまで敏感にならなくても……)
思うけれど、
『霊幻先生を追い掛ける事だけが私の楽しみなんです』と真顔で言われれば、霊幻は本当は色々と言わなければならないが、それ以上は何も言えない。状況が悪化する未来しか想像出来ないのだ。
「慈悲深い霊幻先生?私は目が見えず、先生の可愛らしいペニスも、愛らしいアナルも直接拝見する事が出来ません。どうぞ、そんな哀れな私の為にお願いがあるのですが……」
「何だよ?」
島崎がかなりの下手に出てくる時はろくでもないと知りながら、霊幻は『断ったところで状況は改善しない』事を、身を以て知っていた。
「先生。どうぞ足首をご自分で掴んでM字開脚していてください」
はい。M字開脚の要望を頂きました。
まったく想像通りだ。
いや、想像の斜め上か、斜め下だ。
どうして見えないのにM字開脚を望むのだ。
霊幻には分からなかったが、基本的には相手を尊重する霊幻には島崎に対して『お前、見えないだろ』とは、到底口が裂けても言えるものではなかった。
色々と断り文句を考えながら、霊幻は自分の足首を持ち、M字に足を広げる。そうしながら、本気で、断る口実を探すのだ。もう自ら『M字開脚』しているというのに。
「ああっ、霊幻先生っ!まずは拝ませてくださいっ!!」
「えっ!!何をっ?何処をっ!?」
「先生の恐怖で半勃ちのまま震えているペニスと、期待にヒクついているアナルです」
「そ、そんな真顔で言うなよ~っ!!」
一応抗議するけれど、島崎は既に祈りの体勢に入っていて、手を合わせてブツブツと何か言っている。ところ

どころに『感謝』『尊い』『やらしい』『犯してぇ』など、この状況ではどれが一番物騒なのか分からない言葉が聞こえてくる。

(うう……今からセックスするのに……『感謝』とか、怖い……)

まったくセックスに関係ない言葉を尻穴に向かって呟かれるのは、恐怖以外のなにものでもない。それどころか、霊幻にも分かるほど島崎が興奮しているのが分かる。もう側に芹沢がいるなんて事、忘れているに違いない。

「と、とにかく、落ち着け。息が荒すぎる」

「落ち着いています。私史上、最高に落ち着いています」

まったく落ち着いてねぇ〜〜っっ!!

霊幻は顔を強ばらせるが、島崎はそんな霊幻を気に留める様子もなく、指で霊幻の尻穴の皺を伸ばすように触れる。

「ひゃっ!嫌だっ、恥ずかしいっ!オイル、オイルかローション使って〜〜っ!!」

いくらアナルで感じるようになっているとは言え、オイルも何も付けていない手で触れられる心の準備は出来ていない。

その時、

「ひゃっ!?」

胸にトロリとした冷たい感触が。

「霊幻さんの乳首。いっぱい堪能してますね……ホント、ピンッと立って、よくここまで育ちましたよね、感無量です、俺。」

視線を上げると、興奮に目をギラつかせる芹沢の姿がある。『NTRは男のロマン』と言うだけあって、芹沢は自分以外の誰かが霊幻に触れる事を不満に思いながら、嫉妬している環境にも興奮もしているようだ。芹沢の側には『食べても害のないローション』のボトルが転がっている。

「霊幻さんは、変態の島崎に抱かれながら、俺に乳首を弄られたり、するんですよ?楽しみですか?」

芹沢は尋ねる。

「楽しみなはずあるかっ……んっ、あっ……やぁっ、芹沢っ!乳首っ、引っ張っちゃ……んんっ!」

霊幻の口から喘ぎ声が漏れる。

芹沢に乳首を引っ張られ、捏ねられて、先端に爪を立てられる。ぬるりとしたローションが滑りを良くして、ムズムズとした感触が胸から全身に拡がっていく。そうしている間に、拝むのを止めたらしい島崎が霊幻の尻穴から会陰の付近を丹念にマッサージするように手を動かしている。とろり、アロマオイルが垂れて、香りが広がる。霊幻自身が配合したアロマオイルだ。仕事で使おうとしていた馴染み深い香りに、霊幻の羞恥は高まる。

「だめぇ……島崎っ、尻、引っ掻かないでぇ……んんっ、あんっ、入り口弱いからぁ……っ」
オイルを垂らされ、尻穴を引っかかれる。島崎の爪先が既に霊幻の尻穴の入り口付近をコリコリと引っ掻いている。指の第一関節ほどだけが、尻穴の入り口を行ったり来たりしている。
(……もっと、奥……っ、奥、気持ちいいって……ああ、俺、知ってる……)
尻の奥を、島崎のペニスで掻き混ぜられた。「嫌だ」と言っても、それが本心なのか、何となくの言葉なのか、霊幻自身覚えていない。覚えているのは島崎のペニスの熱さと、内臓を押し上げてくるような不快感、そして、それをある瞬間越えてくるむず痒さと認めたくない気持ちよさと、誰かに求められる心地よさ。
「どうしました、霊幻先生?引っ掻かないで、という割には、『もっと気持ちよくなりたい』というオーラを醸し出していますよ。いいえ、オーラなど見なくても分かります。先生の蕾が先程から綻んでいます。指を入れたら、真っ赤に花開くかもしれませんね?いかがですか?」
言いながら、島崎は、指を霊幻の尻穴の入り口に引っかけて、ぐるりと輪郭をなぞるように指を動かす。
「あっ……そこは……っ、んん、っ……っ」
霊幻は無意識に腰を動かし、島崎の指に自分の尻を押しつける。もう自分の足首を掴んでいることは出来なくて、ガクガクと震えながら、足首から手を離した。「はあはあ」と、整わない呼吸のまま、自分の足先にいる島崎を見る。島崎は上機嫌に、けれど、獲物を狙う肉食獣のように、霊幻を視ながら、舌舐めずりする。
そんな島崎の姿に、霊幻はこれから始まる行為を想像して、コクッと喉を鳴らす。
「あ、霊幻さん。チンポ欲しいんですね?物欲しそうな目、してますよ?」
芹沢は霊幻の乳首に軽く力を込めて乳輪ごと捻った。
「ひゃっ……っ!」
敏感になっている身体には、少しの強い刺激も痛みと快感になる。痛いような気がして、それから、痛くない気がして、気持ち良くなって。
「ああ、芹沢……乳首、もっと、引っ張って……」
「引っ張るだけでいいんですか?」
芹沢は霊幻の髪を掻き上げ、その額に口付けを落とすと耳元で囁き、その耳朶を唇で啄む。
熱い吐息を耳に直接吹き込まれ、霊幻は「もっと」とねだる。
「霊幻先生。私にはおねだりはないんですか?何か、やって欲しい事があるのでは?」
島崎の言葉に霊幻はブルッと身体を震わせる。
(……やって欲しいこと……?何?)

分かっているのに、理性はそれを認めたくないのか、答えを出せずにいる。
「こんな事は、いかがです?」
言って、島崎は人差し指を霊幻の中に差し込んだ。アロマオイルに濡れた指が、霊幻の敏感な尻穴の内壁を撫でる。
「ああっ、んっ!」
そう、それ。
霊幻は思って、そんな事を考える自分にハッと我に返り、また、尻への刺激に意識が傾く。
そんな感情の全てが、島崎にも、芹沢にも、知られているようで、二人とも興奮に息を荒くし、それを無理に我慢して冷静を保とうとする。霊幻は自分を見つめ、興奮する二人に、霊幻自身も呼吸を荒くする。
「もっと乱れて、声を聞かせて下さい、霊幻先生?」
「霊幻さん。もっともっとやらしい姿が見たいです」
「ああ、霊幻先生の蕾は、私の指にもっと奥へと来て欲しいようですよ。キュッキュッと伸縮し吸い込まれてしまいそうです」
言って、島崎は霊幻の尻穴の奥まで指を挿し入れた。
「ひゃんっ!……あっ、んっ……、……っ」
「おや?もしかして一本では足りないですか?どうなんですか、先生?」
「んっ、んんっ、んぐっ」
必死に声を抑えようと唇を噛む霊幻の口に、
「ああ、霊幻さん。唇に傷が付いちゃいます……声抑えたらダメですよ?素敵な声なんですから、いっぱい聞かせてくださいね」
と芹沢は言うと、指を無遠慮に霊幻の口の中に突っ込んだ。霊幻の口内に溜まった唾液を指で掬うと、それをチュッと吸う。その様子に、霊幻は驚きに目を見開き、「そんなのだめ」と舌足らずに言うが、芹沢には意味さえ通じてないようだった。芹沢の指が霊幻の舌の上に置かれると、無意識にその異物を追い出そうと舌を絡めてしまう。
「んっ、しぇり、ざぁわぁ……っ」
舌足らずに『芹沢』と名前を呼べば、それに答えるように芹沢は霊幻の唇にチュッと触れるだけの口付けをし、それからチュッチュッと顔中を舐めるように口付ける。そうしながら、芹沢の太い指が霊幻の乳首をおもむろに摘まんだ。反射的に起き上がろうとする霊幻の身体を押さえ付け、芹沢は霊幻の肌に手を這わせる。
「霊幻さんの乳首。乳輪からぷっくりと膨らんで、とってもやらしい色してますよ。これじゃあ海に行ってもパーカー脱いだり出来ませんね。温泉にも入れませんよ?上半身裸にはなれません」

「やっ！言うなぁっ……んんっ、あっ、乳首と尻の……両方は……あっ、ああっ、両方、動かさないでぇ……」
競うように、霊幻の感じる箇所に触れる二人に霊幻は抗議の声を上げるが、結局、誘っているようにしか聞こえない。
「ほら。もう一本、指、入れて欲しいんだろ?」
島崎も興奮しているのか、ゴクッと喉を鳴らすと、乱暴な口調で言う。
「どうなんだ、先生?」
「んっ！もう一本、指入れてぇ……っ、島崎ぃっ」
「どうすりゃいいかなぁ……もう少し甘えた声も聞きてぇしなぁ……おねだりしてみてくれよ、霊・幻・先・生?」
島崎は人差し指を限界まで霊幻の奥にねじ込み、内壁をグリグリと押したり、引っ掻いたりする。
「ひゃっ！ああっ……島崎ぃっ、もっと、もっと、掻き混ぜて……気持ちいいとこ、抉って……んっ、ひゃっん！」
甘えた声に、島崎は中指も霊幻の中にねじ込む。指が二本になって、霊幻は一瞬苦しげに耐えるような表情を浮かべ、けれど、すぐに呼吸が荒くなり、頬が赤くなる。
「はあ、はあ……んっ……ああ……気持ちいい、とこぉ……」
「ああ、畜生っ、可愛いな、先生はっ！」
興奮を抑えるように、島崎は大きく深呼吸すると、
「……こちらがお好みでしたね、霊幻先生?」
と、必死に丁寧な口調を取り繕いながら、霊幻の膀胱の裏側にある前立腺をグリグリと指で押す。
「あっあっあ、んっ……ふぅっ」
霊幻は島崎の指の動きに合わせて、甘い吐息交じりの声を上げる。喘ぐのが恥ずかしいのか、霊幻は声を抑えようとするけれど、上半身は芹沢に乳首を中心に攻められ、下半身は島崎に攻められ、声を抑える事も難しい。
(……ああっ、俺……ん、何を言うか、わからない……ヤバい……絶対、ヤバい……っ、あっ、気持ちいい……乳首も尻もどこも気持ちいい……ああ、芹沢、もっと強いのがいい……っ、ふぅ、島崎っ、もっと苦しい方が気持ちいいってば……)
内心でそんな事を考えて、霊幻は自分の思考に目眩がする。
そして。
悪魔の囁きのように、芹沢は霊幻の耳元で、
「もっと強い方がいいんですね?」
と確認するように言った。霊幻は驚きに目を見開くが、それを否定出来ず、靄がかっていく思考を置き去りに、コクン、と頷く。瞬間、芹沢は霊幻の乳首をネジを捻るように、強く捏ねる。

「はあっ……強いの、すきぃ……」
霊幻は吐息で言葉にならない声で、芹沢に手を伸ばすと、手の甲で芹沢の頬を撫でる。手の甲で伸びかけのチクッとするヒゲを探す。顎のあたりに触れるとチクチクして、気持ちいい。
「チクチクする、キス、好き……」
「はい、了解です。俺も、霊幻さんのすべすべの肌好きですよ？柔らかい唇も大好きです」
芹沢は言うと、枕を霊幻の背中に滑り込ませ、屈むように霊幻の上から覆い被さると唇ごとしゃぶりつく勢いで口付ける。霊幻の息さえ飲み込むように、芹沢は霊幻の口内を犯すように舌で掻き混ぜる。霊幻の頬の肉を内側から伸ばすように舌で押し、「欲しい」と涙目で訴える霊幻の舌に自分の舌を絡める。
くちゃくちゃと水音を立てるほど深く口付け、伸びかけのヒゲを霊幻の柔肌に擦りつける。霊幻はくすぐったそうに肩をすくめるけれど、抵抗するつもりはないようで、むしろ、手を芹沢の頭に回すと、「もっと」とキスをねだる。
「先生は、私の嫉妬を煽るのがお上手なようで？」
島崎の声に、霊幻は視線を島崎に向ける。島崎の指には霊幻の事務所で呪術クラッシュにも使うオイルの瓶が挟まれている。主に暑い夏にだけ使うオイルで、ミントやユーカリが入っている、清涼感のあるオイルだ。島崎が霊幻の為に好んで使う霊幻の新作オイルではない。
「あっ、それは……」
ほんの少し水に垂らしただけでスッとして涼しさを感じるものだ。主に『足に悪霊が溜まり熱をもっている人』向けのオイルだ。そのオイルを、島崎は霊幻の尻に指を入れている方の手にポタリ、ポタリと垂らす。手を伝い、オイルは霊幻の肌に触れた。敏感になった肌にキャリアオイルは使っているとはいえ、ミントのオイルは刺激が強い。冷たくなるはずの肌が、むしろ火傷でもしたかのように熱い。
「ひゃんっ！あ、熱い……っ！」
「ほんの数滴ですよ、霊幻先生？ほら、そろそろ私の指を伝い、先生の中に入っていきますよ？柔らかな肉に、このオイルが触れたら……先生は、どうなってしまうのでしょうね？」
「ダメだって、それは……っ、火傷しちゃう……熱くて、だめぇっ！」
「ああ、そうだろうな……、いいえ、そうでしょうとも」
オイルが伝い落ちてくるのが分かる。霊幻は「嫌だ」と首を振る。
「もう私の事を忘れませんか？」
「忘れてなんかいないだろっ！」
「では、私の事を『好き』ですか？さあ、『好き』と言ってください」

「……、……き」
「何ですか？」
「……、……す、……き」
「そ、そう来るとは……想像もしていませんでしたっ！霊幻先生、試すような真似をして申し訳ありませんでしたっ!!」
島崎は霊幻の尻から指を抜くと、霊幻の腰に縋り付く。
「ああ、先生っ！お慕いしてますっ！こんなに誰かを『好き』になるなんて、想像もしたことがなかったのですっ！ああっ、先生の匂いっ……ああ、腹筋ヤバいっ、腰細いしっ……ああ、ペニスもきっと愛らしいっ!!拝みますっ、毎日毎日、拝みますっ!!」
「い、いやっ、拝まなくていいっっ!!」
「いいえ、こんな地獄行きの男を『好き』と言って頂けて、もう、絶対に拝みますっ！死んだら一緒に悪霊になって、この世に災厄をまき散らしましょうっっ!!」
「お前、『好き』って言われて、どうしてそんな化学変化を起こすんだっ！」
「ああ、先生の腹筋っ！ああ、先生の桃尻っ、顔を埋めて死にたいっ!!」
「変な死に方を妄想するなっ!!」
どうして、あんなにサドっ気のあった島崎が壊れたのか、まるで分からない霊幻は困ったように芹沢を見る。
芹沢は仄暗い目で霊幻を見下ろしている。
「芹沢？」
「霊幻さんは、その変態が『好き』なんですか？俺の事は？俺の事は、その辺のぬいぐるみに対する『好き』程度ですか？」
「い、いや……」
霊幻の腰に縋り付く島崎の頭を撫でながら、霊幻は首を振る。
芹沢の顔から「のんびり」とした表情は消え去り、深淵のような瞳が霊幻を見下ろす。
「『好き』って、言ってください」
「えっと……」
「俺の事っっ!!『好き』って言ってくださいっっ!!」
そんな風に強要して『好き』って言ってもらって嬉しいの？
と、霊幻は思ったが、すっかり二人に絆されている自分がいるのも事実だ。
特に芹沢は事務所の従業員でもあるし、情もある。
『好き』くらい、あっさり言える。
そう思ったが、霊幻の口から出てきたのは、
「……す、す、すき」
と、蚊の鳴くような声だった。

「霊幻さんっっ‼俺は愛してますっっ‼俺、俺、霊幻さんのためならっ、何だってしますっ‼ああっ、貢ぎたいっっ！『爪』時代の通帳どこにあるかな？多分捨ててないから、それをとにかく貢ぎますっ‼霊幻さんを苦しめた奴らの命だけじゃ足りないっ‼もう何でも捧げますっっ‼」

「と、途中、物騒なこと言った？」

「俺っ！霊幻さんのお尻さんに、毎日俺のチンポで参拝しますっっ‼」

「それはただのセックスだっっ‼」

「俺も、絶対悪霊になって、霊幻さんの復讐の手伝いしますからっっ‼一生側にいますっ‼死んでも側にいますっっ‼」

「いやいや、『復讐』とかないからっ！」

芹沢は霊幻の身体を後ろから強く抱き締める。ミシミシと骨が折れるのでは、と思うほど力いっぱい抱き締められて、「死ぬ」と呟く。

瞬間、芹沢の肩からブシュッと血が吹き出す。霊幻は何が起こったか分からなかったが、よく見れば、芹沢の肩がキラリと光った。

「先生を殺す気か、芹沢っ！」

島崎の振り上げたナイフが芹沢の肩に刺さっている。

「う、うわぁ～」

もしかして俺が「死ぬ」って言ったから？

と、霊幻はかなりドン引きしながら、二人を交互に見る。芹沢は肩に刺さったナイフを気にすることなく霊幻を抱き締めている。島崎は両手に投げナイフよりも大きめなナイフを持ち、振り上げている。

「し、島崎っ⁉ダ、ダメだってっ‼」

頼む、落ち着いてくれ、俺も血で真っ赤に染まる。

と、霊幻は島崎に必死に手を伸ばす。

「霊幻先生っ！霊幻先生は、私を『好き』とおっしゃりましたっ‼」

「言ったっ！確かに言ったっ‼でも、これはさ……」

「霊幻さんは、俺の事『好き』って言いましたよね？」

「言った！確かに言ったっ‼でも、これはさ……」

同じ台詞しか返せなかったが、それが良かったのか、島崎は振り上げたナイフを消す。芹沢も、いつの間にか練り上げていた超能力を手で握りつぶす。

「霊幻先生は、ペニスは一本では足りないとおっしゃるんですか？『３Ｐ』が嫌だと言っていたのは嘘だったのですねっ‼」

「霊幻さんは、やっぱり『３Ｐ』がしたいんですね？

むしろ『3P』が本命なんですかっ!?チンポ一本じゃ満足出来ないんですかっ!?」
どういう思考で、『好き』から『チンポ』に飛んで『3P』にたどり着く？
霊幻は顔を引き攣らせるが、言ってもいい状況なのか、自信がない。
むしろ、言ってはいけない空気がプンプンと漂っている。

「……霊幻先生？」
「霊幻さん？」

「あ、いや……俺はさ……」
チンポは一本でも十分すぎるというか……。
「やはり、芹沢を抹消しなければいけないという事ですね？」
「……島崎を殺せって命令ですよね？」
ゆらり、と立ち上がろうとする二人の手を霊幻は咄嗟に掴む。
（ダメだ……この手を離したら殺し合いになる。どちらかが生き残るまで、終わらないゼロサムゲームの始まりだっ!!もう、あんなサイキックバトルはこりごりだ、俺の方が死んでしまうっ!!）
二人の視線が、霊幻に突き刺さる。まるで『世界平和』が霊幻の両肩にのし掛かってくるようだ。それは大袈裟だとしても、このマンションの住民、周辺住民の命と財産は霊幻の両腕に掛かっている。

「霊幻先生？私を『好き』だと、私のペニスが良いと言ったのは嘘だったのですか？」
「霊幻さん？俺を『好き』って言いましたよね？俺のチンポが好きだって……」

いや、男性器の事までは言っていない。
言っていないが、今は、それどころではない。
霊幻はとにかく二人の手を離せないと、力を込める。
二人は驚いた顔をして、それから嬉しそうに笑って、思い切り霊幻の手を握り返してくる。
（俺は裸で何をしているんだ？
……だから、『爪』の連中は、『世界征服』なんて企んだって何にもならないんだよ……これが争いの後に残った傷跡だ……）
と、霊幻は現実逃避のように思うが、今起こっている事は現実だ。
どうにかしてこの状況を乗り越えなければならない。

霊幻は、二人を見上げると、
「俺、チンポ一本じゃ足りないから。お前達のチンポで、俺は満足だからさ……二本は絶対に必要。」
と、捨て身の言葉を口にする。
すると、
「まあ、霊幻先生ならそう言うと思いました。二本で満足されるとは思いませんでしたが……。先生ほどの方になれば、何本望んでも許されるというのに……なんて謙虚な方なんでしょうっ！」
「霊幻さんっ！俺のチンポも含めて二本で良いって言ってくれるんですかっ!!優しい、優しすぎますよっ！すげぇ嬉しいですっ！ありがとうございますっっ!!」
「ではさっそく霊幻先生に満足して頂けるように励まないといけませんね？私の持つ全ての力を使って、必ず霊幻先生を満足させてみせますっっ!!」
「霊幻さんっ！俺っ、前より絶対上手くなってると思いますっ!!根拠はないですけど、自信だけはありますっ!!」
どっちも、ヤダ。
そう思いながら、霊幻は乾いた私を浮かべ「頼んだよ」と言った。

† † †

ベッドに横たわった霊幻はそのままの姿勢では何となく落ち着かず、膝を立てた。そんな霊幻の足を島崎は自分の方に引き寄せ、自分の膝の上に霊幻の足を掛ける。下半身だけ持ち上げられるような体勢だから、霊幻の臀部に、布を押し上げるように勃起した島崎のペニスが当たった。霊幻は恥ずかしさに動こうとしたけれど、腰を掴まれ上手に逃げる事は出来なかった。
男なんだから勃起するのは自然現象で、ましてセックスをするという状況で勃起していない方が不自然だ。
それは霊幻にも分かっていた、分かっていたが。
(なかなか、慣れない……)
島崎とも、芹沢ともセックスした。尻穴にペニスを挿入され、快楽に溺れ、恥ずかしい声を何度も上げたし、恥ずかしい事も言った。全部は覚えていないけれど、霊幻の中には『恥ずかしい』と『気持ちいい』記憶がしっかりとある。
今、体勢を変えれば島崎の腰に霊幻の足が絡む体勢だ。
(島崎のヤツ……いつも涼しい顔しやがって……)

ちょっとした意趣返しで、霊幻は島崎の身体に足を絡め、島崎の身体に足を這わせる。
瞬間。
島崎の動きが止まり、顔が見る間に赤くなる。
そんな島崎の姿に霊幻の顔も真っ赤に染まる。芹沢は霊幻の髪を優しく撫で、「可愛いですね、霊幻さん」と言う。
それに答える余裕は、今の霊幻にはない。
「な、なんだよ、島崎。も、もっと……恥ずかしい事しただろ?何照れてるんだよ、俺の方が恥ずかしいよっ!」
と、照れ隠しのように霊幻は島崎の身体に絡めた足に力を込める。島崎はそんな霊幻の腰を掴み自分の方に引き寄せる。
島崎の洋服越しに、島崎はペニスを霊幻の臀部をグリグリと押しつける。
「ちょっ……んっ」
布越しとは言っても霊幻は裸で、島崎はスキニータイプのパンツ。刺激は霊幻の想像以上にダイレクトに伝わってくる。
「可愛い悪戯ですね、霊幻先生?先生は、男を煽る術を生まれながらに知っていらっしゃるかのようですね?」
言いながら、島崎は霊幻のペニスにも触れ、軽く触れるか触れないかの加減で皮膚に指を這わせる。
「霊幻さんの乳首、ピンッとしたままですよチンポまだ半分くらい勃ってないのに、乳首は固いですね?」
芹沢は言って、霊幻の乳首を指で押した。霊幻の意識は完全に島崎に集中していて、乳首への刺激は不意打ちだった。
「ひゃっ……あっ、んっ……あっ、あっ」
霊幻の口からひっきりなしに喘ぎ声が漏れる。乳首を捏ねられる刺激の度に喘ぐことを霊幻自身、抑えられない。手で口を押さえようとするけれど、どうしても腕を上手に上げることが出来ない。芹沢の念動力でこっそりと押さえられているのだけれど、霊幻はそれに気付かない。「どうしよう、どうしよう」と心の中で繰り返す霊幻の困惑は表情にも出ていて、それがまた色っぽさを増している。
「ねえ、霊幻先生?ペニスと乳首と……アナルへの刺激。どれをお望みですか?どこが……一番、気持ちいいのでしょうね?」
島崎は霊幻の身を屈め、霊幻の腹筋を伝う汗をベロリと舐める。爬虫類に睨まれた小動物のように、霊幻は身体を強ばらせる。頬はみるみるうちに赤くなり、同様に視線が定まらない。
男の自分が「チンポが一番気持ちが良い」と即答出来なかった事に、霊幻は動揺する。それを誤魔化そうとす

ればするほど、意識がペニスとは違うところに移っていく。唇を噛んで誤魔化そうとすると、口内を芹沢の指が掻き混ぜる。
「霊幻さんのお口の中、温かいですね……お尻さんの中と一緒です。チンポくん舐めてもらったら気持ちいいだろうなぁ」
と、芹沢が言う。
芹沢のペニスをしゃぶる姿、なんて想像出来ないと思った霊幻の頭に、芹沢のペニスを舐める自分の姿が浮かぶ。なら、島崎のペニスを舐める自分は想像出来るのか、と考えると、それが想像出来た。そんな自分の思考が怖くて、霊幻はブルッと身体を震わせる。
「それでしたら、私だって舐めて頂きたいですよ？でも、今日は霊幻先生に気持ち良くなって頂き……ずっとここに住みたい、ここでの生活を楽しみたいと、思って頂けないといけませんからね。私や、そこの化け物の事はどうぞお捨て置き下さい」
「はい。今日は霊幻さんにトイレに立てこもりとか、影山先輩呼び出そうとされたりとかしたくないので、霊幻さんの好きな感じを言ってくれればその通りしますよ。俺、頑張ります」
その言葉に、霊幻は心底ホッとした。願われたら断る自信が、今の霊幻にはなかった。「モブをこんなところに呼べるか」なんて冗談も言える心境でもない。
身体に熱が篭もっていて、島崎から与えられるペニスへの刺激だけでは、それは半勃ちにしかならず、その事も霊幻には恥ずかしかった。
「お、俺だけ……裸じゃ、恥ずかしい……島崎の裸、見てみたい……」
霊幻は言って、自分のペニスを触る島崎のペニスに手を伸ばした。島崎の手に、霊幻は自分の手を重ねた。瞬間、島崎の顔が赤くなって、そして、慌てたように服を脱ぎ始めた。超能力で服を消すだろうと考えていた霊幻だから少し驚いたが、理由は島崎の顔を見れば、すぐに分かった。忘れてしまっているのだ、超能力を使うことを。
それほど、あの冷静沈着で慇懃無礼な島崎が、自分を求めてくれているという事に霊幻は気付いて、恥ずかしくて照れくさくて、自分でも顔が赤くなるのが分かった。そして、尻の奥がキュッキュッと締まる。その事が恥ずかしくて、霊幻は目を伏せるが、上から見下ろしている芹沢には丸見えだ。
「霊幻さん、顔真っ赤。俺の裸も見ますか？」
「……ひ、一人だけ、裸は卑怯だ」
嫌味の一つも言いたいが、言えたのはそれくらいだ。そんな霊幻の額に口付けると、芹沢は着ていた服を脱ぎ、丁寧に畳んだ。几帳面に見える島崎が服を放り投げて、大雑把に見える芹沢が服を畳む姿が面白くて、霊幻は少しだけ落ち着いた。

「霊幻先生、あなたの一番深いところに触れたいのですが、よろしいですか？」
島崎は言った。それが何を意味するのか分からないほど、霊幻も初心ではない。心は初心のままでも、身体はすっかり快楽を覚えている。いつの間にか覚えさせられている。そんな風が一番男を煽るという事が、霊幻には分からない。
「……え、えっと……お、お願いします……」
何がお願いします、だ。
と思ったが、島崎が驚いたように、咄嗟という風に目を見開いて、その焦点の合わないはずの瞳が、間違いなく霊幻を捉えた。
「ああ、もちろんだっ！任せろ、霊幻先生っっ!!……あ、いや、承りました、霊幻先生」
島崎はいつもの口調を忘れ、荒れた口調で、けれど、すぐにいつもの言葉遣いに戻って、ただ、慌てた風で、何ともチグハグになっていた。それがおかしくて霊幻は笑おうとしたけれど、そんな島崎に霊幻の胸はきゅんきゅんと鳴る。
（あれ……？あれあれ？）
いつの間にか手は自由になっていて、霊幻はそれは無意識のように、島崎に手を伸ばし、その首に手を回す。
島崎は掻き抱くように、霊幻を抱き締めた。そのままどちらともなく口付けを交わす。島崎は霊幻が欲しくて欲しくて仕方ないという風に口内に舌を挿し入れ、呼吸さえ奪うように口付ける。
「んっ、ふぅ……っ」
息苦しげに声を漏らす霊幻の声さえ奪い、口付けを続ける。苦しげに島崎の引き締まった胸板を叩く霊幻の手を握ると、その指先にキスをする。まだ息の整わない霊幻に島崎は息を吹き込む。
島崎はそのまま霊幻を押し倒すと、霊幻の身体をうつ伏せに押し倒す。戸惑う霊幻はベッドに四つん這いになり、そのまま腕が崩れ落ちるが、腰は島崎にしっかりと掴まれ、尻だけが持ち上がった状態。尻穴が否応なく空気に晒される。島崎は盲目で見えないはずなのに、その視線は内臓、心の中まで見透かすように霊幻の尻穴に、島崎の『視線』が突き刺さる。
「さあ、今度はどの指から欲しいですか？」
尻の肉を広げるように島崎の指が動き、肉を柔らかくするように揉む。その指が、どんなに霊幻を気持ち良くしてくれて、快楽の海に突き飛ばすのかも、霊幻はよく知っている。
「ああっ……指じゃ足りないっ……指、さっき入れてもらったからっ……っ」
「チッ！あんたって人は……いきなり突っ込まれたら

痛いぞ？あんたのせいで、かなり元気だぞ？」
島崎は怒鳴るけれど、先程の口付けで靄がかった霊幻の頭はふわふわとして、『痛い』という言葉さえ、自分に快楽を与えてくれるものだった。
「遠慮するなんて、お前らしくないっ……っっ!!」
霊幻が、言い終えるか言い終えないかのうちに、ズンッッと内臓を押し上げるような刺激に、霊幻は、
「……ンンンンッッッ！」
声にならない悲鳴を上げた。
「あっ、あっ、あっ……っ！」
霊幻は、島崎から与えられる刺激に合わせて喘いだ。島崎の手が霊幻を抱き寄せ、その手が霊幻の筋肉を確かめるように動き、そして、ピンッと立ち上がった霊幻の乳首に触れた。
「ふぁん……っん！……んんっ……あんっ！両方はダメェ……っ！」
「両方とは？」
「知ってるだろ？」
「……さあ？霊幻先生の言葉は忘れた事はありませんが……」
と、島崎が意地悪く、でも、平生よりもひどく切羽詰まり、霊幻が欲しくて欲しくて仕方ないという風な声だった。その声に、霊幻の胸が締め付けられ、「はぁ」と息を吐き出す。

「乳首と……お尻……」
「じゃあ、ペニスはいかがですか？」
霊幻は、その言葉に息を詰める。
「私も……不器用な男ですから、二ヵ所しか霊幻先生を喜ばせることは出来ませんが……？」
「嘘……つきっ……んっ」
「おやおや。こんな誠実な男を捕まえてなんて、ひどいお言葉ですね？霊幻先生？」
「はあっ……んっ……」
なら、どこを選べばいい？
霊幻は思って、『ペニス』を扱いてもらわなきゃと思った。『もらわなきゃ』それは、義務のような言葉で、何故、自分が義務感のように考えるんだろうと思った。このまま所を後回しのように当たり前に刺激を感じる場所を後回しのように考えるんだろうと思った。このままペニスまで触れられたら『気持ちいい』に支配されるに違いない。
でも。
とも考える。
尻穴を突かれながら、ペニスに触れられたら、それはどんなに気持ちいいだろう、と。
島崎は霊幻の腰を抱き寄せ、片手で霊幻の腹筋を支えている。もう一方の手は、霊幻の乳首を捏ねたり、優しく触れたりを繰り返す。細くて長い指は、きっと、身体中のどこに触れられたって気持ちいいに違いない。

「……お、お尻と……チンポ……」
「おや？乳首でなくてよろしい？」
言って、島崎は霊幻の乳首を捻るように摘まんだ。
「あんっ、んっ！」
触れられた熱はじんわりと皮膚の表面を伝い、全身へと広がる。けれど、下半身に集まる熱も行き場を失い、ぐるぐると体内を回り、気持ちいいと気持ち悪いの間を行ったり来たりしている。
「ち、乳首は……せ、芹沢に触ってもらうっ！」
霊幻は捨て鉢のように言った。
その言葉が、言い方が面白かったのか、島崎は「ククッ」と笑った。
「なるほど。その手がありましたね」
霊幻が芹沢のいた方に目を向けると、そこに芹沢の姿はない。
「あ、あれ？」
戸惑っている内にドアが開いて、芹沢はショートケーキを持って戻ってきた。
「あっ……えっと……ちょっと、お腹空いちゃって……」
芹沢は言い訳のように言いながら、ベッドに乗ると、霊幻の前に座った。霊幻を見つめながらパクパクとケーキを食べる。
「霊幻先生は、お前に乳首を触って欲しいそうだぞ？」
「そうなんですか、霊幻さん？」
芹沢は嬉しそうに声を上げると、何の躊躇いもなく、持っていたケーキのクリームを霊幻の乳首に塗りつける。
「ひゃぅんっ！あ、え？んっ……んんっ？」
な、なんで『3P』中にケーキを食べる、芹沢？
「俺の事なんて忘れて夢中になってたから、つい。エロい霊幻さん見てたらお腹空いちゃって……」
「性欲は他の欲望とも直結しているようですから、きっと芹沢の脳の中で霊幻先生に対する性欲とケーキに対する食欲が合致したのでしょう」
いらない解説付き。
霊幻は「ばかぁ」と芹沢を睨む。
「待たせちゃいましたね、霊幻さん」芹沢は言うと、霊幻の唇をチュッと吸い上げ、クリームの付いた霊幻の乳首を指で捏ねる。ツルツルと滑る指で、触れられ、ブルッと身体が震えた。芹沢は身を屈めると、クリームの付いた霊幻の乳首をペロペロとなめる。舐め終えると、芹沢はケーキの生地ごと、クリームを霊幻の胸に塗りたくる。
「汗でクリームが溶けるのが早いですよ、乳首がショートケーキの苺みたいに、白いクリームからプクッと出

てますよ」
芹沢の言葉に、霊幻が視線を落とすと、白いクリーム
やふんわりしたケーキ生地の中に、赤くぷっくりと膨れ
た霊幻の乳首がある。最初、芹沢に触れられた時よりも
大きくなっている。
（……きっと、乳輪ごと膨れてるんだ……）
そんな身体じゃなかったはずだ。小さな乳首で、それ
を芹沢が何度も吸ったり、触れたりして大きくした。
「あっ、芹沢ぁ……」
このまま、乳首だけで絶頂する身体になったらどうし
よう、と霊幻は思った。
いつだって、それは過ぎっていた。それが、尻穴にペ
ニスを挿入されるようになって、もう既に、ペニスに触
れられなくても絶頂を迎える……
「霊幻さん。『ドライオーガニズム』とか、出来るよう
になるかもしれませんよ？」
「……また、ネット用語っ！」
「ネットには……色々、あるんですよ……霊幻さんが
好きそうなやらしいことといっぱい。本当は『3P』って
言葉も知ってるんですよ？」
芹沢を見ると、芹沢はニコニコと笑っていた。
それ以上聞くのが怖くて、「そ、その話はやめよう」
霊幻は芹沢の腕に縋るように手を掛けた。
「さあ、霊幻先生。嘘つきの話はそれくらいにしてお
きましょう……ほら、ペニスにも触れてあげますよ？」
島崎は言うと、霊幻のペニスに指を絡めた。
インクの凹凸さえ理解し、周囲に盲目だという事を感
じさせないほどの男の指。それが、一番敏感なペニスに
触れている。筋の一本一本、筋肉の凹凸を確認するよう
に触れる。

ああ、考えなくちゃいけない事があるのに。
芹沢は何であんな事を言ったんだ？

思うのに、思考は快楽に傾いていく。
「霊幻さんのショートケーキ、美味しいですよ？」
「私が先生のペニスに触れる度、霊幻先生の尻穴がキ
ュッキュッと締まって、私のペニスを締め付けますよ。
ああ、芹沢に乳首を舐められても、感じてしまっている
ようですが？」
島崎の言葉に、霊幻は「その通りだ」と思った。
二人に触れられれば、触れられるタイミングが違う。
島崎に抱かれながら、芹沢にも身体を触られている。そ
の罪悪感と背徳感に目眩がするのに、内臓を押し上げて
くるような島崎の熱に霊幻の思考は麻痺してくる。
「しま……ざき……？」
霊幻が島崎を振り返ると、甘い声で島崎の名前を呼ん
だ。チロチロと舌を覗かせるようにして、口付けをねだ

ると、島崎は苦笑いしながら、霊幻の誘いに答える。口付けの合間、「あなたに弱い自分に驚いてました」と囁く。
「んっ、んんっ、あふっ……んっ……」
霊幻が目を瞬かせ島崎を見つめれば、島崎は霊幻を視ていた。
「どんな風に見えてる？」
『恥ずかしいけど、気持ちいい』ですか？」
「……そんなの、オーラ見なくても分かるだろ？ばーか」
わざわざ確認しなくても伝わってしまっているに違いない、と霊幻は思った。身体がトロトロに溶けていく。それに気付かれないはずがない。
ズンッと強い圧迫感で中を貫かれて、霊幻は身体を仰け反らせた。
「ひゃっ……深いっ……っ！あっ、しま……あんっ、！反り返って……っっ、良いとこに当たる……っ!!」
霊幻は「あんあんっ」と、たがが外れたように喘いだ。苦しいのに、気持ち良くて、目の前がチカチカする。もっと気持ち良くなりたくて、キュッと島崎のペニスを締め付けると、霊幻の耳元で「くっ」と島崎の苦しげな声が聞こえた。
「……先生。良い子ですね、どこでこんな術を？」
「知らない……っっ、お前達しか……島崎と、芹沢が……教えたんだろっっ！あっ、んっ、ああぁっ、ダメっ、チンポまで……っっ、あんっ」
仕返しとばかり、ペニスを睾丸ごと握り込まれる。
「霊幻先生。男は睾丸を潰されると死ぬそうです。どうですか、心臓を掴まれた気持ちは？」
『死』と『セックス』は似ている。
自分ではどうすることも出来ないところも、与えられる感覚を散らせないところも、きっと似ている。命を誰かに触れられているところも。

「霊幻さんの顔……霊幻さんにも見せてあげたいです。やらしくて、溶けてますよ？ああ、でも目はいつもの霊幻さんだ。俺の大好きな霊幻さん」
芹沢がすぐ側で霊幻を見つめていることを、霊幻は気付かなかった。霊幻が芹沢の声のする方に視線を上げると、芹沢の唇が霊幻の唇に触れた。口の中に甘酸っぱい味が広がる。
「苺？」
「はい、苺です。霊幻さんの乳首と一緒で赤くて、霊幻さんの乳輪みたく、ぷっくりしてつぶつぶがあります」
と、芹沢は言って笑った。
「お水、ありますよ？喉渇いてますか？」
「お水？」
「はい、お水です」

「んっ、んんっ……飲みた……いっ……飲みた……いっ……」

霊幻は息も絶え絶えに言った。自分自身、何を言っているのか、あまり自覚はしていなかった。口元にコップの縁が付くけれど、上手に飲むことは出来ない。口の端からダラダラと水が零れる様に、島崎はタオルを手にアポートさせると、その口元を拭う。

「霊幻先生。せっかくですし、芹沢に飲ませてもらったらいかがですか？私に抱かれながら、他の男におねだりする先生の痴態も見てみたい」

と、島崎は言う。

平生ならば「何言ってんだ、バカ」と一蹴する言葉だけど、今の霊幻には関係なくて、島崎の声が命令のような、自分で思ったような、そんな夢見心地に聞こえてくる。

「せりざわぁ……水、お水……っ、あんっ、だめぇ……しまざきぃ、お水飲むから、動いちゃだめぇ……あっあっ、気持ち良くなっちゃうからぁ……あんっあんっ……」

ずっと声を上げているせいか、霊幻の語尾が微かに掠れてきて、それがまた扇情的で島崎のペニスは霊幻の中で一層質量を増す。

「ああ、このまま霊幻先生より先に射精するわけにはいきませんね」

言って、島崎は霊幻のペニスの根元を握り込む。

「ひっ！……ああぁっ、だめぇ……っ、痛いっ！痛いっ！」

「本当に？オーラを視なくても分かりますよ？喜んでいらっしゃる……痛いの『が』お好きなんですか？……ああそうでした、痛いの『も』、お好きなんですね？」

「違うっ……ちがっ……んんっ！ひゃ……うっ……！」

グリグリと尻穴のもっと奥を探られ、抉られて、霊幻は「気持ちいい、気持ちいい」と、そればかり思った。その事に思考がすっかりと支配されていく。

そんな霊幻の汗で肌に張り付く髪を芹沢が掻き上げる。

「口を開けて下さい？」

芹沢が言うと、霊幻は顔を上げた。島崎に上半身を抱き締められ、バランスの悪く宙に浮いているようだ。そう思えば、目の前にいる芹沢とのセックスには浮遊感がある。体格差のせいも、この性格のせいもあった。芹沢は水を口に含むと霊幻の口に水を流し込む。半分以上が唇から流れてしまうけど、その度に、芹沢は霊幻の口元に滴る水を舐め上げる。それを何度か繰り返し、霊幻は「ケホケホッ」と咳をする。

喉はすっかり潤っていて、咳も乾いてはいなかった。それなのに、島崎は動きを止めて背中を撫でる。芹沢は慌てたように霊幻の顔を覗き込む。

「『大丈夫ですか？』」
二人に同時に声を掛けられ、霊幻は小さく笑う。
本人達は似ていないと言うけれど、霊幻からすれば『似ている』ところは多い。
「……私に抱かれながら、何をお考えですか？」
島崎の問いに、
「島崎も、芹沢も、俺に対して過保護だな。と思っただけだ」
と霊幻は答える。
それを否定出来ず、「まあ、その通りですね」と島崎は言った。「俺の方が過保護ですよ」と対抗する芹沢に、霊幻は苦笑いする。
「へぇ、あんたはまだまだ余裕だな。本気で俺なしじゃ生きられなくするぞ」
乱暴な口調で島崎は言うと、霊幻の最奥をグリグリと抉る。
「珍しい……島崎が、んっ……余裕、あんっ……ないなんて……っ」
「うるせぇっ！もうこの口調聞くのは、一生、先生……あんただけだよ」
島崎の舌先が霊幻の耳に入り、耳の中をペロリと舐める。
「……芹沢も……聞いてるぞ？」
意地悪く言って、霊幻が芹沢を見れば、芹沢は残っているショートケーキをパクパクと食べている。
「あれ？そろそろ交代ですか？」
何事もなかったかのように、芹沢は顔を上げた。
「えっと……ま、まだ……」
霊幻が答えると、島崎は「ククッ」と笑った。
「ほら。あんただけだ……」
島崎は言った。
「……『未来視』？」
「さあ、どうだろうなぁ……？」
ニヤリと笑う島崎に仕返しするように、霊幻は思い切り自分の尻をキュッと締める。
「お、おいっ……たくっ……。霊幻先生、ご自分から危険に近付くのは危険ですよ？」と島崎は言った。
「お前が、危険なのか？」
「私には、あなたの方が危険ですよ？」
「お互い、危険物に近付いたってことか？」
「そういう事ですね」
言い合って、思わず笑い合う。普段はその口調も相まって年齢不詳の島崎の表情が幼く見えて、霊幻は目を瞬かせる。
「いかがされました、霊幻先生？」
「いや……ちょっと……島崎が可愛く見えた」

「……私の目にはあなたの方が……いいや、俺には、アンタが別嬪で男前に『見える』」
と、島崎は言って、霊幻の身体をきつく抱き締める。
視覚のない世界に生きてきた島崎には、聴覚、嗅覚、触覚が全てだった。その世界に、『視覚』を持ち込んだのはこの腕の中の人、ただ一人だ。見えなくても分かるのだ、きっと見えるようになったとしても、分かるのだ。
「霊幻先生。貴方の中に、精をたっぷり注ぎ込みたい……」
と、島崎は耳元で囁く。
「……え？お前は……本気なのか……」
「今更でございますよ？ですが、そんな鈍感なところも愛らしい。今日は、ポリウレタン越しでございますが、いつかは直にお注ぎしたい、思いの丈とともに」
「……俺がめちゃくちゃ腹下すだろ？」
「おや、ご存じでしたか……？ですが、私が『世界一のテレポーター』という事をお忘れですか？精を注ぎましたら、アポートの能力で精液をトイレにでも飛ばしますよ」
と、島崎は言う。
「島崎は……案外、面白い事を言うなぁ」
霊幻は島崎の言葉がおかしくて、思わず笑った。
繋がったまま会話を交わせるなんて、どうにも不思議だった。
（もっとこう……『3P』なんて言うから、身構えてたけど……芹沢は壁に寄り掛かってケーキ食ってるし……時々、超能力で悪戯してくるけど……）
嫉妬や独占欲で、もっとひどいことをされるかもしれないと思っていた霊幻は、結局、自分も『耳年増』なだけだったのだ、と思った。
「こちらは、本気なのに。霊幻先生に本気で納得して頂くには時間が掛かりそうだ」
「……違うって。それなら、今日だってポリウレタン越しでなくても出来るだろ？って……、その……思っただけだ……よ」
照れくさそうに霊幻が言うと、島崎は見えない目で霊幻を見た。
「……なるほど。そう来ましたか……ですが、貴方が私におねだりするようになりましたら、お願い致します。今日は、コンドーム越しで」
「コンドームは？」
「はい。装着済みです」
「……超能力？」
「いいえ。先生が喘いでいる間に……」
言いながら、島崎は律動を再開する。霊幻は今更のように島崎が、ずっと片手を霊幻の心臓の上に置いていたことに気付いた。息も絶え絶えで、鼓動も早くなった霊幻が落ち着くまで、こうして待っていてくれた事に気付

く。それを知ると、霊幻の鼓動は、また、ドキドキと早鐘を打つ。今度はセックスとは関係ない。『島崎に抱かれている』その事に意識が集中する。
「……オーラを視るような無粋な真似はしませんよ」
島崎が囁いた。
「そろそろ代われよ。俺だって、トロトロの霊幻さんをもっとトロトロにしたいんだからさ」
と言う芹沢の声に、霊幻はハッとして芹沢を見る。今更のように恥ずかしくなって、今更のように自分の身体を意識して、自分がどんな顔をしているだろう、と思った。
島崎は芹沢の言葉を無視し、霊幻の背中に口付けを何度も落とす。霊幻は自分の顔を隠すようにしながら、芹沢に「変な顔してるから、見ちゃダメだ」と言った。芹沢はきょとんとした顔をして、「可愛いですよ」と答えた。けれど、霊幻は照れ屋だから見られるのが恥ずかしいのだろうと、ポリポリと髪を掻いて、頭を下げ、覗き見することに決めた。
「さあ、こちらに集中を」
島崎は言って、霊幻の皮膚の感触を確かめるように指で触れていく。それだけで霊幻のペニスはすっかり硬度を取り戻して、でも、ペニスに触れられていないのに勃ち上がって、まるで十代のようだ、と一層に恥ずかしくなる。それに気付く様子もなく、島崎は霊幻のうなじに鼻を寄せ、クンクンと匂いを嗅ぎ、浮かんだ汗を舐めた。
「んっ……も、もう……終わらせて……っ」
霊幻は堪らず、自分のペニスに手を伸ばす。その手を島崎が掴み、「ダメですよ」と言う。
「夜は長い。私達は若い。まだまだ、たっぷり楽しみましょう」
それは『悪魔の囁き』そのものだった。
霊幻はその言葉に、顔を引き攣らせることしか出来なかった。

† † †

ぐったりとベッドにうつ伏せに倒れ、霊幻は息も絶え絶えになっていた。そんな霊幻を芹沢は甲斐甲斐しく世話をする。水を飲ませたり、固く絞った濡れタオルで身体を拭いたりしていると、霊幻は「ありがと」と、芹沢

に言った。その言葉が嬉しくて、芹沢は一層、霊幻の世話を焼く。
あまりにしつこく霊幻を抱く島崎を、芹沢は超能力で壁に貼り付けていた。
「覚えていろっ、芹沢っ!!まったく、以前と違う超能力を具現化して……まったく」
テレポーターと粘着性のものは相性が悪いらしい。
霊幻は壁に貼り付いた島崎を見ながら、思った。
「自業自得とは言わないけどさ……」
でも、やり過ぎだと思うぞ。
と、霊幻は言った。

「霊幻さん、お尻、痛くないんですか？」
芹沢は言った。
確かに、霊幻は芹沢とセックスをした時が初めてだったはずだ。事実、戸惑った霊幻の顔は、芹沢の記憶にくっきりと残り、まざまざと思い出される。
「えっ？どうして？」
痛いよ。
と霊幻は答えようとして、尻の痛みがすっかり引いている事に気付いた。そりゃあ、島崎は丁寧に抱いてくれたとは言え、いくら何でも、まったく痛みを感じないわけがない。

「失礼します」
芹沢は言うと、霊幻の尻穴に指で触れる。尻穴は慣らされた後のせいか、するりと芹沢の指を飲み込んでいく。
「ひぁっ……あっ、ん……」
先程まで散々弄られた穴だ。すっかり性器に作り替えられている途中のものだ。些細な刺激にも過敏に反応するのは仕方ない、と霊幻は思うが、それを芹沢に見られるのは、島崎に見られるのとはまた違う恥ずかしさがあった。
（……『３Ｐ』って同時に攻められたり、でも、こいつら仲悪いし……部屋の中に二人いて、順番に抱かれる感じなのかな？……って、それはそれで大変だっ！）
思ったけれど、誰かの体温を感じるのが安心するという事を、霊幻は初めて知った。最初に抱かれた時は無我夢中で、そこまで感じる余裕がなかった。でも、慣れてくると、セックスの最中、求められて体温を全身で感じることは不快ではなく、むしろ、気持ち良くさえ感じていた。そんな自分を霊幻が素直に認めるには……まだまだ時間は掛かりそうではあったが。
「霊幻さんは俺よりも島崎の方がいいんだ。俺のチンポは予備なんですね。スペアってヤツです……スペアチンポです」
「そ、そんな事あるかっ!?チンポにスペアもメインもないっ！」

「なんか、セックスへの入口も違うと思うんです……どことなく俺へのページ数も少ないと思いますし」
「芹沢、落ち着け。どっちも一緒だって。むしろ、多いくらいじゃないか?」
「それはありません……なんか、俺がお願いしてセックスするって感じで……セクハラも上手に出来なかった気もするし……。なのに、島崎とは良い雰囲気でセックスに入っていくじゃないですか?」
「そ、それは……島崎が、口が上手いっていうか、会話が上手いっていうか……」
「霊幻さんは口だけの男が好きって事ですか?」
芹沢の言葉に、霊幻は押し黙る。
そうではないけれど、芹沢はきっと納得しないだろう。
「口の上手い芹沢なんて怖いから、そのままでいいよ」
「じゃあ、じゃあ……このままの俺でいいんですか……?」
「うん。芹沢は芹沢で、島崎は島崎だからさ……そのままでいいと思うよ。だから、島崎は助けてあげて」
「あれですか?」
芹沢が指差す方に目を向けると、そこに、島崎の姿はない。
気付けば、島崎は霊幻の後ろに座っている。
「霊幻先生?さすがの私も目を酷使しすぎてしまいました。今度は他の男に抱かれているあなたの喘ぎ声を存分に聞かせてくださいますね?」
島崎は言う。
「霊幻さん……いつも、俺に霊幻さんのアナルさんを解させてくれないんですね?」
芹沢は霊幻の身体を仰向きに押し倒しながら、言った。
「そ、それはさ……まあ、また今度な?」
「今度?今度がなかなか来ないじゃないですかっ!」
怒ったように言う芹沢に、霊幻は、
「だから、怒りの沸点低すぎっ!!」
と、被せ気味に怒鳴る。このやり取りも否応なく慣れるほど、超能力者の沸点は低い。特に、芹沢の沸点は低い。
「じゃあ、舐めても良いですか?」
「切り替え早いって……それに、そんなの嫌に決まってるだろ、汚いし」
「あっ、霊幻さん!お尻の穴舐められると思ったでしょ?」
芹沢の言葉に、「何だ、自分の勘違いか」と霊幻はホッとする。島崎はベッドに押し倒された霊幻の頭を上げ、枕の上に乗せると、その髪を撫で、「私も、舐めたいですよ、霊幻先生」と言った。
「正解ですっ!霊幻さんの全身をくまなく舐めたいんですっ!!もちろん、チンポさんもアナルさんもですよっ!」
「えっ?ヤダよ……」

「残念っ。……でも、今日、俺は核心に迫りましたっ！霊幻さんはエロエロのトロトロになると舐められるのが……」
　そこで言葉を切り、芹沢は霊幻の足を広げた。グッと持ち上げると、ペニスも尻穴も芹沢の目に晒される。手だけでは足りないので、そっと超能力で霊幻の足を押さえるが、ふんわりと押さえているので、霊幻は気付いていない。それとも自分の格好が恥ずかしくて、超能力まで気持ちがいかないのか、芹沢には分からなかった。けれど、芹沢にとって超能力は人にとっての手のような、足のようなものだ。使わない方が、なかなかに骨が折れる。
（それでも霊幻さんが言うんだから、超能力で『超能力者以外の人間』を攻撃しないようにしないと……）
　と、既に霊幻の教えは変わっていたが、それでも芹沢に超能力に対する何かを教えられただけでも快挙であった。それほど芹沢にとって霊幻は世界の中心であり、自分の感情の全てが向かう人だ。
「……ほら、もうトロトロだ」
　霊幻の股間にあるペニスはいまだ半勃ちのままで、その先端はしっとりと濡れていた。芹沢は霊幻のペニスの先端を指でグリグリと押す。先端を掌で刺激しながら、霊幻の尻穴に指を挿し入れると、先程まで島崎のペニスを受け入れていただけあって、霊幻の尻穴は芹沢のペニスを軽々と飲み込んでいく。
「んっ……はあっ、それは……」
「チンポさんとアナルさん、どっちが気持ちいいんですか？」
「その言い方、やめろ……っ」
　恥ずかしい。
　と、霊幻は言うけれど、芹沢にとって霊幻の身体でさえ特に重要な箇所は『さん付け』しないのは失礼にあたると思っているようだった。それだって、興奮してくると忘れてしまう。その切り替えが、また、霊幻を興奮させる。
「そんな事より、アナル、パクパクして、お魚みたいですよ？あ、俺、霊幻さんの下半身を可愛がるのがいっぱいいっぱいなので、乳首とか胸肉は、島崎にでもおねだりしてください」
　霊幻は「うぅぅむ」と唸った。芹沢に言われなくても、下半身への刺激だけで、乳首はピンッと立って、痛いほどだった。
「おねだりを待つほど、私、堪え性がないようです。霊幻先生？」
　島崎は言って、霊幻の胸の肉を寄せるように揉む。霊幻の肌は色も透き通り、けれど骨が出ているような不健康さはない。全体的に線の細い霊幻であるけれど、腰はとくに細い。胸も薄く、けれど、そんな身体に深い赤に

染まった乳首だけがピンッと立っている様は、一層に身体の艶やかさを際立たせる。
　島崎の手が、探るように、霊幻の乳首に触れる。ビクッ、霊幻の身体が跳ねた。それを芹沢と島崎にしっかりと押さえ込まれていて、霊幻は息を吐くことでしか、身体に溜まる熱を外に出すことは出来ない。
「霊幻さん。島崎に乳首弄られたからですか？チンポも勃ってるし、尻も指を咥えたまま、キュッキュッってしてますよ。」
「んっ……はあっ……だめぇ……チンポと……乳首とアナルは……ダメェ……」
「同時の刺激が良いんですね？これじゃあ、確かに霊幻さんはチンポ二本欲しがりますね。一人じゃ満足出来ないでしょ？俺と二日過ごしますけど、足りるんですか？『三人じゃなきゃヤダ』って霊幻さん、言い出しそうで、怖いです。でも、霊幻さんに言われたら、そんなわがままも聞かなきゃいけませんね。ああ、ペニスも筋張って、玉も膨らんでますよ？アナルだって、中がうねってます。もうイッちゃいそうですか？まだ、話の途中なんだからダメですよ……」
　言うと、芹沢は超能力で霊幻のペニスの根元に輪っかを付ける。
「ひぐっ……んっんっ……あっ、苦しいっ！やだぁ……」
　熱が身体の中を駆け巡る。手を伸ばしてペニスに触れれば、根元に透明のシリコンそっくりの感触がある。指で伸ばせば、しっかりと伸びる。けれど、ずっと引っ張っていれば、反対側が食い込む。
「これはこれは……と思っていましたが、芹沢は霊幻先生の除霊の手伝いをしているせいか、超能力と霊能力を混ぜたような成長をしているんですね。なるほど、『爪』のボスも警戒する男です。
　でも、本当に警戒しなければいけないのは霊幻先生ですね？何も知らない男を自分好みに育て上げるんですから……そう思えば、私も霊幻先生の好みに育てられているという事ですね？」
「んっ、島崎みたいに危険な男……育てるかっ……生まれつきだ、生まれつき」
と島崎を睨むと、違うところから視線を感じる。
「……霊幻さんは、島崎にばかり構いますね」
「何を言う。霊幻先生は、芹沢、お前にばかり構ってしまわれる」
「俺はもっと霊幻さんに構って欲しいんだ」
「私だってそうだっ！」
　二人は睨み合い、超能力を発動する直前のように、オ

ーラというか、焔を背負う。能力のない霊幻でも見えるものだから、本気で戦闘モードらしい。

「……俺は、自分の熱を持て余して、早くセックスの続きをしたいだけど……」

不本意ながら。

二人相手は身体に必要以上に負担が掛かるが、それでも、一対一とは違う背徳感が、霊幻を興奮させた。

ああ、こんな事を素直に口にするなんて。

自分でも気付かない間に、芹沢のことはもちろん、島崎のことも、信用するようになってしまっているんだ、きっと。

霊幻はそんな自分に戸惑い、どうすればいいのかと心を持て余す。

そうしていると。

「ああ、霊幻さん。ごめんなさい、早くチンポをアナルに入れてほしいんですね？」

「ああ、霊幻先生。申し訳ありません。決してそのようなつもりでは……気合いを入れ直して頑張らせて頂きます」

と、二人が縋るような口調で言った。

「……別に。喧嘩したければ、喧嘩してくれれば。芹沢、超能力、解いていけよ。バーカ」

自分の気持ちに戸惑い、霊幻は不機嫌になっていた。

すっかり拗ねた霊幻の様は、霊幻自身が思っているよりも愛らしい。芹沢はいそいそと、霊幻の尻穴に自分のペニスを押しつけた。島崎も、霊幻の肌にアロマオイルを垂らす。

「……そんな事言って、まだ足りないですよね？霊幻さん？」

芹沢は言う。

「霊幻先生。私はまだまだ霊幻先生の喘ぎ声を聞いていませんが？」

島崎が言う。

「霊幻さん、霊幻さんのお尻さん。お邪魔しますね」

「ムードもないし、デリカシーもないっ！」

「……ごめんなさい、霊幻さん。次からの俺に期待して下さいっ！」

「期待出来るかーっ！」

芹沢は何故か妙にポジティブなのだ。マニュアルにすぐ頼るし、自信はないと自己申告しているが、超能力者特有の「何か、出来る気がするんです」という根拠のない自信も持っている。

「はいはーい。お邪魔しても……うわっ、相変わらず霊幻さんのアナル、エロい」

「アナルという言葉を覚えたからって、無駄に多用しようとするなっ！　俺だって使ってないだろ？」
「じゃあ、「芹沢のチンポくん、新隆のアナルさんに欲しい」って言ってもらえるように頑張りますっ！」
言うと、芹沢は霊幻の尻穴に自分のペニスをしっかりとあてがい、その入り口を突くように、堪能するように、霊幻の尻穴に自分のペニスを押しつける。
「じゃあ、お邪魔します」
そののほほんとした言葉とは裏腹に、芹沢のペニスは思い切りの質量と勢いで、霊幻を貫く。
本当は芹沢の声にだって、余裕はない。霊幻の緊張を解すためか、必死に自分を落ち着かせようとしているのが分かって、霊幻の胸は締め付けられる。
ただ、そんな霊幻の感慨とは裏腹に、芹沢のペニスは、質量と熱量で、霊幻の体内は埋め尽くされる。
「んぐっ……んっっっ！　あ、そんな急に……んっあ、くぅっ……まだ動いちゃ、だめぇっ!!」
「でも、霊幻さんの中、俺を奥へ引きずり込んでますよ？」
わざわざ芹沢に言われなくても、霊幻自身、自覚はあった。二度立て続けに、しかも、自分を抱く男が二人とも部屋にいる背徳感は、霊幻を興奮させた。島崎のペニスですっかり解されている霊幻の尻穴は、芹沢の大きなペニスも苦しいながらも、飲み込んでいく。

（どちらかの能力が働いているのかな……）
尻穴を何度も擦られて、乱暴の一歩手前のように律動を繰り返され、それでも、しばらくすると回復していく。超能力者特有の自然治癒の高さには及ばないけれど、切れたり、擦り傷になることはない。
「……んっ、んっ、……あっ、乳首は……だめっ、あっ、芹沢ぁ、尻いじめないで……っ、んんっ……あっ、チンポの形、違う、っ、からぁ……あっ、ダメっ、奥にあたる……っ！」
霊幻は喘ぎ声を上手に止められない。
これから『ここ』に住むんだ、と言われ、誰と過ごすかも決められて、でも休日もあって、布団はしっかりとしていて、リビングも広くて、お風呂だって大きいに違いない。何もかもが『青天の霹靂』でも、それ以上に、自分が『3P』なんてするなんて。頭の中が、快楽とこれからの事でふわふわとしながら、身体には痛いほどの快感が押し寄せてくる。
（ああ、どうしよう……俺は、本当に誰かに『愛されて』いるのか……？）
本当に、他人を信じて良いのか、霊幻には分からなかった。『超能力』こそないけれど、他の能力の大半を持っている。『経営能力』も『コミュニケーション能力』も、『クレーム処理能力』も。他にもいっぱい。
ないのは、『霊能力』と『他人を信用する心の広さ』だけ。

だから、深い人間関係は築けず、余計に人間不信になった。妬みの感情に押し潰された日も一日や二日ではない。虚像の自分が一人歩きして、それを『好きだ』という人間もいる。あるのは虚しさばっかりで、自分は『愛される』はずがない、『求められる』はずがないと思っていた。

それなのに。
お前達のせいで、期待しちまっただろ。

「芹沢、芹沢ぁっ……」
自然と流れる涙に、霊幻は芹沢に手を伸ばす。仕事でもプライベートでも一緒の芹沢は霊幻にとっては、自分が面倒をみなければいけない存在で、けれど、除霊の時は芹沢に頼りきりだ。それに関して芹沢は何も言わないし、気付いてもいる。その大きな身体に抱き締められると、安心する。
芹沢は霊幻の背中に手を回すと、そのまま抱き起こす。芹沢は自分の胡座の上に霊幻を乗せる。向かい合ったまま、どちらともなく口付けを交わす。
「どこにも行くなっ……どこにも行っちゃダメだっ……っ!俺から離れたりしちゃダメだ。ずっと側にいろ」
「れ、霊幻さん……」
「絶対だ……お前には裏切られたくないっ……ああっ、俺は、俺はっ……何を……っ!?」
何を言っているんだ。
こんな事、言って傷付くのは自分なのに。
霊幻は思ったが、自分の気持ちに手綱を付けられず、必死に言葉を押さえようとするけれど、まったくうまくいかない。
しまいに、しゃくり上げるように泣き出した霊幻に芹沢が戸惑っているのが伝わってくる。そんな霊幻の背中を、島崎は優しく撫でた。
「霊幻先生。芹沢が霊幻先生から離れるなど、あるはずがない事です。それは、もちろん私もですよ」
「……島崎は……胡散臭い」
「はい。よく言われます」
「島崎は……テレポーターだし、すぐにどこにでも行ける……」
「おやおや。ならこんなマンション買う必要などございませんよ?根無し草の方が気楽なんです、本当は。世界中、パスポートなしで、どこへでも行ける男ですよ、私は。全ては霊幻先生のためなのに……私の気持ちはなかなか通じませんね?でも、そうでなくては。あなたは好きに生きてくださっていいんですよ。
世界中、どこでも、俺がアンタを追い掛ける。逃がさない」
島崎は不適に笑う。

慇懃無礼の領域に入る敬語ではなくても、乱暴な口調でも、島崎は霊幻に対して本音を語れるようになってきていた。それが島崎の霊幻に対する一番の信頼の証なのだろう。
「……霊幻さんの側に、俺、ずっといていいんですか？」
涙混じりに、むしろ涙をボロボロと流しながら、芹沢は不安そうな声で言った。まさか芹沢が泣いているとは思わなかった霊幻は驚いて芹沢を見るが、その目は『同情』などではなく、『不安』で、でも『嬉しげ』であった。
「俺、バカだし、技術もないし、引きこもりだし、テロリストだし、まだ島崎を殺せてないし……ダメダメなのに……」
「い、いや……島崎は殺さなくてもいいよ……」
「俺っ、俺っ、霊幻さんに捨てられちゃうって……っ！ずっと思ってて……っっ‼」
「捨てられるなら、俺の方だ。お前は、毎日男ぶりが増してるよ」
「……どういう意味ですか？『男』ですか？『ぶり』ですか？」
「格好良くなってるって言ったんだ」
言うと、芹沢は霊幻を抱き締めた。
（もっと、強く抱き締められると思っていたのに……）
霊幻は思って、お返しに、自分の中に埋まっている芹沢のペニスをきつく締め付けた。
「ひゃあっ！」
芹沢は悲鳴を上げて、霊幻を睨む。感情にブレがあると、超能力は安定しないようで、霊幻のペニスに付けられていただろう輪っかはなくなっていた。そのせいで、霊幻のペニスの先端からはトロトロと先走りの汁が漏れている。
（ケツにチンポ突っ込まれてるのに、チンポのヤツ、元気だし。俺、すっかりケツの主導権の方が上……？）
作り変わっていく自分の身体に、不思議な気持ちになる。
「霊幻さん、霊幻さんっ」
無骨で気持ちに技術がまるで追いつかない芹沢は、ただ夢中で霊幻を突き上げる。内臓を押し上げられるような違和感と浮遊するような感覚に、霊幻は必死に芹沢にしがみつく。

「霊幻先生、大丈夫ですか？」
島崎は霊幻の背中を何度も擦った。いつもなら芹沢の態度を叱責する島崎だが、霊幻の気持ちを考慮しているのだろう。
「……島崎は……、本当に……俺の、側にいるのか

「……？」
「毎日でも、囁きましょうか？」
「……本当に？」
「俺の過去を知ったら、あんたの方が俺を嫌いになるだろうな。それでも、手放す気にはなれないねぇ、霊幻先生？」
「本当か？」
「……霊幻先生に、私の心を見せてさしあげたい。脳でもかまいません。ご覧になれば、納得出来ると思いますよ」
霊幻は芹沢の腕の中、苦しい姿勢のまま島崎を振り返ると、そのまま島崎の唇にしゃぶりつくように口付けする。島崎は、そんな事は想像も『未来視』も出来なかったようで、驚いたように身体を硬直させる。
「……あとで、『3P』の仕方を勉強するよ……」
「必要ない。あんたの負担の掛からない方法で……私と芹沢は、大変に仲が悪いですが……霊幻先生の事となれば話は別です。きちんと、譲り合えますよ？」
と、島崎は胡散臭いことを言った。きっと毎日のように喧嘩という名の殺し合いをするであろう二人だけれど、それも自分を取り合ってのことならば、しばらくは喜んでいても良いかもしれない。
霊幻は、すっかりと蕩けた脳で考えた。

「芹沢……大好きだから、側にいてくれ。ずっと、ずっと……バカとは言うけど、嫌いなんて絶対に言わないから」
「もちろんです、霊幻さんっ!!好きなだけ罵ってください。俺、俺……霊幻さんの事、無茶苦茶好きですっっ!!世界中の誰より、好きですし、尊敬してますっ!!霊幻さんを笑う奴らは殺したいし、永劫に苦しめば良いのにっ!!っていつも思っていますっ！毎日『エゴサーチ』してますし、色々と特定もしてますっ！霊幻さんの命令さえあれば、すぐにでも消しますっ!!もちろん、霊幻さんを見るだけでも罪ですし、他のヤツに渡したくないですっ!!でも、霊幻さんは、チンポは二本ないと足りないって言ったから……俺、めちゃくちゃ頑張りますっ!!」
なんでだろう……。
芹沢の話を聞いていたら、チンポが力を失ってきた。
あまりに強烈な告白だったからだろうか。
「私は、霊幻先生のために、人殺しをやめましたっっ!!それくらい霊幻先生を愛しているのです。もちろん、『エゴサーチ』は日課です。芹沢との戦いに一段落付いて言葉が通じるようになれば……、まあ、『消滅』とか？『社会的抹殺』とか？愛する人のためならば、当然の行為と考えてますので」

え？二人とも『エゴサーチ』してるの？　で、資料だけ集めてるの？

「……霊幻さんのためなら何でもします。離れている時間があっても、ずっと見守ってます。だって、霊幻さんと一緒にいると楽しいし。それに……好きなんです、霊幻さんと一緒にいる時の俺。役にたっているような、化け物じゃなくなったような……そんな気がして。きっと、幻想なのに……霊幻さんには、俺が『化け物』に見えてますか？」

その言葉が冗談ではなく、芹沢が本気で言っている事が、霊幻にはすぐに分かった。

「馬鹿野郎。お前は、『霊とか相談所』の立派な有望株の新人社員だ。それに……こんな事してるのに……自信くらい、持て」

『『自信持て』は、そのままブーメランでお返しします。自信、持って下さい、霊幻さん。大好きです。」

「私だって同じですよ。退屈で、鬱々とした毎日。でも、霊幻先生が存在してくれるだけで、毎日が楽しいんです。貴方の声を常に盗聴して、それを編集して、イヤフォンで聞いたり、音響にこだわった部屋で聞いたり。毎日、欠かさず聞いています。先生も、私の愛をお疑いなら、一緒にいかがですか？」

島崎は真剣な顔で言った。問題は、『盗聴』の部分と『毎日』の部分だ。それでも、島崎なりの『好意』なんだろう、と霊幻は思った。

「島崎。お前のことは理解出来たり出来なかったりで……でも、それも含めて、面白いよ。どこから現れるか分からないし。えっと……この部屋も気に入ってる。お前となら、暮らしていけると思うよ」

「……霊幻先生……状況を受け入れすぎです……っ！」

感極まったように島崎は言って、そのままボロボロと泣き出した。

「な、泣くなよ～～、二人とも～～っ!!俺も泣けてきちゃうだろ～～っ!!」

それでなくてももらい泣きしやすいんだから。

「じゃあ、エロいことの続きしましょう。頑張りますよ、俺。霊幻さん」

「霊幻先生。信じてもらえるまで、しっかり抱き潰して差し上げますよ？」

言うと、島崎は霊幻の上半身を引っ張りベッドの上に霊幻を横たえ、芹沢は霊幻の膝をグッと持ち上げた。

第六章

もこ沢の半纏

それは、ある日の事だった。

「霊幻さんっ!何ですか、その格好はっ!」

三人で暮らす(芹沢はバルコニーに住み着いている)にあたり、霊幻は二日間の休日を要求した。しかし、生来の寂しがり屋で、自分に対して無頓着な霊幻は、休日になっても島崎の用意した家具も電化製品も使わず、部屋の隅に座りクッションを抱き締めぼんやりと天井を見たり、ベッドの真ん中にうずくまったり、決して健康的とは思えない休日を過ごしていた。

リビングには大きな最新型のテレビもあり、ネット配信で映画も見放題だ。最新のゲーム機から芹沢の持ち込んだレトロゲーム機まで揃っていて、好きに楽しむ事が出来る。

けれど、霊幻はそんなものに見向きもしない。ただただ部屋で時計を見たり、天井を見たりしている。あるいは、塩の研究か、アロマオイルの研究だ。

それが『忙しい』と本気で言うのだ。

「このままではいけない」と、芹沢も、島崎も、ぼんやりしている霊幻を部屋から連れ出し、出来る限りリビングのソファで過ごさせる。決して、セックスだけが目的ではない。一緒に過ごすだけで、それだけで十分すぎるほど幸せで、その上で、セックス出来たらとっても幸せなのだ。自分の部屋に連れて行きたい、寝室に連れて行きたい気持ちはあるが、まずは、誰かに甘える生活を覚えて欲しい。

島崎も、芹沢も、霊幻が毎週少しずつ、甘えてくれるようになり、膝枕をさせてくれたり、映画を見ながら寄り掛かってくれたり、一緒にお菓子を食べたり、少しずつ心の距離が近付き、甘えてもらえる事が実感出来て、霊幻の週休二日をそれはそれで楽しみなのだ。

あとは、もう少し、霊幻にわがままを言ってもらいたい、というのが二人の共通認識だ。

島崎は霊幻の部屋のドアを見ながら、仕事の電話をしていた。早く電話を切り上げて、霊幻の元に行きたい、と思っていた。

芹沢はそんな島崎を横目に、霊幻の部屋に向かう。

ガチャッ

ちょうどその時、霊幻の部屋のドアが開き、中から霊幻が出てきた。起こされず、促されず、霊幻が部屋を出

てくることは珍しい。
「おはようございます、霊幻さんっ！」
せっかくの休みなのに、仕事の予定を入れてしまう霊幻が渋々取った丸々一日の休日。
けれど、機嫌が良さそうで良かった、と芹沢は思った。
「うん、おはよう！芹沢っ！」
「はいっ！おはようございます……れ、霊幻さん……っ⁉」
霊幻は珍しい事に機嫌が良さそうにニコニコと笑っている。
そんな霊幻の姿を見た途端、芹沢は血相を変え、驚きに飛び上がりそうだった。事実、部屋にあるものが、ふわっと浮いた。芹沢の暴走で家具は動かないようにと固定してあるが、それをものともせず、ソファさえ宙に浮く。
驚きに大声を出し、超能力を発動させる芹沢に、霊幻は不思議そうに首を傾げる。
「最近、超能力の制御も出来てたのになぁ……どうした？」
「だ、だって……そ、その格好……」
「その格好って……半纏だよ、半纏。前に芹沢から没収した半纏があっただろ？荷物を整理してたら、ようやく発見したんだ。ずっと探してたんだけどな。せっかくだから、着てみたんだよ。ホント、気持ちいいよな〜、この半纏。俺の部屋着にしようと思ってさ。これから、毎日着るよ。何だか落ち着くんだ」
半纏を羽織った霊幻は、半纏ごと自分の身体を抱き締める。元々、体格のいい芹沢の着ていた半纏だけあって、サイズは霊幻に合っていない。霊幻の手は半纏まで隠れてしまって、しかも、肩からずり落ちそうになっている。その度に霊幻は半纏を肩まで上げる。不格好に着ているそれが、霊幻の華奢な身体付きを強調している。
「半纏、可愛いですっ！霊幻さん、メチャクチャ可愛みがすごいです！」
芹沢は言って、興奮に鼻息を荒くする。しかし、芹沢はすぐに表情を暗くする。
「……、でも……あの霊幻さん。半纏、脱いで下さい」
「……？何で？」
「どうしても、です。半纏を脱いで下さい、霊幻さん。今すぐ」
あまりにも性急な話に、霊幻は怪訝そうに顔を歪める。
「芹沢がどういうつもりかは知らないけど……。俺は、この半纏気に入ってるの、芹沢も知ってるだろ？」
「脱いで下さいっ‼」
「脱がないよ」
「お願いしますっ、脱いでくださいっ！」
必死な形相で芹沢は言うけれど、どうしてそんな事を言われるのか理解出来ない霊幻は半纏をきつく抱き締め

る。
「何で、さっきから半纏を脱げって言うんだ？いつもの芹沢なら、脱がしたいなら自分でさっさと脱がすだろ。変な芹沢だなぁ……まあ、人に超能力を向けちゃいけないんだからいいけどさ」
普段の芹沢は、霊幻の本当に嫌がる事はしないし、命令には絶対的に従う。けれど、それは『基本的には』の注意書きがつく。どうしても野生の本能で行動し、なかなか善悪の判断を付けることが出来ず、霊幻の言う事は湾曲で理解したり、理解していても分からないふりをしたりしながら行動する。
しかも、何かあれば、すぐに霊幻の後を付いて歩き、事あるごとに霊幻にじゃれついてくる芹沢が、霊幻に全く手を伸ばしてこないどころか、霊幻からジリジリと一定の距離を保って、こちらの様子をうかがっている。それを霊幻が不思議に思わないはずがない。
「どうしたんだ？」
「霊幻さん……自分の姿、分かってんすか？」
「どうって、ご覧の通りだろ」
言って、霊幻は両手を広げ、クルッと回ってみせる。
「それですよ！大きすぎる半纏に、ぶかぶかのタンクトップ！それから、ケツがチラ見してるぐらい、すっげー短い短パン！いや、むしろパンツっ！霊幻さんの今の格好、とってもやらしいんですよっ!!」
「い、言うなっ、芹沢っ！しょうがないだろ、それはっ!!このマンションは空調しっかりしてるから、そんなに寒くならないし！半纏あったかいし！ぬくぬくしてて気持ちいいんだよっ!!
……今日は、これで過ごすんだー」
霊幻は、短パンの後ろをクイクイと引っ張り、尻を少しでも隠そうとする。霊幻は思ったよりも短パンは短くて、今更のように恥ずかしくなるが、半纏が長いので、そんなに気にならない。
「変な目で見るなー」
その霊幻の仕草がまた、何とも言えずに愛らしい。
それなのに、
「……畜生っ！何でだっ！何で、俺のチンポくんは反応しないんだっ!?」
納得いかない様子で、芹沢は自分の股間を見つめ戸惑う。

「きっと、その半纏のせいですっ！」

芹沢は、霊幻の着ている半纏を指差す。一人で勝手に戸惑ったり焦ったりしている芹沢に、霊幻は「はぁ？」と言って、顔を顰める。霊幻はそっと視線を落として芹沢の股間を見ると、芹沢の股間は全く存在を主張していない。確かに、芹沢の言葉通り、勃起していないようだ。

子供の頃から引きこもり、性欲とは無縁の日々を送っていた芹沢は、今になって性欲を解放したせいか、かなり性欲旺盛だ。そんな芹沢が、霊幻を前に全くの無反応とは、珍しい事もあるものだ。
「こんなにエロい霊幻さんを目の前に、失礼にも程があるだろ、俺っ!……すんません。霊幻さん、俺のチンポが」
「いや、何だよその怒り方に謝り方。変だろ？別に俺はいいよ。今日は休日だし、ゆっくり過ごしたいし……」
そう言えば、最近いつもセックスしてたもんな」
霊幻が言えば、芹沢は「ひぃっ!」と悲鳴を上げて、激しく首を振った。
「嫌です!エロ霊幻さんがいるのに、何も出来ないなんて、納得いきませんっ!せめて尻を揉みたいですっ!」
「でもさぁ、それは俺じゃなくて、お前の問題だろ？しょうがないって。きっと、射精し過ぎたんだよ、お前のチンポも、少し休んだ方がいいって」
ポンポンと霊幻は芹沢の肩を叩いて、優しく笑いかける。そんな可愛い霊幻の姿に、芹沢はまた頭を抱える。こんな可愛い霊幻を前にしても芹沢の下半身は沈黙を保っている。
そんな芹沢の姿に、霊幻はにんまりと笑った。スタスタと、霊幻は半纏姿のまま、リビングに小走りする。
「今日はリビングでゆっくりネット配信の映画でも観るんだ」
「え？えーっ!ちょっと待って下さいよぉっ!霊幻さーん!!」
いつもの霊幻なら、寂しくて甘えん坊な霊幻が芹沢に甘えてくれるのに、今日は全くその気配がない。今日、芹沢は霊幻が甘えてくれるのを期待して、霊幻を迎えに行ったのだ。それが、休日のいつもの霊幻とまるで違う、アクティブな霊幻の姿に、芹沢はどうしたらいいのか分からないまま、オロオロと後を付いて行く。
リビングに入った霊幻は、ソファにダイブするとダラダラと寝転がり、大型の液晶テレビのリモコンを操作して、有料ネット動画配信サービスにアクセスしている。いつもなら島崎の選んだ霊幻好みの映画やドラマを見ているのに、今日は、画面から目を離すことなく、次々に表示される映画やドラマを見て、霊幻は「へぇ〜」と感嘆の声を上げげた。
「けっこう色々配信されてるなぁ、結構、島崎の選ぶ映画って難しいのもあるからなぁ……今日は、軽いのが見たいんだよ。あっ、この映画まだ観てないんだよなぁ。……あっ、こっちの映画、もうネットの動画配信で観られるんだ。アニメもいっぱい配信になってるし、スゴいなぁ」
ゴロゴロとソファに寝転がりながら、霊幻は楽しそう

にリモコンを操作する。その霊幻の様子を、芹沢は霊幻の足元辺りの床に正座して、ジッと凝視する。不意に霊幻の目が動いて、芹沢を捉えた。

「芹沢、ちょっと頼みがあるんだけど」

「はいっ！何でしょうか、霊幻さんっ！」

勢い良く、芹沢は立ち上がる。気合い十分な芹沢の姿を上目遣いに見上げて、

「確かさぁ、冷蔵庫に島崎が買ってきてくれたチョコレートケーキ入ってたよな？ちょっと持って来て？」

と言って、霊幻は視線をテレビに戻した。霊幻の尻が、芹沢の目の前でぷぷるんと揺れる。

しかし、

「……、……、は、はい」

芹沢はいつもなら霊幻の尻に飛び付いて顔を埋めるのに、今日はどうしても霊幻に近付くことが出来ず、力なく頷くと、よろよろと冷蔵庫に向かった。

†　†　†

ようやく仕事の電話を終えた島崎はスケジュール帳に暗号で予定を書き込み、霊幻の様子を見ようと、部屋に向かおうとして、テレビから音がしている事に気付く。どうしても目が見えない分、音響には常にこだわっている。それでなくても、この大画面で霊幻のやらしい姿を映しながら、ソファで交わることもあるのだ。

「よぉ、島崎。仕事は大丈夫なのか？」

「はい、五分程度で終わりそうなので、夕方にでもやろうかと。ところで、霊幻先生は映画鑑賞ですか？」

普段ならば、週休二日を要求した霊幻であったけれど、島崎には「無表情でデスクに向かい、コインでタワーを作るか、トランプでタワーを作る日」という認識だ。とにかく、霊幻を一人にしておいてはいけない、と庇護欲を駆り立てられる日だ。

そんな霊幻が自室から出てきているだけでも珍しいのに、『ご機嫌』なオーラを出している事も珍しい。しかも、側にはいつも貼り付いている芹沢もいない。

「今日はまた色っぽい……素足を晒してらっしゃいますね。」

「そうなんだ。このマンション空調もしっかりしてるしさ、今日はタンクトップに短パンなんだ」

「それは素晴らしい」

島崎は霊幻に近付こうとして、不意に壁にでも阻まれているような錯覚に陥る。

（……防御壁？まさか……）

そんなはずはないともう一度霊幻に近付こうとして、島崎は何かに阻まれるように、足を止めた。

（……違う。芹沢が張ったものではない……）
正しくは防御壁とは違うかも違うかもしれない。ただ、何となくこの先には近付けない。
「……ですが、そのような服装では涼しいのではありませんか？」
島崎は何事もないように装いながら、霊幻に尋ねた。オーラや血流で、霊幻の様子は常に把握出来るようになっている。盲目の島崎から視ても、今日の霊幻の姿は魅力的で、自分を誘っているようにしか思えない。
それなのに、防御壁のようなものは霊幻を中心に展開されていて、それは芹沢の展開する防御壁とは似ているようでまるで違うように思える。
近付けないだけなのだ。阻まれている、そんな感覚だ。まるで、立ち入り禁止の看板が立っているかのようにさえ思えた。
「上から羽織ってるから大丈夫だよ。心配してくれてありがとう、島崎」
三人の生活（一人はバルコニーを不法占拠）にもすっかり慣れて、霊幻は島崎に意地を張らずに色んな事を言うことが出来るようになってきた。
まだ「寂しい」とはベッドの中でしか言ってもらえない言葉だったが、それ以外は、互いの過去を話したりする事もある。心が満たされればセックスばかりを求めるわけでは決してなくて、ただ抱き合ったり口付けを交わしたりするだけで、島崎は満足する事も多々あった。
それでも『タンクトップ』『短パン』という単語は、魅力的だ。それなのに、近付けない。これはむしろ、失礼ではないのか……そんな気持ちにさえなる。
「……何を羽織っておいでですか？」
「んー？芹沢も脱げって言ってたんだけどさぁ。お前もコレ、ダメなタイプ？」
「駄目というか……、……はい、駄目です」
島崎は霊幻の寝転がるであろうソファに転移する、六人は楽に座れるほどの海外製のソファだ。いつもならば、霊幻に身体が触れるような場所に転移出来るのに。もっと側に行きたいのに、行けるはずなのに、精神に作用する防御壁の作用を感じる。
「はい、霊幻さん。チョコレートケーキです」
「ああ、芹沢ありがとう」
と、芹沢が霊幻にチョコレートケーキを渡そうとして、血を吐くような声で、「テーブルの上に置きますね」と言った。
さすがの島崎もこれにはおかしいと思った。芹沢がタンクトップと短パンの霊幻を目の前に理性を保っていられるような『人間』ではない。島崎がオーラで見る芹沢は『頭が裂け、角が生えた異形の者』だ。そう、島崎

には芹沢がそんな『異形の者』に見えるのだ。『影山茂夫』も同様で、特に『影山茂夫』は影と一体化して、その輪郭すら捉えることが出来ない。そんな者達を側に置いて普通に接している霊幻は、島崎からしても感嘆に値するばかりだ。

「おい、芹沢。霊幻先生は、何を着ていらっしゃるのだ？」

三人で暮らすようになり、霊幻は島崎に芹沢を『化け物』と呼ばないように、芹沢には島崎を『変態』と呼ばないように、と約束させられた。

「しかし、先生。見た目の話です」
「でも、霊幻さん。性格の話です」
「だから駄目なんだろっっ!!まったく……」

なかなか納得出来るものではなかったが、霊幻からの『おねだり』と思い、島崎も芹沢も納得した。

「ああ、『もこ沢の半纏』だよ」

ソファに寝転んだ霊幻は身を起こしながら、言った。チョコレートケーキをフォークで大きく切ると思い切り口に含む。常に『ヒロイン補正』の掛かっている霊幻の口元にはチョコレートの食べかすが付く。他にも『ヒロイン補正』の影響で『猫舌』『酒に弱い』『案外、涙もろい』などの影響が出る。

「……『もこ沢』とは？」

突然出てきた見知らぬ単語に、島崎は霊幻に尋ねる。人の名前のようでもなるけれど、何ともふざけた響きだ。

「ああ、髪のふわふわだった頃の、『爪』時代の芹沢だよ。俺は芹沢と混同しないように『もこ沢』って呼んでるんだ。その『もこ沢の半纏』なんだ」

「えっへん」と霊幻は胸を張り、半纏を着たまま、腕を伸ばす。霊幻から発せられる上機嫌のオーラに島崎は悪い気はしないが、近付くことが出来ないのは重大な問題だ。

「……霊幻さんっ！その半纏を脱いで下さい」
「芹沢はそればっかりだ。芹沢の半纏なんだからいいだろ？」
「俺の半纏なんですが……近付けないんですよっ!!」
「近付けばいいだろ？」
「その勇気を奪われるというか……霊幻さんをエロい目で見られなくなるというか……ほんわかした空気にな

るというか……」
「ああ、ほるほど。確かにそうです。霊幻先生が楽しそうにしているのは、私としては、とても嬉しく好ましいことですが……霊幻先生に触れる事が出来ないんです」
「防御力が高くて、魔物避けも付いてるんだな。すごいな、『もこ沢の半纏』。レアアイテムだ」
霊幻は嬉しそうに言った。

「霊幻さんっ！今、タンクトップから乳首が見えましたよっ！」
「何っ!?ああ、先生っ！短パンから必要以上におみ足が……っ！」

「「それなのに、近付けないっっ!!」」

芹沢はガックリと崩れ落ち、島崎は頭を抱えた。
「今日は、俺の休日なんだからいいだろ？もこ沢が、俺を見守ってるんだよ……きっと、俺の尻の治りが良いのも、もこ沢のおかげだっ!!あいつはいなくなっても俺を守ってくれているんだっ!!あいつは俺の命の恩人だしな……額の傷だってなくなってたんだ……っ！傷を治せなくてごめんなさいって言ってたけど……」
傷として残るほどの深い傷だった。それでもあれだけの戦いだ。仕方ないと霊幻は思っていた。けれど、当時の芹沢は霊幻の身ばかり気遣っていた。
「もう一度会えるなら……お礼を言いたい」
しんみりと霊幻は言って、芹沢を見たが「無理だな」と言った。
「……なあ、芹沢。お前の超能力って、全部、もこ沢が俺を守りながら覚醒させたものだよな？確か、超能力ってストレスで生まれるって……」
今更のように霊幻は気付いた。きっと、芹沢が手にしている具現化と可視化不可視化の能力も霊幻を守るために手にした能力だったのだ。
それなのに。
「あ、俺っ！今、むちゃくちゃストレスフリーですっ!!」
「お前は～っ!!お前の力の大半はもこ沢が発動したものじゃないかっ!?」
「あー、そう言われればそうですね。力を具現化させたり、固定化させたりするのも、全部『爪』時代に霊幻さんを守ろうとした時のものです。俺、霊幻さんを守るのに必死で……」
「本当に、あの時はお前に助けてもらったよ……」
「はいっ！でも、その後はストレスフリーになっちゃってっ!!」
と芹沢は言って、ニコニコと笑う。

『霊とか相談所』で働けるようになったし、霊幻さんのアパートの側で暮らしてましたし、今は、霊幻さんの寝室の側にあるベランダで暮らしてますしっ！霊幻さんの天井を眺める日は一緒にリビングでゲーム出来るしっ！確実に俺の時代、来てますよっ！」
芹沢の言葉に、霊幻は「そうか」としか言えなかった。
「まあ、ストレスが掛からないのは良い事だよ……」
まだ何かを話したそうにしている芹沢から、霊幻は顔を逸らし、島崎を見た。

「島崎は？」
「そうですねぇ……未来視の延長ですね？あと、どの能力にも一層の磨きが掛かりましたよ。視覚以外の五感の強化や、テレポートの距離が飛躍的に伸びましたっ！『旅行雑誌のライター』なんて、私、とても向いていると思うんですが……」
島崎は言いながら、霊幻の様子を窺う。
グルメ雑誌のライターの肩書きは霊幻も喜んでくれるし、自分自身、楽しく感じる時もある。けれど、テレポートで移動して写真を撮って、という訳にはいかないので、手間に思う事も多い。
「ああ。雑誌も売り上げに左右されるもんな。ライターとしての仕事に心配なんだな……島崎、旅行雑誌の仕事も増やすのか？」
「……いいえっ！今はグルメ一筋でっ！」
これ以上仕事を増やされては困る。それでなくても、『裏の仕事』もあるのだ。『裏の仕事』で遠出する事はあるが、それも一瞬の事だ。それが記事を書くとなると、一瞬では済まなくなる。ただ、霊幻は純粋に自分の読んでいる雑誌に島崎の記事が載るのが嬉しいのか、『旅行雑誌』でも記事が読めるなら、その方がいいのにな、と思ったのだ。それが手に取るように分かって、けれど、島崎はそれに気付かないふりをした。
「……まあ、私は霊幻先生の側に芹沢が侍っているのが悔しくて。今は……残念な事なのか、幸いな事なのか、ストレスフリーです。ので、力の成長は止まっていますね」
「ストレスがないのは良い事だと思うよ。まだ『グルメ雑誌』のライターになって日も浅いし、『旅行雑誌』に取り組むのはそれからでもいいと思うよ、俺」
「は、はい……」
頼む、『旅行雑誌』の事は、忘れてくれ。
島崎は切に願ったが、無理だろうな、という事は、未来視を使わなくても分かる。

「霊幻先生、空調、涼しいですね？もう少し、温度を上げますね」

さりげなくソファから立ち上がって、島崎は空調の温度を上げるボタンを連打する。『北風と太陽』作戦だ。それに気付いたのか、芹沢は自分の周りに防御壁を張って、温度を調整する。基本的に、いつでも涼しげに過ごしている島崎でも暑く感じるくらいの室内温度だ。

「霊幻さん。暑くないですか？」

芹沢が防御壁を解くと、暑い。とにかく、暑い。空調で快適に制御されている室内になれているから、一層、暑く感じる。

「そう？冷凍庫の中にアイスクリームあったと思うぞ」

と、霊幻は言って、チョコレートケーキの最後の一切れを口に運び、名残惜しげにペロッと唇を舐めた。

「……体温調節機能も付いている可能性がある」

「いくらなんでも、この暑さで汗一つかかないなんて……」

まさか、と思いながら、島崎は空調の温度を思い切り下げた。

今度はみるみる内に室内が寒くなってくる。

けれど、霊幻はソファに寝転がって、男性向けの『旅行雑誌』を読んでいる。

（頼む、旅行雑誌から離れてくれ……っっ!!）

周囲の気持ちにも、思惑にも鈍感なのに、人の心を抉るのは上手い。

「最高です、霊幻先生」

島崎は言うと、もう一段階、温度を下げた。

「霊幻先生。アイスクリームなどいかがですか？」

こんな寒さの中、アイスクリームなど食べたくないだろう。それでなくても、霊幻はタンクトップに短パン、生足スタイルなのだ。単純に薄着の上にダボダボの半纏を羽織っているだけなのだ。

「んー、そう？あっ、島崎が買ってきてくれたアップルパイあっただろ？俺、あれを温めて、その隣りにアイスクリーム、いーっぱい乗せて欲しいっ!!」

「れ、霊幻さん。寒くないですか？アイスクリーム食べたらお腹冷えちゃいますよ？」

「？寒くないぞ。なあ、芹沢。アップルパイ温めて、冷たーいアイスクリーム乗せてきて〜っ」

「チョコレートケーキ食べたばっかりじゃないですか……それにアイスクリームなんて」

「大丈夫大丈夫。なあ〜、島崎〜アップルパイ、食べ

てもいいだろ〜〜」
いつもからは考えられない甘えた声で霊幻が言う。
「そんなに食べてしまっては、ランチが食べられなくなりますよ？」
「う〜ん……でも、アイスクリームって聞いちゃったから……」
「三時のおやつにしてはいかがですか？コーヒーも淹れて、アイスクリームにキャラメルソースを掛けるのは？」
「でも……ランチって何？」
「私が、腕によりを掛けて、美味しいものを作りますよ。オムライスなんていかがですか？霊幻先生の事もお連れした、レトロな喫茶店のご主人に、昔ながらのオムライスの作り方を教えて頂いたんです」
「食べたいっ!!トロトロのオムライスも悪くないけど、昔ながらのオムライス、大好きっ!!」
「では、アップルパイは三時のおやつですよ」
「わかったっ！ありがとう、島崎っ！大好きっ!!」

はい。『大好き』頂きました。
ああ、こんな時、霊幻先生を抱き締めて、口付けの一つも交わせるものを……。
どうして、どうしてペニスは勃起せず、静かな海のように凪いでいるのだ。

ここはソファに押し倒しても、霊幻先生が受け入れてくれるシーンじゃないのか？

† † †

芹沢は空調を元に戻すと、腕を組み、壁に寄り掛かった。
「なあ、島崎。あの半纏、異様じゃないか？」
「貴様の半纏だ。いや、もうあれは『半纏』なのか？ファンタジーの世界の産物のようだ……」
「あの頃の俺は霊幻さんの言う事なら、何でも聞いていた。『止めろ』と言われれば、素直に止めていた。髪の毛を切ってもらって、ヒゲを剃ってもらってから、霊幻さんの身体に触れながら『止めろ』と言われても、止めなくなった。
……あの時、俺は『もこ沢』ではなくなったんだ……」
「お前、バカだろ。何、理解不明な事を言ってるんだ？」
「……『もこ沢』時代の俺は、怪我を治せたんだ……今は、出来るかどうか試した事がないし、出来る自信もない」

発動した超能力が使用出来なくなるのは、よほどの恐怖を味わった時か、燃料切れを起こして、超能力自体を使えなくなった時だ。それにも関わらず、超能力の量、質ともに『爪』で群を抜いていた芹沢が、使えていたはずの超能力を使えなくなるはずがない。
「……あるいは、霊幻先生だけに対してだけ発動する超能力かもしれない」
島崎は顎に手を当てながら言った。
もし、そうなら、霊幻が二人に抱かれても、理性も肉体も壊れてしまう事がないのも納得が出来る。

「何の話だー？」

霊幻は半纏を身に纏いながら、スリッパをペタペタさせながら、二人の元に近付いてくる。
「いえ。『爪』時代以降に発動した超能力について、話し合っていたんです。」
島崎の答えに、霊幻はなるほど、と両手の指を合わせた。
「なるほどねー。せっかくなら、立ち話なんてしてないで、ソファで話そう。俺も気になるっ！最終章だし、気になる事はちゃんとハッキリさせておかないとすっきりしないだろ？」
言うと、霊幻は二人の手を掴んで「早く早く」とソファへ連れて行く。
「霊幻さんからの接触は、大丈夫なんだ」
「こちらからの接触が駄目という事か……」
言って、島崎が霊幻の手を掴もうとすると、霊幻がバランスを崩し、島崎から手が離れてしまう。
「ごめんごめん」
「先生。家の中だからと言っても、足下にはお気を付け下さい？」
「うん。島崎、手」
言って、霊幻は島崎の手を掴んだ。問題なく手を繋がれて、島崎は「これはいよいよ、本物だ。呪いのアイテムかもしれませんね」
ソファに二人を座らせると、霊幻は結局アイスクリームを持ってきた。
「ほらほら受け取れって」
二人にパックに入ったアイスクリームを渡すと、霊幻は芹沢の太ももに足を掛け、島崎の身体に寄り掛かった。いつもなら「お行儀が悪いですよ」と注意する島崎だったが、今日ばかりは違う。触れたくても触れられなかった霊幻が遠慮なく甘えてきてくれている。肌に当たる霊幻の体温も、身体に当たる霊幻の短パンからはみ出た尻も、髪から香るシャンプーの香りも、全てがご褒美だ。
「霊幻さん、短パンからはみチンしそうですよ」
と、芹沢は言って、霊幻の短パンを直そうとしたけれ

ど、触れる事は出来ない。霊幻は「ごめんごめん」と言って、短パンの裾を引っ張る。それなのに、芹沢のペニスは反応しない。

「アイス食べながらでいいからさ、教えて?」

「まあ、それは構いませんよ」
「俺、超能力ないから、細かい事分からないし、知りたいんだ?」
「もちろんいいですよ。でも、自覚のないものもありますよ?」
「いいから、いいからっ!分かる超能力だけでも教えてっ!」
楽しみを待ちきれない様子で、霊幻は芹沢の服をくいくいっ、と引っ張る。あまりの可愛さに、芹沢は霊幻に触れたいのに、触れられない。「くっ!」血反吐を吐く思いで、芹沢は口を開いた。

「じゃあ、俺の超能力を紹介しますね」

【芹沢　克也】

【念動力】触れずにものを動かせる。主に、霊幻の服を脱がせる時と寝室へ連れていく時に使用する。

【力の具現化】イメージしたものを超能力で具現化する。より具体的にイメージ出来る物の方が、耐久性も高く、攻撃力も高い。霊幻のリクエストで作る物は、高性能で再現率が高い。
【透視】霊幻を見守りたい一心で発動した能力。可視化・不可視化の切り替えも、透視能力の一端。この力で、テレポートした島崎の居場所も把握していた。
【痛覚遮断】痛みを取る力。傷が治らないなら、せめて霊幻の痛みだけでも取ってあげたいという、もこ沢の優しさから発動。芹沢に使っている自覚はない。(霊幻限定で発動)
【超回復】自然治癒能力を上げる力。霊幻の傷を癒してあげたいという、もこ沢の優しさから発動。芹沢は使っている自覚はない。(霊幻限定で発動)

「……って。全部の能力に、俺が絡んでるっ!」
ずらりと並んだ超能力一覧を見て、霊幻は思わず声を上げた。
「どれもすごい超能力なのに、全部の能力説明に俺が名前が入ってるよ……」
呆然と呟く霊幻の横で芹沢は、超能力一覧を読みながら考え込んでいた。
「……やっぱり、俺の知らない能力もあるんだな……」
【痛覚遮断】と【超回復】は、芹沢が使っている自覚

は全くないし、使える感覚もない。超能力者なら誰もが共通する話で、超能力の使い方は分からないが、どんな超能力が使えるか、本人なら分かる筈だ。まさか、自覚なく使っている超能力があるとは思わなかった。意外そうに呟く芹沢とは反対に、霊幻は「当然だ」と大きく胸を張った。

「もこ沢だよ。もこ沢が、今もどこかで俺を見守ってくれているんだ。芹沢は俺を見守るだけじゃ満足出来ないだろ？」

霊幻の問い掛けに、芹沢は力強く頷いた。

「はいっ！俺、霊幻さんと一緒にいたいし、霊幻さんと除霊したいし、霊幻さんとセックスしたいですっ！他にも、色々あるけど、全部霊幻さんとがいいです!!」

「ほらな。だからさ、芹沢には【痛覚遮断】と【超回復】は使えないんだよ」

ぷすーっ、と霊幻は鼻で笑った。

「自分の事なのに……負けた気がするっ！」

悔しそうに唸る芹沢を見て、島崎は鼻で笑った。

「全く……欲望の固まりだな、お前は。では、霊幻先生、私の能力もご覧下さい。……誰にも知られた事がありませんん極秘ですよ」

【島崎　亮】

【テレポート】転移能力。自分や人を転移出来る。（レア☆☆☆☆☆）

【アポート】物体を転移させる。自分専用の格納庫があり、兵器を自由に出し入れしている。（レア☆☆☆☆☆）

【未来視】先視の進化系。大体、五分後ぐらい先まで見えるが、自分であまり制御出来ないので、視える時と視えない時がある（レア☆☆☆☆☆）

【五感強化】視覚以外の五感が人一倍強い。

【視覚強化】オーラや血流、温度など、人の視えないものが視える。人の表面は視えず、色も分からない。

「すごいっ！レアの星五つが三つも付いてるっ!!」

驚いた事に、島崎の超能力のほとんどにレア表記がある。しかも、高評価と思われる星も並んでいて、霊幻のテンションは自然に上がった。

島崎の超能力一覧を見て感嘆の声を上げて喜ぶ霊幻に、島崎は得意げに笑う。

「お褒めいただき、ありがとうございます、霊幻先生。まぁ、私は『世界一のテレポーター』ですので、これぐらいは出来て当然ですね」

「うん、さすがだよ、島崎。こんなに珍しい超能力が揃うなんて、滅多にないだろうに……んん？」

その時、一覧を見ていた霊幻は「あれれ？」と首を傾げる。

「……島崎って、あんなに強いけど、攻撃系の超能力はないんだな？」
戦っている島崎を思い出せば、確かに、攻守を全て超能力を用いている芹沢と違って、島崎は直接的な攻撃には超能力を一切使わず、格闘術や武器を使って戦っている。
霊幻の指摘に、島崎は「う……」と言葉を詰まらせて、気まずそうに頭を掻いた。
「さすがは、霊幻先生。お察しの通りですよ。……実は私、念動力のような超能力者が基本的に使える能力は一切使えません。せいぜい、ナイフの軌道を少し変える程度の微々たるもので、スプーンも曲げられません。ちょっとしたエネルギー弾なら、超能力を軽く手に纏わせて跳ね返せますが、芹沢や影山茂夫クラスの能力者の攻撃は、まず防ぐ事は出来ないのです」
今さら隠し立てしても、仕方がないと、島崎は全部白状する。自嘲気味に笑う島崎を見つめる霊幻は、ゆっくりと首を振った。
「あれだけテレポート出来て、戦っているんだから、十分すごいよ。さすがは島崎だな」
戦闘時に見せた武器の扱いや格闘術は、見事なものだった。きっと、周りに悟られないように、毎日努力した結果なのだろう。素直に霊幻が言えば、本心から言っていると島崎には伝わったのだろう。島崎は顔を真っ赤にして、「ありがとうございます」と、蚊の鳴くような小さな声で呟いた。本当に、素直じゃない。
「こうしてみると……芹沢はレアな超能力は持ってないけど、本人の基礎超能力値が高いから、どの攻撃も強力なんだな。レベル99あれば、ただのパンチも雑魚敵なら瞬殺だもんなぁ」
「恐らくは、影山茂夫も基礎超能力値が桁違いなのでしょう」
「すごいなぁ、モブは。さすがは、俺の自慢の弟子だ」
機嫌良く笑った霊幻は自分を指差して、口を開いた。
「じゃあ、俺の能力を教えてやるよ」
得意げに胸を張る霊幻に、芹沢は「え？」と不思議そうに首を傾げた。
「霊幻さん、『超能力』も『霊能力』もないじゃないですか。それなのに、能力って何言ってんですか？」
「何言ってんだ、芹沢っ！色々、あるだろ！『ソルトスプラッシュ』とか『呪術クラッシュ』とか『お祓いグラフィック』とか『正当防衛ラッシュ』とか！」
霊幻は自分の誇る必殺技の数々を挙げていくと、島崎は「あぁ」と納得するように頷いた。
「確かに霊幻先生の『正当防衛ラッシュ』は効きましたね」
「だろっ!?島崎、分かってるじゃないかっ！……じゃあ、俺の能力一覧を見なさいっ！」

【霊幻　新隆】

【ヒロイン補正】霊幻の全ての行動にヒロイン補正がかかる。

「……あれ？これだけ？ソルトスプラッシュは？しかも、『ヒロイン補正』って、何？」

期待していたのとまるで違う。たった一行で終わった能力説明に霊幻は呆然とするが、島崎も芹沢も、二人とも納得したように頷いている。

「霊幻先生の場合、必殺技もヒロイン補正の中の成せる技なのではないでしょうか？」

「霊幻さんの行動って、全部がヒロイン属性ですもんね。マジで驚きですよ」

「素直に喜べないっ！」

霊幻は不満の声を上げたが大きく咳払いをして、すぐに気を取り直したように、島崎と芹沢の顔を交互に見比べる。

「で、結局……お前達って、相当強い？」

「……俺は、まったく自覚はないです。テロリストやっている時も、ボスは『ナンバー2』だって言ってましたけど……別にお世辞言われても嬉しくなかったし。まあ、世話になったのかな？単純に、引きこもりを止めたかっただけなのに、また引きこもった……そんな感じです。あ、自分では下っ端だと思っていましたよ。実際、そうだったんじゃないのかな？力の制御が出来るようになったのも、霊幻さんに会ってからだし……それまでは、適当で。

だから、島崎を『ナンバー2』だと思っていました。性格も悪いし、服装も『超能力者』っぽかったんで」

芹沢は真剣な顔で、言った。

本気でそんな風に思っているのだろう、劣等感を感じているわけではないけれど、無力感と孤独感は感じていたらしい。それでも、本人に言わせれば、今は前向きになって、ストレスはないようだ。

「俺は芹沢に会えなかったら死んでいたわけだし、俺の社員だし。それに、お前、本当に格好良いよ。前にも言ったけど……もこもこの髪でも、今の髪でも。優しいし、まあ、怒りの沸点が低いけどな。その辺は『もこ沢』も『芹沢』も一緒だな？」

霊幻の言葉に、芹沢は困ったような顔をする。

褒められているのか、貶されているのか、正直、芹沢には分からなかったが……霊幻は褒めているつもりらしくニコニコしている。

「私は、ご存じの通り人畜無害の『テレポーター』ですよ？とは言え、まあ『5超』の中でも負けるつもりは

ありませんでしたが……。私は雇われていたので、『爪』の内情には詳しくなかったのが本当のところです。それでも、頭脳明晰だったので、見当はついていましたが。まあ、実力は……先生もご存じの通りです。ただ、芹沢は別格です。組織さえ扱いに困っていました。傘を持たせていたのも、能力を制限するためのものだったはずです。順応性も低かったので、ボスと渡り合えるまで強くはなれなかったようですが？
……で、先生が力の使い方を教え、最強防具まで作らせてしまった、というわけです」
島崎は言った。
「島崎はさ、変装も得意だし……俺、全然分からなかったんだっ！あと、やっぱり『人気グルメ雑誌』で連載持つなんてさ、すごいよっ！『超能力』使わなくても生きていけるんだからさっ！俺、雑誌二冊買っちゃったもんっ!!」
「いや、霊幻先生……」
そこじゃない。
超能力の『強弱』の話をしていましたよね？
島崎は言いたかったが、霊幻は嬉しそうにマガジンラックからグルメ雑誌を持ち出して、芹沢に見せている。
「すごいだろ」
と自分の事のように自慢する霊幻に、島崎は自分の心に今までになかった器官の存在を感じた。

「今度、ここに連れて行ってもらうんだ」
と言って、霊幻は嬉しそうに笑った。
芹沢は霊幻が島崎と出掛けると聞いても、『嫉妬』を感じなかった。子供の頃は感情の幅が少なくて、成長するごとに感情は広がりをみせるらしい。そう思えば、芹沢の中にも、新しい感情が芽生えたのだ、と芹沢は思った。霊幻と一緒にいると、知らない世界をたくさん見る事が出来る。『嫉妬』も『好意』も、『喜び』も『悲しみ』も、全て同じところにあって、その全てを霊幻に感じている。それは不快ではなく、自分が霊幻を『愛している』証拠なんだ、と芹沢は知る。

「このアイスクリーム、美味しいな」
『ヒロイン補正』の掛かっている霊幻の口元には、アイスクリームが付いているが、霊幻はそれを拭う事はない。自分自身は、とても綺麗に食べていると思っているのだ。
それでも、いつもの癖で、芹沢は霊幻の口元のアイスクリームに手を伸ばした。

「あっ、触れた……」

芹沢は驚いたように言った。

芹沢の言葉に、島崎は考え込むようにして、それからスプーンでアイスクリームをすくい、霊幻に差し出す。
「こちらも美味しいですよ？」
「頂きまーす」
霊幻は島崎のスプーンを口に含んだ。「うん、美味しい」と言う霊幻に、「あなたの方が美味しそうです」と言うと、防御壁が強くなる。強制的に押し返されるような感覚で、霊幻はソファに寄り掛かっている。
「なるほど」と島崎は呟く。

「霊幻先生は、甘えるとセックスをされると思っていますか？」
「えっ？……そ、そんな事、ないと思う」
「正直におっしゃってくれて構わないんですよ？」
島崎が言うと、霊幻は困ったように眉尻を下げ、コクンと頷いた。
「霊幻さん、そんな事考えていたんですかっ!?」

「だって……島崎は身体触ってくるし、芹沢はチンポ勃てるし……」

「まあ、否定出来ませんが……もしかして、セックスに答えなくてはいけないと思っていませんか？」

島崎の言葉に、霊幻の目が泳いだ。揺れる感情はオーラを視るまでもなく、島崎にも分かった『霊幻が義務感を抱えている』と。
一緒に暮らし始めて数週間が過ぎている。
元々、霊幻の人間不信は根深く、言葉だけでは信用出来ず、かと言って、肉体を繋ぐだけでも信用出来ない。
その屈折した性格が島崎にも芹沢にも魅力的に思えた。
それだけではなく、霊幻の言動も行動も、二人の想像の斜め上をいく。
根は真面目で、そんな自分が恥ずかしくて、地毛が明るいのに、染めていると言ってみたり、すね毛にまつエクをしようとしてみたり、やる事が突拍子もない。
「……霊幻さん。俺のチンポは俺のチンポの問題ですから……霊幻さんのお尻さんは、それに全部応えようとしなくてもいいんですよ？」
それこそ恐れ多い。
と、芹沢は恐れおののいた。
一緒に仕事をしている芹沢から見れば、霊幻は『霊能力』もないのに、悪霊の跋扈する場所を涼しい顔で歩いて行くし、「霊感がないヤツだって警戒するだろ」という場所でも物怖じしない。だから、自分のような『化け

物』と一緒にいてくれるんだ、と感謝することはあっても、霊幻に罵られる事はあっても、自分が霊幻に無理強いをする事はない。

　時々はペニスに支配され暴走する事はあるが、毎日ではないし、今日ではない。

「俺なんかに応える必要なんてないんですよっ！お尻が痛いとか、俺が気に入らないとか、色々あるでしょ？俺が、霊幻さんの『覇道』を邪魔する者を見逃してしまったとか……そんな時は蹴っ飛ばしていいんですよ？あ、でも、俺じゃぁ蹴っ飛ばされても痛くないか……。

　とにかく、俺は霊幻さんと一緒なら、それでいいっ！って事を学習したんですっ!!人間は考える『足』なんです」

「……芹沢ぁ。それを言うなら、『葦』だぞ～」

　霊幻は言って、芹沢にしがみついた。芹沢はそんな霊幻の背中を撫でた。

　島崎は、

「霊幻先生、今日は霊幻先生の休日なんですから……ただ、我々が一緒に過ごしたいな、と思っているだけです。まあ、そこの『化け物』は下半身に支配されているようですが……？」

　と言った。霊幻は島崎に手を伸ばすと、その手を握った。

「先生がそういう気分なら構いませんが、そうでない時は『ごめんね』とでも言って、頬にキスの一つでもしてくれればいいんですよ？

　いつだって霊幻先生を求めているのは、私のわがままなんですから。霊幻先生のわがままも、いっぱい叶えたいですよ？」

　島崎の言葉に、霊幻は島崎に抱きついた。

「……先生だって、私に抱かれたい時も、芹沢に抱かれたい時も、我々二人に抱かれたい時もあるでしょう？それは、言ってくださってもいいですし、オーラで知らせてくれてもいいですし、態度で示してくださってもいいですよ？なんなら、『イエス』『ノー』枕でも作りましょうか？」

「それはそれで、恥ずかしい」

「では、レアアイテム『もこ沢の半纏』を着ている時は、裸でも『ノー』という事で」

「……強引に、来て欲しい時もあるんだ……これでも」

　霊幻は照れくさそうにいって、そのまま島崎の胸に顔を埋めた。

「それは、私もオーラで分かりますし……まあ、芹沢も『野生の勘』に期待しましょう。駄目な時は助けを求めて頂ければ、お助けしますよ。芹沢にも遠慮なく『ステイ』させればいいじゃないですか？」

「……嫌いに、ならないか？」

「一層、好きになりましたよ?」
「頭、撫でてくれる?」
霊幻の言葉に島崎は霊幻の頭を撫でた。ついでに耳の後ろもこちょこちょとくすぐると霊幻はくすぐったそうに肩を竦めた。
(確かにこの半纏は芹沢のものではない。独占欲の強い芹沢では、半纏を着ている霊幻先生に、私が触る事は出来ないはず。この半纏は、霊幻先生の意思を尊重するものと考えるのが正しいのでしょう……)
不思議な事が世の中にはあるものだ、と島崎は思った。

† † †

最初、二人と暮らし始めた霊幻は、もっと辛い毎日が待っている、と思っていた。事実、状況だけみれば、そうだろう。一週間を『2・2・1・2』に分けて生活するのだ。
二日間を島崎の部屋で過ごし、二日間を芹沢の家(小屋?)で過ごし、二日間は自由に自分の時間、一日を二人と過ごす。『過ごす』と言えば平和的だが、結局、『セックスをする』という事だ。昼間は『霊とか相談所』で働き、時には(芹沢が)除霊をし、帰ってきたら、『セックス』。そんな毎日では死ぬと思っていた。
しかし、結果から言えば、霊幻はこの生活が思った以上に楽しかったのだ。
自身では自覚もないし認めたくない霊幻だったが、元々、寂しがり屋なのだ。素直じゃなくて、捻くれたところもあって、嘘もつくし、話も大きくする。その全てが、照れ隠しと寂しさを誤魔化すためでもあった。他人に裏切られたくないから、他人を信用しない、そんなところもある。
そんな霊幻だったが、島崎との生活も、芹沢との生活も、本当の自分を隠す必要もなく、気楽なものだった。
(もう尻の穴まで見られてるどころか、中まで見られてるんだから……もう、セックスも数え切れないほどしたし。蹴っ飛ばしたし、頭突きしたし、殴ったし、金的も狙ったし……、……あいつらの腕ん中で何度も泣いたし)
それが大きいのかもしれない。誰かに涙なんて見せたことのない霊幻からしてみれば、セックス中の生理的な涙とは言え、誰かに思い切り泣いているところを見せるのは、憑き物が落ちるような感覚だった。
だから、余計に一人で過ごす日があると不思議な気分だった。島崎は霊幻が休日の二日間に集中して仕事を入れ、家にいない事も多い。それでも、いつもなら島崎か芹沢のどちらかが家にいる。

「……暇すぎる」

霊幻は呟き、『もこ沢の半纏』に包まれながら、霊幻は身を丸くする。

「……誰かといる事に慣れすぎたのかな……」

と、呟くと、

「それは、聞き捨てなりませんね、霊幻先生?」

真横から声がする。

ハッとして霊幻が顔を向けると、何食わぬ顔で島崎が立っていた。

「まだまだ私といることに慣れて頂かないと。慣れすぎるなんて、とてもとても。もっと甘えて頂きたいですが……そこは、照れ屋の霊幻先生ですから……私がたっぷり甘やかさないといけませんね?」

「島崎っ、仕事は?」

「霊幻先生が『暇すぎる』とおっしゃられたので、大至急で帰ってきた次第です」

「そ、そんな事しなくても……」

「おやおや、これは……もしかしなくても、霊幻先生の心の隙間に入り込んで、お身体にも入り込めるチャンスでしょうか?」

と、島崎はニヤリと笑う。

そんなことない、と霊幻は言いたかったが、寂しかったのは事実だ。きっと、甘えたいのも本心だ。その証拠に半纏を着ているのに、島崎は霊幻に触れている。

「今夜は部屋に私の好みの音楽を流しましょう。私おすすめのレストランでキャリーアウトしたオードブルでも摘まみながら、あなたの好きなレモンサワーを一緒に飲むのはいかがですか?私の書いた記事の載ったグルメ雑誌を眺めて、そのまま過ごすのは?」

島崎は霊幻の唇の端に口付けると、霊幻の肩を抱き寄せる。何の抵抗もなく自分の胸に顔を埋めてきた霊幻を島崎は愛おしそうに視る。

「寂しがり屋の甘えん坊なのに素直になれないあなたは、誰よりも魅力的ですよ?もっと私に甘える事に慣れて下さい」

「……甘えすぎると依存にならないか?」

「では、私も……あなたの前では、出来るだけ大きな猫を被るのを止めましょう。それは、依存ですか?『信頼』あるいは『親愛』あるいは『愛情』という名前に変えてはいかがでしょう?」

「甘える俺は、島崎を信頼している?」

「そして、私はあんたを愛してる」

ゆっくりと島崎の唇が近付いてくる。

バンッッッ

その時、思い切り部屋のドアが開いた。
「た、ただいま……もどりました……霊幻さん。おかえりなさいは？」
そこには急いで帰ってきたのか、髪がグチャグチャの芹沢が立っていて、霊幻は、
「おかえりなさい」
と、言った。
「俺っ！不器用で、器用で、寂しがり屋で、意地っ張りの霊幻さんが世界で一番好きですっっ！」
芹沢は叫んだ。不器用で、でも真っ直ぐに好意を伝えてくる芹沢に何度助けてもらっただろうと霊幻は思った。
「……せ、芹沢……」
「だから、雲のベッドに横になりながら、夜空を見上げて、何かお話を聞かせてくださいっっ!!」
話を聞かせてくれるのではなく、話を聞かせるのか、と思って、霊幻は笑った。
「大好きですっ！」
「ああ。俺も芹沢が好きだよ」
「……良かった……」
芹沢は安心したかのように、霊幻の元に駆け寄り、その身体をギュッと抱き締めた。
「芹沢……なんで、帰ってきたんだ？」
「野生の勘ですっっ!!」
勘だけで、霊幻が寂しがってるのを感じ取り走って帰ってきてくれたのか。
そう思うと、芹沢の無骨な優しさが有り難かったし、嬉しかった。
「そっか……ありがとう」
「いいえ。もっと頼って下さい……俺、見た目に寄らず包容力、ありますよ？」
芹沢は霊幻の前髪を掻き上げ、その額に口付けた。
「今日は、せっかくだし半纏脱ごうかなぁ……」
霊幻が背伸びすると、二人とも驚いた顔をして、それから、顔を綻ばせる。
そのタイミングがまるで一緒で、霊幻は、
さあ。
今夜はどんな風に過ごそう……。
と霊幻は考えながら、恥ずかしげに笑って、二人に手を伸ばした。

モブサイコの同人誌として発行した2冊目3P本。しかも、島霊・芹霊の3P本だったという事を今更のように思い出し……『尖ってんなぁ』と笑ってしまいました。『みんすき』のような『師匠総受けのイベント』ももちろんないので、普通のイベントにこの分厚い3P本を持って参加していたと思うと、今の私は『臆病になつてるな』……と変な反省をしました。

とっても素敵なイベントを主催してくださって、本もむくわれます。最初は展示も考えていたのですが、あまりに長いのと、細かく分かれていて……これを展示用に変えることを考えただけで、早々に諦めてしまい。PDFで配布してゆっくり読んでもらう方向で考えました。

いっぱいイベントを楽しんだ帰りのお土産に持って帰ってもらうイメージでいます。そうしてもらえたら嬉しいな、と思っています。是非、『みんすき』の思い出に、お土産に、持って帰ってもらえると嬉しいです(*´∀`*)

くり坊

-同類嫌悪は、必然性。-
MOB PSYCHO 100
UNOFFCIAL FAN BOOK 2nd.
発行日：2019.08.24
：サイキック100%+6%
発　行：ダニエルProject
発行者：丸太
E-mail：maosuiren@gmail.com
pixivID：39508249
pixivページです
本は芹霊多め。pixivは芹霊・最霊・島霊・エク霊・峯霊小説等、霊幻総受け系。

←当時の奥付です(*´∀`*)
サークル名もペンネームも違います！懐かしいので小さくして載せておきます。印刷屋さんのところだけ消しておきます。まだMPの同人誌2冊目です。懐かしいー!!
本当に、今回のイベントがなかったら、本を見直す事もなかったと思うので有り難いです。素敵なイベントを開催下さり、本当にありがとうございます!!

再配布などはご勘弁下さいm(_ _)m

-同類嫌悪は、必然性。-

芹沢克也 × 霊幻新隆　島崎　亮 × 霊幻新隆
2019/08/24 発行

改めまして
2024.10.04～10.06 開催
『みんな師匠が大好きです』にて、
無料配布致しました。

この本は、芹沢 × 霊幻・島崎 × 霊幻本です。
3P表現あり。
全編セクハラ表現・成人向け表現多数です。
ラストは安心のハーレムエンドです。